

デスゲームのお食事情

lonrium

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAOでプレイヤー喫茶店はあってもプレイヤーレストランは無くね?と思い書きました。▼オリ主がレストランを経営しながら色々なキャラと絡んでいくだけです。戦闘シーンはほぼ皆無です。▼GGO辺りから異様に戦闘シーンが増えました。

目次

SAO

『食事処メイ』開店	1
月曜日《日本食》&鼠	3
火曜日《中華》&黒の剣士	5
休日の水曜日とレベリングと屋台	8
木曜日《イタリアン》&風林火山	12
金曜日《洋食屋》&攻略の鬼	14
土曜日《呑処》&黄金林檎	18
日曜日《スイーツ》&武器鍛冶屋	22
お好み焼き&軍	28
チーズケーキ&小さな竜使い	31
圈内事件（ネタは割れてる）	34
続！圈内事件	39
出前カレー&血盟騎士団	43
ラーメン&《神聖剣》	47
おでん&殺人ギルド	50
パスタ&恋愛相談	55
ノンアル&アフターケア	59
海&おつかい	65
屋台獲得クエスト&共闘	69
S級食材&試食会	78
74層攻略&青眼の悪魔	83
露見&討伐	88
決闘&唐揚げ	94

vsアスナ&打ち上げ	100
交渉&交渉	106
殺意&友の死	112
結婚式&ウエディングケーキ	117
シチュー&謎の少女	123
放任主義者達&チョコレートケーキ	128
釣り師&和食定食	132
ゲームマスター&醤油ラーメン	138
ALO	
未帰還者&ALO	145
森の中の勝負&妖精達	153
新人訓練&首都	158
ルグルー回廊&追跡	162
化物&化物	168
再会&告白	172
世界樹&最終手段	177
ナメクジ&GM権限	184
帰還&打ち上げ	189
GGO	
新アカウント&BAR《シキ》	195
ライムサワー&魔王	200
テキーラ&《ランガン》	206
ビール&環境操作者	210
飲み会&思い出話	214
ソフトドリンク&秘密者	220

予選&死銃	224
大会直前&疑い	230
本戦&捜索者	235
挟撃&ガス噴射装置	240
観戦者&最終決戦	245
確認&確信	253
番外編 おしよくじじじょう	260
オリジナルストーリー編	
菊岡&皐月	265
特殊クエスト&参加者達	271
考察者&決意者	277
シリカ&■■■■	283
リズベツト&■■■■	289
エギル&■■■■	295
作戦続行者&傍観者	301
英雄&■■■■	307
再戦&再現	314
種明かし&目的	320
最後の挑戦者&■■■■	326
殴り合い&決着	335
目的&閉幕	344
神代凜子&邂逅	353
マザーズ・ロザリオ	
絶剣&料理人	359
勉強会&ココア	367

ガールズトーク&討論	373
報酬確認&屋台引き	378
特別魔法&通行止め	384
不治&不治	390
見舞い&経験	397
SJ	
招集&テスト	403
記念日特別	
IF 疑念&躊躇	409

SAO

『食事処メイ』開店

「いやあ…やつと店が開けるようになったわあ…」

50層の《アルゲード》で新しく店が開く。しかしその店は鍛冶屋でもなければ喫茶店でもない。ましてやボツタクリの雑貨屋でもない。

新しく開かれる店はレストランであった。そんなものこのゲームでは料理スキルを上げればだれでもできると思うかもしれないがそういう訳ではない

大量の食材確保が面倒くさいのだ。さらにそれらを提供してくれるスポンサーも必要だ。故に誰もレストランを開かなかった。

「ホンマに助かりましたよエギルさん。食材提供してくれる契約ありがとうございました。」

「おう、良い金もらえるんだから当たり前だ。」

語りかけたのはレストランの店主になるプレイヤーで『メイ』という。長い銀髪をポニーテールに纏めている。

彼女と話している男はエギル。同じく50層で雑貨屋をしている。

彼が彼女を支援したのは経営仲間が増えるからだ。

「しっかしメイ。こんなに沢山の食材を注文するなんてよ…。メニュー表が分厚くならないか？」

「心配いりませんよ。曜日ごとにメニューは置き換えるつもりなんです。」

「なんでお前はレストランなんてやろうと思ったんだ？」

「それはですね…」

彼女がレストランを開こうと思ったのはこのSAO内における食事に問題があった。とにかく美味くない。美味くない。(大事なことなのでry)

全プレイヤーがこんな食事情では良くないと思い開くことを決めた。

それに独り身なので出会いが欲しかった。婚活ではない。

「確かにSAO内の食事はあんまり美味くねえな…」

「でしょ。」

そんなに大層な理由を掲げずこの店『食事処メイ』は開店した。

「では、本格的な活動は明日から始めることにします。それはそれとしてエギルさんには色々お手伝ってもらたんで何か作りますよ。」

「おっ、ありがたい。じゃあボストン風ベイクド・ビーンズで。」

「面白いもん頼みますなあ。」

すでに一晩水に漬けていた豆を固めに茹でてザルに上げる。茹でている間にベーコンを一口大に切る。

厚手の鍋にベーコンを入れ弱火で炒めて油が出たら玉ねぎも炒める。

火を止め豆を入れ弱火で1時間煮る。SAOはシステム料理なので時間は短縮できる。

最後に塩コショウで味を整えれば完成

「ほい、おまたせつと。ボストン風ベイクド・ビーンズです。」

「この世界に来てこれを食うのは始めてだ！」

そういつてエギルは食べ始める。

「いやあ美味い。リアルが懐かしいなあ…」

「死ななければいつかは戻れますよ。きつと。私はレベルが低いんでこんなことしかできませんが応援してますよ。」

私のレベルはこの層でギリギリ安全マージンが取れているレベルだ。攻略組になんて程遠い。だからこうして料理を出し娯楽の場を出すことにしたのだ。

「ほい、ご馳走さま。明日から経営頑張れよ！」

「お粗末さま。頑張りますよ。」

こうして『食事処メイ』は始まった。ゆつたりと

月曜日 《日本食》 & 鼠

「いやあ…：ガランガランですわあ…：」

店が始まって初日なのである。初のプレイヤーレストランでも認
知されなければ客は来ないのである。

ちなみに今日は月曜日。日本食の日である。

「ビッグネームのお客さんが欲しいなあ…：」

名前の売れてる人が店に来てくれたらその人を出汁にして繁盛す
るだろう。そうに違いない。

チリンチリン

「おっ、いらっしやいませー。」

「ここだナ。プレイヤーレストランってのハ。」

やって来たのは黄色のフードを被っていてその顔には鼠の髭のよ
うなペイントが描かれていたプレイヤーだ。

情報屋 《鼠》 のアルゴである。

「おー姐さんいらっしやーい。教えてもないのに開店初日に既に噂
になっているような口ぶりってのはどう言うことですか？」

「それを知りたければ5000コルだゾ。」

「相変わらずガメついこって。」

それにしてもアルゴとは久々に会った。初期の頃にチラホラ会っ
ていたが途中からは全く会ってなかった。

それにしてもどういいう情報収集能力してんだ。

「あつ、こちらメニュー表です。」

「オイオイ、よそよそしいナ。今まで通りでいいんだヨ？」

「それはいけませんよ。」

姐さんだからって今まで通りに接してはいけない。私は店側の人
なんだから。

姐さんがメニュー表を見始めて3分。やっと決まったみたいだ。

「じゃあ寿司を頼むゾ。特上デ。」

「はい。特上寿司ですネ。少々お待ちを。」

既に用意していた酢飯を取り出して軽く握る。

米の間に空気は必要だ。

その上に様々なネタを置いていく。マグロなどには隠し包丁を入れておく。

うに。マグロ。ハマチ。鰻。イカ。トロ。アワビ。

「その他もろもろ色鮮やかに。」

「はい。お待ちどお様。特上握りです。」

「まずこのゲームで今までまともな寿司なんて食べてなかったヨ。」
SAOの舞台は基本的には西洋風なので喫茶店を営んでいるプレイヤーも日本食は基本出さない。風景と食事が合わないからそこはしょうがない。

NPCレストランにも寿司はあることにはあるのだが相変わらずである。

「そーいやメイちゃん。表にもあつたが曜日ごとにメニューが変わるんだよナ?教えてくれないカ?」

「えっ、一週間過ぎたらいいですよ。」

「いいじゃないカ。教えてくれたっテ。場合によっては色々出すヨ。」

結局私はこの話を断った。最初の一週間は客が少なくても情報屋には売らないと決めていた。

「チエツ。まあいいヤ。その内全部聞きに来るからナ。」

こうしてアルゴは店を出た。そしてその後には「鼠から聞いた美味しいレストランがある。」と聞いて色々と食べに来たお客さんが数人来た。

姐さん…ありがとう。

火曜日《中華》&黒の剣士

今日は火曜日。中華の日である。

昨日アルゴ姐さんが来てから客足は思っていた以上に伸びており赤字という悲劇は当分起こりそうに無い。

また今度姐さんにはお礼をしなくては。

それでも開店2日目であるので50層を中心に活動している人が多かった。他の層の人達が来るまでにはもう少し時間がかかりそうだ。

チリンチリン

「いらっしやいませー」

「ここだな。近所にできたレストランは。」

入ってきたのは全身が黒の装備で統一された中性的な男だった。近所と言っていたので彼も50層の人だろうか。

「店主のメイです。50層にホームでもあるんですか？」

「俺はキリトだ。よろしくなメイ。確かに俺は50層にホームを持っている。」

完全にご近所さんでしたね。というかキリト!? 《黒の剣士》だの《ビーター》だのと色々同名高いソロ(ボッチ)プレイヤーさん!?こんなに近くに住んでいたのか…

「あつ、こちらメニューです。」

「そんなに堅くなくタメ語でいいよ。同じくらいか少し上だと思っし。」

結局確認したところ歳は私が3つ上だった。

そんなことは気にしない様子でキリトは麻婆豆腐を頼んだ。

「ちなみに辛さは10段階ありますけどどないする?」

「もちろん10で頼む。」

キリトは辛さの確認もせずに10を頼んだ。ちなみに10は唐辛子を10使うって意味だ。唐辛子密度がすごいことになってて赤黒い。

そんなことは気にせず作り始めるとしよう。

豆腐を食べやすい大きさに切り沸騰したお湯で湯通しして水気をよく切る。

豆板醤、唐辛子（10個）、ニンニク、生姜を炒め、香りが出たら豚ひき肉を入れ色がつくまで炒める。

豆腐、水、醤油、酒、砂糖などを加えて煮込む。

とろみをつけて山椒とラー油を入れて完成。

せっかくだ。山椒とラー油の量も増やしてほしいやろう。辛さ100初挑戦祝だ。悶ろ（直球）

「お待ち遠様。辛さ100（実際それ以上の）麻婆豆腐です。」

「メイ？これ本当に辛さマックスか？見た目が普通じゃないか？」

「見た目の保持に結構頑張ったんですよ。」

当たり前だ。料理スキルにはある程度だが見た目をいじることができる。

料理には見た目も大事ということシステムを作った茅場も分かっているようだ。

「それじゃ頂きます。」

（逝け！悶ろ！）

パクッ

「辛ッ！ゴフッ…み、水…」

……なんてことを期待したが目の前の男は匂いだけで鼻が痛いこの麻婆豆腐を平然と食べている。

「こんなものだな。美味しい。」

どれだけ辛さに強いんだこの男。まあ美味しいと言ってくれるだけ良かったが…

「それはよかったです。最前線のトッププレイヤーに褒められるとは光栄です。」

「いや、お世辞じゃなくて本当に美味しいよ。また今度クラインとかに教えてやりたいくらいだ。」

おっ、やったお客さんが増えそう。

「そういやメイは狩りとかはしているのか？」

「いうほどしてませんよ。最近店の方に集中しててちよつと鈍り気味で。まあ明日は定休日のもりなんで行きますけど。」

「こんなな美味しい料理が久々に食えたんだ。明日少し手伝うよ。」

「最前線の54層はお断りです。」

結局明日私はキリトと狩りに行くことにした。久しぶりの外なんです少し楽しみでもある。

休日の水曜日とレベリングと屋台

メイはイライラしていた。

狩りの約束を取り付けた方のキリトが遅刻しているからだ。待ち合わせ時間は9時だ。しかし現在は9時15分。

「遅いなあ。」

そんなことをボヤいているうちにキリトはやってきた。

「ごめんごめん。」

「遅いでえ。」

理由は寝坊だった。くだらない理由だ。さてそんなことより聞かなくてはならないことがある。

「今日はどこでレベリングすんの？」

「そのためにも聞きたいことがある。メイのレベルはいくつだ？」

「62やけど。キリトは？」

「俺は75だ。」

……このゲームの安全マージンって階層+10くらいだよ。どんなレベリングしてるのこの人…。

「じゃあ、54層でいいよな？」

「いいわけ無いやろ！殺す気か!？」

いくらキリトがついているとは言え層+8少し危ない。

「じゃあメイはどんなステ振りしてるんだ？」

「AGI最優先次点でSTRちよつとVITやけど？」

「モンスターハウスの経験はあるか？」

「あることはあるけど最前線は嫌やで。」

話し合いの結果昼食後にモンスターハウスの結果になった。死にそう（）

迷宮区にこもって3時間、時刻は12時30分。ここいらで昼食をとることにした。

持ってきたのはおにぎりと焼き芋だ。と言っても作り方は簡単だ。おにぎりは好きな形に握り、好みの量の塩をつける。

中には梅や昆布や鮭なども入れておくと尚おいしい。保存も効くので長持ちするしとても便利だ。

焼き芋はさつまいもにアルミを巻いて火にくべるだけでできる。そして砂糖を使っていないのに甘い。

さて昼食は終わりだ。ここからが狩りの本番、モンスターハウスだ。

「さて、いくぞ。」

キリトがそう合図をし目の前の宝箱を開けた。

次の瞬間部屋中に警報音が鳴り響き大量のモンスターが現れる。

キリトは片手剣をメイは短剣を手に持ち次々と現れるモンスターの群れに飛び込んだ。

キリトがリザードマンをなぎ倒し、メイがゴブリン達の喉をかき切る。

30分ほどたってもモンスターが消えないので宝箱の方に仕掛けがあると二人は気づいた。

「メイ、武器の耐久値とポーションはまだあるか？」

「まだまだ十分にあるぞ。」

それから2時間、二人は無限に現れるモンスター達を狩りまくった。

モンスターハウスが終わり、二人は帰路についていた。

この時の二人のレベルはメイが68、キリトが78まで上がっていた。

「なあ、そのレベルならメイも攻略組になれるんじゃないか？」

「覚悟が決まって整理がついたらな。」

メイは攻略組になる気はなかった。そもそもピリピリしているこの世界を落ち着かせるために店を開いたのだ。勝手にやめたら手伝ってもらったエギルに悪い。

「今日はレベリング手伝ってくれてありがとな。」

「いいって、お互い生きてクリアしよう。」

そう言つて二人は解散した。

メイは帰る途中に35層に寄っていた。焼き芋の消化とこの層で人気のチーズケーキを食べるためだ。

宿屋に入りメイはすぐにチーズケーキを頼んだ。素材の配合が絶妙でとても美味しかった。

メイはこれをメニューに入れようと考えていた。

あとは焼き芋の消化だ。メイはアイテムストレージからでかい木製の荷車とスピーカーを出し、電源をいれ…

いっしやっしきいもっしおいもっし

石焼き芋を始めた。

すると近くにいたのか一人のプレイヤーが近づいてきた。

「あら、懐かしい。」

そのプレイヤーは赤髪で片目が隠れていた。背中には大きな槍を背負っている。

「はい、まいど。ありがとうございますー！」

焼き芋を買ったのはロザリアというプレイヤーだった。

「あなたこんなところで商売してるの？」

「狩りの帰りだったんでその寄り道です。お姉さんは？」

「私はパーティーと色々…ね…」

メイは久々の女同士の会話だったので盛り上がっていた。

「いやあ、ありがとうございます！お姉さんもパーティーの人達と上手く行ってくださいね！」

こうしてメイは35層を去った。

木曜日 《イタリアン》 & 風林火山

地獄のレベリングの翌日。メイはなにごとくもなく営業に戻っていた。

「今日も働きますか。」

今日は木曜日。看板には《イタリアン》の文字がある。

この木曜日が彼女にとって一番楽な日である。メインがパスタやピザであり簡単だからだ。

最も難しい料理も作れることは作れるのだが人気のものではないので頼まれることはないと思っっている。

そして今日もドアが空く。

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

「ここだよな。キリの字が言っていた店は。」

「そうですね。お頭」

中に入ってきたのは5〜6人の……なんというか……侍だった。真ん中の『お頭』と呼ばれた男は赤髪でバンダナのが巻かされていた。野武士面だった。

「ここは中華料理屋だと聞いたんですけど……」

「ここは曜日毎にメニュー変わるんですよ。」

どうやらキリトはここを中華料理店だと思っていたようだ。しようがない。曜日でメニューが変わるのを知っているのはエギルとアルゴくらいだ。

「それで今日はイタリアンですけど何にしますか？」

「ピザで。マルゲリータをお願いします。」

クラインはメニューを見ずにすぐに決めた。

「そんなにピザが好きなんですか？」

「いやあ、リアルで最後に食い損ねたのがピザなんで……つい……」

それなら気持ちも分からないでもない。思い入れも強くなるだろう。

「それでは少々お待ちを。」

鍋にホールトマトを手で潰しながら入れ、にんにく、塩を入れて焦がさないように汁気を半分以下になるまで煮込む。

強力粉をメインにしてピザ生地を作り15分休ませる。

綺麗な円上にのぼしフォークで適当に小さな穴を開けておき、オーブンを予熱240度にする。

オーブンがあたたまる間に生地の上にトマトソース、トマト、チーズ、バジルでトッピング

オーブンに入れて7分焼きめがつき、チーズが溶ければ完成。

「お待たせしました。マルゲリータです。」

「やっぱこれだよ。美味そうだな。」

「そうですね、お頭。」

そういつて風林火山のメンバーはピザを切り分け食べ始める。

チーズがとろけてトマトとのマッチングも完璧である。

「かあ〜うめ〜!」

「そこまでピザに思いが詰まっているのなら当然ですよ。」

「えっと…店員さんお名前は…」

「メイといます。」

「どうも、クラインと言います!24歳独身で彼女募集しています!」

ものすごい勢いで自己紹介+彼女募集宣言。これにはメイも苦笑いだった。

「はい、よろしくですクラインさん。」

それだけの挨拶で不安になりクラインは確認をとった。

「えっと…いいんですか?」

「この場にすれば食事は提供しますよ。その他は相談くらいしか受け付けませんから。」

遠回しにクラインは軽く振られた。

金曜日 《洋食屋》 & 攻略の鬼

今日は金曜日。看板には《洋食屋》の文字がある。

「はいはい少々お待ちを。」

今日も今日とて店主のメイは店の中を走り回っていた。

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

「ここですね。《食事処メイ》は。」

入ってきたのは栗色の長い髪をした女性だ。その装備は白と赤であるギルドの制服みたいなものだ。

「そうですね。私は店主のメイです。血盟騎士団（以降k o b）の方ですね？」

「そうですね。私は副団長のアスナといいます。今日はあなたにお話が
あつてきました。」

そういうとアスナは一つ深く息を吸い…

「あ」個人的なお話のようですね。閉店後にお聞きしますので「……いやちよつと、」

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

アスナの話は遮られた。

アスナは攻略に関わる話を持ちかけようとしたが忙しそうに走り回る彼女を見て閉店まで待つのを決めた。

夜8時30分

営業時間が過ぎ、話し合いをするためにアスナとメイは店の中に入った。

「で、k o bの副団長さんが何のこんな私に何の用ですか？」

「それはですね…」

グウ

グウ

2つの腹の音が鳴る。

「お互い夕食はまだみたいです。何か食べますか？」

そう言ってメイはアスナにメニュー表を渡す。

「すいません。…じゃあハンバーグセットで。」

「少々お待ちを。」

玉ねぎをみじん切りにして、強火で炒める。

ひき肉、玉ねぎ、パン粉、卵黄をボールに入れその上から塩こしやう等を加え手で練っていく。

手の間で投げつけて空気を抜いていき、形を整え、真ん中を軽くへこませる。

中火でフライパンを慣らし、慣れてきたら強火にして焼き目がつくまで焼いていき、弱火で5分程焼く。(なおシステムによる時間短縮はしている。)

フライパンに残った汁をケチャップやソースで好みの物にしてハンバーグにかける。

ハンバーグ以外のものは適当にサラダや白米で飾る。

「はい、お待たせ。ハンバーグセットです。」

「い、いただきます。」

二人は目の前の食事に手をつけ始めた。メイは普段自炊をしているため食べ慣れているがアスナは久しぶりのまともな食事に舌鼓を打っていた。

しかしその割に二人は無言で食べていた。食べるペースは異常だが。

「それで、お話はなんですか？」

そう言われてアスナは思い出す。

「あなた、ギルドに入るつもりはありませんか？」

「お断りさせていただきます。」

「メイさん。レベルはおいくつですか？」

「68や。」

この時の空気は一触即発ものだった。

「あなた、一昨日に最前線でレベリングをしていたと団員から目撃情報があります。」

「してましたね。黒の剣士さんと。」

二人の、主にアスナのピリピリ感は止まらない。

「そんなレベルとセンスを持っていながらどうして攻略に参加しないんですか？」

……………メイが口を開く。

「死にたくないからや。のびのびとしたいからや。」

この答えにアスナは困惑した。彼女がやっていることは真逆だからだ。死にたくないなら始まりの街に留まっているはずだし、モンスターハウスなんて馬鹿みたいなのはやらない。

「死にたくはないけど、黙って指加えて待つだけっていうのも嫌や。やからなにかを手伝うことに決めた。」

「じゃあなんで鍛冶職や道具売りじゃなくこんな仕事をしてるんですか？」

アスナの質問は最もだった。攻略を手伝いたいのならその辺りぐらいしかないからだ。

「前線も中層も攻略攻略ばっかで常に気が張ってる。そんなんじやいつか碌でもないことになるし、元の日常忘れてるやろ。始まりの街

で留まっている人の方が日常感あるで。もともと私はゲームするた
めに来たんや。楽しみな損やで。色々珍味も試せるしなあ。」

アスナは溜息を一つ吐いた。

「分かりました。命あつてのことですし、無理には誘いません。」

「ありがと。その気になったら行くから。」

「それでは失礼します。ご馳走さまでした。」

こうしてアスナは店を出た。

「ははっ、流石鬼さん。怖いもんやわあ。それでも食べてる時は可
愛らしかつたんやけどなあ…。」

その頃アスナ

「この世界の食べ物は贗物のはず。でも美味しかった……。私もそ
のうち料理スキルとろうかな……。」

なんてことを呟いていた

土曜日《呑処》&黄金林檎

今日は土曜日。看板には《呑処》の文字がある。常識的に昼間から飲む人はいないので本日は夜からの開店となる。なので昼間はツマミなどの下準備だ。

「やっと下準備終わった……」

時刻は午後6時45分。開店は7時からだ。

「……ジュース飲も……」

そして開店の時刻。

チリンチリン。

「いらっしやいませー」

「あのー予約していた者ですけど……」

「ヨルコさんとカインズさんですか？」

「あつ、そうです」

「では奥にどうぞー」

入ってきたのは予約をしていたヨルコとカインズだった。今日はおそらくこの二人だけだろう。

二人に注文を取りに行く。

「何にしますか？」

「俺は生ビールを。あと焼き鳥」

「私はカシスオレンジとフルーツポンチで」

「少々お待ちを」

焼き鳥

鶏肉はフライパンで全体にこんがり焼き色がつくまで焼いていく。

タレをフライパンに流し込み、強火で一気に焼く。

タレが焦げ始めたら火を止めタレを回していく。

焼き鳥はこれで完成。

ポウルに白玉粉を入れ水を三回に分けて入れる。
白玉粉を丸めお湯の中に入れる。
氷水に入れて冷やてザルにあげる（猿にはあげない。）
白玉が冷えたらゼリーとサイダーを入れて完成。
「お待たせしました。お酒とおつまみです。」
「ありがとうございます。」
「それではごゆっくり。」
そういつて私はキッチンに戻る。
しかし今日は本当に客足が伸びない。掃除でもするか。

「……し……しシュ……ト……す……」

「……は……だと」

二人が何か話す声が聞こえる。おそらくプライベートな話だろう。
聞くべきでは

「しか…グリゼルダを……」

グリゼルダ……！

「失礼します！今、グリゼルダと言いましたか！」

「うわあー」「きゃあー」

あつ、テンション上がりすぎた……

「と…いうことで私はグリゼルダさんと会ったんです。」

私がグリセルダさんとあったときはまだ下層でちまちま石焼き芋売りをしていたときだ。あの時彼女は横にいたグリムロックという男性と一緒に初めて石焼き芋を買ってくれたお客さんだった。

「なるほど…その時に指輪のこともめたシユミットって人を炙ろうとしてるんですね」

「ええ…そうです…」

今私たちは死の擬態方法を模索している。その時の死因として貫通ダメージが前提だ。

「なにか…ないですかね。」

カインズさんが悩む。

「そんな簡単に騙せますかね?」

ヨルコさんも悩む。

カツン

メイの肘がコップにあたる。

パリーン

シユウウン　バシャーーン

コップが光の粒子になって消える。

「あらまあ…すいま……………いけるか?」

「どういう…」

「ちよつと待っててください!」

そう言つてメイは店を飛び出す。

5分後にメイは戻ってきた。

「今から転移門の前まで来てください!」

そう言われてヨルコとカインズとメイの三人は転移門の前まで行った。

「何をするんですか?」

「死の擬態方法のテストですよ。」

メイは手を動かしながら答える。手を動かした終えたメイの防具は一層で買えるフード付きの防具であった(アスナが初期に着ていたもの)

左手には貫通ダメージ能力の高い槍がある。

「あの…いったいな」

その瞬間にメイは自分の胸に槍を突き刺した。

「いったい何を！」

「あ、圈内なんでダメージないですよ？」

「あ…」

槍を突き刺してしばらく経つ。

「それじゃあいきまーす！転移！《始まりの街》」

その瞬間防具の防具だけが耐久値切れで消えメイは転移した。

メイが戻ってき

「どうでした？死亡エフェクト感出てました？」

「これは…行けますね…」

三人は悪い笑みをしその場を解散した。

日曜日《スイーツ》&武器鍛冶屋

今日は日曜日。看板には《スイーツ》の文字がある。

昨日のおつまみ用に用意していた一部が使えるので割と楽である。

「ふっふっふーん♪」

今日で開店して一週間。メイは無事に予定を崩さずに営業できていたので上機嫌だ。

チリンチリン

「いらっしやいませー」

「おー、かわいい雰囲気じゃん」

入ってきたのはピンク髪でエプロン姿の女性プレイヤーだ。背中にはメイスがある。

「日曜日はスイーツを取り扱ってるんです」

「へー。だからカラフルなのね。」

そんな話をしながらメイはメニューを渡す。

「んー。じゃあチョコレートパフェで」

「分かりました。少々お待ちを〜」

バナナを輪切りにしていく。

板チョコを細かく手で砕いていく。

クランチとホイップクリームとアイスを用意し適当な順番でカップに詰めていく。

コーンフレークなども好みの具材をどうぞ。

「お待たせしました。チョコレートパフェです」

「お、ありがとう。」

目の前の女性プレイヤーは器を受け取り食べ始める。

「んんん。やっぱり仕事疲れには甘いものよね。」

『仕事』。その単語を聞きメイは女性プレイヤーに質問をする。

「なにかお仕事をされてるんですか？」

「ええ。48層のリズベット武具店って店で鍛冶屋をしているの。

私はその店主のリズベット。気軽にリズでいいわよ。」

「あゝ。って！あの腕がよくてかわいい店主がいるって噂の武具店
!？」

リズベット武具店は一部の攻略組も通っているという有名な店である。その店主がこのレストランに来てくれたことにメイは驚いていた。

「いやあゝ。攻略組の人を相手に店をしてる人なんてもっとピリピリしてるイメージがありましたわあ。」

「そんなことないわよ。店に籠もって鉄叩いてるだけなんだから。」

「いやいや…しかそれでも……」

こんな感じで二人の女性店主は話の花を咲かせていく。

「わかる！わかるわよメイ！あの軽薄っぷりは本当に嫌になるわ！」

「やっぱそうやんなりズ！3日前に来たギルドのリーダー（クライン）とかホントにその筆頭やで！」

愚痴話になっていた。

話し始めて数時間。リズベットの目の前には器以外に3枚皿があった。仮想世界内では太ることがないので、気にせずに食べることができるのだ。

「いやあ〜。にしても武具店の知り合いなんておらんかったし、こ

んなに波長の合う子やと色々楽しいわあ。」

「メイも何か武器のことで相談があればいつでも乗るわよ。」

「お、ありがたいなあ。こちらも幾分まけたるから、そっちもまけてくれへん?」

「駄目。そんな交渉には乗れないから。」

ここに新たな商売仲間ができた。

すっかり夜になりメイは店の片付けをしていた。

コンコン

裏口からノックの音が聞こえる。

「はい。ちよつと待ってて〜」

メイが裏口のドアを開けるとそこにはアルゴがいた。

「よおメイちゃん。一週間経ったから記事に載せてもいいよナ？」

月曜日にした話から一週間。アルゴはその確認をしにきた。

「あ、うちの店の広告ですか？ありがとうございますございます姐さん。」

「そういうことダ。じゃあナ。」

「あつ、ちよつと待ってくださいいよ。姐さん。」

メイは帰ろうとするアルゴにコルを渡そうとする。

「うちの店を記事にしてもらうんですからお礼がしたいんです。」

「いや、別にいらないヨ…。」

「いやいや、仕事人だからこのくらい当然ですつて。」

なかば押し付けられる形でアルゴはコルを受け取らされた。

「まあ、いいや。じゃあナ〜。」

それから一週間アルゴの盛りに盛った記事でメイは忙しく走り回っていた。

お好み焼き&軍

アルゴの新聞のおかげでSAO初のプレイヤーレストランとして認知されてから一週間。《食事処メイ》は繁盛していた。

「オレンジギルド『タイタンズハント』壊滅…」

メイはアインクラッド新聞の朝刊を詠んでボヤいていた。さらに目を通すとそこには見覚えのある顔があった。

「かく。ロザリアさんがボスってマジかいな！」

『タイタンズハント』のリーダーがロザリアという事実には軽く驚くメイ。その反応からでもあの時自分が狙われていたならと思うとメイは軽く恐怖…し…た…かな？

この事件を片付けたのは《黒の剣士》だと書いてあったのでメイは本人に既に確認していた。どうやら彼がこの依頼を受けたのは、あの日にレベリング終わって解散してからのようだ。

時計をみると開店間近の時間だった。

「じゃあ、今日も頑張るで！」

開店してから3時間。時間は午前1時である。店内は大勢の人で賑わっていた。

チリンチリン

「いらっしやいませー」

「ここやなあ！最近賑わってちゅー店は！」

「そうです！キバオウさん！」

入ってきたのはまるで頭がモヤッ○ボールのような男だとその取り巻きだった。

「お前が店主やな？」

「そうです。店主のメイと申します」

「ワイはキバオウってもんや。」

「私はコーバツツ中佐だ。」

装備からしてこいつらは軍の連中か、ガラが悪そうだ。とメイは内心溜息を吐いていた。

「今日はアンタに話があつてきたんや。」

ああ、だめだ。話を持ちかけて来る人は面倒くさい。《攻略の鬼》のときだってそうだったのに…

「奥の席へどうぞ。」

メイはとりあえずといった感じでキバオウとコーバツツを奥に案内する。

「ご注文どうぞ。」

「ワイは話をしにきたんや!」

「とりあえずご注文どうぞ。」

「だから話を」「いいから、早く」アツハイ」

話が合わないところを無理やりだまらせる女であった。

「じゃあ…お好み焼きで…」

「鉄板席にどうぞー」

お好み焼き粉に水を入れ、かき混ぜる

生地に豚肉や山芋、キャベツ、天かす等を入れ、卵も混ぜる。

あとは焼けばできあがる。

焼いていく途中でメイが口を開く。

「で、軍が話つてなんですか?」

「せや、お前も早くこの世界から出たいんなら軍にコルを寄付せんかい。」

「攻略していないものも軍の援助をするのは当然のことだ。」

キバオウとコーバツツはそこそこ儲けている店に自分達のために寄付と称し恐喝をしている。50層は広く、客が多そうという理由でメイはこの場に店を設けたと思っている。

「いやなら強硬手段にでるで」

「いや、その前にそろそろ焼けそうなんですけど」

ペンー!

お好み焼きは2分で焼ける

それ以前に焼き時間を時短している。

「じゃああとは食べながらでも」

緩んだ雰囲気をブチ壊し気味にするメイにキバオウは少々イライラする

「で！払うのか！払わんのか！どっちや!?!」

「払いませんよ。サツサと食べて出てい……………なあコーバツツ中佐さん……………何してんの?」

コーバツツは好み焼きをまるでピザのような切り方で8等分にしようとしていた。その箸をメイはガン見していた。

「なあ……………どういう切り方してんの?」

「えっ……………何かだめなの」「アカンに決まっとするやろが！認めんぞ！」「アツハイ」

メイとキバオウの音がきれいにハモった。

「なあキバオウさん。コイツにちゃんとした食べ方教えようと思うんやけど……………どや?」

「ええなそれ、この食べ方は直させんとアカンわ。」

「えっ……………ちよ……………キバオウさん?……………店主さん?」

再び二人の声がハモる。

「お前は黙ってワイ（私）らの言うとおりにしろ!」「お好み焼き連合（仮）が結成された。

その日、コーバツツの夢は大量のお好み焼きに追いかけられる夢を見た。

チーズケーキ&小さな竜使い

流石に2週間も経ったためアルゴの新聞による爆発的なブームも収まり、連日人が押し寄せてくることが少なくなった《食事処メイ》。開店間近の時間に唯一の店員はつぶやいた。

「もう…あそこまで動き回るのは嫌やで…」

新聞が出てから最初の一週間は店内を駆け回り、左右で違う料理を同時にこなしていたこともあった。ブラック企業を通り越してダークネス企業の働き方であった。

それでも新規の人は来るものであるし、リピーターだっている。今日は日曜日のため、比較的仕事は楽である。

「チョコと飴食べよ…」

働き詰めで糖分が足りないんだ。いいから寄越せ。

そう言わんばかりにチョコを食べ、飴をなめ始めるメイ。

やはり土曜日の閉店時間と日曜日の開店時間の間が短い。見直すべきか…。そう考える。実際夜をメインに開く呑処と夕方までゆえに開店時間が早いスイーツ店。ここをどうにかすべきと考えながらメイは店の鍵を開ける。

開店してから結構時間が経ち現在は午後2時半。日曜日は3時に混む傾向にある。スイーツお菓子おやつ3時。こういうことである。

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

「こんにちはー。ほらピナも！」

「ピーー！」

フェザーリドラを肩に載せた茶髪ツインテの少女が入ってきた。メイは少女に見覚えがあった。直接見たわけではないが新聞でみたのである。

「《竜使い》のシリカちゃん？」

「そんな大層なものではないのですが…なんで知っているんですか？」

「タイタンズハント崩壊事件のときに知り合いから聞いたのでね…。それはそうと！店主のメイです。ご注文はなんですか？」

「スフレチーズケーキをお願いします！」

「少々お待ちを」

クリームチーズに砂糖を半量入れて混ぜる。

卵を入れて混ぜる。塊が出たら潰すように混ぜる。

生クリームを入れて混ぜ、レモン汁も入れて混ぜる。（生地）

薄力粉をふるいながら入れる。

卵白に砂糖を2〜3回にわけて加えながら角が経つまで混ぜ合わせる。（メレンゲ）

生地メレンゲを加えて混ぜ合わせる。

型を整えてから、60分焼き上げる（時短）

最後に粉砂糖をふりかけて完成。

「お待たせしました〜スフレチーズケーキです〜」

「わあ、ありがとうございます！」

そう言つてシリカはフォークを持ち食べ始める。

「ん〜甘くてフワフワでおいしいです〜」

「それはよかったです。実はこれ、35層の名物のチーズケーキをスフレにしてみたんです。」

実際これは事実であり35層で食べたチーズケーキをスフレ化したものである。

「そうなんですか！あのチーズケーキ美味しいですよね！」

その横ではフェザーリドラもチーズケーキをつついている。

「どう、ピナ？美味しい？」

「キューー！」

「とても喜んで食べてます！」

「モンスターのお客さんは初めてです……。」「

シリカはチーズケーキを食べ終わり、不意に聞いてきた。

「そう言えば私のことは知り合いから聞いたと言つてましたが誰から聞いたのですか？」

「ああ、《黒の剣士》から聞きました。あのオレンジギルドリーダーとも知り合いだったので解決者本人に聞いたんです。」

「ええ!?!ロザリアさんと知り合いだったんですか!?!」

シリカはひどく驚いている。それもそうだ。目の前にいる女性プレイヤーがオレンジプレイヤーの知り合いなら彼女もオレンジではないかと思っただからだ。

「あ、知り合いついていっても向こうは滅多に見ない女性プレイヤーのお客さんってことでしたし…。安心してください。私はオレンジではないですし、この店から滅多に出ないので。」

そう言うとしリカはなんとも言えない表情で笑っていた。

「チーズケーキ、ごちそうさまでした。また来ます!」

「ん、ありがとうございますー。また来てくださいねー」
軽い感じで返事を返し、シリカは店を出た。

圈内事件（ネタは割れてる）

メイは驚いていた。料理の参考になるかと思いい57層のレストランで食べていた。その料理とても美味しくて――

それともう一つ、56層のフィールドボス会議の時に揉めたらしいキリトとアスナが一緒に食事をしていたことに。

メイは店内の隅の方で二人を見ているが二人からはほぼ死角になっっているためメイの姿は見られない。

仲良く食事をする二人を見て仲睦まじいと思いつつながら食事をするメイ。

瞬間

「きゃあああああああ!!」

悲鳴

多くのプレイヤーが悲鳴の出所に向かう。その中には当然3人もいる。

そこにはにわかにな信じがたい光景があった。

鎧を着込んだ男が教会のような建物の2階からロープで吊るされていた。

その胸には剣が一本刺さっていた。

しかしメイはこれを見て、理解した

「今日が決行日やったんか…」

メイは手口もその目的も知っていたが決行日は知らされていなかった。知っていたなら店かダンジョンで大人しくしているつもりではあった。

「早く剣を抜け！」

キリトの声が飛ぶ

周りから見ると男は剣を抜こうとしたがなぜか抜けない。

メイは笑いを噛み潰しながら見ていた。

そして男はHPバーがある位置を見つめている

(耐久値確認してるやん……w)

そして、爆散した。

「WINNER表示を探してくれ!」

見つかるわけない。メイはニヤついている。

「キリト君!上からは見える!?!」

「駄目だ、くそっ」

そして数秒してから

「30秒……経った……」

アスナの眩きが聞こえる。

キリト達が事件のことについてなにか知ってる人はいないかと探しているところから出てきた

話をしていると途中でヨルコは顔を覆って泣き声を漏らした。

こまったキリトは後ろを見ると知ってる顔を見つけた。

「メイ!」

「おっ、お二人さん!犯人探しか?圈内であんなことになるなんて前代未聞やからなあ。で、どうすんの?」

「今日はもう遅いからこの人を宿に送るけど……」

「それじゃあ私が送るで」

「お願いします。メイさん」

アスナに任せられメイはヨルコを送ることにした

道中

「今日が決行日やったんか」

「ええ、あなたも巻き込んでしまってますいません……」

当事者とネタの発案者が話し合う

「キリトと一応は知り合いやからなあ。絶対誘われる……」

宿屋に着き、二人は解散した。

翌日キリト、アスナ、メイの三人は圏内すぐ近くの圏外に出ていた。
「なあキリト…何するつもりなん？」

「圏外で武器を刺してから圏内に入る実験だ。」

アスナが止めたもののキリトは自分に短刀を刺し、圏内に入った。
「どうや？」

「駄目だ。ダメージの発生はない」

次に武器に調べることになり、キリトの数少ない友人(?)のエギルを訪ねることにした。

「よお。これは一体どういう組み合わせだ？」

「圏内で人が殺されたんです。私達はたまたまそこに居合わせたんです。」

エギルの質問にアスナが答える。

それをよそにキリトは回収した武器をエギルに渡し、受け取ったエギルは鑑定を始める。

「プレイヤーメイドの武器だな。」

「製作者は!？」

「おいおいキリト、そう焦るな。製作者はグリムロック。綴りは《G r i m l o c k》だ。」

「わかりました。私達はグリムロックさんを探します。」

「んな簡単に見つかるわけないと思うけどなあ」

アスナの気構えを潰しにかかるメイ。空気を読むべきだ。

「エギル、武器の名前も教えてくれ。」

「名前は…《ギルティソーン》罪の茨って意味だな」

「罪の茨か……」

武器の鑑定後三人は一層の生命の碑を確認しに来た。ここでは生存者、死亡者を確認できる。

今回確認するのはカインズとグリムロックだ。G列を見ていくとグリムロックの名前はあった。

「生きてるな…」

「ええ、グリムロックさんは生きているわね」

「そつちはどうだ？メイ。」

「あかん。《K a i n z》の名前には横線ある。死亡者状況とかも全部一緒や。」

確認を終え、外に出ると青の鎧をつけたプレイヤーが7人いた。その鎧からそのメンバーは攻略ギルド《青竜連合》だと分かる。

アスナはその中の顔見知りにも声をかけた。

「こんばんわ、シュミットさん」

シュミットと呼ばれた男は眉間にしわをよせながら言った

「聞きたいことがある…昨日の圏内で人が死んだという事件は本当なのか？WINNER表示もないと聞いたが」

その質問にアスナとキリトは頷く。メイは頷かず、

「WINNER表示はなかったですよ。少なくとも広場じゃ誰も確認しておりません。」

シュミットは目を剥きながら

「本当かよ…。…もう一つ聞きたいことがある。死んだプレイヤーはカインズだと聞いたが…」

「それも本当ですね。」

シュミットが驚いていっているとところにアスナは口を挟む。

「今度はこちらが聞きます。あなたはカインズさんと関係があるのですか？」

「あんた達に関「事件目の前でみたから関係者やで」……」

「ああそうだな。俺たちは関係者だ。この事件を調べないと他の街にまで危険が及ぶ。手口がわかれば対策がうてる。」

「そういうわけでシュミットさん。協力していただけますか？」

首を縦に振るシュミット。協力してくれるようだ。

今日も遅いので解散することになった。明日はヨルコに話を聞き、シュミットに話を聞く予定だ。

メイは自分のレストランに戻りヨルコとメールを打ち合う。

「シユミットさんは釣れた。次はヨルコさんやろ？」

『ええ、そうです。私が死にまねをします。』

「しくじったらあかんで。」

『わかりました。巻き込んでしまつて本当にすみません』

メイには笑いが止まらなかった

続！圈内事件

圈内事件につきただいま閉店中

圈内事件が起きてからメイは店にこの看板を出し始めた。食事にぎつくりとやられる可能性があるかもしれないからだ。

しかしそんなことをしていようがあこの二人は容赦なかった。朝の段階であるメールが届いたので。

差出人・キリト『ヨルコさんと話をするから場所を貸してもらえないか？』

事件の関係者としてメイはこの依頼は断れなかった。

時間になると3人は店にやってきた。

「で？何か飲むか？」

「悪いな：俺はコーヒーで」

「私は紅茶をお願いします」

「私はお茶を…」

「少々お待ちを」

お茶と紅茶はそれぞれ茶葉を用意しお湯を注ぐ

コーヒーは豆を挽いてお湯を注ぐ。

飲み物はお湯でできている。

「はい、どうぞ。」

「悪いな、友達が亡くなったばかりなのに…」

「いえ、いいんです。私も早く犯人を見つけてほしいですし…」

それぞれ飲み物を飲みながら話している。本題にはすぐに入つた。

「まず昨日、生命の碑に行ったところカインズさんはあの日に亡くなっていました。そしてグリムロック、シュミット、この2つの名前に聞き覚えがありますか？」

「ええ、二人とも私が昔所属していたギルドのメンバーです。」

「グリムロックさんは芋売り時代の初めてのお客さんやったなあ…」

「メイさんは茶化さないで下さい。そしてヨルコさん。他に心当たりがありますか？」

「すぐには返事のなかったヨルコだが、顔を上げ頷いた。」

「はい。お話しします。」

それからキリトとアスナ、メイ（2回目）は『黄金林檎』のことを聞いた。その内容は中層でレアモンスターと遭遇し、それを倒したところ強力な指輪がドロップ。それを使うか売るかで多数決をとり結果は売却。最前線の店にリーダーのグリセルダが売りに行った。しかしグリセルダは翌日になっても帰ってこず、生命の碑を確認してみると死んでいた。

「レアアイテム売却が目的なら圏外に出ることはない。そうすると睡眠PKか…」

キリトが一番有効な仮説を立てる。その仮説を汲みアスナはヨルコに問う。

「リーダーさんを狙ったのは指輪を知っている人でしょうね。つまり…」

「黄金林檎の誰か…。私達も考えました。でもそのせいでギルドはすぐに崩壊しました。」

「売却に反対したのは？」

「私とカインズとシュミットです。私は当時付き合っていたカインズに合わせただけでしたけど…」

「ヨルコさんは今でもカインズさんと付き合ってるの？」

「出会いを求めて店を開いたメイにとってその手の話は餌である。」

「ギルドが解散して自然消滅しました。昨日も夕食だけのつもりなのに、あんなことになるなんて…」

「ショックなのは変わらないよな。すまない色々聞いてしまつて。」

「いえ、いいんです。」

「グリムロックさんもショックやろなあ…嫁さんが死んで…」

「ええ…そうでしょうね、ソレほどまでにあの二人は仲が良かったですから」

キリトとアスナはこれを聞いて驚いた。その二人の関係がそれほどまでに大きいものだとは思わなかったからだ。

「最後にお聞きしますが、カインズさんに刺されていた武器はグリムロックさんの作ったものでした。犯人はグリムロックさんだと思いますか?」

ヨルコは少し考え、首を縦にふった。

「それは…あると思います。もし彼が犯人なら指輪売却に反対した私達を殺すつもりかもしれません。」

メイは一度キリト達と分かれヨルコといた。進展があれば連絡は出るそうだ。

「いよいよか?」

「ええそうです。」

「じゃあ…やるで…」

—————

ピロン

メイにメッセージが届く。

『これからシュミットさんとヨルコさんは話をする。メイも来てくれ。』

ローブを纏ったメイは手を動かす。たった一文

『ごめんな、無理や』と

ピロン

再度メッセージが届く

差出人・ヨルコ『恐らくご存知でしょうが例の宿です。』
メイは深くローブを被った。

「お前はいいのかよ!?!こんな訳のわからない方法で殺されているのかよ!?!」

小さく動くヨルコ。耐久値ギリギリで背中からナイフを抜いた。その瞬間にメイはダガーを投げた。

トン

乾いた音が響く。ヨルコは背中を全員に見せ、落ちた。

ヨルコは地面に落ち、爆散した。

キリトはローブのプレイヤーを見、追いかける。

メイは一目散に逃げる。

教会の鐘が響きわたったタイミングでメイは転移した。

50層に転移したメイは店に戻っていた。あとはキリト達の解決報告を待つかヨルコの報告を待つかだ。

その前にやることはある。報告だ

「ヨルコさんの死に真似は成功ですよ。カインズさん。あとはご自分らでどうぞ。」

「すみません…メイさん。何から何まで」

「ええからええから」

数時間後にメイには2つのメッセージが届いた。

キリトとヨルコからの解決報告だ。

メイがグリムロックとグリセルダの夫婦関係を聞かされる前に知っていたことをおかしいと思っていた二人はヨルコに確認をとったところ、グルだと聞かされ激怒したのは別の話である。

出前カレー&血盟騎士団

「というわけなので何卒お願いします。」

「はあ、わかりました」

圈内事件も落ち着き店を通常運転に戻したメイ。今日は珍しい仕事が入った。それは最前線60層迷宮区への出前である。

以前に美味しいといいながら食べてたクラディールは仲間のレベルリングのモチベーションを上げるために出前を頼んだ。しかしメイはレベルが少し低く最前線では通用しない。なので依頼主でもあり普段から護衛慣れしているクラディールが護衛につく形である。

「で？最近は何副団長はどうなんです？」

「最近料理スキルを取り始めて楽しそうです。それと…書類仕事を私に投げることがありました。」

「なんやそれ、面白すぎる。」

現在は二人で迷宮区の安全区域に向かっている。時間になるとそこにレベリング中のkobメンバーが集まるからだ。

メイとクラディールは仲が良い。モンスターエンカウントが無いならこうして世間話もするくらいには仲が良い。とはいっても内容としてはアスナの話がメインであり、クラディールの愚痴が多い。

「まあ書類仕事の話は関心できひんからまた副団長さんにメッセージ飛ばしますね。」

「よろしくお願いします。」

圈内事件の一件からメイはアスナとフレンド登録をしたのでメッセージが飛ばせる。またメイはアスナとキリトがフレンドになったことも知っている。

目的地が間近なところでモンスターの出現があった。

「ソードゴブリン2体ですね。片手と細剣の。お願いします。」

「はい。お任せください。」

クラディールは出現したばかりで二人を発見できていないゴブリンに近寄り、3連撃両手剣スキル《スコップピード》を打ち込む。全てがゴブリンに当たり、体力を半分以上削った。そこからは二対一の混

戦だ。

メイは出張用キツチンアイテム《屋台》から手放せないため現在は戦闘に参加できない。

クラディールは攻撃を両手剣の腹で受けつつ少し苦しい状況であるが、なんとか片手剣ゴブリンを倒した。そこからは簡単だった。この迷宮区において最弱モンスターはソードゴブリンであるから。クラディール一人でも十分に倒せるレベルである。

しかしそれは突然だった。時間がある程度経ってしまったため、リザードマンが一体現れた。リザードマンは中々に厄介ではある。

「うげえ…これはやばいとちやうか？」

「お願いします！メイさん！」

クラディールはリザードマンの攻撃を切り上げ、スキル《テンペスト》を打ち込み、

「スイツチー！」

メイが前衛に出て、荷物引きはクラディールになった。

《屋台》は破壊不能オブジェクトではあるがいくつかの条件一つで消えてしまう。その一つは一分以上屋台ゾーンにプレイヤーがいないことである。なのでクラディールが屋台を守り、メイが戦うことになった。

メイは短剣を取り出し、スイツチの瞬間に3連短剣スキル《トライピアース》をリザードマンに打ち込む。

これで2体の体力は共に半分を切った。

ここからはゴリ押しだった。《トライピアース》の効果でAGIの落ちたりザードマンは驚異にならず、AGI振りのメイは遅いリザードマンの攻撃を躲しながらゴブリンと戦う。ゴブリンの細剣スキル《リニアア》のスピードとほぼ互角で短剣2連撃スキル《クロスエッジ》を打つ。防御の下がったゴブリンを刺しまくって倒す。リザードマンはまだスピードが戻らないためスキルの乱打で倒す。

「はい、お疲れ様でした。」

「すみません。途中でバトンパスしてしまってます…」

「いや、屋台を守ってくれてありがとうございます。」

二人は安全区域に到着し、メイは調理を始める。屋台内では大量生産ができる料理しかできない。なのでカレーを作り始める。

人参、ジャガイモ、玉ねぎ、お肉を切る。

肉に塩コショウなどで味をつける。

肉を炒め、色がついてきたら玉ねぎを入れ、しっかりと炒める。

玉ねぎに色がついたら野菜を入れ、調味料を入れ水分が飛ぶまで更に炒める。

熱湯とカレールーを入れ、しっかりと煮込む。

これで完成である。

「クラッシーん。できましたよー」

「それではあとは待つだけですな。」

そして夕食時になるとレベリングメンバーの6人が安全区域にやってきた。

「こんにちは！《食事処メイ》の店主のメイです。出前の依頼で来ました。」

メイは皿にカレーをよそおい、メンバーに配っていく。

「これは美味しい！」

「今までレベリング中の食事はパンぐらいだったからなあ。」

「迷宮でこんないいものが食べれるとは…」

大好評である。迷宮区にはモンスターがうじゃうじゃやっていて安全区域でしか食事ができない。できたとしても持ち込みのものだけである。なのでこんなことは珍しいのである。

「私の名前はゴドフリーだ。メイさん。できれば今後も届けてほしいのだが…」

「出前は色々難しいですからどうなるかわかりませんよ。」

ゴドフリーの誘いをメイは柔らかく受けた。この店は一人でしか経営していないので出前の連続は本店の経営が怪しくなる。

「「「ごちそうさまでした。」」」

「はい。どういたしまして。」

翌週、再びクラッディーは店を訪れた。

「すみません。また出前の依頼よろしいですか？」

「予約はないからいいですよ。次はどこですか？」

「はい。次は中層の迷宮区です。」

「わかりました。」

この依頼を受けたことをメイは後々後悔した。そして、ありえないパイプを持つことになった。

ラーメン&《神聖剣》

「できた……ついに……ついに……」

メイは感激していた。料理スキルを極め、SAO内では自分で作ることの多い調味料の一つが完璧にできたからだ。

「完成した……ついに……味噌が！」

完成したのは味噌である。それも黄土色の完璧な。醤油の自作にも成功し《麻婆豆腐》でも使ったができた形状はすごいものであった。具体的に言えば緑色のスライムである。これが醤油の味そのままなのは結構笑えない。

「これで味噌系のメニューが増やせる。」

今日は火曜日。開店前のこの時間にメイは一枚の紙にペンを走らせる。

『新調味料完成！メニュー増加！』

—————

店が開いてからは走り回るメイ。新メニューの味噌中華料理の注文があとを絶えなかった。特に多かったのは回鍋肉ハイコーローであった。今日作られたばかりの味噌もあと3食分しか残らず、休みの翌日に生産するつもりである。

「あと30分で今日は終わりかー」

時刻は閉店30分前。客は残っておらず、時間も時間なのでテーブルを拭くなどをして軽く後片付けに入る。しかしこの時間でも来る人は来るのだ。

チリンチリン

「いらっしやいませー……うっそお……」

「ふむ、ここが……」

入ってきたのは白をベースに赤のラインが入った鎧。kobの鎧だ。しかし普通のkobメンバーならまだよかった。銀の髪をオーバルバックにし、盾と一緒にになった剣を持っている。SAO内唯一の《ユニークスキル》を持ち、トップギルドのリーダー。最強と名高いプレイヤー。

ヒースクリフその人だった。

「いらっしやいませー。トッププレイヤーさんに来てもらえるのは光栄ですけどどうしていらっしやしてくれたのですか?」

メイには分からなかった。《攻略の鬼》の唯一の上司も攻略効率厨だと思っており、来た理由が分からなかった。心当たりがあるとすればアスナの時と同様に勧誘だと思っている。

「そう固くならないでくれたまえ。いやなに、この店の料理が絶品だと団員達が話していてね、私も食べたくなつたのだよ。」

「そうでしたか。ではメニューをどうぞ。」

「いや、もう決まってる。味噌ラーメンはあるだろうか?」

「味噌ラーメンですね、少々お待ちを。」

鍋を2つ用意しそれぞれにお湯を用意する。

もやしを水に浸し、あげたら水切りをする。

ニラと豚肉を切っていく、豚肉を塩コショウで味付けする。

ニンニク、生姜、味噌、上新粉、カツオ、七味唐辛子をよく混ぜる。

それを一つの鍋に入れて溶かす。

中華鍋で肉を炒め、色がついたらもやしを入れ30秒ほど炒める。

中華麺を取り出し、茹でる

味噌スープをフライパンで加熱し、沸騰したらすぐに止める。

フライパンのスープを半分麺にかけ、麺をほぐし具材を盛り付ける。

「お待たせしました。味噌ラーメンです。」

「ふむ、では頂こう。」

ヒースクリフは手を合わせてから麺をすする。味噌が麺に染み込んでいる。しかし、しつこくなくてとても美味しい。

「これは…美味しいな…」

「そう言ってもらってありがたいです。普段は何を食べてたんです?」

素朴な質問にもヒースクリフはしっかりと答える。こういう真面目さ、堅実さがギルドを支えているのだろう。

「なに、たまにNPCレストランで食べることもある。この前も醬

油ラーメンを提供している店があったが醤油の風味のない偽ラーメンだったよ。」

「あらあ…。それはそれは」

ラーメンを食べ終えたヒースクリフは満足そうであった。

「ごちそうさま。この世界で好物がすっかり食べられたのはこれが初めてだよ。」

「また、来て下さい。ここでならラーメンは各種ありますよ。」

そう言っつてヒースクリフは店を出ようとした。が立ち止まり口を開く。

「少し、聞いてほしい話があるのだが。大事な話だ。」

「え？勧誘ですか？」

メイはある程度予想していたがやっぱりその手の話が本題かと思つた。しかしヒースクリフからはもつと違う話が出てきた。

「近々《笑う棺桶》の討伐戦がある。聞いたところ君はクラディール君に引けをとらない実力があるそうじゃないか。こちらも戦略的にも心もとないところがあつてね。参加してくれないか？」

ギルド《笑う棺桶》。通称ラフコフ。SAO内で人殺しを目的に活動する最悪のギルド。犯罪行為を行えばオレンジと呼ばれるようになり、それを通り越す質の悪さ。攻略組がついに見過ごせなくてはなり、捕縛作戦に出るのであつた。

「そんなんに参加したくはないですね。死にたくないですし。」

「そうか。すまないね。命あつてこそだ。」

「でも、姐さん…《鼠のアルゴ》と協力はしてラフコフの情報は集めますよ。」

「そうか。ありがとう。よろしく頼むよ。」

ラフコフ討伐の話聞いたメイは少し困惑した。隠しているつもりでも感情表現のオーバーなこの世界ではどうしても微妙な顔が出てしまう。

その様子に違和感を感じながらももう話すことはないためヒースクリフは店を出た。

おでん&殺人ギルド

ガラガラガラガラ……ゴロゴロゴロゴロ……

迷宮区に屋台を引く音が響き渡る。

今日もまた出前のためにメイとクラディールは迷宮を進む。しかし今回は前線の迷宮ではなく、下層の迷宮である。

「メイさん。今日は一体何ですか?」

「今日はおでんですね。お酒もあります。てかクラさん『あっち』じゃいつもタメ語なのに私には常に敬語なんですな。」

「それはそうですよ。『あっち』でも『こっち』でも常にお世話になってますし。染み付いてしまったんです。」

「そんなもんですかね?」

「そんなものですよ。」

下層のモンスターだからクラディール一人でもオーバーキルができる。なので常に話す余裕がある。

そして話しているといつのまにかついていた。

「んじゃ、やりますか。」

大根を輪切りにし、十字に切れ込みを入れ茹でる。

こんにやくを三角に切り、厚さを半分にし、下茹でをする。

ちくわは半分に斜めに切る。

卵は水からゆでて沸騰したら火を弱めて茹で、水にとり、殻をむく。

油揚げは半分に切り、油抜きをする。半分に切った餅を入れ、楊枝で留め、餅巾着を作る。

鍋にほんだし、一部具材を入れ火にかけ、沸騰したら煮る。

その後一部具材を加え、弱火で煮る。

ゆでたまごを加え、味を整え、火を止め味を含ませる。食べる前に餅巾着を入れる。

「できましたよー。」

「それではメイさん。こちらを。」

クラディールはメイにフライパンとオタマを渡す。それを受け取ったメイは安全区域の真ん中に立って…

ガンガンガンガン！ガンガンガンガン！

「it's show time！」

オタマでフライパンを叩き、叫んだ。

……

……

……

「ヒヤッハー！」

大量のプレイヤーが一斉に飛び出す。どのプレイヤーも黒のローブを着込んでおり、腕には刺繍が入っている。その刺繍は棺桶に顔が入っており、その顔は笑っている。SAO内において最悪と呼ばれるレッドと呼ばれる殺人者のギルド『ラフィンコフィン』である。

「飯だー！」

「このにおいは…おでんか!？」

「おい! 酒もあるぞ!」

「最高じゃねえか!」

「はい。いっぱいありますからねー」

「」「食うぞー!」「」

そう言つてラフコフのメンバー達は食べ始める。普段から街に入れない彼らにとってはこの食事は殺し以外での唯一の楽しみだった。

「毎回悪いな。こんなに大量に用意させるのと騒がしくて。」

「別にいいですよ。それぐらい皆さん楽しみにしてるってことですし。」

「そう言ってもらえると助かる。」

「じゃあ poh さんも食べてください。はい、ちくわ」

poh にちくわを渡すメイ。それを受け取る poh。この光景は中々に異常であった。

なぜそもそもメイは殺されないのか? それはラフコフとその他プレイヤーの中立を守っているからだ。ラフコフに情報も渡さないがラフコフの情報も漏らすことはない。もし漏らせばクラディールやその他諜報員から報告が入るためいつでも殺せる。

「俺も本当は殺したくねえんだよ。この食事にも刺激があることだしな。」

「poh さんにそう言ってもらえるなら安心はできますね。漏らさない限り「おかわりー!」はーい。」

メイは呼ばれたのでその声の方向に向かう。その先にいたのは幹部のザザとジヨニーだ。

「卵とこんにやくくれない? あれほんとおいしくってさ」

「おでん、なら、餅巾。」

「はいはい、飲み物もありますからねー。」

こうしてどんどんと食事は続いた。

食事も終わりメイは帰ろうとしたところでジヨニーに呼び止められた。

「ねえねえ。また『運動』に付き合ってよ」
「……………ええで」

ジョニーが画面をいじりメイにデュエルを申し込む。ルールは初撃決着モード。カウントが始まる。

「やれー!」

「ぶっ殺せー!」

周りから野次が飛ぶ。

カウントが0になり、二人が動きだす。しかし決着はすぐについた。普段あまり戦い慣れてないメイは対人戦に慣れているジョニーに負けた。

具体的には不意打ちの投擲である。10秒麻痺毒ですぐに刺された。

「さすがジョニー先輩!」

「俺らにできないことを平然とやってのける!」

「そこに痺れる憧れる〜!」

周りは大盛り上がりだがメイはやはり悔しいものである。ジョニーと戦うのは3度目であり、毎度不意打ちで負けているからだ。

「ああ。やっぱ強いな。あかんわ〜」

「こっちは対人戦に慣れてるんだから当たり前ですよ〜」

「しかも殺し特化やしな〜」

ため息を吐きながらメイは起き上がる。

「それじゃ、また来ます」

「ああ、次も頼む」

メイはクラデールを護衛に付け、帰る。

それからメイは二度とラフコフを見ることはなかった。

パスタ&恋愛相談

メイは怒っていた。目の前にいる人が一体なにをしたいのかわからないからだ。

時刻は夜8時半。メイの目の前にいるプレイヤーは以前の教訓を活かし、この時間に来たのであろう。店の営業時間外という教訓を。

「なあ…うちがなんの店かわかる？レストランやで？相談所じゃないねんで？」

「その節は本当に申し訳ありません…。でもどうしても相談にのって欲しいことが」

目の前にいるのはアスナだ。店にくるのは3度目であり、今日は客として来たわけではない。

「んなもんギルドの人にしてきてや。上司の団長さんなり護衛の人なりに」

「男の人には相談できないことです！特にギルドの人には！」

この勢いにメイは驚いた。こんな副団長を見たことがないからだ。それにここまでの反応ならばそれなりに重要な相談だと思い、のることにした。

「分かった…。で？なんや？」

アスナは顔を赤くしながら呟くように言った。

「実は…気になる人がい「よっしや！出て行け！」ごめんなさい！でも本当に助けてください！」

「ふざけんな！」

メイは完全にキレていた。人々との触れ合い、出会いを求めてこの店を始めたので他人の恋愛相談なんてもつてのほかだった。

「しかも相手は絶対にキリトやろ!?結構前に一緒に食べてたことは知ってるんやぞ！」

「それストーリーじゃないですか!?!」

こんな感じの下らない喧嘩がしばらく経ったが、2人はなんとか落ち着き、メイは相談にのることにした。

「で?まずはキリトとどうなりたいんや?」

メイはまず軽くアスナに質問する。

「そ、それはまず友達というか…気軽に話したいというか…」

「圈内事件の時は普通に話してたやろ…それはどうしたんや?」

「あの時は事件のことで頭がいっぱいだったし…解決しなきゃって…」

それから2人は考えたが特にいい案はでることなく時間だけが過ぎていき…

グウ

グウ

デジヤブを感じた

「なあ…アスナはご飯食べてないの?」

「そうなんです…。そもそもメイさんもいつ食べてるんですか?前もそうでしたし…」

「店を閉めてからや。今日は突撃されたからまだ食べてないけど」

「本当にすみません…」

メイは立ち上がり厨房へ向かいながら言った。

「何食べる?メニューの中からお願いね。」

アスナはメニューを取り出し、じつくりと目を通す。

「今日はイタリアンかー。じゃあパスタをお願いします。」

「種類は？」

「カルボナーラをお願いします。」

ベーコンを炒め、炒まってきたらニンニクを入れる。

色が付いてきたら牛乳と生クリームを入れ、煮立たせる。

ソースに塩と昆布茶で味付けしてから冷ます。

ソースが冷めたら卵、チーズを入れてソースを完成させる。

麺が茹でたらソースが入ったフライパンに入れ、火をつける。

卵が固まらないように火を入れてながら濃度を調節し、全体にソースが絡めば黒コシヨウを振って完成。

「はい、お待たせ。」

「ありがとうございます。」

メイとアスナは向かい合いながらパスタを食べ始める。

「やっぱりメイさんの料理は美味しいですね。私じゃとても敵わないですよ。」

「そーいや聞いたんやけどアスナも料理スキルを取ってるんやろ？」

「はい。そうです。」

これを聞きメイはニヤつきながら比較的小さな声で言った。

「家に招待して手料理を振る舞えば？」

「無理です！無理です！」

アスナは顔を赤くしながら慌てるように言う。その様子をメイは可愛いと思いつながら追い討ちをかける。

「なんで無理やと思うねん。」

「だって…家に呼ぶなんて恥ずかしいし、キリト君はこの料理を食べ慣れてるからまだ完全習得してない私じゃ満足してくれないだろうし…」

キリトは二週間に一回の割合でこの店に来ている。常連となつているため確かに舌は中々に肥えている（辛いものに限る）。アスナはそれを気につけ、料理を作るにしても完全習得してからにするつもりだろうだ。

メイが案を出してもアスナは大体恥ずかしがるか口籠るかで話が

中々進まなかった。しかし話をすれば色々案は出てくる。

「2人とも攻略組なんやから武器系統の話でもすれば？どつかの武器店に行くなりして。」

「それなら良いかもしれない…。キリト君もこの前武器のことで言ってたし…。」

「いけそうか？」

「ありがとうございます！来週までには知りあいの武器店を紹介したいと思います！」

結果としては攻略組だからこそできる武器店の話のことで距離を縮めていこうということになった。

アスナはメイにお礼を言い、意気込みながら店を出た。

—————

後日、メイは一人で厨房で試作品を試していた。

トントントントン…トントン…

ボキッ！

包丁の耐久値が切れたのか、包丁が真ん中から折れた。

「ああ…折れたか…。予備がなくなってきたらまた買わんとなく。」

なんてボヤいているとメイは先日のアスナとの話を思い出した。

「武器店か…。オーダーメイドの包丁なんていいかも知れない。どこの武器店にしようかな？」

メイはアルゴに情報を貰おうとしたが、フと思い出した。

「リズや…。せや！リズに頼もー！」

メイは予定をスケジュール表を開き、リズベット武器店に行くことを決めた。

ノンアル&アフターケア

メイはウキウキしていた。

ほとんど事務的な用事にしろ、フィールドや迷宮区ではなく、久しぶりに他層の居住区に出かけるからだ。それにとっても気の合う商売人仲間と久々に会うからだ。

今日の目的地は48層《リンダース》のリズベット武器店だ。メイは自分なりに武器店のルールを調べ、とりあえず色々な鉱石を持って行くことにした。まあその鉱石の殆どは耐久値ーパワー型の鉱石だった。料理包丁が欲しいため、スピードは必要なく、これらの鉱石になった。

現在は昼過ぎ。水曜日のため今日の店は閉め、午前中はいつもの試作&休憩を繰り返してから外出した。

アスナに教えてもらったかぎり、リズベット武器店は今日は通常営業のようだ。地図を頼りにメイは動いている。

「水車のある店… ……ここか。」

メイの目の前にあるのは水車のあるとてもオシャレな雰囲気のある家だ。パツと見ただけでは武器店とは分かりにくい。リズらしいかわいい雰囲気のお店だなど思いつつメイは家を見ていた。

ドアノブに手を掛け、メイは止まった。普段店主として過ごしているため、お客として店に入るのは久しぶりだからだ。しかしそれすらも楽しかった。

あれを話そう。これを話そう。最近新作のスイーツもできた。あれこれ話そうと考えながらメイはドアノブを捻った。

ガチャ、ガチャガチャ

「はあ？」

鍵が掛かっていた。どうやら留守のようだ。どういふことか全然わからなくなったので、とりあえずアスナに連絡を入れた。

『リズが店にいないんだけど？』

『リズはたまに鉱石を探りに行くことがあります。それではないですか？』

メイは困惑しながらもリズがいないとどうしようもないと思い、夕方と夜に出直すことにした。

夕方になっても夜になってもリズは帰ってこなかった。フレンド登録をしているとどこにいるのかは分かるが、場所が場所のようなので表示されない。名前に横線が入っていないため、生きてることは分かった。

明日になれば帰ってくるだろうと思い、メイは出直すことにした。

翌朝になってもリズと連絡はとれなかったが、生きていることは確認できたので、メイはリズが夜行性のモンスターに巣にいると予想した。過去にメイも食材取りに巣に潜った挙句、丸一日帰れないという体験をしたので同じ状況だと思っていた。

店を経営しつつ、リズの場所を探っていると、昼にはいつの間にか帰っていた。これを確認したメイはこの昼食ラッシュが終わってから早閉まいし、リズの店の行くことにした。

そして昼食ラッシュも終わり、片付けもすませてからメイはリズベツト武具店に向かった。時間としては夕方と夜の間の微妙な時間になってしまったが、リズベツト武具店は比較的遅くまで営業しているので問題はない。

とりあえず着いたら昨日のことでも聞こうと思いつつ、メイはドアを開けた。

「いらっしやいませー。リズベツト武具店にようこそ！」

ドアを開けると中からはとても明るい声が響いた。いい笑顔で客を出迎えるリズベツト。しかしメイはその笑顔の中にある違和感を見抜いた。

「……なあリズ。今日はこの店に入ったのは私だけか？」

「えっ？今日来たのはアンタ以外ならキリトとアスナだけだけ……」

それを聞いたメイはため息を吐いた。

「来たのがまだあの鈍い二人だけで良かったな、リズ。アンタ今なんちゆう顔しとんねん。」

リズにはこの言葉の意味がわからなかった。整理しようにも思考がうまくまとまらない。そんなリズを待つことなくメイは続ける。

「泣き腫らした後やる？顔を洗ったにしろ直後ならなんとなく分かるもんやで。昨日か今日に何かあったやる？」

「そ、そんなこと」

リズは先程のことを思い出してしまった。キリトのこと、アスナのことを。しかし迷惑をかけないように否定した。

だが辛いことを思い出してしまったためか涙が出てしまった。感情表現がオーバーなため小さいことでも大きく出してしまう。そして隠すことなどできるはずもない。

「ほらな？絶対なんかあったやろ？」

「だから……！そんなことは無いって言って……」

言葉を遮るようにフワツと何かのリズベツトを包み込んだ。

「……ほらまだ泣いてる。辛いことがあったら誰かに聞いてもらおう。自分の気持ちに素直に行動する。それが一番や。まあ相談するしないは人によるけどな。」

リズを包み込んだのはメイだった。メイがリズを抱きしめている状態であった。リズはその状態のまま確認するように質問をする。

「……本当に話を聞いてくれるの？」

「うん。」

「……一方的な愚痴になるかも知れないのに？」

「わかってる。」

「自分の気持ちに素直になってもいいの？」

「うん。」

「……じゃあ胸貸して……。」

トサツ

リズの頭がメイの胸に当たる。そしてそのままリズは自分の気持ちに素直に行動した。

「うわああああああああああん!!」

リズは大声でただひたすらに泣いた。

どれほど時間が経っただろうか。やっと落ち着いたりズはメイの胸から離れた。

「……ありがと。落ち着いた。」

「よかったな。」

そこからメイは話を聞いた。曰くキリトと一緒にドラゴンから鉱石を採りに行ったところ巣穴に落ち、そのまま一晩過ごした。過ごしてる間に優しさに触れ、惚れた。脱出できたときに告白したものの風で難聴。先程改めて店で告白しようとしたものの、入って来たアスナと自分を比べて負けを認めた。この世界の最前線で戦っている彼女に少しでも心が開ける相手が出来たなら喜ぶべきだと思いい身を引いたとのことだった。

「何か食べるか?」

「できればいっぱい食べたい。」

「OK。厨房借りるで。」

メイは厨房に向かい、料理を始めた。

薄力粉、砂糖、ベーキングパウダー、卵、水、牛乳を混ぜる。

フライパンに薄く広げて焼く。

これでパンケーキの完成だ。これを大量に作っていき、数個はあんこを挟んでどら焼きにした。

あとはハンバーグなどを作り、軽くパーティーができる程他にも作った。

「はい、とりあえず作れるもん作ったから食べて元気出し。」

「ありがとう。」

そこからメイは『ノンアルコール』と丁寧に書かれた飲み物も出した。それを開け二人で飲んでいく。

一時間後、リズは酔っていた。ノンアルコールは基本的にアルコールは0ではない。アルコール濃度1%未満のものを指す。この飲み物の濃度は0.98%とギリギリだったので酔う人は酔う。

「メイは良いよね。落ち着いてて、大人っぽくて…。私なんか。」

ここからは一方的な愚痴が始まり、最後にリズは寝入った。

時間も時間だったので、メイはリズを部屋に運び、一階にある応接間かなんのか分からないがソファがあったので、そこで寝ることにした。

翌朝、リズは昨日の夜のことを思い出し、顔を真っ赤にしながら起床した。更にそこで寝ているメイを見つけたものだから更に赤くした。

「おはようメイ。昨日はごめん…。私になにかできることないかな？」

「ん…。おはようリズ。」

メイは目が覚め、リズの話聞き直してから答えた。

「包丁を作つて。リズのできる最高のものを。」

それからリズは昨日の余りの鋳石を使い、スキルを可能な限り使い、マスタースミスに恥じない最高級の包丁を作り上げた。

「できたわよ。メイ。」

「お！できたか！」

水色に輝く新しいナイフをメイは受け取る。

「これタダでいいの？」

「いいわよ。昨日のお礼も兼ねてる訳だし。」

「ん、ありがとう。じゃあなく。」

そう言い残しメイは店を出た。メイの背中が見えなくなるまでリズベットは見送った。

海&おつかい

SAOにおいて『趣味スキル』と纏めて呼ばれるスキルがある。料理スキルもその一つであり、趣味スキルを鍛えている人はほとんどいない。

料理スキルの他に代表的なのは『釣り』スキルだ。これは水中にいる生物を文字通り釣りあげるスキルだ。但し釣りあげられるのは食材、モンスターを問わないのが難点ではあるが、レアモンスター、レア食材を釣りあげることもある。

メイはよくよくこの釣りスキルを取りたいものではあったが、スキルスロットが全て埋まっていたため、とることを諦めたものの、未練たらたらで目の前の海を眺めていた。

現在メイがいるのが13層。海をモチーフにした階層であり、47層と同様に観光スポットみたいなエリアだ。そのため多くの人で賑わっており、チラホラとカツプルらしい二人組も見れる。

今日はその浜辺の掘っ立て小屋で簡易式海の家を経営しているメイであった。

「……暑い。」

どういうわけかこのエリアは他のエリアとは異なり、季節関係なく常に暑い。目の前に並んで多くの客の中に混ざっているカツプルもその暑さ（熱さ）を助けており、鉄板で焼いてる焼きそばの煙の3段コンボで暑さは最高潮だ。

「おねーさん焼きそばくださいーい」

「カレーライスくださいーい」

「かき氷くださいーい」

「一緒に遊ばない？」

「オムそばくださいーい」

「ナンパはお断りでーす。」

ゆるく、そして真面目に客を捌いていき、料理を提供していくメイ。環境が変わろうが慣れたその動作には無駄がなかった。

いつもと違うことと言えば常に忙しいことだ。いつもなら昼食、夕

食の時間帯が主に忙しかったが、今は常に忙しい。かき氷やドリンクなどもメニューにあるため、軽食、嗜好品として求められているからだ。

メイが最初に予想していたよりも客足は伸び、在庫もほとんど尽きかけており、そろそろ後片付けに入ろうと思っていると、知っている顔が見えた。

「あつ！メイさんじゃないですか。」

「キユイ！」

「おー。シリカちゃん。久しぶりやなあ。」

やって来たのはシリカだった。肩にはいつものようにフェザーリドラが乗っており、その機嫌は心なしかよく見える。

「こんなとこで何してんの？散歩か？」

「まあそんなところですよ。ピナもここが大好きでたまに来るんです。」

シリカの手には魚系の食材が握られており、それをピナが食べている。ピナのおやつに魚モンスターを狩りにきたということだった。

「なあシリカちゃん。ちよつと一ついい？」

「あ、はい。なんででしょうか？」

メイは少し申し訳なさそうにしてシリカにメッセージを飛ばす。

「悪いんやけど…そこに載ってるもの全部買ってきてくれへん？」

メッセージを見たシリカは顔を青くする。

「これ…全部ですか…？」

「ホントにごめん！でもいいかな？お礼もするから！」

シリカはこれを了承し、急いで街の方に向かった。しかし買ってきたものの、まだまだ客足は伸び、もう一度追加で買いに行くことになったが、重量+暑さでシリカがバテたため、転移結晶まで使った。

「はく終わったく。ありがとうなシリカちゃん」

「メイさんって…いつも…こんなこと…してたんですね」

シリカは息を切らしながら言う。今までにない体験でつかれたが、こんな激務を難なくこなすメイを見上げた。

「最初の約束通りお礼したいんやけど…」

「いや、別にいいですよ」

「いいからいいから。」

半ば強引ではあるがメイはお礼をすることにし、シリカと共に50層のメイのホームに向かった。

「今から晩御飯なんやけど食べてつて。とは言っても今日の一部分なだけでどな。」

「ええ!? いいんですか? メイさんの料理すごく美味しいので嬉しいです。」

「焼きそば作るから待つててな〜」

玉ねぎはくし切りにし、人参とキャベツは細切りにしていく。豚バラ肉を一口大に切る。

ホットプレートを熱し、豚バラ肉を塩コショウで炒める。

火が通ってきたら、玉ねぎ、人参、キャベツをいれ更に炒める。

野菜がしんなりしてきたら土手状に広げる。この真ん中にもやしを入れる。

具の山の上に麺をおき、蒸し焼きにしていく。

上からソースを回しかけ、全体をよく混ぜ合わせる。

最後にトッピングを乗せればできあがり。

「シリカちゃん。焼きそばできたよ〜。」

「ありがとうございます〜!」

二人は向かいあって焼きそばをすすり始める。

「やっぱりメイさんの料理は美味しいです。ソースがしっかり絡んでいて、野菜もシャキシャキしていて。」

「気に入ってくれたなら嬉しいなあ。」

二人は向かいあって笑顔で食べ続ける。

「そう言えばSAO内には日本食が少ないのはなんでなんでかね?」

「周りの風景が中世ヨーロッパみたいないメージやからかなあ…。喫茶店やってる人もメニュー内には日本食ないし…。」

SAO内は中世ヨーロッパのような風景がほとんどであり、店を構えてる人はほとんどが洋風である。そんな中週に一度とはいえ、場違

い感溢れる和風の店があるのは景観のぶち壊しでもある。

「どんな風景でも結局は美味しく食べれたらええねん。美味しく食べるのが食事の基本やからな。」

「ごちそうさまと言いつつ、後片付けに入る二人。ふと思いついたようにメイはシリカに尋ねる。

「そーいやシリカちゃんって短剣使いやんな？」

「はい。そうです。」

「OK。ちよつと待って。」

メイはウインドウを開き、少し操作した。

「それあげるよ。」

シリカの元に来たのは以前メイが使っていた短剣だった。シリカが断ろうとも押し付けられ、受け取った。

「なん…ですか…これ…」

短剣のステータスを見てシリカは驚いた。今までシリカが手にしてきた短剣の性能を大きく上回っていたからだ。前線のものには及ばないものの、中層なら大体オーバーキルできるレベルだ。

「こんなどこで手に入れたんですか？」

「ソロ専用特殊クエストのボスドロップ」

さりとメイは答えた。新しい武器が手に入り、レア武器を腐らせるのはもったいないと思い、メイはシリカに短剣を渡した。

「メイさんって何者なんですか？」

この質問にメイは全力で逃げた。タダの料理店の経営者なのにその答えではシリカが納得しないと踏んだからだ。しかしシリカもメイを逃がすことはなく、結局メイは自分のステータスを全て吐いた。とても普通のステータスだったのでシリカはガツカリした。

屋台獲得クエスト&共闘

「嘘やろ…今日が自動返却日やったんか…」

いつものように屋台を整備しようと思っていたら屋台がなかった。屋台の消滅条件の一つの自動返却である。

特殊アイテム《屋台》は特殊クエストの報酬である。しかし普通とは異なり、報酬としてレンタルができる品だ。なので期限が来れば自動的に消滅してしまう。消えてしまったなら仕方ないと割り切り、メイはクエストを受けるために身支度を始めた。

屋台獲得クエストは厄介なものである。報酬に《屋台レンタルの権利》を出しているクエストは今では2つしか見つかっておらず、その数しか屋台がないため早い者勝ちだ。更に2度目、3度目に受けようとしてもクエスト提示のNPCが動き回るので非常に見つかりづらい。とにかくNPCから情報を集めてたどり着くしかないのである。

—————

メイは一日中歩き回り情報をかき集めた。あつめた情報をまとめるところである

- ・ 10日前にアルゲードで見かけた
- ・ 8日前にグランザムの片隅で見かけた。田舎にいくらしい
- ・ 4日前にダナクを全力疾走していた
- ・ 2日前にセルムブルクを出た。68層に向かうとのこと
- ・ 昨日68層の宿を見た。目的を果たすまで出ない
- ・ 今までの屋台より設備が充実してるとのこと

NPCはほとんどアインクラッドを登っているようだ。今逃すとまた情報の集め直しになるのでメイは68層に向かう。その上今までの屋台より設備が充実しているので、獲りにに行くしかない。

メイは68層の宿に到着しクエストマークのあるNPCを探した。頭上には？マークのあるNPCは一人しかいなかった。簡単に見つかった。

「何かお困りのようですけどどうしたんですか？」

「旅のお方。よろしければ相談に乗って頂けますか？」

話を要約すると、68層の森を抜けた先の平原にあるアイテムを手にしたのだが、そこを縄張りにしてるボスを倒さないといけない。そいつを倒してくれとのことだ。

「そのアイテムを譲ってくれたらこの屋台を差し上げます」

報酬は今までと違いレンタルではなく、入手ということにメイは驚いた。とても美味しい話なのでメイはクエストを受けることにした。しかしこのクエストにはメイはレベル不足という重要な問題があった。《○○をく体倒せ》や《ネペントから胚珠を持ってきて》等と違いボス討伐である。一人では勝てそうにもないので同行者を探すことにした。

翌日、メイはクエストの同行者募集の看板を店の中に立てた。しかしこの店に来る人はほとんど中層組なので前線のボスにビビるため立候補はいない。

待てども待てども同行者は来ることなく、自分のレベリングを進めた方が早いと思い始め、ため息をついた時だった。

チリンチリン

「この店に来るのも久しぶりだなあ。」

「今日はお頭の奢りだー!」

「食うぞー!」

「なんでお前らが決めてるんだよ!」

見覚えのある侍集団がやってきた。

「いらっしやいませー。お久しぶりです。」

「お久しぶりです!メイさん!」

「「「お久しぶりです!」」」

店に来たのはギルド《風林火山》だ。その面々はテーブルに着き料理を注文した。届いた料理を食べていると、前にはなかった看板が目につき、内容を確認めた。

「メイさん。あのクエスト同行者募集ってなんのことですか?」

「68層のフィールドボスを倒すクエストです。一人では厳しいので手伝ってくれる人を探そうと思ひまして」

ほとんど最前線のフィールドボスをソロで倒すことなんて確かに

無理なことだ。現状それができそうなのはユニークスキル持ちのヒースクリフぐらいだろう。攻略組のプレイヤーでも難しい。少人数で挑むのではなくレイドを組むのが一番確実だろう。

クラインはレイドを組むことを提案したが「一番の情報屋がまだ抑えていない情報なので出回るより先に入手したい」の理由で断られた。

「そういえば…風林火山って攻略組ですよね？」

「よくフロア攻略には参加させていただいてます。」

これを聞いたメイは表情を明るくした。風林火山のプレイヤー達がいるテーブル前に移動をして、息を大きく吸った。

「お願いします！クエストを手伝ってください！」

クラインの思考は一瞬で塗り変わった。前線のフィールドボスに少人数で挑むことは最善ではない。故に参加しようと気はあまりなかった。しかし女性に頼まれたのだ。ここで断るものなら男が廢る。

「わかりました！手伝いましょう！」

「ありがとうございます！」

こうして68層フィールドボス討伐パーティーが出来上がった。

—————

翌日、クラインたち風林火山は約束時間15分前に転移門前についた。まだメイが到着していないので各自はアイテムの確認を始めた。その5分後に転移門が光を放ち始めた。

「すみません。遅くなりました。」

現れたのはメイだ。しかしいつものエプロン姿と違い今日は若草色の軽金属の鎧にロングブーツ、首には黄色のマフラーの戦闘用の装備だった。

「まだ時間ではないので全然大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。それでは行きませしょうか」

こうして一行は68層に向かった。道中は特に問題もなくサクサクと進み、森を抜け例の平原に到着した。

「雑魚モンスターが一匹もいねえな。」

「そろそろ来ますよ。準備お願いします。」

遠くからズシンズシンと大きい足音が響く。その音が徐々に近づいてきた。目の前に不自然にある洞窟の中から聞こえる。

「おいおい…これがボスカよ…」

「でかすぎやろ…。そのせいでよっほどキモいで」

現れたのは全長4メートルほどの巨大な白い蜘蛛だ。脚は鎌のようになっているためとても鋭い。背中にはトサカのようなものもあり、色は毒々しい。ネームは『ポイズン・スパイダー』。体力ゲージは3本だ。

「あんなもん絶対に状態異常系の攻撃ありますよ」

「だろうな。おいテメーら！各種結晶はすぐ使えるようにしとけよ！」

「『了解！』」

風林火山&メイとフィールドボスの戦闘が始まった。

—————

「ぐっ…。そろそろ毒が回り始めてきました！」

「大丈夫かよ!? 《ヒール》！」

一人が毒にやられてしまっても、もう一人の決めた相方が治す。この戦い方を始めて早数十分。ボスのゲージは一本と4分の3は削れた。しかし風林火山の4人が回復結晶が底をつき、転移結晶で離脱していた。

「あと回復結晶はいくら残ってますか？私は1個です！」

「俺も1個です！」

「俺はもうないです！」

かなりの量の回復結晶を用意していたが、底が見え始めて3人は内心焦り出す。毒蜘蛛は攻撃パターンの半分が状態異常攻撃であり、どういうAIをしているのか使用頻度が高い。更には状態異常特攻の攻撃持ちらしく、攻略組でも体力が6割削られる威力だ。

毒蜘蛛は口から糸を吐き、地面に固定する。その状態でジャンプをして糸の方を戻した。

「翻弄が来ます！」

毒蜘蛛は地面に足が着く前に、クラインの真後ろに次の糸を吐く。そうしてもう一度糸の方を戻して、体当たりをしにきた。しかし何度もこのパターンを見ているため、糸が着弾した瞬間にクラインは全力で横に避けた。毒蜘蛛は着地する前にメイにも同じことをしたが、メイも避けた。

蜘蛛は着地したが高い位置からなので硬直した。この隙を逃さずクライン達は刀5連撃ソードスキル《鷲羽》、メイは短剣3連撃ソードスキル《シャドウ・ステッチ》を放った。

シャドウ・ステッチは麻痺付与効果のある技だ。9回目の攻撃でついにポイズン・スパイダーは大きな体を痙攣し始めた。

「やれやれやれやれやれ！」

「毒蜘蛛が麻痺にやられる気分はどうや!?!」

毒蜘蛛が痺れている間にそれぞれは攻撃回数の多いスキルをどんどん当てていく。10秒間痺れ続け、攻撃を浴び続けた毒蜘蛛の体力は5分の1を切り、レッドゾーンに入った。

痺れが解けた毒蜘蛛は一度吠えた。その瞬間体の毒々しきは更に増した。

「攻撃パターンが変わるぞ！」

「了解！」

直後、毒蜘蛛から大量の糸が口から吐き出され、3人は拘束された。動けない3人に蜘蛛は毒を浴びせ、脚の鎌を振り下ろした。

クライン達の体力はイエローゾーンになり、メイはレッドゾーンになった。残り2個の回復結晶はクエストを受けてるのがメイだけな

ので一つはメイが使い、もう一つはクラインが使った。ポーションでは回復が追いつかないため、もう一人は転移結晶で離脱した。

「これ大分つらいですね。あとは私とクラインさんだけですし」

「こんな苦しい状況でも諦めないで勝つのが男ってもんよ！」

クラインは自分の刀を、メイは愛刀の《ハーネット・メイデン》を毒蜘蛛にむけて構え直す。毒蜘蛛が吠えた瞬間にクラインは左に、メイは右に走る。拘束攻撃を避け、その隙に二人は攻撃を行った。

毒蜘蛛の体力が1割を切り、メイは勝利を確信した。

だが、毒蜘蛛の鎌がメイに当たり麻痺状態になった。

毒蜘蛛はメイの方に近づき、特攻攻撃をするために鎌を大きく振り上げる。

「い、嫌だ……。嫌だ嫌だ！死にたくなんかない！」

メイの体力はグリーンゾーンとはいえギリギリのグリーンだ。あれを喰らえばどうなるかすぐに理解できた。目の前の死に怯えるのは当然のことだ。

ついにポイズン・スパイダーの鎌の攻撃の準備は終わりメイに振り下ろした。メイは目を瞑った。

キイイイイン

響いたのは切り裂く音ではなく金属音だった。メイは恐る恐る目を開けると、目の前には鎌を刀で食い止めるクラインの姿があった。

「てめえ…覚悟はできてるんだろうな！」

つば迫り合いの状態からクラインは鎌を弾き返し、よろつき腹が丸見えの毒蜘蛛に刀ソードスキル奥義《散華》をくり出す。全ての攻撃がヒットし、全ての体力を削り切った。

麻痺が抜け切るまでクラインはメイを待ち、ようやく立ち上がったメイに言葉をかける

「大丈夫でしたか!?メイさん！」

「あう……えう……。だ、たすか、り、まし、たあ」

メイは恐怖やら衝撃やらで呂律が回ってなかった。

やっとメイが落ち着き、クエスト報酬を受け取ってからアルゲードのメイの家まで二人は戻った。

「みなさん。クエストのご協力ありがとうございます！ございました！どうぞいっぱい食べてください！乾杯！」

「「「乾杯！」」」」

クエスト攻略のお祝いとして焼肉を食べ始める一同。飲み物もありとにかく食べまくる。

「かあ〜うめえ〜」

「塩が効いてて身にしてみる！」

「このタレも美味いぞー！」

焼肉を食べている風林火山メンバーを後にメイはクラインの元に駆け寄り、小声で話しかける

「あの…クラインさん…。最後は庇ってくれてありがとうございますました」

「別に気にすることないですよ。男が女性を守るなんて当然のことですし」

「でもクラインさんがいなきや死んでましたし…。本当にありがとうございますございました！」

メイは追加の肉を持ってくると全員に伝え、厨房に向かった。

メイの顔が耳まで真っ赤なものには誰も気づくことがなかった。

S級食材&試食会

最近SAO内では再びグルメブームが起き、アインクラッド内唯一のレストラン経営者であるメイは店内を走り回っていた。

「すみません。餃子定食下さい」

「申し訳ありません。現在在庫切れです…。」

「じゃあ天津飯をお願いします」

メイは厨房の冷蔵庫を開けたが全体的に残りが少なかった。この量だと昼食ラッシュは乗り越えられそうだが、夜の分には足りない。今日は店を早く閉めることにしてスポンサーであるエギルのとこに行くことにした。

エギルはメイのレストランの食材提供者だ。メイは月1で大量の食材をエギルから買っている。明日がその日であったが1日ぐらいと思い、メイは夕方に行くことにした。

—————

夕方、店の片付けと身支度を終えてからメイはエギルの店に向かった。歩いていると見覚えのある後ろ姿が目飛び込んできた。小走りで近寄りメイは声をかけた。

「アスナー！クラサーン！」

「メイさん！」

「お久しぶりです！」

最近出張や屋台の仕事が多く、動き回っていたので会うのは久しぶりだ。メイはアスナに聞きたいことがあったので聞くことにした。

「アスナの料理スキルはどうなったん？」

「先週コンプリートしました！」

「うわっ、早いな」

アスナは料理スキルの取り始めは遅かったがメイより早くコンプリートしている。裏を返せば料理スキルを上げること熱中し、攻略に手がついてないのは明らかなのでメイは内心苦笑いだった。

「そーいや二人はこれからどこに行くんや？」

「アスナ様はこれから知り合いの雑貨屋に行くようです。私はその

護衛です。」

「エギルさんのところか。私もそこに用事があるのでご一緒させてもらってもよろしいですか?」

「もちろん」

こうして三人はエギルの店に向けて歩き出した。道中はアスナとメイが料理などの話で盛り上がり、女二人の会話についていけないクラディールは黙りっぱなしだった。

長々と話をしているといつの間にかエギルの店に到着した。ドアを開け、三人は中に入った。

「シエフ確保…。」

中には既にキリトがいた。キリトはメイの顔を確認してからそう言った。

「いきなりどうしたんやキリト。」

「メイは料理スキルはコンプリートしてるんだっよな?」

「じゃないとあんな商売やってないで。それに…」

メイはアスナに視線を送る。それに気づいたアスナは前に出た。

「私も先週コンプリートしました。」

おお!と声上がるなか軽くドヤ顔のアスナ。メイはキリトがシエフを欲しがっている理由が疑問に思ったので尋ねた。その返答は爆弾ものだった。

「ラグーラビットの肉がドロップしたんだ。」

「ラグーラビット!?嘘やろ!」

キリトはウインドウを操作して全員にラグーラビットの肉を見せた。ドロップは本当のようだったのでアスナとメイは固まった。

「私も食べたいけど…この後も下ごしらえしないと行けないものもあるし…。」

メイは悩みながら肉をチラチラ見ていた。最後にため息を吐きアスナに向かい小声で話した

「またとないチャンスやぞ。家に呼ぶべきやろ?」

「え、ええ!?そんないきなり!」

「こんな大義名分のがしてどないすんねん。いいからほらほら。」

結局メイは下ごしらえの名分で調理をするのをアスナに譲った。キリトとアスナは交渉の結果、肉を半分ずつ分けることになった。肉を一欠片もわけてくれないエギルは悲しそうにしていた。

二人が行こうとしたところでクラディールが横槍を入れる。

「アスナ様。こんな得体の知れないプレイヤーと同行されるなんて困ります。私はあなたの護衛なんですよ？」

クラディールの言い分としては納得できる部分があった。確かに自分の上司、それも副団長で護衛の対象が本人が詳しく知らない人と同行するのは些か不安な部分がある。クラディールは攻略組ではないのでキリトのことは字面でしか知らない。

「これは命令ですクラディール。今日の護衛はここまでです。」

「ですが！」

このままでは埒が明かないと思いメイは助け舟を出した。

「クラさん。こいつなら別に大丈夫ですよ。なんやかんやいい奴ではありますし。私が保証します。」

「ぐっ…分かり…ました。メイさんがそこまで言うなら今回は信じます…。」

クラディールが折れキリトとアスナは店を出た。店の中で三人はその背中を見送った。

食材の補充が終わったメイは二人に提案した。

「これから晩御飯なんですけどお二人もどうですか？ご馳走しますよ？」

「いいのかよ!?メイ！」

「よろしいのですか？」

ほとんど初対面の二人がいることを忘れているが食卓を囲めば仲良くなりやすくなるというものだ。三人はメイのホームに向かった。

レストランに着いたメイは厨房に向かい、エギルとクラディールは席につく。

「今日のメニューはなんなんだ？メイ。」

「あの二人がS級食材食べるということで羨ましくなったんで、私はこれにしようと思います！」

メイはウインドウを操作して食材を出した。その食材の名前は《ミスト・イール》。日本語訳すれば霧のうなぎだ。

「これもS級食材じゃねーか！しかもうなぎだと？」

「これ…本物ですか？」

「入手に苦労したんですよ。」

食材のお披露目が終わり厨房に向かうメイ。二人は食材の興奮が止まらず、話続けた。

みりんと酒を混ぜ合わせ、強火で沸騰させる。沸騰したら砂糖を溶かす。

この上に濃口醤油を入れ、もう一度沸騰させる。その後煮詰める。

灰汁を取り除き、ろ過してから素早く冷却する。

これでタレの完成だ。

フライパンに水と酒を入れ沸騰させる。

うなぎを並べて酒をかける。

うなぎを蒸し、タレをかけて全体に馴染んだら火にかける。これを両面おこなう。

ご飯の上に乗せて山椒をかけたらうなぎの完成だ。

「お待たせしました。うなぎです！」

「うおおおお！」

うなぎ特有の香ばしい香りにタレの匂いも重なり更に香ばしさが増す。その匂いが三人の食欲を刺激し更に空腹感を増す。

「「いただきます！」」

三人はうなぎをくちに運ぶ。ホカホカご飯の上に乗った優しい甘みのあるうなぎが口の中に広がる。

「うっめー！」

「うなぎなんて何年ぶりですかね。」

「S級食材やばすぎやろ。」

箸が休むことなく口に運ばれ続け、数分もすれば完食していた。

「いやー。美味かったなー！」

「S級食材を食べられるなんて思いませんでしたよ。ありがとうございます。」

ざいます。」

「私も食べたん初めてやから驚きましたよ。」

三人は思い思いに感想を述べた。また食べたいなという声もあったがそれを聞いたことでポツリとメイが呟く。

「でももう2年です。74層です。次を食べる前には脱出だと思いますけどね。」

「そうですね。そろそろラストスパートですね。」

「俺も頑張らないとな。」

うな重の余韻に浸り終わり、エギルとクラディールは店を出た。

明日はメイは休みだ。下ごしらえも明日の分は特になく暇になる。最近死ぬのを避けるためにレベリングを続けたメイのレベルは86まで上っていた。しかしまだまだ足りないと思いい、明日は74層で弱い敵相手にレベリングをすることに決めた。

アスナはキリトと上手く行ったことを願い、メイはベッドに入った。

74層攻略&青眼の悪魔

街で既に公表されている分のマップングデータを受け取り、74層の迷宮区に向かうメイ。毒蜘蛛戦から店を休み続け、死なないためにレベリングに没頭していたメイは以前よりレベリングのノウハウを深く理解し、安全に効率的にレベリングをしていた。

だがレベリングを場所を70層を超えたあたりで雑魚モンスターにもイレギュラー要素が入り、一人では苦しいところもあるものの、ポーションは大量にあるので心配は少ない。

「残りのポーションは21本。帰りの分もいるから5本になったから帰ろうかな。」

目の前に現れたモンスターを倒し、アイテムドロップや経験値を確認していると後ろから足音が聞こえた。振り返るといつしかお世話になった侍集団がいた。

「皆さーん！こんにちはー！」

「「「「「こんにちは！」「」」」」」

メイは毒蜘蛛戦で手伝ってもらったギルド《風林火山》と合流した。風林火山はマップングを進めるとレベリングの両方をするためにダンジョンに来ているようだ。

「メイさんはここで何をしていますか？」

「ただ普通にレベリングですよ。以前のような死に目にはもう合いたくありませんので。」

「でも最近はおbも強いんでメイさんも一緒にレベリングしませんか？」

「いいんですか!?ありがとうございます!」

クラインの誘いを受けメイは風林火山と一緒にレベリングをすることにした。メイのテンションは少し上がり気味だった。

一行は迷宮区の奥の入っていきながらレベリングを続ける。奥にいくほど雑魚モンスターも気持ち強くなってる気もしないことはないが、複数人で戦うのでメイにとって戦闘は数倍も楽になっていた。

迷宮区の奥深くまでやってくると、そこには安全区域があった。安

全区域には既に人がいて服装を確認してみると、メイが昨日見送ったキリトとアスナだった。一緒に行動しているという程度はある程度上手くいっただろう。

「おー。キリトじゃねえか。」

「クライン。まだ生きてたのか。今日はメイも一緒なんだな。」

「死にたくないからレベリング中！」

メイはサムズアップを決めた。座っている二人は立ち上がった。キリトを通しアスナとクラインの自己紹介が終わり、クラインはキリトとアスナが二人でいることを妬んだ。そのクライン達の流れをメイは離れたところで少し不機嫌になりながら見ていた。

安全区域で話していると後ろから集団がこちらに来るのが見えてきた。

「あれは…軍のやつらか？」

黒目の青の鎧を身に着けた軍のパーティーが安全区域にやってきた。先頭の人以外は全員息を切らし、誰の目にも疲れきっていた。

「全員！休め！」

リーダーらしき男が号令をかけると軍のプレイヤーは全員崩れ落ちるように座り込んだ。休むことなく動き続けているようなので当たり前だとは思う。メイも普段は休みが少ないが、軍のように偶に動くわけでもなく、毎日やっているので多少慣れはあるので大丈夫だった。

「私は軍のコーバッツ中佐だ。」

「キリト。ソロだ。」

「k o bの副団長のアスナです。」

「クラインだ。」

「またお好み焼き食べに来てくださいね。」

「「「お久しぶりです！」「」」」

「ヒッ」

軍は定期的にレストランに来ているので、メイは重役の顔は大体覚えてる。コーバッツは最初の軍の客だったので尚更だ。

「君たちはこの先のマッピングはしているのかね？」

「ボス部屋までのマッピングは終わったよ。」

「うむ。ではそのデータを我々に提供していただきたい。」

コーバッツはマッピングデータを要求した。周りがどよめく中、メイは今までマッピングをしたことが一度もなく、その苦労を知らない。今日クライン達と出会った場所や毒蜘蛛の平原も全て公開されていた情報だ。命を張って攻略組が頑張っているのは知っているが、彼らにもそれ相応の報酬があったので、タタで要求しているコーバッツに「大丈夫か？」と思っていた。

「マップデータを提供しろだ?! マッピングの苦労を知っているのかよ!？」

クラインの言い分は最もだ。

「我々は一般プレイヤーのために闘っているのだ。諸君が協力するのは当然のことである。」

「てめえ……」

噂なら軍は25層の攻略で壊滅的ダメージを受けたらしく、それ以来攻略に参加することが一切なかったらしい。それが今になって出て「協力しろ」は都合のよすぎることだ。

「いいんだよクライン。どうせ街に戻ったら公開するデータなんだ。」

人が良すぎるとクラインに言われたがキリトはウインドウを操作し、コーバッツにマップデータを渡した。

「協力感謝する。」

コーバッツの言葉は特に気持ちのこもったものではなく、社交辞令みたいなものであった。

「ボスにちよっかいを出すつもりならやめといた方がいいぜ。あれはあんた達でどうにかなるような相手じゃない。それに仲間達も疲労しているじゃないか。」

「それを決めるのは私だ。それに私の部下たちはこれ位で疲れるような者はいない! さっさと立て!」

コーバッツは部下達を無理やり立たせてから奥に進んでいった。

「大丈夫かよ。あいつら。」

全員は先に進んでいった軍を心配していた。だがあの人数で挑みに行くなら偵察目的だと割り切り、安全区域で休憩を続けることにした。キリトとアスナの仲良さげな雰囲気を見てクラインはアスナに話しかける。

「あー、そのー、アスナさん。口下手でバカタレではありませんが、キリトのことをよろしく頼みます。」

「はい！任せました！」

クラインの頼みにとてもいい笑顔で応えるアスナ。あんなに明るい顔ならキリトのことがどれだけ好きかよくわかる。御役御免の日は近いなどメイは思った。

キリトの提案で軍の様子を一応見にいこうということになり、ボス部屋に向かって歩いていく。

「ーあああああ……！」

奥から確かに悲鳴が聞こえた。それを聞いた全員は一斉に走り出す。やがてボス部屋が見えたが、大きな門は既に空いており中の様子が見える。

中は悲惨な状況だった。ボスが軍を相手に蹂躪していた。最初に見たときよりも二人足りない。脱出したのだろうか。

「早く転移結晶を使え！」

キリトが転移結晶を使うように指示したが、その答えは絶望ものだった。

「駄目だ！転移結晶が使えない」

二人足りない。転移結晶が使えない。これだけの情報だけで二人の人間が死んだのは分かりやすかった。

「嘘だ……」

メイが言葉をこぼす。つい先日に来てくれた客が死んだ。その事実はショックだった。これ以上死者を出すべきではない。気がついたときにメイは叫んでいた。

「逃げてください！死んでしまいます！」

「何を言うか！我々に撤退の二文字はない！戦え！戦うんだ！」

「逃げてくださって！」

軍は手を休めることなく攻撃を続けたが、まともに攻撃も当たるところはなかった。ボス《グリーム・アイズ》のたった一息で崩され、一人のプレイヤーが大剣に搦り上げられ、門の前に放り出された。

搦り上げられたのはコーバッツだった。彼の体力はドンドンと削られていきレッドゾーンで止まることなくあつという間に0になった。

「あ、ありえない」

コーバッツは涙を浮かべ、たった一言呟くとポリゴン片になり爆散した。

露見&討伐

コーバッツが死んだ。メイと軍の関わりはコーバッツがあつてこそだった。お好み焼きのピザ切りにブチ切れキバオウと一緒に締めたのはいい思い出だ。

コーバッツはよくキバオウに連れられレストランに来ていた。タコ焼きを少し冷まそうとしてから食べようとしていたところをキバオウとメイに見つかつた。アツアツじゃないと意味無いだろと言われ、アツアツのタコ焼きを口に押し込まれていた。

メイは軍の本拠地に行くほど交流があつた。キバオウの企画で《お好み焼き食べ方抜き打ちテスト》が行われ、コーバッツは見事に引つかり締められた。ついでにシンカーとユリエールも締められた。

軍の中でメイとの架け橋のコーバッツが死んだ。

—————

目の前で人がポリゴン片になり、その上《グリーン・アイズ》は次の獲物を仕留めるために軍のメンバーに攻撃を仕掛けようとする。それを見兼ねたアスナとメイは武器を抜き、叫びながら突撃していった。

「待て！二人とも！」

キリトが呼びかけるも止まらない。二人はソードスキルをボスに繰り出す。攻撃は全て当たり、ボスのタゲは軍から二人に移り、ボスが反撃をしかける。アスナとメイはキレていても冷静な動きで避けていったが、全てを回避しきることはできなかった。

ボスは体制の崩れたアスナを狙つたが、キリトが間に割り込み大剣を片手剣で受け流す。

「二人とも下がれ！」

タゲはキリトに移り、ボスが攻撃をしていくが、キリトはそれを防いでいくだけで、反撃はしない。キリトが攻撃をしないのは、奥で風林火山のメンバー達が軍の人たちを外に連れ出している途中のため、ボスを大きく移動させないためだ。だが真ん中で攻防をしているの

で軍の避難は中々進まない。

ボスの攻撃がついにキリトに届く。弾き飛ばされたが受け身を取り、無事に着地する。このままでは更に死者が増えてしまう可能性があるため、キリトは使いたくはなかったが奥の手を使うことにした。

「アスナ！クライイン！メイ！10秒だけ持ちこたえてくれ！」

「わかったわ！」

「おう！」

「了解や！」

キリトは後方に下がり、ウインドウを操作し始める。その間に3人は前に出てボスとの戦闘を始める。

タゲはメイに移りボスが大剣を振り回す。それを避け、短剣スキル《サイドバイト》を繰り出す。攻撃は全て当たり、AGI補正でボスとの距離を取ったが、大剣のリーチが想像以上に長かったため攻撃が当たり、吹き飛ばされる。メイは体力の4割を削られた。

（フロアボスってこんなにきついんか…）

メイはフロアボス戦は初めてだ。まともな攻撃を初めてくらい、認識を改める。

「全員下がれ！スイッチ！」

キリトが飛び出し二本の剣で大剣を受け止める。大剣を切り返しが空きになったボスにスキルを叩き込む。

「スターバースト・ストリーム！」

二本の剣がキリトのスピードに乗り、ボスに襲いかかる。ボスは攻撃をくらいながらもキリトに攻撃を続ける。キリトも攻撃をくらいながらも続ける。

ライトエフィクトを纏った剣は夥しい数の攻撃を繰り出し続ける。いつ止まるのか見当もつかないほどだ。

時間にすれば僅かなものだが、ここにいる全員はとても長く感じた。

遂にボスに体力が削りきられ、ボスとキリトのタイマン勝負はキリトの勝ちで決着がついた。

「終わった…のか…？」

そう言うとキリトは倒れた。

ボスを倒し、75層への門を有効化する場所までキリトは運ばれてからアスナの呼びかけにより目を覚ました。

「俺はどのくらい気絶していたんだ…?」

「数十秒ぐらいやな。たいしたことはあらへんやろ。」

「そうか…。」

キリトは起き上がったが、軍の方に目を配ってからしばらく沈黙が続いた。

「クライン…。」

「軍の連中は回復を済ませたが…：コーバッツと二人が死んだ。コーバッツの野郎が死んじまつたら元も子もないだろうが!」

クラインは顔をしかめた。人が死んだことによる悔しさがあるのだろう。それはさておきと切り替える。

「ところで、お前が使ったあのスキルは何なんだよ?」

「あんなの一回も見たことないで。」

質問をされたキリトは気まずそうだ。説明したくないような感じが見て取れる。

「ええと…言わなきや駄目か?」

「つたりめえだ!」

できれば人前で公開したくはなかったが、このままでは納得しないと思い、キリトは言うことにした。

「…エクストラスキルだよ。《二刀流》」

聞いたことのない新しいスキルの存在にどよめき上がる。

「しゅ…：出現条件は!」

あれだけふざけた攻撃力を大量のプレイヤーが持てばこれからの攻略はゴリ押しで安全にできるだろう。欲しがるのは当然のことだ。だがキリトの性格を考えれば予測できた答えが帰ってくる

「解ってたらもう公開してる。」

「だ(や)ろうなく」

キリトは以前ビーターの汚名を被り、更に《月夜の黒猫団》のこと

もあるので隠していた。

「まあこんなん一人だけ持つてたらやばいしな。ヒースクリフ同様のユニークスキルやる?」

「そうだな。ネットゲーマーは嫉妬深いからな。」

しかしメイやクラインは空気を読んでも、軍の前でこんなおおっぴらにユニークスキルを使ってしまうば隠すことはできない。

75層への通路は風林火山がアクティベートすることになり、キリト達はホームへ直行。メイは軍の見送りをすることになった。

—————

メイは軍を1層の本部まで送り届けた後、応接間にいた。その場にはメイの他には座ってるキバオウがいる。

「…あれはキバオウさんの指示ですか?」

「あれとはなんや。はつきり言わんと分からんな」

シラを切るキバオウ。メイの店の常連ではあるが痛い所は突かれたくないのだろう。

「少数での74層に送り込んだことですよ。コーバツツさんを含め3人死んでます。」

「3人死んだのは知ってる。コーバツツ達のこととは残念や。でもワイは見てこいって言っただけで倒せなんて言っていないで。」

キバオウはコーバツツ達には「倒してこい」と言った。このことがメイにばれてしまえば、軍全体と仲の良い彼女はトップのシンカーやユリエールにも伝えてしまう。キバオウはそれを危惧している。

「まあいいですよ。次からはやらない方がいいですよ。やれば多分キバオウさんの方が危なくなりますよ。では失礼します。」

ボタンとドアを閉めメイは軍の本部を出た。

「お前には分からんのや…。ワイの立場が…。」

—————

軍の本部の裏には墓地がある。軍の戦死者達の墓だ。グリセルダ同様の墓であり、メイはその一つの前に座っている。

コーバツツ准将 74層ボス戦にて戦死。

以前まで中佐だったコーバツツが准将になってるのは、戦死による

2階級昇進だ。こんなゲームにも現実の軍のような規律があることにメイは悲しくなる。

「コーバッツさん、ごめんなさい。あの時私ともうちよつと早ければもしかしたら助けられていたと思うのですが…」

メイが動いたのはコーバッツが死んでからだ。部屋をのぞいた時に2人いなかったのだからその時点で入るべきだったと後悔する。

「本当にごめんなさい。ごめんなさい…。」

ポタツと涙が落ちる。ラフコフと関わってきた以上、この世界での人の死は見てきたがやはり慣れない。特に知り合いなら尚更だ。

「じゃあ…私はこれで帰ります。これ、向こうで食べてください。」

コーバッツの墓の前にお好み焼きが乗った皿を供える。メイはコーバッツに別れを告げその場を去った。

「死んでもまだお好み焼きですか!？」
コーバッツはあの世で泣いた。

決闘&唐揚げ

74層ボス攻略の翌日。案の定キリトの二刀流の存在は新聞にて公になった。家の前にまでスキルの詳細を聞きに来る人達がいっぱいいたので、キリトはエギルの家に逃げ込んだ。

「なんでこうなるんだよ!」

まだ1日も経っていないのにここまで広がるのは誤算のようだったみたいだ。SAOにはアルゴがいるのだから情報の拡散スピードはすごいものだ。

「そりゃキリトが派手に使ったからでしょ。俺たちの秘密だーとか言いながらも。」

「私も知らなかったけどユニークスキルの存在は大きいからな。そろそろなつても変じゃないやろ。」

バターの買い出しに来たメイは偶々居合わせただけである。特に呼ばれたとかはない。

キリトがゴネていると裏口の方向から人が走ってくる音が聞こえた。ものすごいスピードで迫って来たため、裏口の扉はすぐに開いた。

「どうしよう、キリト君。メイさん。大変なことになっちゃった。」

—————

55層グランザムにあるkob本部に呼ばれたキリトとメイ。それぞれ別々に話があるようで、先にヒースクリフと話すのはキリトだ。

少し待つとキリトは話し終わったらしく、ヒースクリフの部屋から

出てきた。その表情は少し厳しいものだった。待たせては悪いのでドアをノックする。

「入りましたまえ。」

「失礼します。」

先程キリトと話した内容はあまり聞かれなくなかったのだろう。部屋にはアスナとヒースクリフ以外誰もいなかった。

「それで、私には何の御用でしょうか？」

「先日君はアスナ君たちと74層のボスに挑んだそうだね。報告書を見た時には驚いたよ。」

「まあそうですね。」

「以前アスナ君や私からの勧誘を断った時には覚悟ができてないと言っていたが遂にできたようだね。」

「あの時はただレベリングしてただけですし…。軍の人も助けなきゃと…。店も忙しいので断らせて頂きます。」

二人は「入ってくれ」「嫌だ」の会話になり、どちらかが折れなければ話に終わりが見えなくなるのはすぐに分かった。

「ならば剣で、デュエルで決めようじゃないか。私が勝てば君にはkobに入ってもらおう。君が勝てばこちらからは無理に誘わないし、店のスポンサーになろう。」

「団長！また決闘ですか!?!」

「うっ…。kobがスポンサー…?」

メイは悩んだ。SAO内最大のギルドがスポンサーになってくれれば、試作の数も増やせ、品数は増えるだろう。だが相手はヒースクリフだ。ユニークスキル持ちのトッププレイヤーに攻略組平均レベルが勝てる訳がない。

「流石にユニーク持ちトップの団長さんが相手は無理ですね。この話は白紙でお願いします。」

「ふむ…。そう言われればそうだな。ではアスナ君ならどうだろうか?」

「なんで私がメイさんと戦わなければならないんですか!?!嫌ですよ!」

メイはアスナに慈しみの顔をしてから肩に手を乗せ、ヒースクリフの方を向いた。

「わかりました。その勝負受けます！」

「アスナ君。これは命令だ。」

「もおおおおおお！」

アスナの嘆きは止まらない

—————

75層にはコロシウムがあり、そこで試合が行われることになった。キリトは今日の観戦はk o bの人達位だろうと思っていた。しかしコロシウムはお祭り騒ぎだった。

「嘘だろ……」

k o bの人が入場チケットを販売しており、更には商人プレイヤーが露店を開いていた。それにも驚いたが、もつと驚くことがあった。露店の中でも1番長蛇の列を作ってる店がある。それは今日は勝負があるはずのメイだった。

「いらつしやいませー！」

「なんでお前も商売してんだよ！」

「ダイゼンさんからスペース貰ったからに決まってるやろ」

キリトが文句を言っていると横からk o bの人がやってくる。

「おおきにおおきに。キリトさんのお陰でえろう儲けさせてもらえます。あれですなあ、毎月一回ぐらいやってくれると嬉しいですよ」

陽気な関西弁の口調で話すのはダイゼンだ。k o bの会計でもしているのだろう。商売魂は十分にあるようだ。

「あ、メイさん。コロシウム内でも売る用の唐揚げを頂けまへんか？」

「了解しましたー。」

鶏肉を一口大に切る。

醤油、みりん、酒、ニンニク、ショウガを混ぜ、鶏肉をこれに揉み込み、15分程漬ける。

片栗粉をまぶし、余計な粉をはたいて中温で香ばしく揚げれば完成

だ。だがメイは温度を少し変え、2度揚げをした。

これで自信のあるサクサク唐揚げの完成だ。

「はい、これお願いします。」

「おおきにおおきに。」

キリトとアスナはダイゼンに連れられ控室に向かった。

それからメイは入り口前の露店で唐揚げを作り続けた。しばらくすると外にも聞こえるアナウンスが流れた。それはキリトとヒースクリフの呼び出しであったので、メイも店を閉め控室に向かう

—————

「す、すまないキリト君。ここまでの騒ぎになっているとは思わなかったよ。」

「ギャラは貰いますよ。観客の殆どが食べ物片手で完全に見せ物だからな。」

「いや、この試合が終われば君も団員だ。任務扱いにさせてもらう。それと食べ物のことは彼女に言ってくれ。」

ヒースクリフは自分の入ってきた方向の入り口に指をさす。そこには笑顔で手を小さく振るメイの姿があった。

キリトとヒースクリフはウインドウを操作してデュエルの準備を整える。60秒のカウントダウンが表示され、コロシウム全体が静寂に包まれる。

カウントダウンが0になった瞬間キリトは走り出しヒースクリフに斬りかかる。それは防がれたが、もう片方の剣で攻撃する。ヒースクリフはそれも防ぎきり、盾の先端で突きを放つ。キリトは剣を交差に構えて突きを受けきつたが弾き飛ばされた。

そこからヒースクリフは距離を詰め、攻撃をしかける。見ている全員にとって見たことのないスキルを発動しながら攻撃をする。キリトも負けじとスキルで応戦する。ユニークスキル同士の斬り合いにはとても熱く感じた。

2人は一度離れ、再び距離を詰める。キリトの攻撃は更にスピードを増していき、ヒースクリフは苦しくなる。

ついにキリトが大きく動く。二刀流16連撃スキル《スターバース

ト・ストリーム』を発動する。次々と斬撃が繰り出されるがヒースクリフはそれを防いでいく。が、スピードはキリトが上回り次第に追いつかなくなっていく。ついでに。

15 撃目でヒースクリフの盾が弾かれ、キリトの左の剣がヒースクリフを捉えた。

そう思われた。

ヒースクリフの盾は弾かれたはずだが確かにそこにあつた。キリトの攻撃を防ぎ、スキル後の硬直による間にヒースクリフは剣でキリトを突く。

ヒースクリフ vs キリトの勝負はヒースクリフの勝ちで終わった。

—————

(弾かれた直後の盾があんなスピードで戻るんか？ いやスキルならありえるんか……。でもライトエフェクトなんて出ていたか？ いや出てなかったはずや。じゃあ一体あのスピードはなんや？)

この試合唯一ヒースクリフの背を見ていたのはメイだけだ。アスナやリズはキリトの背中が見える位置であり、ヒースクリフはあまりよく見えない。観客たちは上から、その上距離もあるので、2人の距離はわからない。

故に違和感に気づけたのはメイだけだ。違和感の正体を見破るためにありとあらゆる可能性を思考する。

『続いては第2試合です！』

ここでアナウンスが入る。メイはヒースクリフのことを後で考え

ることを決める。

(これからアスナとの試合や。そつちに集中せんと。)

コロシアムの舞台上がる前にメイは口にある物を含んだ。

V S アスナ & 打ち上げ

コロシウム内の歓声が交わる中、メイとアスナは舞台上上がる。お互いは真っ直ぐ見つめ合い目を離さない。視線が外れることなく2人はスタート位置に着いた。

「…色々と鬱憤が溜まってるので全力で勝たせてもらいますよ。」
「……………」

アスナの意気込みに対してメイは返答をしなかった。ただ目を閉じ鼻で深呼吸をしているだけだった。

(すっごく集中してる…。)

いつも明るく、面倒見がよく、時折振り回されることがあるが、どこか憎めないのがメイという人だ。アスナは相手が自分との試合にこれほどまで集中してくれているなら、私情を持ち込まずに戦うべきと考え直した。

(メイさんは店のためではなく、私を1人のプレイヤーとして闘おうとしている…。なら、私も！)

余計な思考を押しやり、アスナも目を閉じ深呼吸をする。ただ唯一気になるのはメイの鎧が違うことだ。若草色ではなく、黄色だった。

気持ちが整ったところでウインドウを開き、相手に決闘の申し込みをする。メイは届いたウインドウを操作をし、カウントダウンが始まる。

カウントダウンの間お互いは武器を抜いて構える。アスナは細剣をメイは短剣を相手に向ける。時間いっぱいまで2人は相手から目を逸らさなかった。

カウントが0になった瞬間2人は走り出す。やはりレベルやステ振りなどによりアスナの方が速い。《閃光》の二つ名も伊達ではなく、アスナの攻撃の方が速い。だがメイはアスナの視線から攻撃先を予測して短剣の腹で受け止める。

メイの愛刀の《ハーネット・メイデン》は鉈包丁だ。腹が広いため攻撃を受けることもできる。突きを防がれたアスナは反作用を利用してバックステップを取る。距離は開き、仕切り直しになった。

アスナは細剣スキル《リニア》を放つ。メイはこれも短剣の腹で受ける。アスナは連続でリニアを撃つ。メイの防御が少しずつ追いつかなくなっていくが、アスナとの距離は詰まっていく。

アスナの細剣は突きがメインなので、突くための距離が確保できなくなっていく。

アスナはもう一度後ろに下がり距離を確保しようとした。だがメイは後ろに下がるアスナに向かって走り出す。メイは短剣を突き出したが、アスナの咄嗟の判断により防がれ、鏢迫り合いになった。

互いの武器は鏢迫り合いには向いていない。細剣は刀身が細いで、鉞包丁はそもそも鏢がない。突き出た刃で細剣に引っ掛けてる程度だ。だがアスナは離れようとしても、メイが腕力のゴリ押しでびつたりと引っつく。

(離れられない…！)

スキルを使おうにも細剣で斬ろうとしても、その動作に入る前に引っつかれる。だがこれではメイも攻撃ができないのは明らかだった。二人は近づいた状態のまま睨み合う結果になった。

「このままでは勝負は着きませんよ…」

「……………」

相変わらずメイは言葉を発することはない。だが鏢迫り合いの主導権はメイが握っているので、アスナはこの状況を打破するために考える。

瞬間

アスナの目の前に果物ナイフより更に小さいナイフが突然飛んできた。アスナは飛び退いたが、ナイフは頬を掠める。アスナはメイに視線を戻すと、メイは腕で口を拭っていた。先程のナイフはメイが口から飛ばしたものだ。

「随分卑怯な手段を使うんですね……」

「いや、掠っただけか。いけると思ったんやけどな。」

口の中にもものが無くなったためメイはようやく喋る。相手の奥の手は防いだが、これ以上試合を長引かせれば自分が不利になるとアスナは確信した。

アスナは全速力で走り出し、細剣スキル《デルタ・アタック》を撃とうとする。

しかし2歩踏み出したところでアスナは痙攣を起こし、体に力が入らなくなっていく。アスナは自分の体力を見ると、そこには麻痺状態を示すアイコンがあった。

先程アスナを掠めたナイフには麻痺毒が塗ってあったので、掠めただけでもアウトだった。

麻痺で動かなくなったアスナの背中にメイは鉋包丁の刃を突き立てた。アスナは抵抗もできずに攻撃を受け、この決闘はメイの勝ちで終わった。

—————

キリトとアスナは試合に負けたので、肩を落としながら帰路について。キリトがk o bに入ることになりアスナは少し喜ぶところはあるが、メイに負けたのはやはり悔しいものだ。二人は夕食もまだなのでNPCレストランに行こうとするが、キリトにメッセージが届く。

差出人メイ：『今日は決闘お疲れ様。キリト達のお陰で屋台がよく稼げてん。夕食食べに来ない？』

どうやら勝った者は敗者の気を取らないらしい。だが折角のお誘いだ。食い尽くすつもりで食べてやろう。キリトはささやかな仕返しに何の連絡を入れずにアスナを連れていくことにした。

—————

キリト達は50層のメイのレストラン前に来ている。何の連絡もなしにいきなりアスナの顔を見たメイの反応を楽しみにし、二人はドアを開けた。

「おいメイ。アスナも連れて……なんでだよ……」

店の中にいたのはメイだけではなかった。メイの目の前のカウンター席にはヒースクリフが座っていた。

「なんでヒースクリフがいるんだよ……」

「なぜキリト君も呼んだのかね……?」

「なんでこのタイミングでアスナ連れてきてんねん…」

「……………」

4人はそれぞれの今日闘った相手がいるので気まずくなくなった。

「じゃあ夕食つくりますね。」

この気まずい雰囲気から逃げ出すためにメイは厨房に入った。とりあえず作るものはキリトとヒースクリフが好きなものを足して2で割るもの『麻婆ラーメン』だ。アスナとメイの分は以前と同じハンバーグ定食にした。

フライパンに油を入れ、中火で豚ひき肉を炒める。

水、キリトが初めて来店した時に作った麻婆豆腐の素、鶏ガラスープを煮てから豆腐、ネギ、ニラを入れる。

片栗粉とトロミ粉を溶き水で混ぜる。

煮立ったら火を止めて、トロミ粉水をかき混ぜながら回し入れ、軽く混ぜる。

全体を火にかけ、煮立たせる。

湯ぎりした麺を入れ、スープで麺をほぐしたら完成。

ハンバーグ定食は以前作ったものと同じように作る。

「お待たせしました。麻婆ラーメンです。」

「これはまた赤黒いな…」

「なんでこいつと顔を合わせながら同じ物を食べなきゃならないんだ…」

キリトはどうやらヒースクリフと顔を合わせて食事するのが嫌ようだ。先程の試合では訳のわからないまま敗れたので当然ではある。だがメイはそんな気も知らない。

「そら新入団員が入ったんやから大手ギルドとしては歓迎会するもんちやうん？」

「大手会社みたいになんて言わないでくれたまえ…」

そんなバカ話をしながら配膳が終わると、全員で手を合わせる。

「いただきます。」

そう言って1組は激辛麻婆ラーメンを、もう1組はハンバーグ定食を食べ始める。

「ゴフツ……！な、これは辛すぎないか!？」

ヒースクリフがラーメンを一口嚼ると辛さで悶え始めた。それを見た3人は笑う。

「なぜキリト君は平然と食べているのかね？」

「これぐらい普通だろ」

「これよりまだ辛くしても平然と食べるような奴ですよ。」

「君の舌はどうなっているのだ？」

ヒースクリフが予想以上に辛さ耐性がなく、残りのラーメンを苦しみながら食べていた。しかし後半になるにつれ、慣れてきたのか食べるスピードも上がっていた。

「そういえばメイさんはどうして口の中に麻痺毒があっても麻痺状態にならなかったんですか？」

アスナが今日一番の疑問をメイにぶつける。決闘の時に口に麻痺ナイフを仕込んでいたメイは一度も麻痺状態になっていなかった。

「簡単なことや。今日の装備は麻痺完全無効の装備やつてん。」

出てきた答えは完全に対人戦の準備をしていたとの答えだった。

アスナは答えを聞いて満足し、再びハンバーグを食べ始める。

「「「ごちそうさまでした。」」」

全員が夕食を食べ終わったので帰ろうとする。

「キリト君。明日から君もk o bの一員だ。よろしく頼む。制服はアスナ君に頼んであるから安心したまえ。」

キリトは不服そうな顔をしながらアスナと一緒に店を出た。メイとヒースクリフはその背中を見送った。

「さて、私も帰るとするよ。」

ヒースクリフが店のドアに振り向いたところでメイは呼び止めた。

「スポンサー契約のことと他に話したいことがあるので残ってくださいませんか？」

「ふむ。了解した。」

ヒースクリフとメイは向かいあい席に着いた。

交渉&交渉

席についたヒースクリフとメイはスポンサー契約について話し始める。いくら卑怯な手段を用いても決闘自体にメイは勝ったのでヒースクリフは条件を飲むしかない。

「やっぱリスポンサーと言うからには無料で食材の提供をして欲しい気持ちはありますね。」

「トップギルドのナンバー2に勝ったお祝いだ。その条件を飲む。ただし、結ぶのはスポンサー契約だ。君にも我々k o bの宣伝をしてもらいたい。」

「わかりました。」

「それで、君にはどれぐらいの食材が必要なかね？」

メイは席を少し離れ、奥からエギルからの領収書を持ってくる。それに記載されている食材の量にヒースクリフは目を疑った。莫大な量の上には『1ヶ月分』の数字があつたからだ。

「これだけの食材は一体いくらかかるのだ？」

「エギルさんのモットーもあつて本当は30万のところを20万で仕入れてるんです。」

エギルの商売モットーは『安く仕入れて安く売る』だ。メイはこれのお陰でエギルから毎月安く買えている。ヒースクリフはこれを無料で提供することになるので、毎月30万コルの出費がプラスされた。

「下の方にA級食材もあるがこれは買えるのかね？」

「裏市場に時々出回ってますね。毎日張っていれば月3個ほどなら買えますよ。」

「君のその情報力も中々のものだな。」

エギルの契約が無く、自分で買っているものもさりと混ぜ、あたかも最初からエギルから買っているように見せかけて上物の食材も確保できた。これは殆ど詐欺に近い。

その後も二人の交渉は続き、話はずいにまとまった。

「スポンサー契約はこんなものかね。」

「両者 win-win の関係ですね。」

「君の win の割合が高すぎる気もするがね。」

少し痛いところをつかれ、メイは笑いでごまかす。

「さて、私も今日は帰るとするよ。」

「まだ話がありますよ。『他に話したいこともある』って言ったじゃないですか」

ヒースクリフは再び席につき、メイはコーヒーを淹れる。コーヒーを飲んでいる間、2人には沈黙が続いた。

「まずは今日の決闘の勝利おめでとうございます。」

「それは君にも言えることだ。」

お互いに今日の決闘の勝利を祝い合う。しかしその言葉はどこか上辺だけのものだった。

「団長さんの決闘のことについてどうしても疑問があるんです。最後の方でキリトの連撃を防ぎきった時にスキルは使いましたか？」

ヒースクリフは考え込むようにして、試合を思い出す。返答までに少しの間が空いた。

「いや、特には使っていない。君は私のすぐ後ろであの勝負を見ていたのだから君にも分かるはずだろう？」

「そうなんですけど確認なんです。第一団長さんの盾にしろ剣にしろライトエフェクトはありませんでしたし。」

まずは一つ目の確認がとれたことにより、メイの中で組まれていた仮説が更に深く組まれる。まだこれでは足りないと思いつつ目の質問をとる。

「団長さんの戦闘スタイルはユニークスキルによるカウンターがメインに見えるので、ステ振りはタンクよりですか？」

「大きく分けるとそうなってしまうな。」

メイは仮説の一つが確信に変わった。やはりこの人はおかしい。キリトのステ振りはSTRベースのスピード型だ。あのスピードの攻撃全てをタンク型が捌ききれないはずがない。《神聖剣》について何も知らないメイは、それ特有のスキルなら納得したかも知れないが、本人の口から使っていないときた。メイの考えの中では矛盾が広がっ

ていく。

「団長さん。いえ、ヒースクリフさん。やはりあなたは異常です。弾かれた直後の盾を戻せる速度。スピード補正のかかったスキルをスキルなしで防ぎきったこと。どう考えても人の反応できる速度じゃありません。このことから私は一つの予想ができました。」

「……その予想を聞かせてもらってもいいかね？」

隠したい真実に近づかれているのだろうか？ヒースクリフは顔を少し歪める。

「これは推測です、ヒースクリフさん。あなたの正体は『茅場晶彦』ではありませんか？」

「……っ!？」

ヒースクリフは顔を大きく歪めた。

「そんな顔をしないでください。これは推測です。いきなり自分が元凶と疑われると私でも反応しますから。違うなら否定してください。」

ヒースクリフは一度深呼吸をし、向きなおし、口を開く。

「いかにも、私が茅場晶彦だ。」

メイの思考が止まった。ここまで見事に仮説が合っていたことに驚いた。ヒースクリフの正体はよくて茅場に近い人物と思っていた。カマかけのつもりがまさか本人が認めるとは思いもしなかったのだろう。

それに比べヒースクリフは、いや、茅場晶彦は胸を張っていた。

「君の推測は真実だ。私の正体を見抜き、怒る気持ちはあるのかね？」

メイはヒースクリフの言葉に肩を震わす。

「ふっ…、ふっ…、」

あつはははははははははは！」

メイは大爆笑した。怒ることをせずただ笑った。

「…何がそこまで可笑しいのかね？」

「はー…、いやー、カマかけのつもりでしたのに本人が認めるとは思わなくて。やっぱり自分で作ったゲームって自分でやりたいものなんでしょうか？」

「他人がゲームをしているのを見るだけ、というのはつまらんだらう？」

「作る人もやっぱりゲーマーなんですね。」

2人は笑いながら会話をする。元凶が目の前にいるのに世間話など中々におかしい。

「それで、秘密を暴いた私はどうなるんですか？」

「君に何かする気は無い。今まで通りこのゲームを楽しんでくれたまえ。他のプレイヤーにバラされると困るがね。」

すぐ後ろで決闘を見ていたメイだからこそ見抜けたものだ。他人

を完璧に頷かせる根拠もないので、バラしても混乱を招くだけだ。

「こんな話誰も信じないと思うので言えませんよ。」

「そうか、それは助かる。」

コーヒーも飲み終わり、話も終わったのでヒースクリフは立ち上がる。

「そういえば、君には褒美を与えねばな。」

ヒースクリフはおもむろに言い出した。

「先程割のいいスポンサー契約はさせて頂きましたけど…」

「私の正体を見抜いた褒美だ。何か希望はあるかね？」

相手はゲームマスターだ。なにを希望しても大体は通る。ユニークスキルか、はたまたログアウトか、メイは悩んだ。

5分ほど考え、メイは要求するものを決めた。

「では……。私が希望するのは……。」

「……本当にそれでいいのかね？」

「はい。大丈夫です。」

「……それが何を意味するのかを分かっているのかね？」

「対策もできるので大丈夫です。」

「……私には君が何を考えてるのが分からない。だが君が望んだものだ。」

ヒースクリフはウィンドウを操作する。メイは届いた褒美を受け取った。

「それでは、私は帰るとするよ。」

「はい、また来てくださいね。」

ヒースクリフはドアを開け、店を出た。

殺意&友の死

ヒースクリフとのスポンサー契約はメイが有利なものではあるが、やはりkobの援助はしなくてはならない。メイはいつもより早い時間に目覚ましによつて起こされ、厨房に立っていた。

kobに注文されたのは、今日フィールドワークに行く4人分のパンだ。訓練から気を抜かないために簡単なものにしてくれと頼まれている。なので丸パンを作ることにした。

ボールに強力粉を入れ、イーストと砂糖、塩をわけて入れ、砂糖とイーストめがけて水を入れる。

これらを混ぜて、まとまったら台に移し、こね続ける。

バターを入れ、馴染んだら一次発酵で一週間ほど置く。これはシテムによる時間短縮ができる。

発酵が終わったらガス抜きをして、好きな大きさに分けていく。今回は出来るだけ均等に分ける。

10分ほど休ませ、成形し直し、40分ほど二次発酵させる。(時間短縮)

オーブンに予熱し、焼いたら完成。

「まあこんなもんやな。」

丸パンをしまいメイはホームを出る。目指すのは55層の街とフィールドを区切る門だ。

—————

メイが目的地に辿りつくのと、そこには既にゴドフリーがいた。今日の訓練の責任者はゴドフリーと聞いているので、他の団員より早く来ているのは当然のことだった。

「お待ちせしました！こちら今日の昼食分です！」

「おお！ありがたい！これで今日の訓練も万全ですな。」

ゴドフリーはパンを受け取った。他の団員がくるまで時間はあるが、メイの今日は特になく暇なので、見送りをすることにした。

しばらく待つとプレイヤーが二人やってきた。その内の一人はメイと面識がなかったが一人はよく知っている。

「あ、クラさん！」

「あ、メイさん。おはようございます。」

「そう言えば君たちはよく知った仲だったな。」

ゴドフリーは以前メイの出前のカレーを食べたことがある。その時のメイの護衛にいたのはクラデイルだった。

メイは三人で話そうとしたが、クラデイルがそれを拒む。クラデイルの様子がいつもより暗い雰囲気になっており、心配になったメイはゴドフリーに何があったのかを聞いた。

「クラさんの様子がいつもと違いますか？」

「ああ、これから来る団員と先日揉めたらしくてな。少し気まずいのだろう。」

なるほど、それならあんな様子でも仕方ない。訓練が始まる前にゴドフリーが仲を取り持つてくれることを信じ、メイは待った。

噂をすればなんとやら。k o bの装備をした人がこちらに向かってくる。

「お、やっときたな。」

やってきたのはいつも黒の装備で固めていたが、この度決闘に敗けてk o bに入り、装備が制服になったキリトだ。いつものイメージとかけ離れすぎたため、その服装は全く似合わない。

「なんやねんその格好w。似合わなさすぎやろw。」

「やっぱりお前も笑うのか…。」

キリトのあまりの似合わさなさにメイは笑う。だがその内心ゴドフリーの先程の言葉に思うところがあった。

(キリトとクラさんが揉めたんか。ならラフコフネタなんか？)

だがその考えはあまり有り得ない。ラフコフネタの揉め事ならクラデイルの正体が怪しまれる。だが他の団員を見ている限りそんな素振りはない。ゆえにメイには揉め事の原因が分からなかった。

ちなみにメイは74層でのキリトとクラデイルの決闘事件を知らない。

「二度と無礼な真似はしませんので……。」

「これで一件落着だな。」

メイがふと我に帰ると既にクラデイルが謝罪していた。その顔は前髪に隠れてよく見えなかった。

「では出発する前に結晶類を預かりたい。緊急時の反応が見たいのでな。」

キリトはこの発言に少し不満そうだったが、チームリーダーの方針に部下が逆らえないので従うことにしていた。

結晶を全て預かったゴドフリーとキリトやクラデイル達は出発した。

(結晶アイテムなしかあ…。)

少し不安を覚えながらメイは4人を見送った。

—————

今日はいつもよりメイの店には客足が伸びなかった。最近はずいぶん忙しすぎて、休憩もあまりとれなかったので、ガラガラの店内で昼休憩を取ることにした。

先ほどの丸パンとコーヒーを取り出し、昼食を食べ始める。食べている途中でふとキリトとクラデイルのことを思い出し、ウィンドウを開いて、位置情報で様子を見ることにした。

奇しくもこの時にアスナも別の場所で同じことをしていた。ただ唯一違ったのはメイはゴドフリーとフレンド登録をしていないことだ。なのでアスナはゴドフリーの消滅を確認できたが、メイにはそれを知る由もなかった。

(別に大丈夫そうやな。)

メイがウィンドウを開いていた間は全員が麻痺になる直前からゴドフリーが死んだ直後までだ。アスナが向かっていることすら知らずにウィンドウを閉じた。

—————

「ありがとうございましたー。」

今日の最後の客を返し、閉店準備に取り掛かる。キリトの初任務祝いで持っていたこうかと思いい、どこにいいのか確かめるためにウィンドウを開く。

開いた瞬間メイは青ざめた。メイのフレンド欄はそのプレイヤー

をカタカナ表記にしたときの50音順で並べてある。なので《キルト》の次は《クライン》。その次は《クラディール》なのだ。しかしその《クラディール》の文字は光っておらず、横線が入っていた。

メイは片付けを全て投げ出し、ホームを飛び出て《始まりの街》へ向かった。黒鉄宮にたどり着き、《生命の碑》に入り、クラディールの名前を探す。見慣れた綴りなのですぐに見つかった。

死因 他殺によるHP全損

その文字を見た瞬間メイは膝を折った。ショックだったのだ。いつかエギルと3人で夕食を食べた時に脱出しようと話した仲だ。出前の護衛についてもらい、ダンジョンを進んだ仲だ。ラフコフのメンバーと知られても変わらずに接してくれた人が死んだことがショックだった。

—————

現在メイは55層フィールドのある岩山にきている。最後にクラディールの位置を確認したのはここなので、ここに墓を作ることにした。コーバツツの時に既に経験したのでその作業は手慣れているように見える。

「できましたよ。クラさん」

できあがったのはやはりグリセルダやコーバツツと似たような墓だった。墓石に使えそうな石の種類は少ないのでどうしても似たり寄ったりになってしまう。

「すみません…。死んでからじゃ気づいても何もできないのに…。」
返事はない。メイの言葉は夜の暗闇と岩山の間で吸い込まれていく。

「もっと私に力が……。あれ…ば……。」

墓石の前に涙が落ちる。いつの間にかメイは泣いていた。コーバツツの時と同じだ。やはり仮装世界でも人の死には慣れないものだ。

「なんで…！なんでいつも知らないところで人が死んでしまうねん…！」

菌を食いしぼりながらメイは言った。それと同時にこの世界でいつの間にか死んでしまった《彼等》を思い出した。

《彼等》は5人組だった。男4人女1人の仲良しパーティだった。最初の出会いは下層だ。まだメイが店を持ってなく、屋台で稼いでいた頃に出会った。この張り詰めていた世界の中であれほど仲良く、賑やかに食べてくれたのは《彼等》が初だった。それからも度々食べてくれたが、ある日、リーダーの男の子がギルドに強い人が入ってくれたので、攻略組でフロアボスを倒すのを楽しみにして下さいと言われた。それまで店には来ることは難しくなりそうだが待つて下さいと言われた。

だが遂に《彼等》は来なかった。メイが店を持ち、しばらくしてから来ることもなく、連絡をしようと思いついたが見たからなかった。《生命の碑》を確認し、全員の名前に横線が入ってるのを見た時にはショックだった。

メイはクラデイルと《彼等》を重ね、涙が止まらなくなった。墓石の前でただひたすらに泣き続けた。

—————

「すみません。こんな自分勝手に泣いてしまいました。」

メイは泣き止み、墓石に向けて謝った。返事はなかったがそこには困り顔のクラデイルがいるように思えた。

「本当にすみませんでした。私にはここにきて墓参りをする事しかできません。」

メイは立ち上がり、踵を返す。

「また、来ますね。」

メイは自分に喝を入れ、いつもの顔でホームに戻った。

結婚式&ウエディングケーキ

「というわけで私達は。」

「結婚したんだ。」

「お前らは過程という概念をどこに置いてきたんや?」

キリト初訓練の翌日に、メイはいきなりバカップルに変更された二人に結婚の報告をされた。

SAOのシステムの一つに結婚がある。これは二人のプレイヤーがシステム的に結婚することにより、パラメータとストレージを共有するものだ。グリムロックとグリセルダもしていたものである。

「メイさんには以前に相談に乗ってもらったことがあるので真っ先に報告することにしたんです。」

「まあとりあえずはおめでどう。よかつたな二人とも。」

この後メイは二人が結婚するまでの過程を聞いた。クラディール絡みのことだったがメイは特に二人に反応を見せなかった。なぜなら、既にヒースクリフにより聞かされているので、事情を知っているからだ。

「それは色々大変やったなあ。二人はお互いのことが大事なんやろ?」

「もちろん。」

「じゃあ、互いに生き残るように無茶はできなくなるな。前々から二人とも危なっかしいところがあつたで。」

「74層のボスと一緒に突撃した人に言われたくはないです。」

痛いところを突かれ、メイはしどろもどろになる。危ないことをした人に危ないことをするななど完全にブーメランだ。

「まあ、何度も言うようやけどホンマにおめでどう。そういやこれからどうするん?」

結婚話のインパクトが強いの意識されないが、この二人はモンスターではなくプレイヤーに殺されかけるといふかなり危ない目にあっている。その上そのプレイヤーは大きいギルドに潜伏していたレッドプレイヤーだ。事後処理はヒースクリフもといGMがやるの

だろうが、被害者の二人は別だ。今まで通りに普通に活動できるはずもないだろう。

だがその辺のことの対応もするのがヒースクリフだ。この二人には一時脱退の許可を出したようだ。

「22層に綺麗なログハウスを見つけんだ。俺とアスナはそこでしばらく過ごすことにする。」

「団長からの許可もいただけたことだしね。」

「ということは戦線離脱か。」

この2人が前線を離脱することは痛い。しかし本人の気持ち的にはそれが一番いいのだ。またマツピングも大方進んでいるようなので特に問題はなさそうだ。

だが2人はヒースクリフに「すぐにまた戻ってくるだろう」と言われたらしい。だが今すぐではないようなのでお呼びがかかるまで休みといった感じだ。

「それでは失礼しました。」

「また来るよ。」

「ゆっくり休みやー。」

2人は挨拶を済ませ店を出た。2人が出て行くとメイはニヤついた。

—————

数日後、22層にあるログハウスの呼鈴が鳴る。

「はーい。」

アスナがドアを開けるとメイがいた。

「あ、こんにちは。」

「ログハウス見に来たんやけどいい?」

「いいですよ。」

メイはアスナに入れてもらいソファに座る。森の中にある丸太製の家は心を落ち着かせた。

「いいところやなー。」

「綺麗なところですよ。戦いから離れてみるとこういうのもいいかなって思うほどに。」

アスナが紅茶を出し、メイがクッキーを出す。2人で談笑していると、匂いにつられたキリトが二階から降りて来た。

「なんだ、来てたのかメイ。」

「お邪魔してまーす。」

キリトとアスナの顔を見るとメイは思い出したかのようにアスナの方へ向かう。

「アスナ。ちよつと話があるんやけどええか？」

「いいですけど…。」

「キリト。二階借りてもええか？」

「あ、ああ。」

アスナとメイは二階に行き、その間キリトは適当にお茶やクッキーなどで時間を潰すことにした。

しかし30分経っても2人は降りて来ず、キリトはそわそわし始める。男の自分が追い出されたので、聞くべきではないのだがどうしても気になってしまう。

更に10分経ってやっと2人は降りて来た。その時のメイの顔は笑顔で、アスナはキリトに向けて少し申し訳なさそうに照れている顔だった。

「話は終わったのか？」

メイは頷くとウインドウを操作し始める。長い時間の操作が終わるとキリトの方を向く。

「ちよつと来てもらいたいところがあるんやけどええか？」

「いい、いいけど。」

相変わらずメイから不敵な笑みは消えず、不気味だった。

—————

三人が来たのは57層、つまり圈内事件があつた場所だ。街の中にある一際大きな教会に向かい歩いている。

キリトとアスナはメイに先導されて教会の裏口から入った。

「なんで裏口からなんだ？」

「ええからええから。」

裏口から教会に入り、キリトとアスナは部屋に入れられた。メイは

部屋の前で待つようだ。

部屋には飾り気がなかった。テーブル一つとカーテンが一枚ある程度であり、テーブルの上にはプレゼントボックスがあるだけだった。その前には紙が置いてあり、「開けたら着ろ」とだけ書いてあった。

中を開けると装備が二つ入っていた。とりあえずその装備を確認するためにウインドウを操作する。

『純白のドレス』

『純白のタキシード』

これらを確認するとキリトはこれから何が起こるか察しがついた。部屋の前にいるはずのメイに事情を聞こうとするも、既にそこにはおらず、振り返ればもうドレス、もといウエディングドレスを着ているアスナだけがいた。

「ど、どうかな?」

キリトは言葉を失った。目の前にいる少女のあまりの可憐さに何も言葉が出なかった。何の躊躇いもなく着るということはやはりアスナもやりたいのだなと理解した。

キリトも箱に入っていた装備を着る。いつもの黒々しさはどこかへ消えてしまったが、似合わない訳ではなかった。タキシード姿を見たアスナはキリトを褒め、またキリトもアスナを褒める。ツツコミ不在の褒めちぎりあいになった。

メイが戻ってき、キリトは細かく事情を聞くことにした。

「この服を用意したってことは今から結婚式でもやるのか?」

「まあゲーム世界でも知り合いが結婚したんやから祝わんとなつて思つてな。ちゃんとした手順もあまり知らんから簡易的なものになつてまうけど。」

「それでも嬉しい。ありがとうメイさん。」

アスナは簡易結婚式をやることを事前に知らされていた。やはり女の子にとってこういうものに憧れがあるのだ。少し涙を流していた。

「じゃあ始めるで。」

「ああ。」「はい。」

メイはスピーカーを取り出し、スイッチを入れる。

「えっ?なんでスピーー」新郎新婦の入場です!」え?」

メイが扉を勢いよく開けると中には沢山の人が出た。それもキリト達がよく知ってる顔ばかりだ。

「おめでとうキリト。これでお前も既婚者だな。」

「お前だけずるいぞキリトオオオ!」

「アスナを泣かせたら許さないわよ!」

席が特に近いエギル、クライン、リズベットは思い思いに叫ぶ。更に奥には黄金林檎やk o bでアスナと特に仲のいいプレイヤー達が出た。

聞いていた話と違う。キリトとアスナは叫んだ。

「おいメイ!簡易的じゃないのかよ!」

「こんな人があるなんて聞いてませんよ!」

「簡易的やけど誰も小規模なんて言っていないで。」

キリト達は肩を落とした。だがここで帰らせては流石にみんなに悪いと思い、続けることにした。

真ん中を歩いていけと言われ、二人は歩を進める。キリトには一部男から嫉妬の声が出せられたが気にせず進む。アスナには特にそのようなことはなかった。

奥まで進むとそこには神父服を着たヒースクリフが立っていた。

「なんであんたが神父をやったんだよ!」

「メイ君からの頼みでな。今回は私にも責任があるので引き受けたのだ。それでは続けるぞ。」

ヒースクリフはメモを取り出し、それを読み上げる。

「汝キリト。休めるときも、健やかなるときも、苦しい時も、HPがゼロになる時も、この者を愛すると誓いますか?」

「ああ。」

「汝アスナ。(以下同文)」

「はい。誓います。」

ヒースクリフはメモをしまい、左手を挙げる。

「それでは誓いのキスを…」

「無理だ！（です！）」

「だろうな。」

会場からブーイングが聞こえる。ピュアな二人にとって流石にキスは酷だったかと、メモを用意したメイは笑う。

「それでは二人には共同作業に移ってもらう。」

ヒースクリフがメイに視線を向けると、メイはウインドウを操作し、ケーキを取り出す。そのケーキは大きさそれぞれの8ホールのケーキが縦に積みまれ、3メートル程の大きさだった。

リズもウインドウを操作し始め、出てきたのはグリーンアイズが使っていたのとほぼ同レベルの大きさの大剣だった。

「ケーキ入刀や。」

「流石にデカすぎないか？」

「この剣二人で持てるんですか？」

「軽めの素材で作ってるから二人の筋力値で多分ギリね。」

キリトとアスナは二人で剣を握った。本当に筋力値がギリギリだったのか少し重く感じる。そのまま二人はケーキに剣を振り下ろして切った。

周りから歓声が上がリ、二人は更にケーキを刻んでいった。人数分切り、みんなで食べることにした。

この世界でも仲間に恵まれたと改めて実感したキリトとアスナであった。

シチュー&謎の少女

メイは月一で通っている場所がある。それは一層にある教会だ。デスゲームに巻き込まれた子供達を守るために、一人のプレイヤーが拠点にしている場所だ。

今日はそこへ行くことになっている。人数がとても多いため一度に大量に用意できる料理がベストだ。何を作るか考えながらメイは一層へ向かった。

いつものように転移門で転移をすますと、慣れた足取りで教会を指す。目的地に着けば呼鈴を鳴らし、いつもの知り合いを待つ。

「どうぞー。」

扉が開き、現れたのは眼鏡を掛けたシスター服の女性だ。彼女がここで子供達を守っているプレイヤーであり、今回メイに依頼をした人物だ。

「あつ！メイ姉ちゃんだ！」

「また来てくれたんだ！」

「今日は何を作ってくれるのー？」

「おー。みんな元気にしとうみたいでよかったわー。」

子供達はメイが来たことによつてテンションが上がっている。メイも何度かここに来ているのでその対応にも慣れている。

この子供達はデスゲームになったこの世界で死なないために始まりの街で止まっている人たちだ。流石にこのような幼い子供達に、目に見える自分の命をかけてまで外に出ることはあまりにも酷なことだ。なので今回の依頼人のシスター、サーシャというプレイヤーが子供達を守っている。

「姉ちゃん！今日もまた新しい武器を見せてくれよ！」

「刀が見たいー！」

「ええでええでー！」

ウインドウを操作し、刀を取り出す。それを見た子供達のテンションは更に上がる。

やはりデスゲームになってもゲームはゲームだ。現実では滅多に

見れない武器をを見れたり触れたりする。特に男の子にとつてもかっこいい武器というのは夢を与える。

「じゃあ今から料理作ってくるで。」

「「「はーい！」」」

メイは厨房に立ち、料理の準備を始める。やはり一度え大量に作るならルーものだ。なので今日はシチューにすることにした。

じゃがいも、人参、玉ねぎをそれぞれ切っていく。

フライパンで玉ねぎを炒めながらバターを絡ませていく。

更に小麦粉を入れる。玉ねぎとよく馴染ませて、粉っぽさを無くす。

別の鍋を用意して切った野菜を入れ、15分茹でる。その後に玉ねぎを入れ、小麦粉を溶かす。

コンソメ、塩コショウ、牛乳を入れ、混ぜる。一煮立ちしたら完成だ。

だが最後に煮ている途中で教会の扉からノックの音がした。一層のこのような場所に訪れる人は少ない。だがメイは一層の現状を知っているため予測がついた。

「私が対処してきますね。」

メイは料理を一時中断し、短剣を取り出そうとしたが、サーシャに止められた。

「今回はいつもと様子が違うので私がいってきます。それに頼んだのは料理だけですから。」

サーシャは腰に短剣を装備し、扉に向かった。その間に子供達は二階に行くなりして隠れた。それでもやはり不安は残るので、メイは扉が見える位置に立っていた。

サーシャは扉を少しだけ開け、顔を覗かざるようにして話している。メイからは相手の顔も見えないし、声もはつきり聞こえない。だが、サーシャに何かあればすぐに対応できるように立っていた。

だが予想と反しサーシャは扉を更に関き、訪問してきたプレイヤーを中に入れた。そのプレイヤーの顔はメイもよく知っている人だった。

「お、急にどうしたん？こんなところにくるなんて珍しいやん。」

「メイこそなんでここにいるんだ？」

教会を訪ねたのはキリトとアスナだ。今日は武装をせず、私服のよ
うな格好だ。だがそんなことより気になるところがある。見慣れな
い女の子がキリトとアスナの間に立っていた。

「……………その子どうしたん？」

「おっと、紹介がまだだったな。」

キリト、アスナ、サーシャはそれぞれ自己紹介をし、最後に女の子
の紹介をした。

「そしてこの子が娘のユイだ。」

「……………頭が痛いのは気のせいやろな。うん！」

ありえない単語が聞こえたので聞き流すことにした。

「それで人を探していると聞いたのですが」

「はい。実はこの子を上層で保護したのですが記憶喪失のようなん
です。もしかしたら此処に知り合いの人がいないかと思っただん
です。」

アスナが詳しく説明し、ユイが養子？であることがわかったので納
得した。

メイとサーシャはユイの方に向いた。その瞬間背後のドアが勢い
よく開き、子供達が現れた。

「上から!?!ってことは本物の剣士かよ!?!」

「こらっ！隠れてなさいって言ったじゃない！」

だが誰もサーシャの言うことは聞かず、上からきたプレイヤーに興
味津々だった。

「あんた達どんな武器持ってたよ?」

やはり一つの武器だけでは満足できず、他にも見たいようだ。キリ
トとアスナは使っていない武器を取り出し、子供達に見せる。

「すみません。本当に…。」

サーシャは謝り、キリト達を奥に案内した。メイはそちらには行か
ず、子供達をみることにした。

この教会には約30人近くの子供達がいる。今は何人かはおつかいに出ているようなので全員は揃ってないがいつも賑やかなものだ。だがおつかいに行ったらわりには中々帰ってこないなとメイが思ったころだ。

「大変だ!!?」

「何があつたの!?!」

目に涙を浮かべた子供が教会に飛び込んできた。余程のことだと思ひ、話を聞くとおつかいに出た子供達が軍のプレイヤーに捕まつたとのことだ。サーシャはその子供達を助けに、その場所に向かつた。キリトとアスナもそれに同行することにしたが、メイはこの教会を守ることにした。

軍のことは解決したのだろう。キリト達は帰つてきた。だがユイは昏睡状態だつた。メイ達は看病を試みたものの、一向にユイの目が覚めることはなかつた。先ほどメイが夕食用に作ったシチューを目が覚めた時用に取り分け、メイは帰ることにした。キリトとアスナは泊まることにしたようだ。

メイは家に帰り、ため息を吐いた。そしてベッドに倒れこむ。考えるのは例のユイという少女のことだつた。

放任主義者達&チョコレートケーキ

ユイという目の前の大問題が解決され、メイは気持ちが悪くも落ち着きいとも通りに店を開ける。

だがユイはキリトのナーヴギアに入ったらしく、またいつ出てくるかも分からない。出て来た時にはキリト達には会わないようにするしかない。それでも1ヵ月程は出てこれない筈だ。その間にどうにかするしかない。

チリンチリン

「いらっしやいませー」

「お久しぶりです。メイさん。」

「先日はお世話になりました。」

入って来たのは軍の鎧を身につけた二人の男女だ。男性の方は黒い髪をオールバックにし、長いもみ上げが印象的だ。もう一人の女性の方はメイ同様に長い銀髪をポニーテールに纏め、耳にはイヤリングが付いている。

「あ、ユリエールさんにシンカーさん。先日はどうも。」

シンカーとユリエールは先日のユイの時の関係者だ。シンカーはキバオウに嵌められ、黒鉄宮の地下のダンジョンに閉じ込められた。ユリエールはシンカーを助けようとしたものの、ダンジョンのレベル的につづく、その場にいたキリトとアスナに助けを求め、シンカーを助けに行った。

いざシンカーの場所に辿り着いたものの、そこには90層のボス級のモンスターが居り、その上そのモンスターは不死属性。絶望的な状況になったが、キリト達に同行していたユイが一刀両断。その正体はメンタルケア用のカウセリングのAIだった。これがユイ事件である。

だがメイが関わったのはこの後だ。今回のシンカーを嵌めたこと、以前の74層の強攻策をメイにより報告され、ついにキバオウは軍を追放された。キバオウは逃亡を計り、流石に放任主義のシンカーもこれを見過ごすことはできなかった。ユリエールはメイにキバオウの

搜索の依頼を出し、軍から逃げて2日目でキバオウは見つかった。現在キバオウは黒鉄宮の牢屋だ。

「キバオウ搜索の件については本当にありがとうございました。メイさんがいなければまだキバオウは捕まっていなと思います。」

「もう解決したことなんでそこまで気にしなくて大丈夫ですよ。」

キバオウの逃亡は全力だった。彼は全てのフレンド登録を削除し、誰からもマーキングされてはいなかった。故に搜索は難航したがメイが加わった途端すぐに見つかった。

「キバオウは捕まっただけど、これからシンカーさんは軍をどういう方針で進めるんですか?」

「今まで放置してたのが悪かったので、これからは僕が中心となっていくことになりました。」

シンカーが特に口を出すことがなかったので、キバオウ一派ができたため、今後それがないようにするつもりのようなうだ。ちなみにキバオウ一派の者たち、つまり先日恐喝まがいのことをしていた連中もキバオウ同様に軍を追放されている。

それでも軍そのものについた印象は悪く、またキバオウ一派のような者が出ると恐れている人もいるため、信頼はまだない。だがシンカーとユリエールの人柄ならいずれ信用されるだろう。

「それで、今日ここに来たのはそういうことを言いに来ただけなんですか?」

「いやあ…軍の立て直しの指針がやっと固まったところでちよっと休憩を挟みたくて。」

シンカーは頭を掻きながら言う。やはり人間なため電子世界内でも腹は減るため、休憩は必要だ。

シンカーの立て直した指針は最初の目的通り、全てのプレイヤーに平等に食料が行き渡るようにすることだ。だが攻略が進んでいるため、『全て』のプレイヤーに届けにいくというのには無理がある。なので範囲を絞り、一層のプレイヤーに行き渡るようにすることだ。

メイはシンカーの方針に賛成したため、エギルと同じように、売上げの一部を一層に寄付することを心の中で決めた。

「それで、ご注文は？」

メイはシンカーとユリエールにメニュー表を渡す。二人はそれを受け取るとじっくりと見る。ユリエールは真つ先にケーキやパフェなどのスイーツ系のページを見ていた。やはりどれだけ凛としてもユリエールも女性なのだ。甘いものには目がないのだろう。

「わ、私はチョコレートケーキで…」

「僕も同じものをお願いします。」

「少々お待ちを。」

ボウル内でチョコレートは湯煎にかけて、溶けたら生クリームを混ぜる。

チョコレートのボウルに卵黄ときび砂糖を入れて混ぜる。

冷凍した卵白を取り出し、グラニュー糖を二回に分けて入れ、高速で混ぜる。これでメレンゲの完成だ。

チョコレートにメレンゲとココアパウダーを交互に数回に分けて入れ、その都度混ぜていく。

型に入れ、表面を平らに慣らしたら、170度のオーブンで40分焼いていく。(システムによる時短)

焼きあがったら粗熱をとり、冷やす。(システム時短)

「お待たせしました。チョコレートケーキです。」

「やっぱり疲れには甘いものだね。」

「そうですね。シンカー。」

二人は出て来たチョコレートケーキを食べ始める。疲れた脳に糖分が染み渡り、優しい甘さに包まれる。

「やっぱりこの世界でも食事は大事なんだね。」

「人間の三大欲求の一つですからね。当然ですよ。」

食べている二人を見てそういえばと、メイはシンカーに話しかける。

「シンカーさん。ちょっとユリエールさんと話したいのですが…。」

「私と、ですか？」

二人から了承を貰い、メイはユリエールと奥に入る。

「あの、私に話とはなんでしようか？」
「えつとな…」

シンカーさんのこと好きなんやろ？」

「ブフツ！ゲホゲホ！」

ユリエールは盛大にむせた。いきなりそういうことを言われると流石に焦る。

「いきなりなんですか!?別に…そんなこと…」

「顔真っ赤やで。前々からそうかなー?と思ってたんやけど当たりやった?」

ユリエールは手で顔を覆い、俯く。一度大きく深呼吸をしてメイに向き直る。

「ええ…そうですね…。悪いですか…」

「やっぱりかやっぱりか。で?アタックはせえへんの?」

「今はできませんよ。あんなにやる気になったシンカーは初めてです。邪魔をする訳にもいきませんし…。つて!なんで今こんな話になってるんですか!」

そう言うとユリエールは立ち上がりシンカーの元に戻った。だが少しの間、ユリエールはシンカーの顔をまともに見ることができなかった。

釣り師&和食定食

「久々に暇やわー。」

今日はいつもと違い、店はガラガラだった。なぜなら今日は攻略組は75層のボス戦に挑む日なので、いつも来ているメンバーがいないからだ。

メイも最初はヒースクリフに攻略に誘われたが断った。ラスボスの正体を知っているのになぜクウォーターポイントという地獄に行かなければならない、となるため行かなかった。

「こんなことなら行けばよかったなー。」

だが化け物相手に怖い思いをしたくないところもあるので、取り出した回廊結晶を弄ぶだけだ。

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

「お久しぶりです。メイさん。」

入って来たのは初老を思わせる男性だ。肩には釣り竿を寄せ、服装は釣り装備のものだ。

「あつーニシダさん！お久しぶりです。」

NPCと思えるような見た目をしているが、ニシダと呼ばれた人は確かにプレイヤーだ。恐らくSAO内のプレイヤーでは最高齢だろう。

「今度は何が釣れたんですか？」

「今回も良いのが手に入りましたよ。また調理をお願いします。」

メイの店では食材を持ち込んで料理を頼むこともできる。だがほとんどの食材が最初から揃っているため、特に意味は為さなかった。だがメイは釣リスキルが無いため、市場に揃ってない魚を入手できないので、釣りプレイヤーが食材を持ち込むことは多々ある。

ニシダはウインドウを操作し、今回の魚を取り出す。

「今回入手したのは22層の池の主です！」

メイは食材アイテムを受け取り、その情報を読んでいく。その魚の正体は6本足で、人面魚のような化け物魚であった。

「アツハハ、これを調理かあ。」

あまりの化け物具合にメイは笑った。この魚はどの魚にも似てないため、料理の方法に悩む。

「ご注文はなんですか？」

「それでは和食定食をお願いします。」

「少々お待ちをー。」

ヌシの一部で出汁をとり、味噌汁を作る。

ヌシの残りは簡単に焼き魚にして、大根をおろしていく。

米を炊き、茶碗に盛り付ける。

小松菜を切り、水で洗って、水気を切る。

質素だが健康的なメニューだ。だが電腦世界のため健康に関係ないので、気持ちの問題だ。

「お待たせしました。和食定食です。」

「おお。やはりこれですなあ。」

ニシダは手を合わせてから食べ始める。久しぶりのまともな日本食のようで、美味しそうに食べていた。

焼き魚に手をつけようとしたニシダはふと手が止まる。

「そういえば、ここにしか無いと思っていた醤油が他にもありませんか。」

この世界での調味料の入手は料理スキル持ちのプレイヤーが自作するしかない。趣味スキルを取っている人はそこそこ少ないので調味料の存在は絶望的だった。

「こんな緑色のスライムのようなものですけどね。その人の醤油も見てみたいですね。」

配合の方法に違いはあっても、最終的に同じ味にたどり着くこともある。実際メイは本物に限りなく近いお酢と、赤色のゼリーのようなお酢がある。

「あなたと同じく料理スキルを極めた人でしてね。なんと、それだけではなく物凄く強かったのです。今食べてるこの化け物魚を倒したのもその人なんですわ。」

22層のヌシ。料理スキルを極めたプレイヤー。22層にいると

は思えないモンスターを簡単に倒すプレイヤー。これだけで大体メ
イは予想がついた。おそらくアスナだろう。突然に知り合いの存在
がチラつき、思わず笑う。

チリンチリン

「いらっしやいませー。」

「今日はいつもと違ってガラガラなんだナ。」

「姐さんじゃないですか。また久しぶりですね。」

「新聞屋さんじゃないですか。」

入ってきたのはアルゴだった。仕事に一区切りがついたときには
よく来るようになってる。

「今日は何を食べます？また寿司ですか？」

「持ち込みがありと聞いたからナ。苦勞して手に入れたコイツを頼
むヨ。」

アルゴはウインドウを操作してカウンターに食材を出す。その食
材はなんとミストイールだった。

「また見れるとは思ってなかった…。」

「ミストイールですと!?!釣り師達の間では幻なんですよ!?!」

ミストイールに一番興奮していたのはニシダだった。どうやら釣
り師ではこれを釣ることがよほど名誉ものらしい。

「どうやってこれを釣ったのですか!?!」

「掴み取りで」

ミストイールの捕獲方法は掴み取りだ。ある一定の沼で低確率で現れるのを素手で掴むだけだ。

「まさか釣りではないとは…」

ニシダは衝撃の事実に関を落とした。今まで自分が狙っていた大物の入手方法が自分の得意の釣りではなく、もっと簡単な方法とは思ってもいなかった。

「じゃあメイちゃん。こいつで3人分の肝吸いを頼むヨ。」

「本当ですか!? 頂いてよろしいのです?」

アルゴは頷き、ニシダは喜んだ。S級食材が食べれるのだ。こんなに嬉しいことはない。

「少々お待ちをー。」

緑色の苦玉を潰さないように取り外す。

筒状の部分を包丁でしごき、先端を切り離し、残った部分を水で洗う。

鍋に湯を沸かし、塩を入れて肝をさつと湯通しする。

ざるに上げて水で洗い流す。

カツオ出汁に塩と薄口醤油を入れ、煮立ったたら肝を入れ、また煮立ったたら完成だ。

「肝吸い！できましたー！」

「おおー。」

3人は肝吸いを啜る。やはりS級食材は偉大だ。とても美味しい。

「またS級食材を食べれるとは…」

「いやあ、とても美味しいですな。癖になりますね。」

「こんな美味しいのは初めてだよ。」

3人は肝吸いを堪能し、また飲みたいと思った。だがそういうわけにもいかない。現在攻略中の75層が終われば、ラストスパートがかかるだろう。今回は断ったが次回からはメイも強引に駆り出される

はずだ。

「いやあ美味かったよメイちゃん。あと残りも僅かだ。頑張ろうナ。」

「今日はご馳走様でした。」

二人は店を出て、メイは見送った。現在攻略中の75層も含め、あと26ボス。終わりも近い。メイは改めて考え直し、店に戻った。

「ゲームはクリアされました。」

たった一言の放送がアインクラッド中に響き渡った

ゲームマスター&醬油ラーメン

いきなり意識が暗転したかと思えばすぐに目覚める。まるでゲーム初日の強制転移の時のようだった。だがあの時とは違い、エフェクトなど何一つなかったことだ。

「なんやんこ…」

メイは改めて現状を確認する。服装はさきほどまで調理場に立っていた時のエプロン姿だ。だが場所が違い、ここは外だ。綺麗な夕焼けが広がっており、幻想的だ。

続いて足元を確認すれば、そこにあるのは透明な水晶版のようなものだった。つまり空中に立っている状態だ。

メイはわけがわからなくなり、この場から脱出を試みる。回廊結晶を取り出そうとウインドウを開くと、いつも通りのウインドウが開いたかと思えば、一瞬で切り替わる。そこには『最終フェーズ実行中 78%』と出た。そして振り返れば後ろで塔が崩壊しているのが見えた。

(落ち着け。まず整理するんや。)

後ろで崩れてるのはどう見てもアインクラッドだ。そして最終フェーズ実行中の文字。最後に朧気に聞こえたあのアナウンス。ここまで整理し、まとめ上げる。

「綺麗な景色だろう?」

メイの横から声があった。それは茅場晶彦の声だった。

「なんで終わったんですか?まだ75層のはずで、あなたは100層のボスのはずですか?」

メイは茅場に質問をする。こんな途中でこの男がゲームを終わらせるはずがないと思っっているからだ。

「何、75層のボスを倒した直後にキリト君の手によって正体がバレてしまったね。看破の褒美に一对一の勝負をしたら負けてしまったのだよ。」

なるほどとメイは納得する。確かにキリトもメイと同様に看破の褒美はもらっているようだ。ただ違うとすればその周囲の状況だ。

メイの時は周りに誰もおらず、キリトの時はいた。その上生産系プレイヤーと攻略プレイヤーの立ち位置による思想的な違い。交渉の余地もない。

「それで、私はどうなったんですか？」

メイは現状を茅場に確認する。ここにはメイと茅場しかないの
で不安な気持ちはある。

「安心したまえ。君を含め6147人のプレイヤーは全てログアウトした。」

これにはメイも驚いた。よくあの状況でそのプレイヤーの中に含まれたのだと分からなかった。

「てつきり私はログアウトされへんものかと思ってましたよ。」

「私は君との約束を守ることができなかつたからな。それに君も生存者だ。システム上私の体力が尽きた瞬間に生存してる者はログアウト対象になる。」

茅場が申し訳なさそうにメイに謝罪する。メイは水晶版の上で背中から寝転ぶ。

「まあログアウトされていますしね。それならそれでいいですよ。あなたは約束を守る人ですしね。」

「そう言われると私も嬉しいな。」

二人はフツツと笑う。ああそう言えばと茅場は続ける。

「君はあれを何回使ったのかね？私は2回だと思っているが。」
今度は茅場がメイに質問する。

「あ、やっぱりバレてました？本当は3回使いましたけどね。まあその一回はただ回廊結晶を作っただけなんですけどね。」

やっぱり隠し事は通用しないと痛感する。

「キリト君たちの結婚式の時と軍のサブリーダー搜索の時だろうか？でないと2日で75層まで広がったアインクラッド内で隠れた一人の人間が見つかるわけがない。」

「筒抜けやん。」

本人の前でそれっぽいのは一回行ったメイであったが、まさか新聞記事だけでそこまでたどり着かれるとは思っていなかった。

「それと君の言う《対策》は見せてもらったよ。確かにあれなら万全だろう。君の目的もある程度はわかった。」

茅場は半透明の体をメイにむける。

「君は私に賭けたんだろう?」

二人の間に沈黙が続く。だがその沈黙もすぐに破られ、メイは笑い出す。

「あつははははは。やっぱり頭の回る人には勝てへんな。」

メイは笑い転げた。楽しくて仕方ない感じで笑い続ける。しばらく笑うとメイは落ち着き、体を起こす。

「なんとなくお腹へりましたね。」

「奇遇だな。私もだよ。」

それでは、とメイは立ち上がり茅場に頼む。

「システム起動お願いします。私のウィンドウではもうできませんしね。」

「よかろう。それでは醤油ラーメンを頼みたい。」

「最後の料理を楽しんでくださいね。」

茅場はシステムを駆使し、水晶版の上にメイが使ってきたキッチンを再現する。そしてメイに頼まれた食材も出す。現れたキッチンにメイは入り、料理を始める。

醤油、ニンニク、ごま油、オイスターソース、鶏ガラ、みりん、砂糖を鍋に入れ、軽く混ぜ合わせる。

できたスープにお湯を入れ、濃さを整える。

中華麺を茹で、湯切りをしたらスープに入れ、トッピングをしたら完成。

「醤油ラーメンできましたよ。」

「では、頂こう。」

ずるずると茅場は麺をすすり、ラーメンを食べる。

「やはり君の料理は美味しいな。NPCとは違う。」

「まあ本物に近づけるため調味料頑張りましたから。」

メイはドヤ顔で答える。それを茅場は特に気にせずラーメンを食べ続ける。

「そう言えばなぜこんなことをしたんですか？」
麵をすすする茅場の手がピタツと止まる。

「どうして……か。空に浮かぶ鋼鉄の城の空想に取り憑かれたのは何歳の頃だったかな。この地上から飛び立ってあそこに行きたい。それが私の唯一の欲求だった。」

茅場の動機を聞き、メイは頷く。夢を叶えたい気持ちは誰だってあるのだ。

よく考えたらこれはログアウトの最中だ。つまりログアウトが完了すればメイも現実に戻る。当時の夢は今も変わらないので、またそれに向けて頑張ることを決めた。

「やはり、最後に君と話したのは正解だったよ。久々に楽しかった。」

茅場はどこかはわからないが行こうとしている。それをメイは見送ろうとする。

「最後に君に感謝するよ。君のおかげでこの世界は限りなくもう一つの現実に近いものになった。最初はみんな脱出に躍起になると思っていたが君の《食事処メイ》のおかげで現実味のある生活がそこにはあった。」

「あはは。ゲームマスターに言われるとゲーマー冥利につきるものです。」

「私はもう行くよ。」

「さようなら、茅場さん。私はこのゲームのことは忘れませんよ。」
茅場がいなくなってから、茅場がいた方にメイは呟く。アイコンク
ラッドの崩壊はもう90層までできていた。ある程度それを眺めてい
ると、色々な思い出が蘇る。

メイはそれを噛みしめた。

目が覚めた。開いた目に入ってきたのは白い天井と蛍光灯。先程

までは光を浴びても何も感じなかったが、今では肌に突き刺さる感触がある。

現実だ。

頭にははるかに重いものが乗っている。外そうにしても、二年間動かさなかった体はまともに動かない。

「こ、はっ、だっ、っ、つ、でき、た、の？」

声すらまともに出ない。あの世界でメイと呼ばれた少女は体をなんとか捻る。うつぶせになり、動かない腕をなんとか動かし、ナースコールを押しした。

どうやら耳は正常のようだ。人が走ってくる音が聞こえる。

ドタドタ

ドタドタドタドタ

ドタドタドタドタドタドタ

部屋の横開きのドアが開き、病院関係の人が部屋になだれ込む。

「篠原さん！大丈夫ですか！？意識ははっきりしてますか！？」

「篠原臯月さん！脱出おめでとう！あなたで最後の人です！よく戻ってきましたね！」

医者や看護師から声をかけられる。なんとか反応を返し、大丈夫なことを伝える。

また料理ができるだろうか。まずはリハビリかな？篠原臯月は考える

この日メイこと篠原臯月はアインクラッドから脱出した。

A L O

未帰還者& A L O

2年間動かしていなかった体を元に戻すために、皐月はリハビリに励む。解放直後にナースコールをできたのは殆ど執念だけのものであり、その後からめつきり動かなくなった。

リハビリに専念したおかげで、皐月はある程度まで回復はした。だが2年という時間はあまりにも長すぎたため、軽度だが後遺症が残ってしまった。

皐月の足は完全には治らなかった。だが日常生活をする程度には問題は無いが、走れなくなった。

約一ヶ月半リハビリに励んだがダメだった。どれだけ頑張っても走ることだけはできなかった。しかし足以外は特に問題もなく、元に戻ることができた。なので退院の予定はできていた。

退院日を迎え、2年ぶりに親戚の家とはいえ家の安心感に包まれる。皐月はS A Oの発売日は先着順ではなく、抽選制の店を見つけ、東京の叔父の家にいた。なのでS A Oログイン中も東京の病院にいた。

「本当によかったな皐月。足は治りきらなかったがこうして無事に戻ってこられて。」

皐月の叔父は涙を流しながら言う。姪がデスゲームに囚われ、弟になんと言えば良いのかわからなかった。自分の娘じゃないにしろ、心配なもの心配だった。

「最初は俺も心配したんだよ。多くの人が目覚めていく中、お前も一部の人と同じように目を覚まさなかった。だが遅れたとは言えお前は目覚めた。本当によかった。」

そう。S A O事件はまだ終わってはいない。皐月のいた病院では全てのS A O患者は目を覚ましたが、未だ300人ほどのプレイヤーは目を覚ましていなかった。その者たちは今は未帰還者と呼ばれている。

皐月も最初は未帰還者だと思われた。院内のSAO患者が目覚めていく中、皐月は目を覚まさなかった。病院関係者達は大いに慌てた。生命反応はあるのに目覚めない、だが他の人は目覚めた。ならナーヴギアに触ってよいのか?となったが迂闊に触れない。

だが他の病院でも目覚めない人がいるので皐月もその一人だと結論付けることになった。

だが皐月は目覚めた。他の人が目覚めて約3時間後に目を覚ました。これなら他の人も目覚めるのでは?と思われたがそんなことはなかった。

(ログアウト直前に茅場昌彦とラーメン食べながら話してたなんて言えへん…)

遅れた理由はこれである。だがはぐらかせばそこそこんなんとかになった。

退院してから数日、家で過ごしていると携帯電話がなる。その液晶には《篠原美優》と表示される。

その名前を確認すると皐月はすぐに電話に出た。

『やっとな繋がったー!元氣してた!皐月!』

「相変わらず元氣やな美優は。」

受話器の向こうから明るい声か聞こえる。皐月と通話してるのは篠原美優。皐月の親戚であり、はどこである。

『本当に2年間ずっと心配したんだよ。体はもう大丈夫なの?』

「もう大丈夫やから問題ないで。それより美優は今年受験やる?それこそ大丈夫なん?」

『うっ…。それを聞かないで欲しかったな。てか皐月も高2で口グインしたからそっちのことも気になるんだけど。』

「SAOにログインしてた人を対象に学校を作るって聞かされたよ。そこで高校卒業認定書はもらえるらしいから大丈夫やる。」

SAO生還者の学生には社会復帰のために専用の学校がつくられることになっている。皐月もそこに通うことになっており、今は勉強もしている。

それから皐月は美優から親戚の話の色々と聞き、時間を過ごしてい

く。そしてもう一度勉強の話になると美優のテンションが上がった。

『そーいや皐月はALOって知ってる?』

「知ってるで。ナーヴギアのダウングレードのアミュスファイアのVRMMOやろ?」

『よく調べてるねー。やっぱりゲーム好きだね。』

SAO事件により世間からVRMMOは消えたと思われたがそうではなかった。安全性が高い新しいハードをつくり、今も生き残っている。

その中で今話題なのはALO。『アルヴ Heim オンライン』だ。その中ではプレイヤーは種族ごとの妖精となり、楽しむゲームである。妖精というだけあって翅がついており、人間には不可能の飛行ができるようであり、多くの人に人気だ。

『そこでならお互い会って勉強できるんじゃない? 受験生が教えるよ〜?』

「いや、正直VR怖いから断らせてもらおうわ。それに勉強ならギリ間に合ってるから。」

『皐月そこそこ成績よかったもんね。偏差値いくつぐらいだった?』

「……全国模試で偏差値55前後をウロウロしてただけやけど。」

長らく勉強しているが、さすがに習っていないかったところはキツイ。実際皐月は数学の一部と理科で詰まっている。

『んじゃ、そろそろ切るねー。』

「またいつか北海道いくから待っててな。」

電話を切り、皐月はもう一度机に向かった。

—————

いつもの様に勉強、料理をしながら過ごしていく。SAOの様にシステムによる時短はなくなったが、やはり本物の料理は楽しいものだった。

「ただいまー。」

皐月は買い物を終え、荷物を片付けると部屋に入る。勉強を始める前にパソコンを開けば、メールが入っていた。そのメールを開くと、

SAOでの恩人からだった。

fromアンドリユーさん 『これを見てほしい。』

アンドリユーと言うのはエギルのことだ。本名はアンドリユー・ギルバード・ミルズ。そのメールには短い文と一枚の写真があった。その写真を開くと鳥籠に女の子が囚われているようだった。

ただの女の子ならまだよかったが、皐月には見過ごせなかった。どうみてもそれはアスナにしか見えなかった。

アスナはまだ目覚めていない。300人の目覚めていないプレイヤーの一人だ。

皐月はアンドリユー（以降エギル）の店に行き、事細かく事情を聞くことを決め、台東区のカフェに向かう。

—————

皐月は目的地に到着し、店の扉を開く。長いこと自分の店を構えていたので、他の店に入ることに懐かしみを感じた。

「よう、メイ。意外と早かったな。」

「割と近いですからねここは。」

皐月はカウンター席に座り、さてつと呟く。

「さっきの画像の話聞かせてもらってもよろしいですか？」

「もちろん、そのつもりだ。」

皐月はエギルから話を詳しく聞いた。その内容としては先程の写真は、ALOの最終目標の世界樹という場所に、何があるのか気になったプレイヤーが、正規の中からの攻略ではなく、飛行を駆使して外壁から撮影したものだという。

やはり何度見てもそれはアスナにしか見えない。ALOプレイヤーからは重要なNPCと思われるようだが、SAO生還者にとってはそうは思えない。

「エギルさん。私は行きます。あの世界での仲間かと思われる人を見捨てるなんてできません。」

「お前ならそう言うと思っていたよ。ほらこれ」

エギルはALOのソフトを取り出し、皐月に渡す。皐月はそれを受け取り、礼をした。

「ちなみにそのソフトはナーヴギアでもできる。更にさらにその中で死んでも実際に死ぬようなことはなかったらしい。」

それを聞いた皐月は帰りに電気屋に寄ることをやめた。

「そういうヤキリトにはこのことを言ったんですか？」

「いや、まだだ。お前ら二人には連絡がつくから同時に送ったがまだあいつは30分ぐらいここには来れないらしい。とりあえず先にお前だけには話したんだ。」

「なるほど。それでは。」

「絶対に助け出せよ。それまで俺たちの戦いは終わってないからな。」

皐月は店を後にした。

—————

帰り道、皐月は悩んだ。それは叔父の説得と美優のことについてだ。美優にはログインしないと行ってしまったが、結果ログインすることになった。まあ彼女も受験生なので、ログインすることもないだろう。これは秘密にすることにした。

問題は叔父の説得だ。あれほど心配してくれた叔父にまたVRに行くとなったら無理にでも止められる。だが隠れてしようにしても据え置きของเกมなのでそれもできない。皐月は溜息を吐き、相談することにした。

家に帰り、皐月は叔父に事情を話した。そうすれば意外にもすぐ頷いてくれた。なんでもSAO生還祝いとして、やりたいことはやらせるつもりだったらしい。実家の両親にも内緒にしてくれるようなのですぐに片付いた。

こうして全ての問題が片付き、皐月はナーヴギアを被り、ログインすることになった。

「リンクスタート」

全てのセッティングを終え、ログインする。2年ぶりのログイン時の感覚と、新しいゲームを始めるワクワク感はある。

プレイヤーIDとログインパスワードは特に思いつかなかったの
で、SAOの時と同じものにした。そして最初についたのは暗い空間

だった。

『《May》様。種族はどんなせますか?』

メイの目の前に9種類の妖精の選択肢と説明がでてきた。

火属性の魔法が得意で戦闘向きの火妖精

水属性の魔法と回復魔法が得意の水妖精

風属性の魔法が得意で素早い風妖精

土属性の魔法が得意で防御の高い土妖精

モンスターを仲間にできる猫妖精

武器をつくることが得意な工匠妖精

洞窟の中でも飛行可能な闇妖精

魔法で音楽を奏でる音楽妖精

幻惑魔法が得意な影妖精

これらの説明を見て少し悩んだ。メイの目標は世界樹の攻略になる。その中で選択肢は少し狭められたが、決め手が薄い。

少し悩んだがやっと決まり、選択肢を押す。

『ようこそ、ALOへ。』

視界がひらけ、空中に放り出される。スタート時に少しでも飛行の感覚に慣れさせるものらしい。きれいな景色を楽しみながらメイはゆっくりと降りて行く。

だがそうにもいかなかった。

降りている途中で突如視界が暗転し、元に戻ったかと思えば森の上だった。この世界にも飛行にも慣れていないメイは頭から森に落ちた。

「つつー。どうなつとんねんこれは。」

とりあえずゲームが始まったことには変わりないので、現状を確かめるためにメニューを開く。

「……はあ？」

開いたメニューには異常しか見つからなかった。一番分かりやすかったのは所持金だ。どう見ても数値がおかしい。初心者が持つてゑる額ではない。スキルメニューも確認してみればあまりにも高い数値だ。だがメイには見覚えのある数値だった。

「SAOのときのステータスかこれ……？」

さらに確認してみればそれを決定づける証拠があった。メニューの中に説明書にはなかったコマンドがある。

「SAO世界のコピーかなんか？これは？」

アイテム欄を開けば????の文字が大量にあったので、怖くて消した。とりあえずどうすればいいのかわからなくなったのでメイは飛行

練習をすることにした。これがあれば移動には困らないので習得する必要はある。

「おおー浮いた浮いた。」

翅を出し、少しだけ浮くことができた。そこから前に進むことを意識してみる。

「おおー。進んだ進んだ。つて速いなあ……。ちよいちよいちよいちよいちよいちよい！」

加速が更に更についていき止まらなくなった。

「うわー！ー！ー！」

そのままメイは森の更に奥へと入っていった。

――――

木をなんとか避け続け、止まらないまま飛行を続ける。どれだけ進んだかわからなかったが、遂に希望を見つけた。

遠くにだが4人のプレイヤーを確認できた。なりふり構ってははいられないのでメイはその4人の近くにある茂みに向かって頭から突っ込んだ。

「助けてくださいーい。」

情けない助け声が響いた。

森の中の勝負&妖精達

A L Oのとある森の中で睨み合いをする種族があった。一つのグループは火妖精^{サラマンダー}。重装備の男が3人である。もう一つは風妖精^{シルフ}。こちらは一人の少女であった。

ことの発端は数分前。空中を移動していた風妖精の男女二人が火妖精の集団に見つかった。風妖精としては逃げたが、見つかった場所が悪かったらしく逃げようがなかった。

「リーファちゃん！もう追いつかれた！」

リーファと呼ばれた風妖精の少女は後ろを確認し、戦闘をすることを決め、剣を抜く。

「レコン！戦うよ！何人落とせる？」

「二人は絶対に落とすよ！」

「行くよ！」

風妖精の二人は火妖精に飛び込む。リーファは素早い動きで火妖精に突撃し、驚いてた火妖精だが、すぐに反撃を試みる。だがもう一人の風妖精が隠密行動をしていたため、奇襲が決まる。

火妖精一人の急な叫びと消滅に、気を取られていたところをリーファが一人仕留める。

ここからリーファに3人、レコンに2人がつき、火妖精達は応戦していく。それぞれは数の多さに苦戦しながらも対処していく。

リーファの方には、魔法も使うプレイヤーがいたようなので、先にそちらから仕留めると決めた。だが、

「リーファちゃん！後ろ！」

レコンの叫び声で、リーファは後ろを向く。すると目の前には火妖精が剣を構えて今にも斬りかかろうとしていた。

あまりにも急で驚きはしたが、カウンターの要領で相手の胸を刺す。

(まさか！)

そう思い、リーファはレコンの方を向くと、そこには赤い火と緑の火があった。プレイヤーのHPが0になると出現するものだ。つま

りレゴンのHPは無くなった。

レコンは宣言通り二人は倒した。だがリーファにとっては生き残って欲しかった気持ちはある。更に翅を見れば、色が失い始めている。飛行制限時間だ。

リーファは舌打ちをし、森の中に降りていく。火妖精達もリーファを追い、森の中へ降りていく。地上に着いた4人は睨み合う。その中火妖精のリーダーと思われる男が前に出た。

「悪いなお嬢ちゃん。こつちも任務なんでね。アイテムと有り金を置いてくれたら殺しはしない。」

だがリーダー以外の火妖精達は殺そうと提案した。一部のプレイヤーにとつて女性プレイヤー狩は楽しみの一つのものであり、この提案は気に入らなかつたようだ。

「あと一人は道づれにするわ。デスペナが惜しくない人からかかつてきなさい。」

元より、リーファはアイテムも所持金もタダで渡すつもりもない。息を大きく吐き、剣を構える。

「頑固なお嬢ちゃんだ。仕方ない。」

火妖精達は武器を構え、空から勢いをつけて攻撃するために浮き上がる。リーファは三方向から囲まれ、火妖精達が突撃しようとした。その瞬間、

ガサガサバキボキ!!

一人のプレイヤーが森の中の一つの木に頭から突っ込んできた。

「助けてくださいーい。」

森の中に情けない声が響いた。

—————

火妖精達に引き抜いてもらっているプレイヤーを見てリーファは再び舌打ちをする。落ちてきたプレイヤーの印象としては至って普通の女性プレイヤーの初心者だった。自分と同じように長い髪をポニーテールにしているのはこの際どうだっていい。

だが、そのプレイヤーの髪色や初期装備の特徴からして火妖精とい

うのは明らかだった。

風妖精領が近いのに、こんなところで他種属のプレイヤーが1人であるわけがない。少なくとも1人は近くにいるはずだ。4 v s 1以上の状況になるのは間違いない。これでは道づれすら難しくなってしまう。

初心者プレイヤーはこの場にいる全員の種族を確認できたようであり、自分と種族特徴の一致する火妖精達の方に立った。援護が来てしまう前にどうかしようとしてリーファは決めた。

—————

メイは火妖精達に助けてもらい、4人を見る。外見的特徴から種族を判断すると、同種族が3人もいたので、そちらに立つことにした。

「君は初心者だろ？こんなところで一人で何してたんだ？他に仲間はいないのか？」

3人の中でリーダーっぽい男がメイに問う。

「色々想定外のことになりました。とりあえず飛行練習してたらここに落ちたって感じですよ。」

「まあ俺たちはこの風妖精を倒すところなんだ。どこかで隠れた方がいいぞ。」

メイはその忠告を素直に聞き入れて、その場から少し離れ、襲われたときに対処できるように武器を抜く。再び4人は武器を構え直し、対峙する。だが

「おっわあ!？」

空からメイと同じようにもう一人落ちてきた。黒髪で黒をベースとした初心者装備。影妖精だ。スプリガン

「着地がミソだなこれは…。それで…」

影妖精はあたりを見渡し、状況を確認かめる。元々分かりやすい状況なので、すぐに判断できたようだ。

「4人で女の子1人を囲むのはカッコ悪いな。」

「私を数に入れるのはやめてくれへん？アンタと似たような装備やで。」

この影妖精の発言が気に入らなかったのはメイだけではなかった。

カツコ悪いという発言に1人の火妖精が怒っている。

「なん…だと…!?!」

遂に怒りが頂点に達したのか、火妖精は影妖精に斬りかかる。だが影妖精はものすごいスピードで、その火妖精を斬り裂いた。そしてその場には赤い火が灯った。

「このっ！」

更にもう一人の火妖精は仲間がやられたことに、そして先程の挑発のこともあり、影妖精に斬りかかる。影妖精は先程のリプレイをするようにもう一人も倒した。

「あんた達もやる?」

影妖精はメイと火妖精のリーダーに聞く。

「いや、遠慮しておくよ。もう少しで魔法スキルが900なんだ。デスペナが惜しい。」

「私もええわ。まだ始めたばかりで勝手がわからんし、武器も手に合わへんからね。」

メイの現在の武器は初期装備の両手剣だ。短剣しかまともに扱える自信がないので、戦えない。

「正直な人だな。そちらのお姉さんは?」

影妖精はリーファに聞く。

「私も遠慮しておく。けど次は負けないからね。」

「いや、そちらのお姉さんともタイマンでやるのは勘弁して欲しいな。ほら、行くぞ新人さん。」

メイは生き残りの火妖精について行き、森の中を歩いて行った。

—————

風妖精と影妖精から少し離れたところで、火妖精はメイに話しかけた。

「さて、新人さん。まずは自己紹介をしておこうか。俺はカゲムネだ。これから聞きたいことがあるんだけどいいかな?」

「あ、先程は助けて頂いてありがとうございます。メイと言います。このゲームを始めたばかりの初心者です。」

カゲムネはいくつかメイに質問をしてみた。何故あんなところ

で一人で落ちて来たのかを詳しく聞いた。

「実はアカウントを作つてすぐに何かしらのバグが発生したようである……。街を見てたらいきなり森に放り出された感じになってしまひまして。」

今までにそのようなバグなど聞いたことがないのでカゲムネは驚いた。もつと詳しく話をしようとしたが、風妖精領に近い上、初心者と満身創痍の自分だけでは危ないと判断し、火妖精領まで戻ることにした。

「これから火妖精領まで戻るのだが、飛行はできるか？」

「全くできません……」

カゲムネはどうしようかと一瞬悩んだが、すぐに問題は解決した。先程メイが空から落ちてきた時はおそらく随意飛行だったので、コントローラーを使った飛行なら問題はないはずだ。

「じゃあ今から簡単な方法の飛行を教えるからよく見ててくれ。」

カゲムネは左手にコントローラーを取り出し、飛行の説明をする。メイはすぐに理解し、同じようにコントローラーを取り出し、飛行はできるようになった。

「それじゃ、俺についてこい。」

「わかりました。カゲムネさん。」

二人は空を飛び、火妖精領を目指した。飛行中にカゲムネは先程のバグの件を詳しく聞こうとしたが、メイは初心者だったので、詳しい情報は得られなかった。

メイは初めての飛行をとて楽しんでんだ。

新人訓練&首都

メイとカゲムネは火妖精首都《ガタン》に向けて飛行を続ける。途中でメイはコントローラーでの降り方の方法も頭には入れたので問題は無い。

二人はやつとガタンに到着し、街の中に降りる。メイにとってはバグにより、ALOを始めた直後に着く場所だったが、始めて首都に入った。

降りた先には先程森で見た顔がいた。影妖精に倒された二人だ。

「カゲムネさん。無事だったんですね。あの風妖精と影妖精は倒したのか？」

「案外話を通じてね。この新人さんと逃げてきてきたんだ。」

「新人もよく逃げ切れたな。あの感じだとデスポーンするかと思っ
ていたがな。」

メイとカゲムネは二人に囲まれながら森の中でのことを話した。風妖精と影妖精への敵討ちがなかったことに対して少し不満がある様子ではあったが、流石に2対1だとしようもないことを理解してくれたので、すぐに解放された。

「じゃあメイさん。俺は今から領主に報告するけど、君も挨拶して
いくかい？」

「領主なんてあるんですね。一応そうさせてもらいます。」

メイとカゲムネは領主のいる、首都の中で最も目立つ建物に向かっ
た。

カゲムネの案内により、メイは火妖精の領主の前にいる。その領主の名前はモーターティマー。ALOで最強と呼ばれるユージーンというプレイヤーの兄であり、とても頭が回るようだ。なので多くのプレイヤーは『武』のユージーン、『智』のモーターティマーと呼ぶ。だが今この場にはそのユージーンはいなかった。

「以上が報告であります」

その報告内容としては『風妖精二人を倒しきれず、アイテムを奪え
なかった』と簡潔にまとめたものであった。

「ああ、ご苦労。そしてそのプレイヤーは？」

カゲムネの報告を聞き終えたモーティマーはメイに視線を向ける。見慣れないプレイヤーなので当然だろう。

「この度ALLOを始めた新人の火妖精です。メイといいます。」

「今時領主に挨拶にくる新人は珍しいのだがな。だがその姿勢は好きだ」

メイはモーティマーに挨拶をし、モーティマーはそれに応える。流石にモーティマーも全ての火妖精プレイヤーを把握はしきれない。覚えているのは目立つ功績を挙げた者と、作戦に数多く参加したプレイヤーぐらいだ。その上ゲームを始めた新人はすぐに知り合いと行くか、単独行動が多いので挨拶に来る者も少ない。

「さて、メイ。つかぬことを聞くがお前は何故この世界に来た？」

ALLOの世界にくるプレイヤーの目的は様々だ。ただ仲間内で話したり、空を飛ぶだけで楽しむ人。PKだけを目的にした人。世界樹攻略を目指す人。モーティマーとしては常に戦力は欲しいところではあるので、女性プレイヤーならエンジョイ勢だと思っている。

「私の目的は世界樹の攻略です。なので来たる日には是非パーティーに入れてほしいです。」

モーティマーはこれほどやる気のあるプレイヤーの参加に素直に喜んだ。今は期待はしていないが、戦力の増加は喜ばしいことである。

「ではカゲムネ。そのプレイヤーを新人訓練場まで案内してやれ。」

「わかりました。」

「失礼しました。」

メイとカゲムネは部屋から出て、訓練場まで行くことにした。

—————

カゲムネの案内により、メイは訓練場に到着した。道中に短剣を買ったり、こういった内容の訓練をするのか確かめたところ、随意飛行と近接戦闘の訓練のようだ。魔法の使い方は詠唱だけで、その上指向性のようなのでスペルを覚えるだけなので必要ないらしい。

「じゃあ後は頑張れよ。」

カゲムネは案内が終わるとその場を後にした。訓練場の大きさは体育館を2つ並べたようなものだった。一つ分は飛行訓練場、もう一つが近接戦闘用なのだろう。

メイは飛行訓練場の中に入る。その中では何人かのプレイヤーがぎこちなく飛んでいた。一部制御ができてないものもいたが、それはメイも同じだ。

「君も訓練希望者か。カゲムネから既に話は聞いてる。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

訓練場の教官のようなプレイヤーとメイは挨拶を交わす。それが終わると訓練の説明に移った。

「ここでは随意飛行。つまりコントローラーを使わない飛行を訓練してもらおう。これを習得することで空中でも両手を使って戦うことができる。」

随意飛行の簡単な講座を受け、すぐに訓練に入る。翅を出す前にメイは質問をした。

「なんかコツなどはありますか？」

「コツは肩甲骨から仮想の筋肉が伸びていることを意識してやることだな。とりあえずやってみよう。」

メイは肩甲骨に意識を持っていき、翅を出す。蝉のように翅を動かす、飛ぶための準備を整える。斜め方向に勢いよく飛ぶと、他の訓練プレイヤーとぶつかった。

「前よりよくなったけどこれは難しいなあ。」

「この飛行には慣れるまで時間がかかる。頑張ってくれ。」

だがものの数分もすればメイはスイスイと随意飛行をしていた。SAOの中で2年もずっと過ごしていたので、VRには完全に慣れている。

「筋が良いなんてものじゃないな。」

メイは周りからはVR適性が高いか、センスがいい、またはその両方だと思われるだけで済んだ。

こうしてメイは誰よりも早く飛行訓練は終了した。

メイはすぐに次の近接戦闘訓練を受けることにし、隣の建物に入

る。中には様々な武器を持ったプレイヤー達が実践稽古のようなものをしていた。メイもその場に加わり訓練を始める。

だがメイは初心者とは違い、SAOから引き継がれたスキルと、数ヶ月のブランクはあるものの2年で培った戦闘技術があるので、すぐに合格ラインにたった。

その場にいた教官とも勝負をしたが、大したこともなく、楽々と突破した。

たった数十分で全ての過程を終えたメイはその場を後にした。

—————

「とりあえずこんなもんでええかな。」

メイは体力回復アイテムと魔力回復アイテムを買い貯め、更に魔法について書かれた本からスペルをメモした紙を数枚用意した。それぞれメモした魔法の種類はそれぞれの属性の初期魔法から中級魔法だ。

まだ落ちるまでの時間には余裕があるが、地図を見ながらログアウトするための宿を探す。宿に到着するとちゃんと確認してなかったステータスを確認する。

「料理スキルって動くんかな」

気になったメイはすぐに実験することにした。ジャガイモと人参を用意し、短剣を当ててみる。するとSAOの時のように一瞬で切り分けられた。

「動くんやな。やっぱりエンジョイ組用なんかな？」

他のスキルも見れば、きちんと動くようなので、特段問題はなかった。ソードスキルが無いのが些かきついところではあるが、そこは仕方ない。他のプレイヤーも同じなので気にしないことにした。

メイはベッドに横になり、寝落ちによる自動ログアウトをした。

ルグルー回廊&追跡

平日の午前中からはALOをするのは気が引けるので、遅れている分を取り戻すために勉強をする。やはり学生時代のクセが抜けず、学校のある時間帯は勉強しなくてはという気持ちがある。

やはり理数系の科目がどうにもならず詰まってしまう。美優に聞くのが一番だが、時間的にもよくないし、受験のピーク時に聞くのも申し訳ない。

「やっぱあかんわー。」

伸びをしつつ呟く。3時間も座りばなしだと流石に集中力も切れてくる。

時刻は正午。そろそろお腹も空いて来る頃であり、軽c昼食を食べることにする。皐月が一人で食べる分なので、今朝会社に行った叔父に渡した弁当の中身とほぼ同じなので、色々と楽である。

昼食を済ませると、勉強へのモチベーションが少し低下したので家事をしていく。だがやはり家事を一人でこなす上、皐月の足では大変だった。

掃除はほどほどに済ませてから、早めではあるが夕飯の準備に取り掛かる。作るのは生姜焼きだ。

豚肉を程よい大きさに切り、軽く焼く。

生姜チューブ、砂糖、酒、醤油、みりんを混ぜてタレを作る。

フライパンに肉を入れ、その上からタレをかけて、タレがほとんど無くなるまで強火で煮詰めていく。

これで生姜焼きは完成だ。あとはキャベツを千切りにしていき、添える。

ご飯と味噌汁も作ることにし、それぞれ作っていく。ご飯は炊飯器のタイマーをセットするだけだ。

1時間ちよつとで料理は終わり、時計を見れば午後3時半。まだ早いと言う気もあるが、ALOをすることにした。日常生活も大事だが、やはりアスナのことも気がかりだ。

皐月はナーヴギアを被り、ログインをした。

ALOにログインし、最後のセーブポイントであった、宿屋から出る。メイは改めて世界樹の位置を確認し、街とフィールドの門から飛行をすることを決めて、歩き出す。

門に近づくとつれ、掛け声のようなものが聞こえてくる。メイは聞き耳を立てて、会話を聞いた。

「影妖精と風妖精の二人組はルグルー鉱山へ向かうようだ。よって今回の目標はルグルー回廊での奴ら及び討伐だ！」

「二二はい！二二」

数えると12人のプレイヤーが作戦確認のようなことをしていた。メイにとつてこの情報は有力なものだった。

ルグルー鉱山は世界樹までの中継ポイントのようなものであり、セーブ地点としてはぴったりだ。だが、話の内容から推測するに、そこで倒すべき対象がいるようだ。アスナ救助が目的のメイは急ぎたいので、そこに混ぜてもらいたい気持ちはある。だがこんな初期装備のプレイヤーを入れてくれるはずもない。

なのでメイは後ろからこっそり付いていくことにした。その下準備として、物陰に隠れ、魔法を唱える。

唱えた魔法は8詠唱の闇魔法だ。唱え終わると小さなコウモリが出現する。このコウモリはマーキングのようなものであり、特定にプレイヤーをマークすることができる。コウモリを12人の内のプレイヤーの一人につけ、全員が飛び立ったのを確認して、少ししてからメイも飛び立った。

影妖精を追う火妖精集団を追う火妖精という二重追跡が始まって僅か。メイは思いの外世界樹までの距離はあるのだと痛感させられた。外ならどこからでも世界樹が見えていたので、空を飛べれば近いと思っていたが、翅の制限時間と予想以上の距離。道中にもモンスターはいるらしく、戦闘を余儀なくされる。それ自体は影妖精達がなんとかしてくれるが、火妖精集団は彼らに見つからないように隠れねばならず、メイもまたこっそり追跡してる身なので隠れねばならない。

ガタンを出て数時間。先頭集団が止まったらしく、それに伴い火妖精達も一時休憩するようだ。時間を見ればそろそろ夕食時と風呂の時間も近いので、一旦ログアウトすることにする。

だがここで問題が起きた。現在いる場所はどうかやら中立区らしく、ログアウトはできてもプレイヤーの体そのものは残ってしまおうようだ。これだとモンスターに見つかっても、プレイヤーに見つかってもキルされてデスポーンしてしまう。

どうしようもなかったので、緊急策として手頃な岩に魔法で穴を開け、その岩の中に入ってから表面を幻惑魔法で覆う。どれほどの効果があるが分からないが、無いよりはマシだと思い、ログアウトをする。

—————

「意外と問題なかったんな…」

1時間ほどログアウトしててもメイの体には特に問題はなかった。コウモリの位置を確認してみれば、思ってるほど進んでおらず、充分に追いつける距離だった。メイはすぐに追跡を再開した。

少しすると、洞窟にたどり着いた。火妖精集団の作戦開始地点が近いので、いつでもコウモリと視覚共有できるように準備する。

洞窟の中を進んでもモンスターと出会うことはなかった。恐らく一番前の影妖精達が倒したのでだろう。

10分程進んでから、そろそろ戦闘が始まっているころだと思い、コウモリと視覚をリンクさせる。ヒントを合わせてから現在の状況を確認する。

『グオオオオオオオオオオオオ！』

……化物が吠えていた。しかもメイにとってその姿は見覚えがあった。それはSAOの74層のいたフロアボスにそっくりだった。

『た、退避！退避！』

火妖精の集団が陣形を崩され、退避していく。だが化物はそれを許さず、追撃していく。その追撃の途中でコウモリとのリンクが切れた。化物の手によって潰されたのだ。

状況は最悪だ。ルグルー回廊を通ろうにしても、あのモンスターがいては進むことができない。かといってガタンまで戻ってから編成を組んでもらうにしてもいつになるか分からないので、メイはここを一人で突破しなければならない。

「これは無理やろなあ……」

メイは腹をくくり、戦うための準備をする。とはいっても今まで使った魔力を回復させるためにポーションを飲むくらいだ。それからメモをしておいた魔法をもう一度確かめる。

だがメモをしておいた魔法の中に一つどうにかなりそうなものがあった。あの化物と戦うにはこれしかないと思い、詠唱を始める。

—————

「キリト君。そいつ残してお」

「まだです！後ろから新たなプレイヤー反応があります！」

リーファが暴れるキリトを止めようとするが、ユイから制止が入

る。初めから13人のプレイヤーがあつたが、ここで戦つたのは12人であり、一人足りなかつたのだ。だがついに後ろからついて来たもう一人がくる。リーファは相当な手練れだと予想していた。

「キリト君。あともう一人来るよ！」

その声にキリトは反応し、手に握つてる火妖精を橋の端に投げ捨てる。そして洞窟の出口を見つめた。

「目視距離まで、5、4、…」

ユイが近づいて来る反応に合わせてカウントダウンを始める。しかしリーファには幻惑魔法で無双したキリトがいるので一人ぐらいいなら問題ないと思つていた。

「3、2、1…」

洞窟の出入り口から現れたのはどう見ても人間ではなく、化物だった。その姿を見たりーファの第一印象としては『気持ち悪い』だった。現れたのは体調が4メートルほどある、白い蜘蛛だった。その前脚

は鎌のように鋭くなっている。背中にはトサカのようなものがあり、毒々しい色をしていた。

『キュルアアアアアアアアア！』

巨大な蜘蛛が大きく吠えた。それに合わせるかのようにキリトも吠える。

蒼い悪魔と白い化物が互いを敵と見なし、橋の上で戦闘を始めた。

化物&化物

リーファと捕虜の火妖精は絶句した。目の前で起こっている化物同士の戦いに理解が追いつかなかった。

最初に動いたのは蜘蛛の方だった。その前脚には関節が二本あり、変身したキリトの腕よりも長くいたため、キリトのリーチ外から、横に薙ぎ払うように攻撃をしかける。

流石のキリトもこれは初見で避けきることができず、鎌の先端部だけだが少し喰らってしまふ。だがキリトはその一撃で少し蜘蛛への対策を練ることができた。それはリーチ外から攻撃されるなら、距離を詰めれば良いというものであった。距離を置かれ続け、ちまちま攻撃を喰らい続けると負けるのはこちらだ。とりあえずの方針は定まった。

蜘蛛は同じようにもう一度攻撃をしようと動き始める。キリトはそれを相手のアームの部分でうけ、ダメージを最小限に抑える。距離を詰めたところでその脳天に拳を振り下ろす。距離を詰められた蜘蛛は離れようとするが、キリトはそれを許さず、追撃にかかる。

蜘蛛は腕の振り上げを腹で喰らい、何を思ったのか離れることを諦め、その場でキリトと殴り合いを始めた。

殴り合いの中で、見ているだけのリーファでもキリトが有利なのは分かった。蜘蛛の攻撃はキリトの腹や腕にしか当たっておらず、逆にキリトの攻撃はほとんど蜘蛛の頭に入っている。実際攻撃力もキリトの方が高く、この状態が続けば勝つのはキリトだ。

逃げようにも逃げられない蜘蛛は奇策に走った。その行動は橋から飛び降りるというものである。だがその水中には水妖精がないとどうにもならないレベルのモンスターがおり、自殺行為に思われた。

だが蜘蛛は水面に向けて勢いよく糸を吐き、表面張力で一瞬固まったところで橋の下にもう一度糸を吐く。振り子のような動きになり、最高点に辿りついたところで橋の上にもう一度糸を吐き、糸の方を戻していく。

そうすれば重力と戻すスピードがあわさり、キリトを遥かに上回るスピードになった。すれ違いさまの一瞬にキリトは鎌の攻撃を思いつき食らってしまった。

キリトは蜘蛛を追いかけてしようとしますが、蜘蛛はまた橋の下に居座る。もう一度同じような攻撃がきたが、やはりそのスピードは捉えきれない。

キリトは三撃を急所に食らってしまい、体力はレッドゾーンまで来てしまった。モンスターの姿をしていようが、元の体力はプレイヤーのものだ。頑丈ではない。だが蜘蛛も同じであり、殴り合いを続けたのが原因でレッドゾーンだった。

キリトの体力がレッドゾーンになったこともあり、蜘蛛はトドメにかかる準備をする。同じように橋の下に糸を張り、振り子運動を始める。だが先程までとは運動量が違い、高さがあった。その高さからは先程よりも早い攻撃が来るのは誰の目にも明らかだった。

最高点に到達した蜘蛛は橋の横側に糸を吐き、先程よりも早いスピードで攻撃をしかけた。そのスピードはリーファの目で追えるか追えないかのスピードであり、避けようがないかと思われた。

「キリト君！！」

リーファは相棒が負けてしまうのを嫌がり、目を瞑った。

何かを殴りつけるような鈍い音が響き渡った。リーファは恐る恐る目を開けてみれば、そこには空中にいる蜘蛛の顔面に拳をいれれているキリトがいた。

何度も同じ攻撃を受けたキリトはカウンターをしかけることを決めていた。スピードが上がっても、キリトの持つその反射神経は対応でき、見事カウンターに成功した。

蜘蛛は力なく水の方へと落ちていき、水の中に落ちる前に赤い命火と化した。

—————

「あいつまだ帰ってこないな。」

ガタンのデスポーンの場合で11人の火妖精が残りの1人の帰りを待つ。今回だけのメンバーとは言え、同種族なのでやはり心配になるのだ。まだかまだかと待っていると、門が光だし、新たな死に戻りの人が現れた。

「あー。ギリギリで負けてしもたかあ。」

出て来たのは今回の作戦メンバーではなく、見知らぬ女性の火妖精だった。その装備は初心者のものであり、死に戻りしたということは大方どこかで初心者狩りにでもあったのだろう。

「あ、急ぎがあるのでどうしてもらっていいですか？」

そう言っつてその火妖精はその場を立ち去った。

—————

メイはガタンまで死に戻りをしてしまったが、どうやら60人を超える火妖精が作戦行動に出るという情報を仕入れることができ、再び世界樹を目指すことに決めた。先程の12人は偵察隊だったと判断し、本隊であろう方について行かなかったことは失敗したと思うがこの際は仕方ない。時間としてはかなり前のようなので、あそこまで削り切った化物は倒してくれるはずと予想した。

道は覚えているので、メイはトップスピードでもう一度ルグルーを

目指す。道中の戦闘と翹を休めるべき時間もできるだけ短縮したいので、幻惑魔法を使って歩幅を上げるのと、雑魚モンスターへの威圧を重ねる。こうして使ってみると幻惑魔法は割と便利だ。

最速で洞窟まで再びたどり着き、中にいるモンスターともできるだけ戦わずに進んでいく。先程メイが負けた橋までもう一度たどり着くと、あの化物はもう既にいなかった。

「よし！誰かがなんとかしてくれたみたいや。」

メイはルグラー回廊を突破し、そのままルグラーを突き抜け、アルンへと向かった。

アルンへと到着したメイは街並みを見て回る。流石ALOで最大の中立都市というだけあり、全種族のプレイヤーを見ることができた。中には土妖精と水妖精がイチャついてるところも目撃し、ここには種族間の隔たりがないように思えた。

「賑わってんねんなあ。」

街並みを見た感想をポロリとこぼす。時間を見ればそろそろ定期メンテナンスの時間ようだ。メイは近くの宿屋を探し、セーブしてからログアウトをした

再会&告白

A L Oのメンテナンスが終わり、皐月は再びログインをする。メンテナンス中は家事や勉強等をして時間を過ごしたため、入れたのはメンテナンスが開けてからしばらく経っていた。

セーブ地点であるアルンの宿屋から外に出る。宿屋の周りは多くのプレイヤーで賑わっていたが、グラントクエスト場所である世界樹に近づくにつれ、人通りは少なくなっていく。どうやら常に誰かが挑んで混雑してるということは無いらしい。

だがそれはおかしいとメイは思った。昨日のメンテ前に出発したはずの火妖精がの集団がないのだ。60人もいれば世界樹攻略体制だ。それが見当たらないということは既に負けた後かまだ準備中なのだ。だがどこにも火妖精が見つからず、攻略したという噂も無さそうなので、攻略に失敗したのだろう。

事実は分からないが大体の予想を立てながらメイは階段を登っていく。その途中で奥から声が微かに聞こえてきた。

「……これ以上………ない。俺は………だから。もう一度行くよ。」

もう一度行く。つまり連続で挑もうとしてるプレイヤーがいるということだ。このままでは順番待ちになってしまうのでメイは走り出す。

「……いつもの………君に戻っ……。私………君の……。」

まだ声は聞こえるがこの際どうでもいい。メイは翅も使い、世界樹の前にたどり着く。

「お二人さん。私は今すぐここに挑みたいんやけどええか?」

メイは気持ち之急いでいるため、いつもの敬語が消える。目の前にいる二人はいつか見た影妖精と風妖精だった。二人はメイの方を見ているが、影妖精の方は睨むような見方だ。

「二人で挑むのか? だったらそんなことはさせられない。」

「そつちも一人でやろうとしてたやろ。大方サツサと光妖精になりたいだけなんやろ。装備も私と同じ初期装備やし、飛ぶ楽しさを知って制限を無くしたいんやろ」

メイの言葉に影妖精は歯を噛みしめる。

「それはお前のことじゃないのか？でも俺は違う。あそこで会わなきゃいけない人がいるんだ。だから譲れない」

今度はメイが歯を噛みしめる。事情がほとんど同じだからだ。その会う人が妖精王かアスナらしき人物かは分からないが、光妖精への転生が目的ではないらしい。

「私も同じような事情や。私が絶対に上に着かんとあかんねん。あの子に会うために…。やから譲れない」

影妖精が啞然とする。あの子という言い方でメイがどちらかに会うために動いているのを理解したのだ。だが自分だけがその目的でこのゲームをしていると思いきっていた影妖精はメイを怪しく思う。

「なぜお前が彼女のことを知っている？」

「一言で言えば仲間や。友達や。やから私はあの子を助けたいんや。これ以上は言えることは何も無いで」

S A Oの名前を出せば色々面倒になるので伏せる。だが影妖精の目的もアスナということが分かった。

「お前もあの子のことを知っているみたいやな。なにが目的で会うんや？」

「俺もお前と同じような理由だ。俺は彼女が好きだから助けたい。」
やはり目的までほぼ一致している。故に二人は相手に同じことを問う。

「どうして…」

「なんで…」

「お前がアスナを知っている!?!」

二人の言葉がハモる。今すぐ助けたい気持ちがいっぱいで大事なことにはお互い気が回らない。そんな中二人の言葉に反応する者もいた。

「今、何て？」

反応したのはずっとその場にいた風妖精だ。彼女はアスナという言葉に反応した。

「でも…だって…その人は…」

風妖精は後ずさりながら思考をする。そうして確信を得た。

「キリト君……。お兄ちゃん…なの？」

「えっ…？スグ…直葉なのか？」

「ひどいよ…あんまりだよ。こんなの…」

そう言つて風妖精はログアウトをする。だが二人のやり取りで得られた情報もあった。キリトと呼ばれた影妖精。そしてその目的。そこからメイはあのSAOのキリトだと確信する。

「お前、キリトやったんか。やったら納得いくわ。」

「その関西弁にアスナを知っているということは…メイか…？」

こうしてメイとキリトはお互いを認識する。色々と話したいこともあるのだが、今はそういう訳にもいかない。

「俺も今すぐログアウトする。妹を放っておけない。」

「やるな。今すぐ行つてき。私はここで待つとくわ。」

キリトは風妖精を、リーファのリアルを追うためにログアウトする。

「やっぱキリトもアスナを助けに来たんか。」

たった一人残されたメイは呟いた。

「……………」

しばらく待てば、キリトが再ログインしてきた。

「おかえり。どうやった？」

妹を追った結果をメイは聞く。

「俺たちはアルンの北側のテラスに行く。お前もついてきてくれな
いか？」

だが詳しいことを知らないメイは迂闊についていけないわけもない。これは二人の問題だ。ならば二人で解決するのが筋というものだ。

「いや、変に関わってもこじれるだけやから行かれへんわ。でもその代わり、しつかり説得して来てな。」

メイはキリトの背中を叩く。キリトはそれに驚き、メイの方に向きなおる。

「行つてきー！」

メイの力強い言葉にキリトは応える。

「おうー」

そうしてメイは北側のテラスに向かうキリトを見送った。

キリトを見送った後、キリトの妹について考える。おそらくあの二人はお互いの正体を知らないまま行動していたのだろう。そして口グアウトする直前のセリフから察するに、彼女はキリトに好意を抱いているはずだ。

だがお互い初対面なため、メイは掛ける言葉を見つけられなかった。キリトがどうにかすることを願うだけだ。

「……………」

しばらくすれば無言のまま再ログインするキリトの妹の姿があった。落ち込んでいるように見えるが、上からの人物に目を向けていた。

「おーいー！リーファちゃんー！」

向かってきているのは風妖精の男のプレイヤーだった。メイは二人から死角になる位置にいるので、邪魔にならないようにする。

二人は何やら話をしているようだが、メイの位置からは聞き取り辛い。最初にまともな聞こえたのはリーファの声だった。

「変なこと言っちゃってごめんね。帰ろ、スイルベーンに。」

どうやらリーファはキリトに会うつもりはないらしい。それを知ったメイはキリトに伝えに行くことにする。

「リーファちゃんは泣いちゃダメだよ。いつも笑ってなきやリーファちゃんじゃないよ」

だが横からその男がリーファを励ましに行く。

「リアルでもここでも、絶対に一人にしないから！」

声のトーンからしてただの励ましではなく、本気だろう。

「リーファちゃん…直葉ちゃんのことを好きだ！」

メイは後ろで苦笑いを浮かべる。このドサクサで告白するなんて大胆な人だと思う。ここまで良い人がリーファを励ましているならきっと大丈夫だろう。

その直後に殴られた音が響き渡ったのはきつと聞き間違いだろう。

だがリーファの顔は清々しいものになっており、心配も無さそうだ。そのままリーファは北側のテラスに向かって飛びたった。後はキリトとリーファの問題なので、無事に解決することを祈るだけだ。

「そこに誰かいるんですか？」

不意に声を掛けられた。その声は先程の風妖精である。

「ごめんなあ…つい聞いてもたわ。」

「サ、サラマンダー!?それに聞いてたって…まさか!？」

彼の顔は今は真っ赤だった。

そこからお互いに敵意は無いことを話し合って理解し、自己紹介をする。彼の名前はレコン。どうやらリーファとリアルでの友人らしい。

「にしてもレコン君やるやん。あそこで大胆にも告白するなんてなあ…」

メイはニヤニヤしながらレコンに言う。レコンは人生で最大の告白を聞かされたことに対してオーバーヒートしそうなほどに恥ずかしがっている。

「やめてくださいいよお…」

「まーあそこまで男魅せたら大したもんやで。反応も悪くなかったしこれからリーファも意識するんちゃうん？」

「からかわないで下さいいよお…」

レコンとメイは世界樹の前で座りながら話している。話題は先程の告白のことであり、レコンは恥ずかしさの限界だった。だがメイから見ても、先程の告白はリーファにとっても好感触に思えるので、脈はあると思っている。

メイがレコンをイジリ続けてしばらくすれば、キリトとリーファが戻ってくるのが見えた。

世界樹&最終手段

「おかえり二人とも。」

降りてきたキリトとリーファにメイは声をかける。二人で降りてきたということはキリトはリーファの説得に成功したのだろう。

「さて、ここからはもう分かってるな。」

「そうだな。行くか。」

キリトはメイに応え、リーファは頷く。だがこの状況についてこれてない者が一人いた。

「ええつと…。どういうこと?」

声を出したのはレコンだ。これから何が行われるか理解しておらず、困惑した表情をしていた。

「世界樹を攻略するのよ。私達4人で。」

「ええ!?世界樹攻略う!」

今までのどの種族がどんな布陣を用意してもクリア出来なかった世界樹に挑むことに驚くレコン。更にたった4人で挑もうとしているのだ。無茶な計画としか思えない。

「既に挑んだ人達に聞くけど、どうにかなりそうなん?」

未だに抗議を続けるレコンを余所に、メイはキリトに質問をする。その横で放置されていたレコンは一瞬でリーファに丸め込まれていた。

「それについては私がお答えします。」

キリトのポケットの中から小さな妖精のようなものが飛び出る。いきなり飛び出したもので、メイは少し驚いた。

「お久しぶりです、メイさん。ユイと申します。」

「……………えつ?」

ユイの名前を聞くなりメイは固まる。それを見兼ねたキリトは説明をすることにした。

「ほら、あの時の子だよ。アスナと俺の「覚えてる。こっちでやっと会えてんな。よかつたやん。」あ、ああ…。ありがとう」

いきなり遮られたことにキリトは困惑するが、どうやらメイはユイ

のことを覚えていたようだ。

「ユイちゃんは今どういう扱いなん？」

メイがユイに聞く。メイにとつてはとても重要なことであり、返答次第では優先順位が変わることすらあり得る。それ故にメイの表情は真剣なものだった。

「私はプライベートピクシーです。記憶は前から特に変わりはありませんが、できることはパパのナビゲートくらいです。」

それを聞いてメイはホツとする。一番の悩みの種が解決し、これからの世界樹に集中できる。

だがそういう訳にもいかない。相手は茅場の作り出したプログラムだ。どこでどのようなことをするのか、どこまでのことができるのか分かったものではない。

「それでは先程の戦闘についてのまとめをお話しますね。」

「ああ。頼むぞユイ。」

メイが悩んでいた横でユイが世界樹についての情報を話し始めようとしているので、そちらに意識を傾けることにする。

「あのガーディアン達のステータス的にはさほどの強さではありません。ですが出現数が多すぎます。あれでは攻略不可能な難易度設定されてるとしか…」

「つまり、総体的には絶対無敵のボスと同じってことか…」

キリトとユイがガーディアンについての情報をくれる。話通りなら出現数は多すぎるようなので、一瞬で突破するのが最善策なのだろう。相手にしないことが一番だと思う。

「でも、パパとメイさんなら瞬間的な突破は可能かもしれません。」
ユイの言葉にキリトとリーファにはある疑問ができた。確かにキリトは火力も速さもある。ユイはキリトを信じているし、それはリーファも同じだ。更にその上リーファも自分の火力の無さは理解している。ステータスも大体ユイに知れてるだろう。

だがなぜここで初めて顔合わせしたメイの名前が出てきたのか分からなかった。キリトもメイがスピード型なのは知ってはいるが、SAO時代からしても明らかに火力不足だ。

「パパ。この人はルグルー回廊の橋で戦った大蜘蛛ですよ。プレイヤードが一致します。」

「「えっ……」」

キリト、リーファ、メイの3人が固まる。お互い一步も譲らない勝負をした相手が、これから一緒に戦おうとしてるのだ。複雑な気持ちもある。何よりもまず理解が追いつかない。

「つまり、あの蜘蛛がメイさんであり、だから、ええつと……」

特にリーファが追いついてない。その一方、反対側では似たような状況になっていた。

「あのグリーンムアイズがキリトで、つまり幻惑魔法で……」

メイも狼狽えていた。

時間にすれば1分ほどだろうか。3人は状況を整理でき、落ち着きを取り戻した。

出来上がった作戦としては一発勝負だ。リーファとレコンが回復役に回り、キリトとメイが前衛を務める。

「行くぞー！」

キリトの声と共に4人は世界樹の中に入った。

—————

世界樹の中に入った直後にキリトは飛び出す。最初の出現数が少ない内に高く昇るつもりだ。メイもそれについていき、後ろではリーファとレコンが回復魔法の準備をする。

ステンドグラスのようなものからガーディアンが現れる。徐々に数が増えていくと聞いていたが、どうにも最初から多く感じる。なるほど、流石はグランドクエスト。その分難易度も高いというわけだ。

「前回より出現数が増えています！」

キリト達が挑んでから短い時間しか経っていないのに数が増えていくということは、難易度が調整されている。しかしそれは落ちていくのではなく、むしろ逆だ。つまり、更に攻略不可能に近いたといくとだ。

「それでも行くしかない！」

だがある程度進んでしまったため、ここで立ち止まれば後が辛くなる。逃げてでも追撃はしてくるので進むという選択肢しかない。

ガーディアンの攻撃を短剣で逸らす。だが後ろから来た他のガーディアンがランスがメイに刺さる。メイはそのガーディアンを蹴り飛ばし、急いで上昇する。キリトも似たような状況だ。

二人の体力が減っていき、リーファとレコンに回復をしてもらおう。これを繰り返して高度を上げていくが、高くなるほどガーディアンの数は増えていく。

繰り返しを続ける中一つ違和感を感じた。最初より回復魔法が追いつかなくなっていた。ガーディアンの数が増えているから攻撃を喰らう回数も増えたが、そもそも回復魔法特有の光が減っていた。視界の端に黒い光が見えた。見えたと思えばそれは瞬時に音をあげた。

ドオオオオオオオオオ

爆音が鳴り響く。黒い光は球体状に爆発をし、厚かったガーディアンの壁に風穴を開けた。

振り返ればリーファが何かを呟いている。だが距離がありすぎるため全く聞こえない。その横にレコンの姿はなかった。

「自爆……魔法なんか?……」

メイがガタンで見た魔法の本に書いてあった。あれは多大なデスペナルティを受けるが、それに見合った威力を出す。集団戦にはもってこいだ。

「アアアアアアツツ!!?」

叫びながらキリトとメイは突っ込む。何も無くなったスペース分は簡単には進めたが、ガーディアン達も負けてない。新しい個体が出現し、数の暴力で二人の行く手を阻む。

レコンが作ってくれたチャンスはすぐに埋められ戦力的にキツくなった。だがその時下から色々と音がした。

「ドラグーン隊！ファイヤブレス放て！」

「シルフ隊！放て！」

下を見れば風妖精と猫妖精達がいた。メイにとっては見ず知らずのプレイヤー達だ。となればおそらくキリトかリーファ関係だろう。援軍の要請でもしていたのだろうか。

どれほどの準備をしたのだろう。猫妖精と風妖精の火力はすごいものであり、ガーディアンの壁にもう一度穴を開ける。

「お兄ちゃん！」

リーファはキリトに自分の剣を投げ渡す。それをキリトはしっかりと受け取り、2本の剣を重ねて突き進む。

メイもそれに続きキリトの後ろに着く。横からくるガーディアンを掻き切り、落としていく。

敵の壁を突破し、遂に目の前に扉が現れる。キリトとメイはそれに飛びつき、開けようと試みる。だがその扉はビクともしなかった。

「なんでだよ！」

キリトは叫んだ。メイはただ歯を噛みしめている。するとキリトのポケットからユイが出てき、扉をペタペタと触る。

「この扉はシステム管理者権限によりロックされています。」

「くそっ！」

キリトは扉を叩きつける。システムによるロックならどうしようもない。やはり世界樹は攻略されないようになっているとしか考えられない。

するとキリトがハツとしたようか素振りを見せる。そしてカードのようなものを取り出した。

「これなら…あるいは！」

ユイがそのカードに触れ、光り始める。すぐに作業が終わりユイ扉にもう一度触れる。すると扉は音を立てながら開いた。

「転送されます！パパ、メイさん、手を！」

二人はユイの手を握り、転送を待つ。

キリトとユイは転送された。だがメイだけは転送されなかった。

見えない壁のような物に邪魔をされ、物凄い勢いで落ちていく。どうやら扉を開いた本人、またはそれと直接的な関係があるものしか入らないようになっていようだ。

地面まで落ちたメイは一度世界樹の外に出る。先ほどの援軍とリーファは既にそこにはいなかった。それを確認してから深く深呼吸をし、たった一言つぶやいた。

「システムログイン。iD?May95urggr?」

メイは怒っていた。これはゲームではなくゲームマスターの籠城戦だ。だったら使いたくはなかったが遠慮はしない。これは戦争だ。

メイはもう一度世界樹の中に入る。ガーディアンが大量に出現し、メイに襲いかかるために助走をつけ始める。

だがガーディアン達は全員地面に吸付けられるように落ちていく。メイはただウインドウを操作しているだけだ。だがそのウインドウには?重力魔法?の文字があった。

メイはガーディアンは気にせず扉の前にたどり着き、扉を触る。すると扉は一瞬で崩壊し、メイは世界樹の中に入った。

ナメクジ&GM権限

世界樹の内部に転送されると、そこはただの樹の上のような場所だった。そこには光妖精など1人も存在せず、クリア特典など最初から用意されていないようだった。

どうやらGMは本当にゲームをクリアさせるつもりは無く、このVR世界で隠したいことがあるようだ。

メイは舌打ちをし、マップを開く。本来世界樹にはマップは無いが、内部に見取り図があるようなので、それを基に作り出した。そこからエリア内にいる全てのプレイヤーを表示するように設定する。

表示した2つのエリアにプレイヤー反応が出た。一つのエリアに点は三つあり、名前を表示すれば、《Kirito》《Asuna》《Oberon》の文字が出てきた。

だがそちらより気になることがある。反対側には数字表記をすれば約300のプレイヤー反応が出てきた。その数はSAO未帰還者の数と一致する。キリトにはカードを転写したユイもいるし、アスナを方を任せることにし、メイはプレイヤーの多い方に進む。

少し進めば《実験体保管室》と書かれた部屋に到着する。世界樹への唯一の入り口に絶対的なロックをしていたため、中の警備はザルだったので楽だ。メイは部屋の扉に触れ、音もなく消滅させる。

部屋の中の様子にメイは眉間にシワをよせる。そこには無数の人の脳が台座の上で浮いていた。どれも同じように見えるが、よく見てみると色が僅かに違っていたり、それぞれ違うペースで動いていた。部屋の名前からするに、これらの違いは何かしらの実験後の影響だろう。

部屋の奥に黒い立方体のような物が見え、そこまで歩く。いつぞやに同じものを見たので使い方は覚えている。メイはその立方体に触れ、システムを起動させる。そうするとウィンドウがいくつも現れ、一番下には全員を安全にログアウトできるシステムを見つけた。

それを見つけた瞬間に背後から何かが弾かれる音がした。振り返るとメイの背中であつた位置に《Immortal Object》

の紫のウィンドウが出ていた。

「おいどういふことだよ!? 不死属性持ちのNPCとか作った覚えもないし、あの人から聞かされた覚えもないぞ!」

「反応見る限りこれはプレイヤーだね…。でもこれはどういふことなのかなー?」

後ろを振り返れば紫のナメクジが2体いた。彼らの前にもウィンドウが何重にも広がっており、何かしらの操作をしているから運営側の人間だろう。

「どうする? あの人に聞いてみる?」

「いや、今はあの小鳥ちゃんのところに行ってるはずだから機嫌を損ねたくないし、動きを止めれば良いだろう。そんなことよりこいつがどう侵入したか、だね。」

2体はメイをこれからどうするかについて話しながらウィンドウを操作する。メイも聞きたいことはあるのだが恐らく聞かないだろう。

「……………なんで…だよ…」

「どういふ……ことだよ…」

ウィンドウを操作する触手が止まった2体は怒ってるのか身体を震わせていた。体が体なのでその震え方は気持ち悪かった。

「どうして干渉できないんだよ!?なんだよそのiDは!?!」

2体は同時に叫ぶ。自分の持つてる絶対的権限が通用しないのだ。仕方ないだろう。

「で、ここで何してたんや?ゲームの世界で籠城して何か隠しながらすることや。なんかヤバイことなんやろ?」

何もなかったかのようによいにはメイはナメクジ達に問う。だがいつもの初対面の人に対する敬語などは一切なく、確信を持っているのでそんな遠慮などはどこにもなかった。

「答えるわけないだろ!」

「やるな。んじゃ」

そう言つてメイは透明化していたウインドウのボタンを押す。するとナメクジ達は床に押しえつけられた。

「んなっ!?グギギツ、これ、って」

「邪魔やからそこで大人しくしときいや。」

メイはガーディアンにも使つた重力魔法をぶつける。自分達が調整しているデータをその身をもって経験することを想定してなかったのだろう。その間にメイは脳が浮いてある台座や、それに関係するメインコンピュータなどの記録を全て閲覧した。

全てを閲覧し終えたメイは額に青筋を浮かべた。ここで行われていたのは脳の操作の実験だった。そんな外道極まったものにSAO時代に経営していた店の知り合いがその被害に遭つていれば当然誰でも怒る。

「アバター変更。対象2名のアバターを成人男性タイプに変更。」

「なっ!?!」

メイがそう言うと、2体のナメクジは人型に姿を変える。

「対象2名のペインアブソーバをレベル0に変更。重力魔法を解除。麻痺状態付与。礫台をジェネレート。」

メイは次々にある準備を整える。整え終わった今の状況はメイの目の前に男二人が礫にされている。

「ふざけんとんちやうぞ。お前らは考えたことあるんか?身内を。」

本人を。信念あつたあの人を」

メイはウインドウを操作し、空中に無数のナイフを浮かばせる。その数は約300本、つまり未帰還者と同じ数だ。そしてそのナイフで磔にされた二人をまるでハリネズミのようにする。

「アアアアアアアア！痛い、痛いイイ！」

ペインアブソーバ。それはプレイヤーの痛覚に直接関係するものである。それがレベル0であれば現実の痛覚がそのままバターに反映される。百を超えるナイフの同時攻撃に二人は悲鳴を上げる。

「これで終わりやと思うなよ。○○○マシオンをジエネレート。」

たった一言呟くだけで二人の股下に男なら見覚えのある、それと同時に恐怖を覚えるものがあつた。そしてここはゲーム空間。物理法則を無視した設計でも問題ない。

既に2人は気絶しており、もう声も出てなく、虚ろな目で下をボンヤリと見ているだけだ。メイはその間に準備を終え、マシオンを起動させる。

バアアン！

「コツ……、カツ……」

破裂するような音がした。起動したマシオンは磔にされた二人の股下のモノに時速600km/hで見事命中した。悶絶するような声を上げ、泡を吹きながら気絶した。

「流石に…やりすぎではないかね？」

後ろから聞き覚えのある声があった。振り返るとそこには顔が引きつった茅場がいた。他人だろうと男が目の前で最大の処刑をされていれば同情もするのだろうか。

「というか生きていたんですね。」

率直に思ったことを言う。SAOの終わりに死んだものだと思っていたし、今では行方不明のはずだ。生きている方が不思議でならない。

「そうとも言えるし、そうでもないとも言える。私は茅場晶彦という意識のエコー、いわゆるクローンだ。」

「相変わらずアフターケアが万全ですね。それで、私に何の用ですか？」

「なに、君に頼みたいことがあってね。」

「そう言うとな茅場は光る種のようなものを出す。」

「これは一体なんですか？」

「それはザ・シード。どういうものかは芽吹けば分かる。これは君に任せるのが一番だと思ってる。受け取ってくれるか？」

茅場はメイの前にザ・シードを浮かばせる。メイはそれを受け取らず、指で弾き返した。

「いや、私はなんや言うてあなたに関わりすぎましたからね。自分の感情で決めてしまいそうだから違う人に渡してください。それに、報酬を受け取ってない人もいるみたいですよ？」

「そうか。ならば私はあっち側に向かうとする。今後もう二度と会うこともないだろうが、君はやはり面白かったよ。」

「そう言うとな茅場はうっすらと消えていった。メイはそれを見送ると、立方体に触れ、閉じ込められてるプレイヤー300人を解放し、キリト側の様子を見る。」

その様子はもうすぐ終わりの流れだった。キリトが黄金の剣をオベイロンに渡し、剣の勝負をするようだ。オベイロンの剣は腰が引けているので、結果は火を見るより明らかだ。援護の必要もなさそうなので、メイはログアウトをした。

帰還&打ち上げ

皐月はALOからログアウトをし、急いで向かう場所ができた。結果的に未帰還者全員を解放したが、当初の目的はアスナの救出だ。以前にエギルから聞いたアスナの入院先に急いで向かう。

アスナのいる病院は所沢だ。足の悪い皐月では自転車は使えず、ましてや走ることは以ての外なので、電車などの交通機関を使って病院まで行くしかない。待ち時間を含め40分以上はかかるが贅沢は言えない。皐月はすぐに準備をすることにした。

駅を降り、雪が降る道の中で皐月は歩き続ける。元々歩くペースは遅い上に、雪のせいで更に進みは遅くなるが、アスナに会いたいがために足に踏ん張るための力を入れ歩き続ける。

足がヒリヒリと痛むが、なんとか目的の病院までたどり着く。門を潜り抜け、駐車場に入る。だがそこには明らかに事件をおわせるような光景があった。それは成人男性が中高生の男にナイフで斬りかかるうとしていた。

走ることではできないので、気配を可能な限り殺しながら2人に近寄る。ナイフを持った男は狙いを外したのか、雪の上に刃を突き立てた。もう一度振りかぶったところで、皐月は後ろに到着したので、鞆で男の頭を殴りつける。

「ぐうはあっ!？」

男は頭から雪に埋もれた。だが相当な衝撃には変わらないはずなのに、その手にはしつかりとナイフは握りしめられていた。

「だ、大丈夫ですか…?」

足にきていた疲れが一気に全身に来る。皐月は息が上がっているが、少年の安否を確かめるために声をかける。

「メイ…なのか?」

この現実世界では一度も聞いたことはないが、聞き覚えのある声でした。その少年はSAOをクリアし、今回のALOでは皐月と協力して世界樹を攻略した人物だった。

「なんや…キリトか。んでこの人は何なん?」

メイは目の前の男がまだもがいていることを機に、状況を確認する。人に感謝されることはあつても、メイが知ってる限りキリトを恨む人物はラフコフを除いていない。そのラフコフも今は自由ではないので、襲われる道理などあるわけない。

「こいつは須郷伸之。ALLOのGMで今回の主犯だ。」

それだけを聞いてどういうことかはすぐに分かった。須郷はキリトとの勝負に負け、計画も止められ、その上プライドもズタズタにされたのだろう。だとすればこれは逆恨みだ。

「アスナに会うんやろ？ さつさと行つてき。」

「でもお前じゃ…」

キリトは皐月の心配をする。皐月は女性であり、身長は割と高いが見た感じだと細い。成人男性を止められるはずもない。

「いいから行けや！ こんなんに構つてる暇ないやろ!?!」

皐月の怒鳴り声にキリトは驚いた。その声は有無を言わせなく、キリトとしても行くしかなかった。そして皐月は病院に入っていくキリトをみた。

「どうしてあんな奴に肩入「らあ！」オゴっ!?!」

須郷が雪から頭を出した瞬間鞆で再び殴りつける。今度は何度も叩きつけ、動けないようにする。

「須郷。私はあんたを許さへん。茅場晶彦とは違い、正真正銘のクズのあんたは許さへん。」

そう言い鞆からペットボトルを取り出し、須郷の周りに水を撒く。

「茅場と僕を比べるなー!」

須郷が勢いよく雪から飛び出す、皐月にナイフを刺そうと走るが、撒いた水は既に凍っており、須郷は足を滑らす。

今度は頭が埋もれず、硬く凍った雪の上に頭を打ちつけた。そして須郷は気絶し、それを確かめ皐月も病院に入る。

院内に入り、アスナの病室を探す。少し探せば？ 結城明日奈？ の文字を見つけ、部屋の中を少し覗き込む。そこにはキリトとアスナが居たので、ここで間違いはない。

「お邪魔しまーす。」

「あつ…メイさん。」

「無事だったんだな。メイ」

アスナとも現実で会うのは初めてだが、やはり初めて会った気がしない。キリトと一緒にいるのでSAOのときの仲の良い二人を印象があるので、懐かしくも思える。

「私も座ってええか？ 疲れたわ。」

アスナがそれを承諾したので皐月も座る。そして3人はSAOの思い出話に花を咲かせた。

あの後須郷は捕まった。取り調べでは最初は黙秘していたが、部下が吐いたと知ると全て自白したらしい。

SAOに続き、ALOでも事件は起こったのでVR業界は大ダメージを受けた。VRゲームは危険という考えが世間に広がり、もう再開されることもないとおもわれた。

だが茅場がキリトに渡した《ザ・シード》というプログラムは、簡単に言えば誰でもVRゲームを作ることができるというものであり、それを全世界に無料でダウンロードできるようにした。VRゲームは見事復活を果たした。ALOもほかの企業に受け継がれ、続くこととなった。

「メイ。こっちは終わったぞ。何か手伝えることはあるか？」

「皮剥きとそっちの鍋の煮込みを頼んでもいいですか？」

「応。任せろ。」

ALO事件が終わり、しばらくたったころ。SAOのオフ会がエギルのカフェで開かれることとなった。現在皐月は《ダイシー・カフェ》の厨房でオフ会用の料理をエギルの奥さんと作っている。結構な人数がくるので、皐月は朝から料理をしている。このペースなら間に合いそうだ。

少し早くに来た人もいたが、彼らの協力も得て全ての料理は時間以内に作り終わることができた。

「いやーっ。料理って結構大変なのねー。」

そう言ってリズベツト、もとい篠崎里香は伸びをする。彼女の主な仕事は配膳だったが、走り回る体力は十分にあるようだ。

「それで、あとはキリト君だけね。」

全ての準備が終わり、今日の主役が来るのをまだかと待ちわびるアスナ。

「それにしてもリズも粋なことをするよなー。」

クラインとシリカ、もとい壺井遼太郎と綾野珪子はリズの計画にうんうんと頷いていた。少し待てば木製の扉が開いてキリトが、桐ヶ谷和人が入ってきた。

「おいおい。遅刻した覚えはないぞ」

「あなたには少し遅い時間を伝えたのよ。主役は最後に登場しないとね！」

里香はそう言って和人の腕を引っ張り、木箱の上に立たせる。そして皆の方を向き、全員に合図を出す。

「「「キリト、S A Oクリアおめでどう！「「「」

全員でクラッカーを鳴らし、和人は頭から紙テープを被る。驚いているのか、キリトは呆然としており、皆で笑う。

「「「かんぱーい！「「「」

こうしてS A Oクリアのオフ会が始まった。

「さてー！というわけで話したいことがあるので、集まってもらいました！」

里香は一つに机に2人を呼んだ。それは珪子と直葉だ。明日奈はすでに和人にべつとりなので、聞くまでもないし邪魔するのも少し気が引けたので誘わなかった。最近誕生日を迎えた皐月はアルコールが解禁されたので、大人と混じって飲んでいたので誘いにくかった。

「まあ所謂恋バナってやつよ。直葉ちゃんはどうなの？」

直葉はS A Oプレイヤーではないが、和人の付き添いで来た。オフ会が始まってから里香と珪子と気があい、こうして話している。直葉はA L Oでの和人のことを話すことにした。そこから3人は和人の

話になり盛り上がった。

「流石キリトさん。かつこいいですねえ」

「義理の妹も惚れるほどかー。」

「そういうリズさんはどうなんですか!?まだ気になる人のこと話してないじゃないですか!」

3人は和人との思い出をそれぞれ話したが、里香だけははっきりと和人が気になると公言していない。反応的に気になってるのは確かだが、他にもいそうな雰囲気だ。里香は公言を避けようとしたが、二人からのくすぐりにより直ぐに言うことになった。

「……………メイよ。」

里香はそう言っただけで里香の方を見る。その里香は遼太郎とアンドリユーと酒を飲んでおり、里香は遼太郎の肩を叩いていた。里香は酔っているのか顔が赤い。そんな同性の人の名前が出たことに里香と直葉は驚いた。

「メイが男だったら絶対に私は惚れる自信あるわよ…」

里香はそう言っただけで顔を伏せる。少しだけだが赤くなってる顔を見られるのが恥ずかしいのだろう。

「だってあの包容力って言うか、男前なところあるのよ!?あんた達は多分知らないでしょうけど本当にすごいわよ!」

そこから先、里香は瑠子と直葉にメイについていじり倒された。里香がもう一度里香の方を見れば、酒を手放しているのに里香の顔は赤く、突っ伏している里香を見ている。

「リンクスタート」

オフ会の翌日、今日はALOの大型アップデートの最終日だ。今までのアップデートで既に飛行制限が無くなったり、世界樹に街が出来たりしたが、そんなものは前準備と言わんばかりのアップデートだ。

ゴオオオオオオン、ゴオオオオオオン

鐘の音が鳴り響く。空を見上げれば待ち望んだ最後のアップデートが終わったことを告げる。

アイコンクラウド

それが空から降りてき、それぞれは想いを馳せる。

ある人は思い出に浸るように

ある人は始まりのゲームを見に

ある人は最後まで走ろうと誓い

ある人は………

ある人は約束を守られることを期待しながら

「約束、守ってくださいますよね？茅場さん」

GGO

新アカウント&BAR 《シキ》

「さあこれから決勝戦！勝つのは果たしてどちらのレーサーか!?」
ALO事件が無事に解決し、茅場晶彦が残した《ザ・シード》によってVRゲームは増え続けた。それはファンタジーゲームだけに限らず、音ゲー、レース、スポーツ等のジャンルを問わずに増やしていった。現在皐月がいるのはレース系のゲームであり、小さな大会の決勝戦に出ていた。

「第1レーン、フカ次郎選手!」

元気なアナウンスでまず1人目のプレイヤーが紹介される。フルフェイスのヘルメットをしているため、アバターの顔はよく見えないが、女性ということは分かる。

「第2レーン、シキ選手!」

続いて二人目の選手も紹介される。こちらも同様にフルフェイスのヘルメットをしている女性プレイヤーだ。

普通、レース勝負は多人数で行われるものだが、この大会は特殊であり、1対1のトーナメントだ。なので決勝も1対1であり、広いコースに車が2台だけ並んでいる。

「この二人の通算は共に2勝2敗。この勝負で白黒は着くのか!? さあ開始まであとわずか!ここまで勝ち残った二人は果たしてどんな勝負を繰り広げるのか!」

ランプに色がつき、カウントダウンが始まる。

「3、2、1、GO!」

—————

皐月はベッドの上で目を覚ます。頭に装着されたアミュスファイアを外し、携帯を手取る。すると美優から電話が掛かってき、すぐに取る。

『もしもし、私の勝ちだね皐月。』

「あー、あそこであんな綺麗に決められると思わなかったわ。負け

や負けや。」

負けたことは悔しいが、身内での勝負なので軽口を叩きながら臯月は返す。美優に今度こそはと挑んだ勝負だが、結局どのゲームでも、勝ち越すことは出来なかった。

先程の『シキ』というプレイヤーは臯月だ。ALO事件の直ぐにサブアカウントを作り、基本的にはそちらを使用している。『メイ』のアカウントも使用出来ないわけではないが、2つの理由で使用を控えることにした。1つは新ALOにSAOデータが使用できるようになり、修正で消えると思っていたGM権限が残ったことだ。これは隠せば何とかなるし、誰もメイがそのような権限を所持してるとも思わないので、まだマシだ。

2つ目はクラインだ。自然と目で追っていたことがエギルに指摘され、恥ずかしくなった。実際メイはクラインとALOでコンビを組んでいるし、そのコンビはモーターティマーとユーザーに匹敵するレベルで知れている。それにエギルとクラインとは定期的に呑むようになり、会う機会も増えている。呑む回数が増えるごとに目で追う時間も増えているらしく、他の人にバレたくなかったのだ。それにただ純粹にゲームを楽しみたくなり、色々なゲームを転々することにした。『それにしてもサブ垢でここまでくるとかすごいわ。負けそうだったもん。』

「頑張つて急いで育てたけどなー。やっぱりゲーム歴長いだけあるから地力の差やろな。」

先程のレースについて2人は思い思いに話す。話の熱もしばらくすれば落ち着き、次の話題に移る。

『次のゲームは決めてるの?』

「ちよつとやりたいゲームがあつてな。次はそつちをすることにするわ。」

『私もALOに戻ろうと思つてねー。ここで互いにソロプレイになつちやうわけか。』

「まあまた今度どつかでパーティー組もうや。んじや切るで。」

臯月は電話を切り、次のゲームを始める準備をした。臯月が気に

なったのはガンゲイルオンライン、略称GGOというゲームだ。それは銃がメインのゲームであり、なんとゲーム内の所持金を還元できるらしい。

皐月はGGOを始める日を決め、準備を始めた。

—————

「おお…。すごい世紀末感…。」

シキはGGOにログインした。やはり銃の世界だけあって、荒くれ者の住まう町、つとといった印象がある。横に鏡を見つけたため、自分のアバターを確認するために覗く。アバターはランダム生成なので、こうした方法で確認するしかない。

鏡に映ったシキは黒髪ショートカットの男性とも女性とも言いがたい中性的な顔だった。リアルよりも身長は低めになってはいるが、それでやつと平均と同じぐらいだろう。自分の姿を確認していると後ろから声を掛けられた。

「それ、F200系だろ。レアなの引いたねー。3万クレジット出すからアカウントごと売らない？」

「ごめんなさい。これコンバートなので売れないんです。」

「そうかー。まあ気が変わったら連絡してくれよなー。」

そう言つて男と別れ、シキは街を散策することにした。

街を動き回つて20分程でシキは途方に暮れた。初期金額じやまともな装備も買えないし、初期装備の今では外で強いモンスターの区別もつかないし、何よりPKゲームなので初心者狩りに会いそうだ。臨時でパーティーも組みたいがこんな初心者を入れてくれるパーティーもない。稼ぐ手段が基本的に無いのだ。

だがそうでもなかった。当てもなく10分程彷徨いて希望を見つけることができた。それはカジノだ。シキはカジノに入り、ルーレットに興味を示した。ルールを見れば普通のルーレットであったが、増えたクレジットについて注意書きがあった。

・このゲームで獲得したクレジットは還元することはできません。

還元はできないようだがゲーム内で使えるならば問題はない。シキはテーブルにつき、勝負をすることにした。

このルーレットは全てシステムであり、NPCのディーラーもいない。チップの置き方もタッチパネル式である。シキはBET時間になると迷わずにチップを500ずつ1st12と2nd12に賭けた。確率は3分の2で倍率は1.5。利益は低めだが勝算は高い。そしてルーレットは始まった。

結果はシキの勝ちだった。1000クレジットが1500クレジットになり、もう一度同じ賭け金を同じように賭ける。所持金の全てを賭けず、負けた場合のために少し残す作戦をとった。シキはこれを1週間、GGOでただルーレットだけを繰り返した。

カジノのルーレットに籠り続けて1週間。還元はできないが所持金は1億を超えた。元々GGOにはある方向で楽しみたいと思ってきたので、目的のために裏路地に入る。複雑な道を5分ほど歩けば、店を売ってくれるNPCの所に着く。そして7000万クレジットで店を買い、残りの3000万で最低限の必需品と自分の装備を整えた。

シキは装備を2種類用意した。1つはGAU-22でガトリング砲だ。シキのアカウントはメイと違いステ振りはSTR>VIT||DEXのパワーと耐久を上げたステータスだ。AGIは殆ど振っていない。

2つ目は鍛冶プレイヤーに大金を払って作ってもらったワイヤー銃とガス噴射装置だ。腰に寝かしたガスボンベがセットされているが、ステータスのお陰で重さは特に感じない。そしてメインはナイフであり、近接戦用装備だ。

装備を試すためシキは廃街に出た。今装備しているのはmob戦に合わせた光学銃とワイヤー銃セットだ。警戒しながら進むと遠くに鉄の体の巨大ワームを見つけた。

シキは廃墟に身を隠し、ワイヤー銃セットの準備をする。準備を整え、背後から光学銃を撃ち、ワームにダメージを与えたが気づかれなかった。

ワームはシキを中心にとぐるを巻き、締めつけようとする。とぐるを巻き終わるまでにシキはワイヤー銃をワームの頭に撃ち、返して固

定する。そして右のガス噴射を起動させ、とぐろの間の空間を無理矢理突っ切り、ワームの頭の下に出る。そして左右のガス噴射装置を下に向け噴射させ、ワイヤーを巻き取り自分の身をワームの頭に上に放り出す。そして頭の急所ポイントを狙い光学銃を乱射する。システムアシストが付いているお陰で幾分は狙いやすいが中々急所には当たらず、六発目でやっと当たった。

6発中ヒットは4、内一つは急所でワームの体力を削り切り、ポリゴン片になった。ワイヤー銃セットは見事シキの予想通り、足りないスピードをカバーしてくれた。

シキは2時間ほど廃墟で物資調達をし、飲み物アイテムとある程度の缶詰アイテムを確保し、自分の拠点に帰る。そして店の看板を作ることにした。最初は酒場をやるうと思っていたが、戦利品の殆どが飲み物系であり、料理が足りない。なのでBARを経営することにした。飲み物の味もその辺で売ってる物よりは美味しいと思うので、500クレジット、つまり一杯5円ほどなら多分売れるだろう。

シキは店の看板に《BARシキ》と書き、経営することを決めた。

ライムサワー&魔王

「暇やなあー。ゲームしてんのにやることないって矛盾してへん？」

シキは暇を持て余していた。新しく開いたこのプレイヤーBARは立地はあまり良くなく、またGGOはアクティブな人が多いので、こんなところにふらりと立ち寄る人も少ない。

とは言っても開店初日なので1人来ればいい方だろう。しかし来るかも分からないし、やることもないのでGGOに持ち込んだ料理本などを読んだり、栄養学を調べて目を通したりして時間を過ごす。

ギイ：バタン。

木製の2枚扉の開く音がする。銃といえば西部劇みたいなイメージから扉はこのようにした。それより扉が開いたということは人が来たということだ。ウインドウを閉じ、入り口に目を向ける。

「オオー。良いじゃない。隠れ家的名店って感じで気に入った。」

入ってきたのは長い黒髪をポニーテールにまとめ、顔には刺青のようなものをした女性プレイヤーだ。装備はツナギのようなものであり、今は戦闘態勢ってわけでもなさそうだ。

「いらっしやいませー。」

「しかもNPCじゃなくてプレイヤーの店！面白いじゃないのここ。」

目の前のプレイヤーがシキがプレイヤーだと分かった途端にテンションを上げた。GGOは本来こういった商売をするゲームではないので珍しいのだろう。ましてや武器屋でもなくBARだ。探して見つかるものではない。

「設備は整ってるのにガラガラじゃない。店主ちゃん、なんでこの場所にしようと思ったわけ？」

そのプレイヤーは店を見渡しながら質問をした。目についたのはカウンター3席、テーブル2席、ビリヤード台が2つ、2階は個室が2つだ。敷地が少し狭めであり、目立たないのでこの場所だと商売には不向きだろう。

「まあガツツリやるつもりも無くてですね。開いて週2にしようと思つてひつそりとやりたいんですよ。」

「知られざる名店を目指すつてわけね。いいじゃんそれ」
そう言いながらそのプレイヤーはカウンターに座る。

「さて、何になさいます？最初のお客さんなんでサービスしますよ。」

シキはこの店を始めて初の客が来たことを喜んでいた。SAOは初の客が顔見知りだったがそれでも来てくれたことは嬉しく、GGOでも似たような気持ちになった。やはり人との触れ合いとほいものだと再認識する。

「んじやライムで。つまみとかは無くて良いよー。」

「すぐできるんで少々お待ちをー。」

ライム原液を出し、それをレモンサワーと1：4で割る。

それらをよく混ぜ上から氷を入れるだけで完成だ。

「はいライムサワーです。」

「早いわねー。ありがとう」

そのプレイヤーはライムサワーを受けとり飲み始める。ゲームでのアルコールはただ飲んだ気分になるだけであり、現実にも何も影響はないが、味覚エンジンは確かに働いているので美味しいものは美味しい。

「いやあ美味い！テンション上がるわね！店主ちゃんも飲みなよ！」

「営業中なんですけど…。」

シキはその誘いを断った。裏路地でももしかしたらこの人のようにふらりと立ち寄る人がいるかも知れないからだ。その時に店主が客と飲んでいたら色々とおかしいだろう。

「だったら表の看板をcloseにすれば良いじゃない。色々話聞かせてよ。」

「多分それ断っても無理やりやるんじゃないですか？私も酒癖そこそこ悪いらしいし似たようなタイプじゃないですか。」

「へえ。店主ちゃん酒癖悪いんだあ。これは良いことを聞いた」

「あっ…」

シキはついうっかりと口を滑らせてしまった。大したことはないとは思うがリアルな情報が少し漏れたと思う。ただこれで成人してゐることはバレたのは間違いない。

「本当に気をつけなさいよ。私はしないけど情報を繋げてリアルにたどり着く人とかいるからね。」

「はい…。肝に命じます…。」

「よろしい。と言うわけで飲みなさい。」

そのプレイヤーはいつものまにか自分のライムサワーを半分違うコップに移しており、それをシキの前に出した。

「はあ…。少しだけですよ」

表の看板をcloseにしてからシキはそのプレイヤーの横に座り、飲むことにした。

「折角一緒に飲むんだから自己紹介ぐらいはしなないとね。私はピトフーイ。ピトで良いよ。」

「シキです。よろしくお願いします」

二人はグラスをぶつけ、乾杯した。

「だよねえ。分かるわそれ、だから私は顔にこんな刺青入れたのよ。これにビビって近寄る人減ったわよ。」

「私も入れてみようかなー。でもそれやるとこのアバターのイメー
ジぶち壊しになりそうでなんか嫌やけどなあ。」

15分後、シキは少し酔っていた。ゲームのアルコール飲料は味と
雰囲気だけのものではあったが、シキは雰囲気です酔うタイプの人間
だった。出来上がってからはもうお構い無しでピトフィーと普通に
話していた。

「さーて、盛り上がってきたことだしここいらでフィールドに出ま
しょうか!」

「ええやんそれ、私のGAU-22のデビュー戦手伝ってや。」

「よーし、そうと決まれば行くわよ」

こうしてピトフィーと完全に酔いに任せて行動しているシキはシ
キの得意フィールドの廃街に出ることにした。

—————

廃街に出た二人はまず目標を決めた。今回の目標は来るかどう
か分からないがプレイヤー狩りをする事にした。廃街は隠れると
こも多く、初心者向きのフィールドなので、実弾銃を初めて使うシキ
にはぴったりだろう。

二人は軽く作戦を立てた。それはピトフィーが狙撃でシキのいる
建物に誘導し、シキが物量で押し切る作戦だ。最初はピトフィーは止
めたが、シキが上手く嵌れば相手が10人だろうが勝てるかと断言した
ので飲むことにした。

ただピトフィーは作戦を飲んだが、初心者にこのゲームは甘く無い
ぞと言いたいところもあるので、作戦失敗して痛い目を見ても良いと
思いながら、狙撃ポイントに着く。

待ち伏せること40分後、遠眼鏡でピトフィーは6人編成の標的を

見つけた。ちなみにGGOではパーティのことをスコードロンと言う。

「来たわよシキちゃん。本当に任せるよ。」

「任せえやピト。私一人で全部やり切る。」

自信満々のシキの声にピトはテンションを上げる。任せるとしか言われてないのでGAU―22で撃つまで何をやるかはピトフリーも知らない。

スコードロンがピトフリーの射程に入り、まずピトはAK―47持ちのプレイヤーを撃った。その狙撃は見事命中し、そのプレイヤーの頭の上にはdeadの文字が出る。

「襲撃ー！」

ピトフリーの狙撃を注意し、残りの5人は建物に身を隠す。この廃街では民家はほとんど潰れており、まともに使えるのは5階建の廃ビル1つとホールが1つ、あとは僅かに崩れてない民家の3か所しかない。

5人はまずホールに隠れることにした。5人は既にピトフリーの存在に気づいているのでアシストのバレットラインは見えるので、次の狙撃までは大丈夫だろう。

「さーてシキちゃん。見せて貰おうじゃないの…」

ピトフリーは廃街外の崖から狙っているので高みの見物を決め込むことができる。もし狙われても対処は余裕だろう。

5人はまずホールを目指した。だが先頭のプレイヤーがホールに入ろうとした瞬間に異変が起こった。

まず起こったのはホールが爆発した。シキが予めプラズマグレネードでブルービートラップを入り口に作っており、それに引っかかったのだ。

恐らく今死んだのはスコードロンのリーダーなのだろう。残りの4人はとても慌てていた。

「この辺りはトラップがあるぞ！気をつけろ！」

「ブルービートラップかあ。普通すぎるでしょシキちゃん。」

中々手の込んだものではあるが初心者なら少し頭を捻れば考えつく。だがズブの素人であるシキがやったことにピトフーイはシキが手段を選ばない性であることは分かった。

ピトフーイにシキからメツセージが届き、次は民家を狙撃する。民家の柱に当たり家は潰れる。

狙撃手の射線からそれるために、4人のプレイヤー達はビルに逃げ込む。

「ここでやり過ぎすぞ…。さっきの民家みたいに潰されることはないだろ…。」

そして4人がビルに入り15分がたった。

「……狙撃がこないな…。」

「あの狙撃手は諦めたのか…。」

「よし…。確認するぞ…。」

スコードロンのプレイヤー達は立ち上がろうとした。だがしかし全員は体に上手く力が入らず、その場に倒れてしまった。

「なっ…。」

それぞれ自分のステータスを見れば、全員に毒状態が付与されていた。だが4人ともどこで毒を食らったか覚えがない。

そして上から足音が聞こえてきた。階段から降りてきたのはガスマスクをしたGAU-22を持ったプレイヤー、シキだ。そして動けないプレイヤーに狙いを定め、GAU-22を乱射する。毎分3300発の連射性は猛威を振るい、全てのプレイヤーのライフを削りきった。

そしてピトフーイの元に戻り、帰ることにした。

「にしても毒ガスなんてどこで仕入れたのよシキちゃん。」

「裏路地に独自開発の武器商人がいましたね。毒ガスグレネード持つてる人がいるんですよ。それをビル全部に撒いていたんですよ。下に行けばいくほど濃度を薄くなるように調整大変でしたよ。」

「やることが汚いねえ。」

ピトフーイは笑い飛ばし、ニヤついた。

テキーラ&《ランガン》

あの日以来シキはピトフーイと時々パーティを組むようになり、廃街へ出かけることが多くなった。そのおかげで最低限の射撃精度は身に付けることができ、GAU-22でしっかりと戦えるようになった。

だがピトフーイもリアルな事情がないわけでもないようだ。今日はどうやら忙しいようであり、シキの店にはいない。シキは一人でフィールドに出る気も特になく、今日は店で働くことにした。

しかしやはり立地は悪く、特に人が来る気配もない。暇を持て余したシキは自分の店の台で1人ビリヤードをしていた。だがそれもすぐに飽き、再びカウンターに戻り調理本などを読む。

ギイ：バタン。

「なんだ。誰もいないじゃねえか。」

「いらっしやいませー。」

軽口を叩きながら入ってきたのはキャリコム900Aを持った男性プレイヤーだ。頭には赤いタテガミのようなものがあり、サングラスをしてあり顔には傷が入っている。上半身はマントで装備はよく見えないが、下は黒と赤を主軸にした装備だった。

このプレイヤーはGGOでは有名プレイヤーである。何かしらのランキングにおいてはほぼ上位にその名前を残し、GGOでの還元システムでの金稼ぎ率もトップレベルだ。その名は《闇風》。シキのような底辺新人プレイヤーでも知ってるほどだ。

「有名プレイヤーさんに来て頂けるとは光栄です。」

「何、街を散策していたら見つけてな。今までに見たことがなかったから興味本位で入ったってだけだ。そう謙虚にならなくていい。」

そうやって闇風は店内を見て回る。最初にカウンターを眺め、次にビリヤード台を、最後にはシキの立っているカウンターの内側を見た。

「設備は良いのにな…。なんでこんな立地にしたんだ」

闇風の言葉がシキの胸に刺さる。確かに真面目にやるつもりも無

かったがここまでではつきり言われると来るものもある。だがそれより流石はトッププレイヤー。観察眼もすごい。

「まあ別にいいじゃないですか。それより何か飲みます？おつまみもありますよ」

シキは闇風に席に座るように促す。闇風もそれに応えて席に座り、シキの後ろにある酒類を置いてある棚を見る。

「テキーラをストレートで頼む。つまみはチーズとジャージャーキーで。」

「度数大丈夫ですか？」

「味と気分だけのものだし現実に影響はしないから大丈夫だろ。味覚エンジンが作動するだけだしな」

「それもそうですね。少々お待ちをー。」

廃街から調達したテキーラを開ける。ストレートなので特に何をするといいわけでもないのですのまま出す。チーズとジャージャーキーも缶詰なので開けるだけである。

やはりSAOと違い、GGOは料理スキルを使うための設備がなく、また食べ物もすぐに食べれる簡単なものになっているので料理できかないのは物足りないという気持ちもある。それでもある程度は食事を楽しめるので問題はないだろう。

「お待ちせしましたー。こちらお酒とおつまみです。」

「来た来た。美味そうだなあ」

そう言って闇風はテキーラを一口飲む。テキーラはアルコール濃度40%を越え、飲み方を間違えれば危険であるがここは仮想世界。多少キツイところはあるがアルコールが体に染み渡るような感覚が確かに闇風に走る。そしてストレート特有の仄かな甘味を楽しむ。

「っー美味い！」

テキーラを飲んだ闇風は思わず叫ぶ。そしていつのまにか横に置かれていたチーズとジャージャーキーが目に入り、それを食べる。

「この組み合わせがいいんだよ！」

「すごく美味しそうに食べますね。見ててこっちまで楽しくなりそうですよ。」

実際ここまで自分が作ったものを美味しそうに食べてもらえる

料理人冥利に尽きるといふものだ。その上VR世界特有のオーバーな表現も相まって、シキにも食欲が湧いてくる。だが営業中なのでそういうわけにもいかない。

「そんなにテキーラ好きなんですか？」

ふと目の前で美味しそうに飲む闇風に聞く。

「俺はキツイものが好きでな。でも酒はそこそこしか飲めないから現実に影響の少ないここなら幾らでも楽しめる。」

ゲーム世界と現実世界では確かに違うところがある。それはできないことができることだ。レースゲームなら道路で出せないスピード感が楽しめる。ALOなら空が飛べて剣を持てる。GGOなら銃が撃てる。このように現実でできないことを楽しめることだ。飲食もその区分内にあり、現実だと好きだけど食べられないものを食べたり飲んだりすることができる。

「店主さんも《できないこと》を楽しみにここに来たんだろ？」

「ほとんど商売目的でやってますけどね。でもフィールドに出て戦うのも私はそこそこ好きですよ。」

「だな。俺も好きに走って好きに銃を放つためにこの世界にいるかな。こういった飲食だって今見つけた楽しみ方の一つだ。一部の層はハマりそうだな」

2人はそれからVRゲームの魅力について語り合う。あれはどうだ。これはどうだと話し合い、やはりGGOにいるからには話はいっしか銃の話になる。それから闇風は初心者シキにAGI型の魅力を語ったが、コンバートのシキはもうステータスをイジりにくいので肩を落とした。

「そういやAGI型万能説が今話題ですけど闇風さんもその話題が出てからステータス調整したんですか？」

ふと思つたことを口に出す。ゼクシードというプレイヤーがAGI型万能説を推し、今では多くのプレイヤーがそのステータスでGGOをしている。相手の攻撃を避け自分の攻撃を素早く多く叩き込む型は確かに強い。

「いや、俺は初めからこのやり方だ。これが俺にはドンピシャだっ

たんだよ。それにあの野郎の流行りに乗ったと思われるのも何か嫌だな。」

「あの人もランキングトップですもんね。やっぱゼクシードさんには負けたくないんですか？」

「ああ。次の第2回B o Bで俺が勝つ。」

B o Bとは簡単に言うとうとGGOでの大会の一つであり、予選で勝ち残った30人のプレイヤーがバトルロイヤルするものだ。シキが口グインする前に第1回大会は終了しており、近々第2回大会が開催される。

闇風の声は本気であり、ゼクシードというプレイヤーに勝つつもりだ。シキはゼクシードを名前しか知らず、闇風とは今こうして話したので、思いとしては闇風に勝ってほしい気持ちは少しある。それにそういうわけでもないが下克上というものに少し憧れるものがある。

テキーラとおつまみがいつのまにか空になっており、闇風は席を立つ。そして店を出てフィールドのほうに向かう。

その日闇風が森フィールドで一人で3スコードロンに勝ったという噂が立った

ビール&環境操作者

最近GGOのプレイヤー達の動きは活発になっている。何故なら翌日には第2回B0Bの本線があるからだ。シキがGGOにログインし、グロッケン内を歩いているといつもより総督府にプレイヤーの出入りが多く、またフィールドに出て明日への最終調整をこれからするであろうプレイヤーがちらほら見れる。酒場も満席の店が多かった。

他店がここまで満席なら場所を求めて、もしかしたら自分の店にも多くのプレイヤーが来るかも知れない。そういった期待を込めて自分の店に向かい、急いで開店させる。

だがやはり立地の悪さは覆えることはなく、そもそも店が発見されなためいつものように暇になる。やはり闇風やピトフーイのような放浪癖がないところに立ち寄る人が少ないのだと思い知らされる。

「今から広告でも作ったほうがええんかな…」

ここまで暇だと虚しくなる。実際店を開けた日にピトフーイを除き1人も来なかった日だってある。そんな日は後々フィールドに出てモンスター相手に暴れてはいるが、シキがGGOを始めた目的の商売ができてないので不満も残る。

SAOの時はアルゴが新聞に載せてくれたお陰で大丈夫だったが、今は自分から動くしかない。善は急げと言うのでシキはこれから総督府等にどう広告を設置して貰えるか考え始める。

ギイ：バタン

「おや、人が少ない所を探していたらついにいい所を見つけたよ。これなら人の目を気にする必要もない。」

中に入って来たのは濃いめの青色の髪であり、サングラスをかけたプレイヤーだ。装備は白をメインにし、青緑色のラインが入っている。

このプレイヤーもまた先日の闇風と同様の有名プレイヤーだ。還元率トップ、大会でも闇風といつも上位を争っている。その名はゼクシード。闇風が倒すと言っていたプレイヤーだ。今GGO内での環

境であるAGI型万能説を推したのも彼である。

「いらっしやいませー。」

「しかもプレイヤーが運営しているとはますます面白い。」

やはりGGOで飲食店を営むのは珍しいのだろう。反応が今までの客と同じだ。

「お席にどうぞ。何になされますか？」

ゼクシードは席に着いた途端に注文をする。どうやら何を飲むかは初めから決まっていたようだ。

「ビールと枝豆を頼むよ。追加もジャンジャン頼むつもりだからよろしく」

「少々お待ちをー。」

シキは瓶ビールを開け、冷えたグラスを出す。枝豆はお湯でさつと湯がいて出来上がりだ。

「お待たせしました。」

「やっぱりこれだよー」

そう言つてゼクシードは目の前にあるビールを飲み始め、枝豆をつまみにして食べる。彼はどうやらつまみを食べるペースが飲むペースより遥かに上らしく、枝豆はすぐに無くなった。

「鳥皮を頼むよ。」

「随分と景気が良いんですね。」

「そりゃそうさ。明日のBOBで僕の勝ちはまだ決まっているようなものだからね。前祝いつてところさ」

以前も説明した通り、今のGGOの環境を作ったのはゼクシードだ。ならばゼクシード自身もそのステータス振りであり、闇風よりも熟練されているという自信が彼にはあるのだろう。

「やっぱりAGI型の対処方も知ってるんですね。定石を読んでその隙を突く感じですか？」

シキは自分の予想が合っているかをゼクシードに問う。シキが今までに見た他プレイヤーの戦い方はピトフイーのものしか知らず、ピトフイーもシキと同様にSTRメインだ。GGOでのAGI型の戦い方は知らないので気になるところもある。

「何、A G I型万能なんてのは只のまやかしさ。明日の大会では多くのA G I型が来るだろうから、そこを圧倒的な火力と耐久力で削るだけのことさ。」

ゼクシードの口から出たのは自分で作った環境を壊すものだった。確かにA G I型は強いと、A G I型のメイを使っていたシキも思う。だがシキは自分より性能の高い相手の攻撃を回避しきるのは難しいと判断し、ゴリ押し型のシキに変えた。現在はA G Iは無いが、その分はガス噴射とワイヤーでカバーはしている。

どうやらそのこともゼクシードも思っではいたようだ。だからこそ慣れで使いこなせる性能より、ゴリ押しを選んだのだろう。シキにはそう思えた。

「こんなことを漏らしてしまえば睨まれてしまうからね。何ヶ月もかけてA G I型にした人にはご愁傷様と言いたいぐらいだよ」

ゼクシードは自分の作戦に繋がる糸口さえ与えずに明日の大会に臨むつもりだ。そして今の発言からシキはゼクシードの人柄を予測できた。大方目立ちたがりで煽り体質なのだろう。まあ自分の策が綺麗にハマればテンションも上がる。そういった人なのだろう。

「さて、僕は明日に向けてそろそろ帰るとするよ。店主さんは明日の大会には参加するのかい？」

「いや、私はこういった商売目的で遊ぶのがメインなので明日は参加しません。」

「そうか。なら明日は応援よろしく。」

そう言っつてゼクシードは店を出た。

そして翌日、第2回B o Bが開催された。シキは参加せずに自分の店に取り付けたモニターで観戦することにした。

大会の進み方は順調だった。ゼクシードの予想通り、大半のプレイヤーがA G I型らしく、目まぐるしく撃ち合いを始める。だが何人かは自分の型を貫き通したのか、A G I型でもない者もいた。

今現在生き残っているプレイヤーで尚且つ目立つのはA G I型でない《薄塩たらこ》《X e x e e D》《S i n o n》の3名だ。そして

S i n o n というプレイヤーだけは珍しく狙撃銃を持っていた。

もししばらく見ていると状況が動き、S i n o n が脱落した。順位は17位だ。シキがS i n o n と戦うとなれば、有利なのは恐らくガス噴射装置で肉薄するしかないだろう。

そう言ったことを思いつつ、大会を見ていると残りは2人まで減っていた。残ったのはゼクシードと闇風。闇風が攻撃を続け、ゼクシードは耐久をする。そして闇風はゼクシードの攻撃を避けようとするが、たった1発攻撃が闇風に入っただけでそこからはゼクシードのペースになり、第2回B o B はゼクシードの優勝で終わった。

飲み会&思い出話

皐月は今台東区のアンドリユーの店である《ダイシー・カフェ》に向かつて歩いている。今日はアンドリユーと遼太郎との定期的に行われている飲み会があるからだ。

皐月はいつも通りに予定より早めの時間にダイシー・カフェに到着する。この3人の中で皐月が一番料理ができるので、つまみ担当になっっている。なので皐月の持ち込み品は食材が多い。

「こんにちはエギルさん。お邪魔します」

「やっぱ早いなメイは。いつも思うんだが足に無理はさせてないだろうな？」

「そしたら膝ガックガクでまともにも立てへんと思いますけどね」

二人はいつものようにジョークの言い合いを始める。だがアンドリユーはその裏で皐月が心配だった。SAOで商売をしていた彼女は時間に余裕を持って行動するのは分かっている。この定期飲み会の初日に皐月は時間に遅れかけ、自分で歩くペースを上げていたのか飲む前から足に力が入っていなかったことがあった。

だが何回もこの集まりを経験しているので皐月も慣れたのだろう。アンドリユーとしてはもう心配をすることもない。

「エギルさん、厨房借りていいですか？」

「いつものことだからもう確認はいらないんだがな」

「勝手に借りれないんで」

アンドリユーからの許可も出たので、皐月は厨房に入りつまみを作る。手の込んだものは作らず、ゆでタマゴやチャーシューなどのサツと作れるものにした。

皐月がつまみの準備を終えると、裏口側の呼び鈴が鳴る。今日もこの店は閉めているので、くる予定があるとすれば彼だけだ。アンドリユーもその事が分かっているようで、ドアを開ける

「悪いなエギル、ちよつと遅れたみたいだ。メイさんもすみません。」

入ってきたのは遼太郎だ。手にはダイシー・カフェには置いてない

お酒の瓶が3つある。3人はいつもこのように役割分担をして飲み会を行っている。

「じゃあ全員揃ったことだし始めるとするか、二人は何にするんだ？」

「私はロゼで」

「俺はビール」

「肉食う気満々じゃねーか。まあメイが既にチャーシュー用意してるからつまみに困りそうなお酒はないとは思うけどな」

アンドリユーはそう言いながらボトルと瓶を開けていく。ちなみにアンドリユーが飲むのはウォッカだ。皐月はつまみを取り分けてそれぞれの前に置いていく。

「乾杯!!」

こうして3人の飲み会が始まった。

「まあこんなところだ。」

「あれやっぱエギルさんやつてんな。ラフコフ消えて活発な奴増えると思ってたけどそんな情報姐さんからも聞いたことなかったし。」

「攻略に参加してないときはそんなことしてたんだなエギル。俺はとにかく攻略しか考えてなかったからよ…。」

飲み始めてから1時間ほど経てばいつものように3人は思い出話に花を咲かせる。その内容はそれぞれがSAOで行なってきたことだ。それぞれが互いを知る前の話が多い。

「そーいやクラインはどこまで話したっけな」

「確かクラインさんは67層のボス戦まで話したはずですよ」

「んじゃ次のめぼしい話は毒蜘蛛あたりだな」

「それ私が依頼したやつじゃないですか」

「その話、俺は聞いたことないぞ」

だがこのように誰か一人が知らない話もある。遼太郎は商売人特有の話は知らないし、皐月はボス戦の話は知らない。アンドリユーだけが知らない話は少なく、興味が唆られるものも多い。

遼太郎がその時のことを話し出す。皐月も当事者なので遼太郎が

どう話すのかが気になる。それに、あの時のメイがどれほどの印象を彼に与えているのかも知りたい。メイにとつてクラインとの出会いは今となつては素っ気ないと思ひ、あの時ではこんな気持ちを持つとも思わなかつたので改善されていてほしいものだ。

「えつとだな…」

遼太郎はあの時の記憶をなぞるように話し始める。メイからの依頼、移動、そして戦闘の話。

「毒蜘蛛の攻撃に慣れ始めて俺たちは総攻撃を仕掛けたんだよ。俺は羅刹、メイさんはシャドウ・ステツチだったな。」

「2ゲージ目はすごく楽でしたよね。初見であんなに一方的に殴れる風林火山は本当に凄かったですよ。」

「やつぱお前達中々に良いコンビネーションしてるよな。そりや今のALLOでもそこそこ名が通るだけのことはあるよな」

3人とも酒が入っているため話す口が止まることはない。一つの話題からいつのまにか違う話題になることもある程度だ。そしてしばらくALLOの話になり、脱線してること気づく

「3ゲージ目やばかったですよね。糸は吐くわ状態異常特攻はしてくるわで」

「半分削つてから急にキレが良くなったからな。俺でも瀕死ライン見えたから本当にまずかつたぜ。ありやキリの字やアスナさんも連れて行った方が良かったな」

こうやって思い返すと反省点も見えてくる。やはり1パーティで行つたのは間違いだつたと思う。

「んで最後に私が特攻くらいかけたところでクラインさんが割り込んで散華使つたんですね」

「SAOでギリギリの戦いとかするもんじゃねえぞお前ら」

「それは本当に思つてます」

ちなみに臯月はまだスカルリーパー戦の詳細を知らないの言い返せることができない。話が終わった所で遼太郎は席を立ちトイレに行く。遼太郎がいなくなったことを確認してからアンドリユーは話しかける

「お前ってなんだかんだでキリトに似てるよな」

「何でそう思うんですか？あんなに猪突猛進じゃありませんよ」

「いや、あいつがアスナに惚れたのと似てるなと」

「あー、分からんこともないですねえ」

真面目な顔でそんな話をする。その間も遼太郎はまだ出てこない。となると長い方だろう。

「お前はこれからどうしたいんだ」

アンドリユーが唐突に聞く。先程の会話からして遼太郎のことだろう。

「…今みたいにこうやって酒と一緒に飲めれば満足ですよ。私が勝手に憧れてるだけでもありますし」

「お前がいいなら俺は特に言わないがな」

「こりゃ酔ってますね。時間もあれなんでそろそろ帰りましょうかね」

現在の時刻は22時。電車の時間などもあるので皐月は帰ることにした。ちなみに皐月は酔うのが早いが酔い潰れはしないタイプだ。帰るのにも問題はない。遼太郎が出てきたところで帰ることを告げた。

「ご馳走さまでした。また今度ゲームで」

「気をつけて帰ってくださいねメイさん」

「じゃあなメイ」

皐月はダイシー・カフェを出て、まっすぐ駅に向かった。

「なあクライン」

「なんだよエギル」

皐月が帰った後、アンドリユーが話かける。

「お前はこのままで良いと思ってるのか？」

その言葉と共に、酒で赤くなっていた遼太郎の顔が更に赤くなる。

「お前は どう思ってるんだ？」

ここまですれば間違いなく彼女の話だろう。既婚者のエギルにはやはりその辺りのことには鋭いところがある。

「本当に良い人だよなあ、彼女。料理もできて、明るくて、時々からかいはするけど憎めなくて……。……。本当に良い人だよなあ……。」

遼太郎はカウンターに頭を伏せる。彼は酒が入るとよくこの行動をとる。その様子を見てアンドリユーはため息を吐く。

（お互いに自己評価低いんだよ。でも当人達がこの様子じゃ手伝えることもないからな。）

互いに気になってはいるが、お互いが遠慮してるので未だにこうして燻っているのだ。あと一つ何かがあれば変わるとは思うが、その

キツカケを作ることすらできない。

「クライン、まだ飲むか？」

「サンキュー、エギル。」

こうして男2人でもう一度飲み始めた。2人の行く末が良いものであれとアンドリユーは願った。

ソフトドリンク&秘密者

第2回BOBが終わったため、GGO内では大会前ほどの活気さは無くなった。それでも完全にその熱は失われることはなく、近いうちに決定した第3回大会に向けて張り切るプレイヤーもいる。それは生産系のプレイヤーも例外ではない。今より良いものを他プレイヤーに売るためにダンジョンに潜る者もいる。

だがそういったことに関係ないプレイヤーもいる。そろそろ認知されると思っている、今までに来た人はおそらくフィールドに出る時間の方が長い、知り合いにこの店を伝える機会がないのだろう。またわざわざ伝える気がないのかもしれない。なので相変わらずシキは暇である。今日もカウンターの内側で愛用のGAU-22の手入れをしている。

「やっぱ場所選択ミスったなあ…」

シキはポツリと呟く。SAOはとにかく人が集まる街で店を構えていたが、ここでは人が集まる場所と集まらない場所がある。裏路地1本ぐらいならまだ人は来るが、ここは裏路地が5本入ったような場所だ。でもシキ本人はここをかなり気に入っているので、手放すのもつたいない。

ギイ：ボタン

扉の開いた音がする。扉の方に目を向けてみるとそこには2人のプレイヤーがいた。1人は迷彩服を着ており、その上から胸当てをしている男性アバターとしては長い銀髪が特徴的だ。

もう1人のプレイヤーは黒く、すこしボロボロのマントをしていた。マントもその下の装備も黒いので装備の詳細は分からない。そして顔には鉄で出来たようなマスクをしており、少々不気味である。そして、ボロマントの方のプレイヤーの眼が赤く光ったように見えた。

シキとしては少し気になる部分があったが、折角来てくれた客なので迎える。

「いらっしゃいませー」

「あ、すみません。ここって個室とかありますか？」

銀髪の方の人が確認をする。個室を使うということはあまり人に聞かれたくないような話なのだろう。となると予想されるのは現実に関係があるような相談ということだ。

「2階になります。注文は送信式になっていきますのでご了承ください」

「分かりました」

そう言つて2人のプレイヤーは上に上がっていく。だがこの間に話していたのは銀髪の方だけであり、ボロマントの方は口を開いていない。

2人が上に上がつてしばらくすれば、横から飲み物を書いた紙が印刷されてくる。注文されたのはオレンジとサイダーなので、瓶を開けてすぐに横のリフトに入れる。そしてそのリフトを上上げるだけだ。

ちなみにつまみ系の注文はなかった。

だがそれよりも先程のボロマントのプレイヤーには少し思い当たるところがある。シキは、いやメイは彼とよく似た格好をした人物を知っている。

体を覆いつくすような装備

道具を使つたとはいえ赤い眼

だがこのGGOでは当たり前前の装備だ。ピトフーイにしる戦闘時にはプロテクターを装着するので、そこから目の色をいじればそれだけで同じようになる。なのでただの思い過ごしだろう。

結構重要な話なのだろうか。1時間以上は経つたが、あの2人はまだ部屋から出てこない。だが一杯で粘るのも悪いと思つているのか追加の注文はあった。この店は暇を極めているのでそんな気を使わなくていいと思うが、それは本人の気持ち次第だろう。

客は来ているのに今までと違い、シキと面と向かつて話すタイプの人達ではなかったので、余計に暇だ。なんてことを思っていると2階

からドアが開く音が聞こえた。

「あ、っ(馳走さまでした)」

「……………」

部屋から出てきた銀髪のプレイヤーはそう言う。だがボロマントの方は相変わらず無言だ。

だが銀髪の方はこれから出る客としての反応ではあったが、ボロマントの方はやたらシキの方を見る。それは目がしっかりと合う程だ。彼がなぜシキを見るのかは知る由もない。

2秒ぐらい目を合わせてからボロマントは銀髪の後ろをついていく。おそらくGGGでこんな商売をしていることがおかしので、珍獣を見るような感じだと思うことにした

—————

「やつほー。シキちゃんいるー?」

2人の客が出てしばらくすればピトフィーが入ってきた。最近ピトフィーはよく出入りしているシキにとっては貴重な常連だ。

「何のようやピト。」

ピトフィーはいつもシキに何かしらの誘いを持ちかける。それは日によって変わるがフィールドに出ようという誘いが多い。今回もきつとそうだろう。

「シキちゃん。BOB一緒に出ようよ」

今回の誘いはGGG最大レベルの大会のお誘いだった。第2回の時も代わりに出てと言われたので少し耐性はついたがやはり驚く。

「一緒に…ってことはピトも出るんか」

「今回は予定が空いててね。出ることにしたの。それで、出ない?」
第2回大会は見えていたが、あれはとても面白そうに思う。興味がないという訳ではない。それに今回はピトフィーも出るので1人出るよりは気持ち的に楽である。

「OK。私も出る」

シキはこの誘いを了承した。ゼクシードや闇風、ピトフィーが出るので優勝は厳しいと思うが、やはりゲームをしに来ているので楽しみ

たい。

「やつとやる気になってくれたね。」

カウンターの挟んで2人のプレイヤーは笑う。それはこれから戦うことを楽しみにしている目だ。

—————

ピトフリーと約束をしてから数日が経ち、シキは現在は店の中で1人でモニターを映している。チャンネルの内容はMMOトウデイというものだ。そこには司会とゼクシードと闇風がいる。

『AGI型万能論なんて幻想なんですよ。確かにAGIは重要でしたが、これが吐出していけば強者たりえたのは過去の話です。8ヶ月かけてガン上げた廃プレイヤーの皆様にはご愁傷様です』

第2回大会前日にゼクシードがシキの店で言っていたことを言う。よほどツボにはまっているのだろう。話が進んでもゼクシードは過激な発言を止めることなく、それは煽りにも思える。

『そりゃ優勝を目指しますよ』

そして次の大会に出る意思表示と優勝宣言をした。闇風がステータスだけで勝てるほど甘くないと言うが、ゼクシードはそれを否定する。そして立ち上がった。

『つまりですね……。ガッ……』

ゼクシードが急に苦しみだすような反応をする。喉に手を当てて上を見上げ、回線が切れた。

『すぐ復帰すると思うのでチャンネルはそのままでお待ち下さいね』

だがゼクシードは復帰することはなく、死亡したとの噂が流れた

予選&死銃

最近GGO内である噂が出ている。ゲームの中から現実の人を殺すプレイヤーがいるとのことだ。そのプレイヤーの通り名は《死銃》。嘘か本当か分からないが、多くのプレイヤーはこの話は信じてないようだ。

だがそんなことは他所GGOは全体的に盛り上がってる。それは多くのプレイヤーが待ちに待った第3回B0Bの予選が今日だからだ。それはシキも例外ではなく、その上参加するのでテンションは上がっている。今シキは総督府にいる。

「おいシキちゃん。エントリーした？」

「ちよつと前に済ましたとこや。ギリギリで逃げようかどうか結構迷ったけどな」

「勿体ない！楽しまなきゃ損じゃないの」

シキとしては少し冗談のつもりだったがピトフーイはそれを本気で受け取ったかのような反応をする。これは本番前のリラックスのようなものだ。

予選に向けて今日は2人の装備も違う。ピトフーイは一緒にフィールドに出るたびに武器が変わるため、今日も何を使うかは分からない。それに比べシキはメインはピトフーイにバレてはいるが、他には誰一人としてバレていない。今まで店で籠るぐらいとモンスタ―狩りしかしなかったのでこの分のアドバンテージは活かしたい。

なのでシキは現在ブカブカのローブを着込んでいる。ローブの下には近接戦闘用の鈍包丁が一つ、グレネード類6、ガス噴射装置が装備されている。GAU-22は戦闘前ギリギリになってからの準備期間で出すつもりだ。

ガス噴射装置の角度調整などをしてしていると時間が迫ってくる。受付終了時間直前ぐらいに外からバギーの音が聞こえた。恐らく飛び入り参加の類いだろう。そしてすぐに受付は終了し、予選ブロックを確認しに行くことにした。

「シキちゃんどこのブロック？私はFの9」

「Cの49やわ。こりゃ本戦じゃないと闘われへんな。」

シキとピトフーイは互いのブロックを確認する。予選ではお互いに当たらないのでお互いが本戦に出場するしかない。ちなみにCブロックもFブロックも64人いるので5回勝てば決勝に進出できる。

「それじゃお互い頑張りましょ。シキちゃんもね。」

「まあ装備見せてた連中と当たること祈つとくわ。」

予選ブロックが発表される前にすでに完全装備をしている人がいたため、その人たちと当たればある程度は対策が取れる。何人かの装備は憶えたので頭にマニュアルを作り、当たることをシキは祈る。シキも頭以外はフル装備であるが、上から隠しているので動き方次第でロビーではバレないはずだ。

初戦開始まで残り僅かとなり、シキは頭の装備をつけるために一応更衣室に入る。更衣室に入ってからプロテクターを取り出して装着するだけだ。その作業はすぐに終わり、更衣室を出ようとしたところで二人の女性プレイヤーとすれ違う。片方は水色の短めの髪で、もう片方は黒髪の長い髪だった。シキは数少ないGGO女性プレイヤーがピトフーイ以外にもいることを再認識し、嬉しくなった。

『それでは予選トーナメントを開催いたします』

「よっしやああああ！」

「うらあああ！」

放送と共にロビーの熱気が上がる。シキも興奮し、ローブを握る。そして転送が始まり予選が開催された。

—————

飛ばされたフィールドは少し荒れた平原だった。小さな岩などもチラホラあるが、身を隠すには足りないだろう。実質真っ向からの撃ち合いになると予想する。

遮蔽物がないので600m離れていても相手の姿はよく見える。武器も恐らくアサルトライフルの類だろう。だとすれば時代に乘ったAGI型と予想する。確認した途端にシキはGAU-22を撃つ。射程の長いこちらが有利なのだから当然だ。

相手は右脇腹に少し攻撃を受けたものの走ることを止めない。ま

だ生きてるので望みは捨てないのだろう。シキも相手に照準を合わせようとするが、銃が重いので取り回しも辛い。攻撃が当たらず相手に距離を詰められ続けた。

そしてついに二人のプレイヤーの距離はゼロになり、シキが一方的に攻撃をくらい続ける。その時に相手の武器を《ヘーネルStG44》だと確認できた。だがシキはガッチガチに固めているのでそのまま大ダメージは入らない。

だが攻撃が当たらないと勝てないのも事実。そこでシキは撃つのをやめ、両手でGAU-22を握りしめて腰を捻る。武器を持ち上げ、相手の頭めがけて下に振り落とす。元からSTRが高いため、振り上げるのは苦勞せず、重いので落とすスピードも速い。銃は見事相手の頭にあたり、倒れたところを蜂の巣にした。

1回戦はシキが勝ち、待機エリアに転送された。

2回戦はフィールド全体が3回建の一つの建物であり、2階すべてに毒ガスをばら撒き動けなくなったところを蜂の巣にした。

3回戦は初戦同様、相手がAGI型だったので近づかれた。初戦を見られていたのだろう。シキの銃そのものを警戒していたが、シキはそれが分かったので武器を投げ捨て、ゼロ距離のところを鉋包丁で力任せに首を斬り落とした。

4回戦は密林だったのでブービートラップを仕掛けたところ、相手が見事に引っかかり足を失ったところをGAU-22で撃った。

5回戦は住宅街であり、相手がコースの端の建物で待ち伏せを行った。だがシキはガス噴射装置で、建物を上から回り込み、待ち伏せを後ろから鉋包丁で斬った。

—————

決勝まで勝ち進んだシキは、次の相手が長引いているのかロビーで待機している。ここは勝ち進んだ者しか入れないので、周りを見れば人数はそこそこ減っている。もうすぐ予選も終わるのだろう。ほかのブロックもモニター中継されているので、次の転送が始まるまで観ることにした。Fブロックを見てみたが既にピトフーイの名前は無く、2回戦でSinonというプレイヤーに負けていることに驚い

た。

だからこそ後ろからの足音が聞こえなかった。

「お前、に、聞きたい、ことが、ある。」

シキはいきなり話しかけられたので後ろを振り返る。そこには先日店に来たボロマントのプレイヤーがいた。ここにいるということでは大会で勝っているということだ。それと同時に例の噂を思い出す。《死銃》というプレイヤーの姿はこのボロマントと特徴が全て一致する。シキの店に来た時、犯行時、そして今。姿を真似た人の可能性もあるが下手には聞けない。

「この前は店に来てくださってありがとうございます。それでなんでしよう?」

以前来てくれたことを感謝し、本題に入るように促す。

「お前が、本物なら、分かるはず、だ。」

そう言ってボロマントはシキの横に立つ。そして周りが聞けば分からない質問をした。

「おでん、なら?」

「餅巾」

二人の答えが一致する。そして二人は互いの正体を見抜いた。

「やはり、メイ、か。」

「久しぶりやんザザ」

ザザ、それはSAOに存在した最悪のギルド《ラフィン・コフィン》の幹部メンバーである。SAOでPKするという殺人集団だが、メイはそれでも彼等との利害が一致したため、情報を漏らさない流さないの条件で彼等に料理を振る舞い、命を狙われることもなかった。

「てか、よう私がメイって分かったな。アバターも違うし名前も変えてるのに」

なぜこんなすぐに検討を付けられたのかがシキは分からなかった。客観的に見て何か特徴があるのだろうかと思う。

「リーダー、譲りの、鉈包丁スキル。ジョニーから、盗んだ、毒スキル。あれほど、陰湿に、使えるのは、お前だけだ。」

「そりゃどうも」

幾らかボロボロに言われたので少し皮肉をこめる。だが決勝がいつ始まるのかも分からないので聞きたいことは聞いておきたい。

「今噂の事件ってアンタなん？」

今GGOでの噂は死銃だけだ。つまりこれはザザに直接真相を確かめてる。

「お前なら、言わなくても、分かるはずだ」

この答えなら少し遠回りの言い方ではあるが、ザザがこの事件に関わっているのは間違いないだろう。シキはこの答えを聞いて5秒ほど唸り、考える。そしてすぐに思いついた。

「なあザザ。本戦になったらお互いに関わるのはノータッチにせえへんか？それやとアンタはやりたいことやれるし、私も私なりに楽しみたいし。」

これはつまりSAOの約束ごとを継続しようということである。

だがザザにはこれを受けるメリットとしてはシキから情報が漏れないというだけであり、料理提供はない。S A Oの時より利益が低い。そもそも殺して奪う彼等のスタンスには合わない。

「いいだろう。お前は、信用、できる。幹部と、お前しか、知らない、諜報員が、捕まって、ないしな。」

だがザザはこの交渉をアツサリと飲んだ。どうやらS A Oの後でも約束を守り続けたメイへの信頼が彼にはあるようだ。

「じゃあ決まりやな」

シキは立ち上がり歩き出す。すれ違う直前に二人は手を叩きあい、明日の本戦を楽しむにする。

この後シキは決勝でペイルライダーというプレイヤーに大きな橋の上で戦った。お互い接戦ではあったが、ペイルライダーが縦への移動を繰り返し、射角の上がらないG A U—22では太刀打ちできなかった。8割以上の体力は削ったが、シキはクリティカルヒットを受け、予選Cブロック準優勝で本戦へ出ることになった。

大会直前&疑い

BOB本戦出場を決めたシキは、時間より3時間ほど余裕を持ってログインをする。総督府に向かう前にまず自分の店へ行き、1人で大会に向けて集中力を上げるつもりだ。

街の中で裏路地にドンドン入っていく。やはり立地が悪いとは思いなながらも今となっては数少ない奇妙な縁を結んだこの場所は嫌いにはなれない。

店へ続く最後の曲がり角を曲がる。そこにはシキがよく見知った顔がいた。

「やつと来た。それじゃ始めるわよ」

そこにいたのはピトフリーだ。片手には瓶などを何本か持っており、明らかにこれから呑むという雰囲気しかない。だがピトフリーから事前にこのような話を聞いてはいない。

「ヤケ酒でもするんか？」

「そりやそうでしょ。シキちゃんだけ本戦出て私出れなかったんだから付き合ってもらおうわよ。でも1時間半で切り上げるから安心してね」

シキは店を開けさせられピトと中に入る。そしてピトフリーは持ち込んだ飲み物を開けていき、これからのBOBのことをつまみにして話す。

「そういやシキちゃんはちゃんと調べたの？エントリー者の名前は全員出てるけど」

「見たで。何人か知ってる名前もチラホラ見るし、この店に来た人すらいるからな。」

BOBはVRゲームの中で1、2を争う有名所であり、新聞にすら載るほどだ。それを見たシキとしては気になることもある。

『K i r i t o』かあ…。多分あいつで間違い無いと思うけど…)

Fブロックの名前にK i r i t oという名前があった。シキは予選の間でFブロックの試合を何試合か見ており、その中に光剣を使う

人がいたのを見た。最初は剣で戦うのを見てネタ枠と思ったが、剣の振り方に見覚えがあり、名前を確認してみればよく知る名前であった。シキも一度相手の首を鉋包丁で斬り落としているが、扱的には誰でも装備しているナイフ装備のようなものだ。特段注目されることもない。

「まあ商売人であるシキちゃんはルール確認ちゃんとしてるだろうし、下調べもそこそこしてるときだ。こりゃ優勝してよね。」

「祝杯かヤケ酒になるけど終わったら呑みに付き合えや」

「1日に2杯のヤケ酒とか肝臓が潰れそうだね」

こうしてシキとピトフィーは大会開始1時間前まで話し続けた。

「そーいや知ってる？この大会で誰が勝つかの賭けがあるんだって」

「そんなん知らんかったわ。私の倍率なんぼなん？」

「17. 2倍」

「大穴やん」

時間がきてシキが総督府に移動する時にピトフィーを酒場まで来るのか確認したが、どうやらシキの店で中継を見るらしい。それをシキは許可し、飲み物がある程度ピトフィーの前に置いて、大半の物にロックをかけて総督府に向かう。

—————

総督府の地下酒場にて二人のプレイヤーがいる。片方は空色の髪をしており緑を主軸にし、白いマフラーのようなものを装備した女性プレイヤーだ。彼女の名前はシノン。B o BのFブロック代表の一人である。

その隣にいるのは全体的に黒い装備をし、上から胸当てを装着した黒髪のプレイヤー。その顔を見ればとても可愛らしく、初対面であれば目で追ってしまうだろう。

だが男である。

そのプレイヤーの名前はキリト。現在彼はG G Oにいる。なぜいるのかと言えば、最近噂の《死銃》事件の調査だ。ゲームの中で人を殺す事件は見過ぎることができず、仮想空間管理課の菊岡誠二郎によ

る依頼でここに来ている。そして彼もFまたブロック2人目の代表である。

いざGGOにログインしたキリトは下調べをしなかったため、行き詰まったが、そんな彼を助けたのがシノンである。だが昨日自らの性別をバラしたタイミングが悪かったため、現在シノンはあまり機嫌が良くはない。

だが狙いをつけた相手がルールを知らずに脱落でもしないように、自分の手で倒せるように最低限のルールをシノンはキリトに教えることにした。

「本戦はマップに30人がランダム配置されて最後まで残った奴が優勝なんだよな？」

「そんなの運営からのメールをみれば全部書いてるわよ」

もはや前提条件の確認をされるとも思わなかったのでシノンは彼の無計画性に先が思いやられる。もしやとは思うがメールを最後まで読んでない可能性すら見えてきた

「転送位置はランダムだけど最低でも千メートルほどのプレイヤーは離れるわ」

「てことはマップは相当広いのか」

「あんた本当にメール読んだ？」

早速メールを全部読んでいないと予想が当たってシノンはため息を吐く。もうこれだったら全部説明した方がいいのかも知れない。

シノンは簡単にルールをキリトに説明した。マップは直径10kmの複合ステージ。参加者にはサテライトスキャン端末が配られ15分に1回端末にプレイヤーの位置情報が送られる。遭遇戦でいつでも会わないと長引いてしまうのでそれを防ぐためだ。

「そんなルールがあるならスナイパーは不利じゃないのか？」

「1人殺して1km動くには15分もあれば十分すぎるわ」

そんな心配をするならば先ずは自分の心配をしろと言いたくなつたがあえて言わない。

「これで用は済んだわね」

「ここからが本番なんだよ」

キリトはシノンを引き止め、本来の死銃探しへの繋がる質問をする。彼にはGGOで聞くことが出来る人はシノンしかいないためここで聞き逃せない。

「この中に初参加で知らない名前はるか？」

なぜこの質問をするかには彼女には分からなかったが答えることにした。意識を分散されて集中してないキリトを倒してもスッキリしないと考えたからだ。

「あんたを除いて4人だけ」

シノンは参加者の名前一覧を出してその名前に指を指す。

「《銃士X》に《Pale Rider》に《シキ》、これは《Steven》？」

(この中に死銃が?)

この時キリトは気づかなかった。最近色々なゲームを放浪としている知り合いがまさかこの中にいるとだなんて

—————

シキは地下酒場で待機している。酒場に入った直後に賭けの会場を見てみれば本当に自分の倍率は高く、期待されてないことがわかった。そもそも闇風がいる中で自信もないが手を抜くことはしない。それがバレたらピトフイーに何されるか分かったものじゃない。

地下酒場を抜け、待機ドームに向かう。装備を確かめGAU-22を握りしめる。開始までの時間があと30秒であり、外の熱気が上がっているか、自分のテンションも上がる。

『さあカウントダウンいくよー!』

10カウントを数える声が聞こえる。それとともにシキの心臓が高鳴る。

3

いつ以来だろうか。こうして1人でゲームを楽しむのは。

2

もしかしたらSAO中期以来かも知れない。最近は生還者組やフカ次郎と一緒にだった。

1

転送準備が終わり、蒼い光が見える

『バレット・オブ・バレッツ、スタート!』

30人のプレイヤーが1つのマップに転送され大会が始まった。

この時シキは考えもしなかった。自分がGGO内で噂されてる殺人事件の重要容疑者に入ってることを

本戦&捜索者

シキは廃都市に転送された。廃都市はマップの中央に配置されているが、シキが転送されたのは廃都市の端の方であり、比較的森が近い。廃都市はシキの1番得意なフィールドだ。毒ガスをばら撒くことができるし、何より森や岩山よりもガス噴射装置が使いやすい。

早速シキは手頃な建物の中に入る。エレベーターなどは使用不可なので2階まで階段で進み、階段の防火扉などを閉めて部屋を密室にする。そして部屋の四隅に毒ガスグレネードを置いて起動させる。そうすれば2階だけが毒ガスに包み込まれる。

大会が始まって15分、1回目のスキャンが始まる。シキは端末を起動させ、他プレイヤーの位置を確認する。どうやら最初のスキャンが始まるまでに一部では勝負が起こっていたようで、自分を除き29の点の内4が黒くなっていた。そして予想通りというか、真ん中である廃都市には比較的多くのプレイヤーがいるのを確認した。

だが折角罫を張ったこの建物を捨てるのは惜しい。シキはここで相手が来るのを待つことにする。

待つこと7分。どうやらシキに比較的近かったのもあり、狙ってきたプレイヤーが建物の扉を開ける音が聞こえた。シキはGAU-2を構え、上がってくるのを待つ。

可能な限り気配を消しているだろう。階段を上がってくる音はあまり聞こえない。そして勢いよく2階の扉を開けられた。その瞬間濃度の高い毒ガスが階段に向かって飛び出し、また即効性があるので相手のプレイヤーは体の自由が奪われる。

動けなくなったところをシキは蜂の巣にした。

扉が開かれたてしまったのでやはりガスの一部は外に漏れてしまった。もう2階での毒ガス籠城は厳しくなってきたのでガスを全て1階に移すのを決める。その頃に2回目のスキャンが始まり、相手の位置を見る。点が2つ足りなかったが誰かは隠れているようだ。

スキャンが終わり毒ガスを1つ追加する。スキャンが終わるまでシキは2階にいたのでそろそろ対策をされるだろう。

少し待てば2階の窓にプラズマグレネードが2つ投げ込まれた。既に1階にいるので無事ではあるが少し驚く。そして相手は扉を開け同じように動けなくなり、またシキは同じように撃つ。

だがこれで毒ガスの大半が漏れたためこの場所は捨てなければならぬ。本来この大会で同じ場所にとどまり続けるのはリスクがそこそこあるので潮時だろう。

—————

BoBは人気の大会だ。それはGGOの中では止まらず、現実での配信や他のゲームでの生中継すらある。ALOも例外もなく現在は生中継されている。それを見ているのは5人のプレイヤー。アスナ、クライン、シリカ、リズベット、リーファだ。

「お兄ちゃん中々映らないですね」

「最初から飛ばしまくると思ってたのにね」

彼等がこれを見ているのはキリトがGGOでの大会を応援するためだ。

「メイもこつち来れば良かったのに」

リズベットは少し不満を漏らす。最近放浪癖のある彼女と会わないわけではないが今日くらいは久々に会いたかった

「あの人も成人してるから色々あると思います」

「最近あの人は色々してるみたいだぜ。何箇所かに調理器具担ぐような人だし」

シリカとクラインがそれを少しフォローする形にする。特にクラインはリアルでメイと一番会ってるため事情に詳しい。料理して働きたいこともだ。

「あ、この人面白い戦い方してます」

リーファが画面の一部に注目する。その画面では部屋に突入したプレイヤーが一瞬で体の自由を奪われており、動けないところを撃ち抜くガスマスクをしたプレイヤーがいた。名前を確認するとシキと書かれていた。

「相手を麻痺させて倒すやり方。風妖精でもたまに見るやり方です。」

リーファのその言葉を聞いてアスナは同じやり方を得意とするプレイヤーを思い出した。最初は彼女と面影を重ねたがプレイヤー名が違うし、何より型が違う。重装備で明らかにパワー型であり、スピード型の彼女とは違う。

「あ、この人強いです」

シリカが目をつけたのはペイルライダーというプレイヤーだ。3次元起動で相手に肉薄し、ショットガンでとどめを刺していた。

「おー凄いわね」

リズベツトが口笛を吹き感嘆する。だがペイルライダーは次の瞬間いきなり倒れ、肩には針のようなものが刺さっていた。そして遠くからボロマントを着たプレイヤーが近寄り、ハンドガンで撃とうとした。

だがボロマントはいきなり体を仰け反らせる。先ほどまで彼の体のあった位置に弾が通り過ぎた。これを察知したのだろう。

もう一度彼はハンドガンでの射撃準備をはじめ、ペイルライダーを撃つ。体力は大して減らず、またペイルライダーの麻痺も切れたようなので起き上がり、ショットガンを構える。

だが彼は急に痙攣したような動きをする。再び倒れた後、彼の体にノイズが走り消滅した。さきほどまで彼のいた位置に回線切断の文字がある。

5人はそれから彼の名乗りを聞き、ラフコフのメンバーとわかるまで時間はそれほど必要としなかった。そしてキリトが危険なことに巻き込まれていることも理解した。

—————

ゲームが始まって1時間。つまり4回目のスキャンが始まる直前にキリトとシノンが廃都市の付近に来ていた。死銃が次に狙う相手を殺す前に叩く作戦だ。

「初出場のシキか銃士Xかsterbenのどれかが死銃だ。」

「あのさ……銃士Xはひっくり返して死銃、Xは十字を切る動作。それにシキは漢字にしたら死期、つてのは流石に安直すぎ？」

シノンが推測を述べる。あのようなタイプは色々そこだわりを持

ちそうなので、名前にも注目したのだ。

「キャラネームなんてみんな安易だと思うし…。俺は本名のもじりだしな」

「私も」

そして4回目のスキヤンの時間がきた。2人は端末を開いて3人の位置を見る。

「シキと銃士Xが街にいるみたいだ」

「sterbenがいないわね。となるとこの2人のどちらかが死銃つてことになるわね」

「いや、多分銃士Xだ。シキは全スキヤンで街からまともに動いた形跡がない。それに2回目は最初の位置から動いてなかったからな。今回も大して動いてないみたいだ。それに比べて銃士Xはかなり動いている。可能性は高い。」

そして2人は銃士Xの近くにいるプレイヤーの名前を表示させる。リココという名前が表示され、銃士Xがリココを殺す前に倒すことにした。

「頼むぜ相棒」

キリトはシノンに頼み、作戦行動に出た。

—————

ほぼ同時刻別の場所。シキは4回目のスキヤンを確認する。残された名前は8であり、今この街にいるプレイヤーに自分を除いて4つあった。反対側の橋にキリトとシノン。真ん中のスタジアムに銃士X。その横のビルにリココだ。そしてsterben、つまりザザの名前はどこにもなく、生き残りは9だ。

シキとしては近くに誰もいないので、どうにか移動をするしかないが、装備が重いので進めない。開けた場所は苦手なので遮蔽物のある街から出られないし、銃士Xは機動力がありそうな装備をしているのでそろそろガス噴射装置を出すしかない。

GAU-22の弾倉はまだ1ケース半残っているが、そろそろ心許ない。銃を構えながらゆっくりスタジアム目指して進む。すると近くに大型のバギーを2つ発見した。

それをみたシキはノータイムで乗ることを決めた。まずGAU—22を固定させ、運転しながらでも撃てるようにする。そしてエンジンにかかることを確かめる。大きな移動手段を手に入れたので有利にはなるだろう。

廃都市の中でバギーの走行音を聞いたプレイヤーはまだいない。

挟撃&ガス噴射装置

シノンとキリトは窮地に陥っていた。銃士Xを狙ってキリトがシノンから離れたところをシノンが死銃からスタン弾を撃たれてしまった。

動けなくなったシノンを死銃はハンドガンで撃とうとしたところを、ルーティンの最中に肩を撃たれ、更にスモークグレネードが起動したため辺りは白い煙に包まれる。

最初はスモークグレネードをプラズマグレネードだと思った死銃はその場を離れたため、目標の2人を見失う。その間にキリトは動けないシノンを抱えて逃げ始める。

逃げ始めてすぐにキリトに目に入ったものがある。それはバギーと機械馬だ。これを使えば逃げる速度が上がるので使うことにした。

「馬は無理よ…。扱いが難しすぎる」

馬は踏破力が高いがその分扱いは難しい。リリースして間もないGGOの中でこれを扱う物好きはシノンは見たことがない。

シノンの助言を受けたキリトはバギーを選ぶことにした。だがもしものことを考えてキリトはシノンに頼みをする。

「君のライフルであの馬を破壊してくれ」

シノンはそれを了承し、震える指でヘカートIIを構える。距離もなく、馬には対応する能力もないので撃てば当たるだろう。

だがしかしトリガーとシノンの指には絶対的な隙間があった。シノンの指はどうあつてもトリガーが引けなかった。

「う…そ…」

シノンがトリガーを引けずにいるうちに、死銃は距離を詰めてくる。これ以上詰められるのはまずいのでキリトはすぐに逃げることにした。こちらはバギーに乗ってる上、シノンの言う通りなら普通馬なんて誰も乗らない。逃げれると踏んだのだ。

だが現実には希望通りにはいかない。バギーと馬の選択肢の中、死銃は馬を選んだのだ。そして何の苦もなく乗りこなしている。

「もつと速く！逃げてー！」

後ろから迫る恐怖にシノンが叫ぶ。キリトの体にしがみつぎ、震える体をどうにかしたい。だがそんな体制だからだろう。こんな状況だからこそだろう。周りの音がシノンにはよく聞こえる。

「え……」

シノンの耳に入った音はバギーのモーター音、馬の走る音、そしてもう一つのモーター音。シノンは恐る恐る上げる。そこには歯齧みをしたキリトがおり、更にその前には二つ目のモーター音の正体があった。

前から、バギーに乗った他のプレイヤーが迫ってきていた。そのプレイヤーはプロテクターを始め、全身を重装備で防御力を固めていた。そしてバギーにはGAU-22が固定されており、いつでも撃てるのが分かった。

「このままだとまずい。君が奴を狙撃してくれ。」

奴と言うのは後ろの死銃のことだろう。目の前のバギーのプレイヤーは参加者ではあるが、ここで逃げ切れてもその人が死銃に殺される可能性すらある。それを危惧したからこの指示を出すのだろう。

「無理…だってあいつは…。」

シノンは記憶がフラッシュバックしている。幼い頃の銃の記憶。それにより死銃への恐怖が高まり、撃てなかった。

キリトがシノンへの説得を試みるが、シノンは恐怖の感情が全てを上回っている状態なので無理であった。

しかしそんなことをお構いなしに前のプレイヤーがGAU-22を撃ってくる。キリトはハンドルを左右に切り、弾を避ける。後ろの死銃に当たってくれることを願ったが、前からと言うより、左斜めから撃ってきてるので、死銃には当たらず、ただ廃ビルに弾が当たるだけであった。

死銃とバギーのプレイヤーからの距離が更に短くなる。このままでは良くて蜂の巣で敗退、最悪死銃からの銃撃で死んでしまう。

「戦えない人なんていない。戦うか戦わないか選ぶだけだ。」

「なら私は戦わないのを選ぶ。ここでなら強くなれるなんて幻想だった。」

「俺と一緒に戦う。一度だけでいい。この指を動かしてくれ」

キリトは後ろを向き、シノンの狙撃銃のトリガーに手を添える。こんなに揺れていると狙いがつけられないと言われたが、キリトは揺れが止まることを知っている。

後ろを向いたことで、前からの乱射が激しくなる。だがGAU-22の重さも相まってハンドルを中々切れていないので狙いは雑だった。揺れが収まると宣言してから3秒。キリトは脇腹に乱射された弾を受ける。

軽装備であるキリトは体力の4割を削られた。

そしてキリトたちの乗っているバギーは廃車に乗り上げ、空中に放り出された。揺れが収まり狙いやすくなったのでキリトとシノンは引き金を引く。

「外した…」

撃った瞬間にシノンは察知した。飛び出した弾は明らかに死銃の横に逸れている。だが運が良かったのだろうか。それともキリトの狙いなのか、弾はトラックに当たった。燃料に引火を起こし大爆発を起こす。その爆破によりバギーに乗ったプレイヤーは吹き飛ばされ、地面に叩きつけられていた。だがあの重装備なら大したダメージは見込めないだろう。

死銃は爆発の中心にいた。機械馬への引火を起こしたので最低でもまともな移動手段は失ったはずだ。キリトとシノンの乗ってバギーはそのまま砂漠地帯へと走っていった。

「あー、こらあかんわ」

折角手に入れたバギーを爆風で吹き飛ばされて壊されたシキは落胆する。元々この重装備の中動くことがままならないので、移動手段は貴重だったのだ。

正面から2人のプレイヤー、予選と第2回大会を見たから姿と名前は知ってる。あれはキリトとシノンだろう。後ろから偶然ではあったがザザと挟み撃ちに成功したので倒したかったが逃げられてしまった。

それに先ほどの爆発に紛れてザザはあの2人を追っていった。これでザザの狙いはほとんど確定したようなものだ。大会前にした約束のこともあるので、ここで2人を追うのは約束を違える。

ゲームが始まって何回目かは忘れたがスキャンが始まる。端末を確認すれば光点は4で街に2、砂漠に2だ。ザザとあの2人を入れて生存者は7である。

同じ街にいる相手の名前を確認するとリッチーという名前が出た。重機関銃で相手を迎撃するスタイル。街の高台で陣取っている。シキは射程外なのでまだ撃ち始めてないが、入れば撃ってくるだろう。砂漠側は闇風がいるので多分倒してくれると予想し、残りの生存者はみな一撃必殺を持つてる。ヘカートに光剣。重機関銃に最速スピード。これならもうGAU-22じゃ勝つことは難しい。

だからこそついにまともに出番を与えてやれることができる。シキはウインドウを開き、最軽量の装備にする。プロテクターを外し、上下はほとんどインナーに近い。

そして腰にガス噴射装置とワイヤー銃を装備する。装置に出たメーターの現在値は960。今の噴射可能距離だ。それを確認するとリッチーのいた位置に向かって飛び始める。

ワイヤーを壁に刺し、巻き戻しの勢いでリッチーに近づく。リッチーはそれに対して迎撃を始めるが弾がまともに当たらない。撃つた矢先にシキが空中でガスを噴射し、その勢いで左右に避ける。

残りの高さは24。リッチーが打つ前にシキは不規則に、規則性をつけず左右に飛び回るので、重機関銃の取り回しが追いつかない。弾を撃つが牽制にもならず、どんどん肉薄される。

そしてシキは最後にガスを更に噴射し、リッチーの上を取る。そして鉋包丁を抜き、リッチーの首を斬った。

リッチーを倒し、街の生存者はシキだけになった。前回のスキャンの位置的に闇風もここまではスキャンまでに来れないはずなのでガ

スの調整をする。先ほどの戦いで大量に消費したため、メーターは642。ガスボンベを一本新品に取り替える。

そして再びスキャンが始まる。光点は3つであり、キリト、闇風、シキだ。ザザも恐らくそこなので、みんな砂漠に固まっておリシキにはやれることがない。

砂漠の方にシキは歩き始めるが、到着するその頃には向こうでの決着はついているはずだ。

ピトフーイとの約束の優勝に確実に近づいているためシキは嬉しくなった。

観戦者&最終決戦

時間は少し遡る。B o B 中継はG G Oの中で見上げればどこでだって観戦ができる。元から気な大会であり、賭けを行なっているプレイヤーにとつては更に気分が高揚する。

「あつ！負けた！」

「流石闇風！ドンドン狩っていく！」

「芋ってんじやねえぞリッチー！」

「シキも芋ってんじやねえぞ！」

それぞれ賭けた者が勝って欲しいため思い思いな応援、罵倒が飛び交う。残りの生存者が10人を切ったため、普通は動きが活発になるからだ。なので今まで上を取って迎撃をメインにしていたリッチーと、毒ガスを使つての待ち伏せをしていたシキは観客からヘイトを集めていた。

「それにしてもシノつちとキリトちゃんが手を組むのは意外だったな。予選決勝じゃシノつちは大分怒つてたのに」

「スコードロン戦みたいで面白いから俺は好きだぜ」

キリトとシノンが手を組んだことに観客は面白がっていた。遭遇戦でバトルロイヤル式のこの大会で手を組むことは本来ないことだ。だが2人の型は接近戦特化と遠距離特化なので理詰めを考えれば納得はいく。

スキャンが始まり、参加者はそれぞれ端末を見る。最初に確認を終えたキリトとシノンは銃士Xの方へ向かっていった。

「それにしてもあいつは有利だな。スキャンに映らないのは中々羨ましいぜ」

sterbenは光学迷彩マントを装備しているので、常にスキャンからは逃れられる。なので他プレイヤーは街の真ん中に彼がいるのに気づいていない。

「シキも移動を始めたぞ。芋りはおしまいか」

「リッチーまだ芋ってやがる」

シキはスタジアムの方へ移動を始める。その移動の途中でバギー

を確保し、GAU-22を固定し、街の中を走り始める。

「お、足を確保したからシキは積極的になったな」

「リッチーは見習え」

「おい！シノっちがやべえぞ！」

1人の男が急に叫ぶ。その言葉に反応した者たちは急いでシノン
を映しているカメラを見る。そこにはスタン弾を食らったシノンが
映っており、sterbenがハンドガンを撃つ素振りを見せる。

観客はsterbenが死銃を名乗り、ペイルライダーの回線切断
は偶然だと思っているが、麻痺したシノンが装備的にハンドガンの弾
を全弾浴びて耐えられるとは思えない。

だがそのカメラは急に白煙に包まれた。何が起こったかはつき
りと分からなかったが次に映ったのはバギーに乗った2人と馬を乗
りこなすsterbenだ。

「すげえ！追撃戦なんて初めて見るぜ！」

馬とバギーのチェイスに観客は盛り上がる。この時はカメラは遠
くから全体像が見えるように写していたので、観客達はシノンの気持
ちを知る由もない。だが目に映る光景は確かに盛り上がるものであ
り、見世物としては良かったかもしれない。

「逃げ切れシノっち！」

「キリトちゃんも頑張れ！」

男人気の高い2人が応援される。周りから見ればsterben
が悪役になってしまふのは仕方ない。

「あつ、これあの2人ヤバイぞ」

観客の1人がつぶやく。それと同時にカメラは更に高く上がり、キ
リト達の正面も映るようになった。そこには正面からバギーで突っ切
るプレイヤーがいた。

「挟み撃ちだ！これはマズいな」

前から来たプレイヤーがシノンとキリトを撃ち始める。キリトの
運転で避け、車上戦になり更に盛り上がる。

「うおっ！すげえ！」

次に観客達が見たのはキリトのバギーが空を飛んだことだ。そし

てシノンの狙撃でトラックが炎上し、2人を巻き込む。2人ともさしたるダメージは無かったが、移動手段を失った。

すぐさまsterbenとシキの戦闘が始まると思われたが、sterbenがキリト達を追う。シキも街から離れることはなかった。しばらくの間カメラは戦闘をしているプレイヤーを探しに出る。キリトとシノンを見つけることはカメラでも容易ではなく、しばらくの時間をかけた。そしてようやくカメラが2人をとらえた。

カメラに映ったのはキリトの膝の上に頭を置くシノンだった。これを見た観客のテンションは更に上がる。

「ウオオオオオオオー！」

「キマシタワー」

「いい…いい…」

…まあ変態ばかりだった。だがそれとは別のことに気をとられる者もないわけではない。

「おい…こつちもすげえぞー！」

カメラに映っているのはプロテクターを外し、装備もほぼインナーの女性プレイヤーがいた。名前の表示はシキ。今この場で装備を変えたのだ。

「うおっ！かわいいぞー！」

「今まで悪かった！お前のやり方は正しい！」

性別が割れた瞬間に熱い手のひら返しである。その近くにはリッチーが今居り、シキは腰につけた機械で肉薄する。ガスとワイヤーで飛び回るシキにリッチーも対応しきれないようだ。

「すげえ！リッチーが翻弄されてる！」

「なんだあの変態機動！面白え！」

シキは一気に距離を詰め、リッチーの首を斬る。会場は大盛り上がりだ。

「ざまあみろリッチー！」

そしてスキャンが始まり、他は全員砂漠に集まっているのでシキも歩いてそこを目指す。

シキが街から砂漠を目指している間、注目度が高い砂漠にカメラは

集中する。

まず映ったのはライフルの弾を光剣で弾き飛ばすキリト。その技術はいつ見ても素晴らしいものだ。

「相変わらずやり方がバーサーカーじみてる」

「ま、そんなとこがいいんだけどな」

2台目のカメラが映したのは闇風。物陰に隠れて隙を伺う。が、そんなことはさせないとばかりにシノンの狙撃が闇風の体を貫いた。

「すげえ！闇風が負けたぞ！」

「シノつちすげえ！」

闇風が負け、カメラはキリトに集中する。sterbenは腰から鉄の剣を抜き、突き技を連続で浴びせる。キリトはそれを全て防ぐことはできないが、なんとか対応していく。同様にキリトも剣で斬りにいくが、sterbenが致命傷を避けるような対応をする。2人の剣技に観客は目を離せない。

「なあ……これなんのゲームだっけ？」

「GGO……だよな」

銃の世界で剣で戦う2人を見て言葉を失う。次第に苛烈さを増していく。近距離戦特有の臨場感に観客は当てられ、固唾をのむ音ですら雑音に聞こえる。

両者引かない勝負になったところで状況は変わった。sterbenの体に予測線が出てきたのだ。線が延びる先にはシノン。つまり狙撃だ。

sterbenは優先して狙撃を避けることを選んだ。だがそれがいけなかった。その時にできた大きな隙をキリトに見せ、体を光剣で綺麗に二つに斬られてしまった。

「ウオオオオオオオー！キリトちゃんが勝ったぞ！」

「残り生存者は3人！全員女プレイヤーだ！」

そう。GGOの小さな大会を含めても女性プレイヤーから優勝は出たことない。観戦者達はキリトを女だと思っているので女性プレイヤーから確定で優勝が出ることに盛り上がる。

キリトはsterbenを、ザザを倒した。死銃のトリックも見抜き、シノンからの手助けのお陰で勝てたのだ。シノンはsterbenの脱落を確認するとキリトの元に寄り、2人で拳を合わせる。

「そろそろ大会も終わらせないとな」

「ええ。一応スキャンがすぐなんだから確認しておきましょう」

キリトとシノンが端末を開く。そして時間になるまで待ち、光点を確認しようとした。

確認できなかった。いや、させてもらえなかったと言うべきだろうか。バギーや機械馬なんて目じゃないくらいのもので、速度でガスの音が近づき、それはすれ違いざまにシノンの右腕とヘカートを斬ったのだ。ヘカートは傷がつき、シノンはまともな行動がとれなくなった。この大会では2分で欠損部位が戻ることはないので事実上リタイアである。

それでもキリトは端末を確認でき、相手の名前を把握した。最後に残ったのはシキだ。

着地したシキはすぐに身を翻してキリトに斬りかかる。キリトは光剣でなんとか受けきり、相手を弾き飛ばそうとする。だがSTRに差が無かったのか、相手を弾き飛ばせない。むしろ押されている。

キリトはすり足で横に自分から躲し、もう一度シキと向かい合う。剣を合わせてわかったことは相手には速度がないはずだ。音からして速度の元はガスということも理解した。

キリトは模倣バーチカル・スクエアを放つ。初撃は防がれたが、相手の鈍包丁の防御を崩し、2撃目以降は入る確信を持った。

だが相手の動きが急に変わった。シキは弧を描くように飛び、キリトの後ろを取る。模倣の動きなのでキリトはすぐに攻撃を止め、振り向きざまに横に剣を薙ぎ払う。

それがいけなかった。シキは右手に握った鈍包丁だけで剣を受け、そのまま前に詰め寄る。残った左手でキリトの顔面を殴りつけ、そのまま地面に叩きつける。シキもキリトの上からではあるが、その衝撃を受けきることができず、鈍包丁は落としたが、キリトの上をとることができた。無論、衝撃を直に喰らったキリトも手から光剣を落としている。

武器を失った2人に攻撃手段はなく、上を取ったシキがキリトを殴りつけはじめ。このまま削りきるつもりだ。

シノンは取れる行動がなく、ただキリトが殴られる様を見るしか無

かった。

目の前に、落とされたはずのキリトの剣が転がってきた。シノンに残った左手でそれを拾い上げ、2人に近寄る。シキはそれに気づかなかった。

「やあああああー！」

シノンは声を上げ、左腕だけで剣を振る。この大会で何度も見てきたキリトの剣の振り方を真似し、やっとこちらに気づいたシキの首を斬り飛ばす。

「あっ…：かつ…：」

シキは声にならない声を出し、そのまま頭上にDEADの文字が出た。

「ありがとうシノ…：ン…：？？」

キリトがシノンにお礼を言おうとしたらシノンに抱きつかれた。キリトはシノンと離れようとしたが、その間にグレネードがあるのが見えた。

「こういう幕引きも悪くないでしょ？」

「ハハッ…：」

グレネードは2人の間で爆発し、全ての参加者が脱落した。
第3回B o Bは2人の同時優勝で幕を引いた

確認&確信

BOBが終わり、GGOではまだ熱気は収まらない。過去の大会でもなかった女性プレイヤーの優勝。銃の世界で剣での斬り合い。斬新なことが多すぎたのだ。それを真似をするプレイヤーもちらほら現れ、諦める姿を見ることも今や珍しくもない。

またこの熱気に当てられるのは当事者も例外ではない。街はずれの小さなBARの中では、祝杯が行われていた。

「シキちゃん3位おめでとう！」

「ありがとう！」

その場に集まるのは2人のプレイヤー、1人目はシキ。最後の奇襲時の速度に自分も振り回され、シノンの片腕と銃しか持つていくことしかできなかったが、街中での戦いは祝うものに褒められた。

もう片方はいつもここに入り浸るピトフーイだ。今回の祝勝会はピトフーイの提案で行われている。

「優勝しろとは言ったけどシキちゃんまだ荒削りなところがあるから3位いくとは思ってなかったわよ。」

「ガスの力は偉大やねん。移動手段に毒ガス。爆破もできて便利やで。」

「GAU―22よりガスが主力になってたのは面白かったわ。何よりリッチーを倒せたのは大きいじゃない」

2人はサワーを片手に話す。大会のハイライトを見ながらここはどうだった。あそこはこうするべきだったと感想を述べあう。

「主観が入ってるんだけど、シキちゃんが勝てなかった理由はなんとなく見つけたわよ」

「私もあれは後悔してんねん。多分街を捨てたことやな」

「街を捨てたって言うか砂漠と草原がダメなのよ。森や岩山ならまだ勝機はあったと思うけどね」

シキは遮蔽物を使つてのガス噴射装置での移動、そして室内か洞窟での毒ガス戦がメインである。それを放棄し、何より初撃以外で相手の舞台に飛び込んだのはミスだろう。

「何より一番驚いたのはあの鉈包丁。あんな技術持ってたんだねー。アタシですらあの戦闘は見たことないもん」

「まあピトと一緒に時は全部銃で間に合うしな。毒ガスもちらほら使うけど」

「どこかで違うゲームでもしてたの?」

「ALOっていうゲームをやってたん。そこでは鉈包丁メインで使ってたねん。」

「なるほどねえ…。ふーん…」

シキちゃんはSAOって知ってる?」

この発言とともにシキはジョッキを落とす。ガラス片が床に散らばり、ポリゴンとなって消える。

「やつぱり、おかしいとは思ってた。いくらなんでも変だもんね。銃より扱いが難しい刃物を、いや剣の類いをALO配信スタートから考えてもあの練度まではいかないはず」

ピトフーイは自分の考えを述べる。シキはそれを聞きながらピト

フリーに目を合わせる。

「…あの事件は誰でも知ってるやろ。今のは友達がそれに巻き込まれて驚いただけや。」

友達というのは巻き込まれてからできた人のことを指すが、それはあえて言わない。屁理屈である。何よりあまり人には知られたくないので切り抜けるしかない。

「それに別に大した技術じゃあらへんやろ。キリトってプレイヤーとやりあつた時は受けるのが限界でまともに斬れてへんし。」

そう。シキの鉋包丁での戦闘スキルは思ってるより大したものではない。少し体術も合わせて並ぐらいである。事実キリトとの戦いでは一度も刃を当てていない。

「いや、シキちゃんの技術はどう考えもおかしいのよ。例えどんな業物でも、それが刀でも動く相手にあそこまで綺麗にいかない。リッチーの首とスナイパーちゃんの腕を1回で綺麗に斬れるのは」

何かを綺麗に斬るのは思ったより難しい。刃物の向きと振る方向は回数を重ねるほど上達する。だが斬る対象にも合わせなければいけないのだ。

これは野菜などを包丁で切るのとは訳が違う。対象は動かないのでこちらから合わせればスパツといくが、相手が人間なら根本から変わる。常に何かしらの力が入っており、戦いの中なら反射的に避けようともするのでどんなに上手くいっても刃が食い込むだけで止まる。

シキがこの技術を持ってるのはメイの時からだ。とあるレッドギルドのリーダーから教えてもらった技術が型にハマリ、染み付いたのだ。何年もSAOで使い続けたその剣はメイの体から離れることなく、ピトフリーに見抜かれた。

「シキちゃん…。SAO生還者でしょ？」

ピトフリーの推理は確信をついた。たつたあれだけの情報からここまで結びつけた。シキはピトフリーに負けたのだ。

「…せやで。私は生還者や。」

一瞬の沈黙。だがそれをすぐに打ち破る声が店に轟く。

「アハツ…。アツハハハハアアア！いいねいいね！羨ましいよ

！あの世界にいたって羨ましいよ！私が行きたかった、でも行けなかった！でもここに！あそこで過ごした人が！いる！」

「ピ…ピト…？」

ピトフリーのテンションにシキは戸惑う。普段から戦闘の度にイカれていると実感するが、今のはそんなのは可愛く思えるほどだ。

「色々と聞かせてもらおうよ」

こうしてシキはSAOでのメイの話をピトフリーにすることにした。朝からログインしているの、用事のある時間までと釘を刺したが、だいぶ不満そうにする。

まず最初に話したのは茅場のデスゲーム宣言。メイは最初は街に残ったが、1層突破の情報で街を出た。そこからメイがしてきた戦いや生活の話をした。所持金はチマチマと稼ぎ、その合間にスキルも育てていき店も買った。そこで食事処を営んだこともだ。

「良いわね良いわね。いいなあー、戦うだけじゃなくてそんなゆるりともできて。それで、あの鈍包丁技術はどこで手に入れたの？まさか我流？」

「あれは当時のとあるギルドのリーダーから教えてもらってん。私も街の外にも出るし、身につけておいて損は無いつて」

「かーっ、痺れるねえ。その人は噂にある人殺し集団のためにシキちゃんに教えてくれたのよきつと。それにその殺人ギルドの討伐戦とかやりたかったなあー。命を賭けた戦い！絶対楽しい！行きたかったなあー、悔しいなあー。」

このようにピトフリーは今日はいつもより喋る。そして時計を見ればシキのリアルでの用事が近づいてきたのでログアウトすることにした。ピトフリーは止めようとしたが、流石にリアルのことを邪魔できないので話はまた今度することにした。

1人取り残されたピトフリーは口角を上げる

「決めた。次の大会は――」

――

時刻は夕方近く。臯月はとある喫茶店に入った。そこはダイシー・カフェのように落ち着いた雰囲気であり、時間も時間なので客は1人

だけだった。

その1人は皐月を呼び出した張本人、結城明日奈である。

「そっちの用事は終わったんか？」

皐月は明日奈の前に座る。明日奈は今日、昼頃は和人からの呼び出しや、それに関係することをしてしていたのだ。やっと終わった今になって皐月を呼び出したのは何か理由があるはずだ。

「ええ、おかげさまで。友達が1人増えてこれからも楽しくなりそうです。」

明日奈は自然に受け答えする。皐月が注文をしてから、それが届くまでの間は先ほどのダイシー・カフェでの話をした。

皐月の元にコーヒーが届き、店員が離れると皐月は明日奈に向き直る。

「んで？さつきまで居ったりリズムもキリトも呼ばず、一対一で話すってことはそれなりの用やんな？」

誰も連れずに明日奈が呼び出すのは珍しい。いつもはキリトにベツタリではあるが、その人もいないのだ。

「ええ。あなたに確かめたいことがあるんです。」

明日奈は息を大きく吸い、一度吐く。そして皐月に向き直る。

「あなたはGGOPレイヤーですか？それも別アカウントで」

「やってるやってる。別に不思議でもあらへんやろ。明日奈もALOで風妖精もあるやろ？それと一緒にや」

やはりと、明日奈は思考を巡らせる。だったらあれは間違いないはずだ。

「あなたは『シキ』ですか？先日の大会で3位だった…」

「お、やるやん。当たりやで。ちなみに何の根拠でそう思ったん？」

皐月はそれほど重要な用だと分かってるはずだ。なのにこんなに軽い調子で答えてくれるのは少し怖い。裏があるのではと思う。だが主導権を握っているのは明日奈のはずだ。

「いえ、あの日私たちも配信を見ていたんです。ですが最後のキリト君とあなたの戦いで私だけ気づいたんです。あれはあなたの剣の振り方です」

このことに気づいたのは明日奈だけだ。普段ALLOでメイとよく組むクラインは気付かず、明日奈だけが気づいた。

そこには大きな違いがある。クラインはメイの剣を1番知ってる。だがそれは共闘する分であり、横から見たものだけだ。しかしアスナだけは違う。GGOでのキリトを除き、メイと唯一剣を斬り結んだのはアスナだけだ。

正面から斬り合うのと一緒に戦うのでは天と地ほどの差だ。だからこそアスナだけが気づいたのだ。

「んで？何が言いたいん？」

少しずつ話そうとしていた明日奈の企みはこの一言で崩れる。一気に詰められると誤魔化しは効きづらくなり、素直に聞くしかない。

「…はつきり言うとなあなたの剣はラフコフに似てるんです。特定の誰とも言えないんですけど、剣のイメージがそうなんです。」

こう言われて気分のいいSAOプレイヤーはいない。あの殺人ギルドと同じ扱いは侮辱に等しい。

「まあ私は途中から対人戦ばっか練習したからな。SAO内の決闘でもアンティールあつたし、中層のころはそれでよう稼いでたからな。やから対人戦極めたあの連中に似るのもしゃーないやろ。」

明日奈は言い伏せられ、納得するしかなかった。それでも心のどこかではまだ不信感が渦巻いている。そもそもメイはSAOの間、常に誰かと一緒にいた。アスナの知ってる範囲でもクラデールとも2人でいたことはほぼないし、人脈もあるメイだ。ラフコフからは普通狙われる。

明日奈は自分の中で臆月は白だと思う。そして話すことも終わり、2人は解散する。

だがこの時アスナは忘れていた。ラフコフの戦闘スタイルに似ていたメイに気をとられ、1番警戒すべきものを忘れていた。その上元からアスナはメイを信用している。そこまで考えは行き着かないだろう。

メイは、P o hの対話術を盗んでいることを。

番外編 おしよくじじじょう

・ どうも、作者です。

暗闇の中パツとスポットライトが光る。その光に照らされたのは《作者》と書かれた服を着たラグーラビツトだ。

・ 今回やるのは小ネタ集です。GGO編までの3大タイトルまで完結し、区切りもついたので今までの没ネタとこれからの流れの紹介をしたいと思います。

コロコロと音を立てて、ホワイトボードが出てくる。

・ それではまず、呼び出した人を紹介します。本編オリ主の篠原臯月さんです。どうぞ。

部屋の明かりが全て点く。そこには椅子に座った臯月がいた。

「よろしくお願いします」

・ そんなじゃ、ネタ紹介していくよ、まずはこれ。

【元々アインクラッド編で終わる予定】

「これどういうことなん？」

・ デスゲームってタイトルに入ってるから命が直接関わってるここで終わらせるつもりだったんだよ。けど途中で楽しくなって終わらせられなかった。

「すごい楽しそうやな。まあ本人が満足してるならそれで良いやん」

・ 執筆ペースは量の割に遅いけどね。僕は楽しい。

・ 次はアインクラッド編の没ネタを。最初はこれ。

【18話でのニシダさんの登場】

・ 1番最初の没ネタはこれだね。

「海でシリカと焼きそば食べた話やな。」

・ 最初は趣味スキルの流れからニシダさん出すつもりだったの。でもそれだとニシダさんが魚を釣るところから始まって、モンスター戦闘になるからまだ慣れてない作者には無理だった。

「しかも色々ミスってシリカが少しマナー違反やらかしたしな。感想で指摘されてたで」

・それは完全にミス。忘れて。

「分かったで。次行ってもええか？」

・もちろん、次はこれ。

【クラディールの生存】

・私が好きだったから死んでほしくなかった。でもこいつ死なないとキラアスにならない。

「どんな感じで生存させるつもりやったん？」

・いや、具体的な案は無かったから流れた感じだね。クラディールの初登場時にそう決めてたけど途中で諦めたんだよ。じゃないとキラアスの関係性が壊れる。

「まあそれはアンタの技量不足」

・本当にそれ。次はアインクラッド編最後の没ネタ。

【メイも地下ダンジョンへ行く】

「ユイの話か、ちなみに何でなん？」

・ALO以降も書くって決めたから没になったの。最初はこの時にGM権限使って乗り切る予定。

「それその後ヤバくないか？それバレたらアカンやつやし」

・そりゃね。だからその時にキリト戦が始まって、君は負けて拘束されてゲームエンドって流れ。

「バッドエンド真つしぐらやん」

・そのつもりだったよ。でも続ける気力出たから流れたね。これでSAO編の没ネタは終わりだね。

「3つだけって少ないねんな。」

・大体予定通りだったからね。でも追加分のALO以降は変更点多いよ。まずはこれ

【種族は風妖精だった】

「私は今の種族は火妖精やな」

・SAOじゃ足型だったから継続しようと思ったの。でも公式のクライアントの設定に合わせることになった。

「リーファと一緒にやったんか、これは面白そうやったのに」

・アスナも風妖精垢あるからバランスの問題になってくるんだよ

ね。ちなみにこれに伴って流れたネタもある。

【ユージーン戦】

「高原のやつか、私が風妖精なら私がユージーンと戦うことになってたん？」

・ いや、君にはその他多数のつもりだった。キリトがユージーン倒さないと援護の約束入りにくそうだしね。

「原作崩さんようにしてるからなアンタ」

・ クラディールが死ぬことを決めてからそうするようにしたからね。次は火妖精が確定してからの没ネタ。

【高原でのリーファ戦】

・ 後ろから羽交い締めにして森の中で戦わせるつもりだった。

「なんで無くなつたん？」

・ メイはまだALLO初心者だったから戦力的に誘われないうろなって思っ。モーティマーは頭いいから初心者は普通誘わんでしょ。

「まあしょうがないな」

・ 戦闘種族の火妖精にしてはまだバランスも悪いしね。速さ特化のリーファに勝つ手段もないわけではないけど厳しいかな？

「まああの子アスナレベルに速いからな。不意打ち決まるかも怪しいかもしれん」

・ まあ作者次第で多分リーファと戦う機会あるかもね、ALLOラストはこれ。

【世界樹でのサクヤ戦】

・ 流石に情報なさすぎた。記憶にある限りオーディナルスケールの集団戦闘シーンしなくて型もわからん。

「いや、まずなんで戦うん？」

・ 種族的な問題。でもサクヤさんもそこまで見境ないよね…って思っ削った。

「話数の割に4箇所か。やっぱ多いな」

・ 次はGGOだね。これもやっぱ多いかな？ってことでこれ。

【シュピーゲルの単体での来客】

・アサダサンガチ勢の人。1人でシノンを褒めちぎりシキに引かれる予定だった。

「それは怖いな…。でもなんで無くなったん？」

・途中まで書いてただけど、動かし方分からなくなってきた。だからsterbenと一緒に計画を練るだけで終わった。

「上でそんなことされててんな…」

・多分1番流れ方マシなの彼だよ。サクヤとか出番がないに等しいもん。次に紹介する没ネタはなんで書かなかったんだろって後悔してる。

【フィールドワークでのピトフーイ戦】

「私に死ねって言うてるようなもんやんけ」

・金稼ぎの段階で出す予定だったの。でもカジノあるって知ってそつちで済ませちゃった。これやってたらピトフーイがシキをレンのレベルで期待してたかもね。今想定してるSJ編が成り立たなくなってた。

「今は仲良くやれてるからよかったわ。私が殺されてる」

・エムさん2号の誕生。

「それは勘弁」

・次はこれだね。

【水中でのキリト戦】

・BOBの序盤だね。ここで脱落するか途中で撤退するかを決めかねた。それに水での斬り合いだとお互い全裸だし絵面もマズイ。

「観戦者が喜ぶやつやな」

・キリトの性別バレちゃうってのがトドメになった。応援してね☆がネカマプレイになるから名誉保護のため。

「ネタにならずに済んだんやな」

・ある程度シリアスは保ちたい。それではこれで最後だね。

【ダイシー・カフェでの詩乃との出会い】

・アスナとリズみたいに出会わせる予定だった。具体的にはカウンターでアップルパイ作りとキリトから「毒の人」で紹介される予定。「え？これ問題無いやろ？その後でもアスナとの会話でも大丈夫や

ん」

・ リズがいるのがトドメになった。アスナとどう自然に解散するのと、彼女の性格的についてきそうだから。

「まあリズも店やってるし情報には飛びつくしなあ…」

・ 没ネタはこれで全部だね。次は今後の予定についてだね。

・ 今後の予定はこうかってるよ。

オリジナルストーリー↓マザーズロザリオ↓S J 2↓U W

「あれ？2つないやん」

・ キャリバー編の時間にオリストの導入をやることにしてるの。いきなりオリスト始まったら読む人はいきなりどうした？ってなりそうだからこうしました。ご了承ください。

「S J 1は？」

・ シキとしては出る理由がない。ピトフーイ以外に繋がりがはつきりしてないしね。ピトの紹介でレンとエムとの3人チームも考えただけど活躍馬がなくて大差がなくなる。

「それS J 2もどうなん？えっ…お前…」

・ そのつもりだよ。お前が責任をとれ。

「殺されそう」

・ U Wを書くのは決めました。でも長くなりそうだから処女作のこの話が150話超えそうになる。気力持たせるので暖かく見守ってくださいると嬉しいです。

オリジナルストーリー編 菊岡&皐月

GGOで起きた【死銃事件】も無事に解決し、それぞれのプレイヤーは思い思いにゲームを楽しむ。

ある者は自分の技量を上げるため

ある者は趣味としての経営を

ある者は情報集めをしていた

「ALOで聖剣エクスカリバー発見!？」

桐ヶ谷家のダイニングで和人が叫ぶ。片手剣に分類されるその武器は、彼が探していた伝説級武器だ。

「とうとう誰かに取られたか…」

「まだ見つかったただだよ」

和人の言葉を直葉は否定する。その記事にはとあるクエストの報酬でエクスカリバーが手に入ることを示しているだけだ。

「まだ取られてないなら行きたいな」

和人がそう呟いくと直葉はニコニコ顔で頷いた。

「それじゃあ、メンバーを集めるか」

そう言つて和人は携帯を開く。移動手段であるトンキーという邪神に乗れるのは7人までであり、しっかりとしたメンバーを集めなければならぬ。

「アスナ、リズ、シリカは誘うとして成人組がどうかだな…」

和人は呟きながらメンバーを想定する。エギルが入れば守りは堅くなるし、クラインがいれば火力は上がる。メイが入ればある程度敵の動きは止められるだろう。クリスハイトは頼りないが頭数にはなる。

「4人に連絡入れるか…。最低でも2人は漏れるけど…」

和人は4人に連絡を入れる。全員から返信が来るのを待ち、メンバーを決めていく。

返ってきた返信の内容は、クラインはOK、エギルは店があるから

NGであり、クリスハイトとメイは口を揃えて用事があると返ってきた。

「あと1人かー。シノンさんは？」

「それだ」

こうしてキャリバー獲得チームが出来上がり、7人でクエストに挑むことになった。

—————

皐月は現在都内を歩いている。その途中で和人からキャリバー獲得のクエストに誘われたが、これから大事な用件があるので行きたかったが、仕方なく断った。

身体の都合上、移動は電車がメインになるが駅からは歩かなければならない。呼び出した相手は皐月の体を気遣ってくれたのか、駅から徒歩2分の店で待ち合わせを決めてくれた。

目的地は銀座のとあるスイーツ店。相手の奢りのようなので楽しめる限りは楽しむことにする。

「メイ君ー！こっちこっちー！」

奥からハンドルネームで自分を呼ぶ声が聞こえる。その非常識な行動に周りからの目が辛いものになる。しかも皐月に対して行われた行動なのでそこそこ恥ずかしい。

「ご足労願って悪かったね。メイ君」

「そう思うなら大声で呼ばないで下さいよ菊岡さん」

皐月の目の前にいるのは菊岡誠二郎という男だ。総務省の仮想課に所属している人物であり、GGOの死銃事件の調査をキリトに依頼した張本人である。

「それで、またSAOの時の話ですか？」

皐月は菊岡と顔を合わせるのこれが初めてではない。SAOがクリアされて半年ぐらい過ぎてから皐月はよく菊岡から話を聞かれていた。

その理由はもちろんある。菊岡が何人かのSAO生還者から感謝している人物は誰かという問いかけにメイの名前もしばしば上がったからだ。キリトはゲームをクリアし、全プレイヤーを解放した英雄

である。だが、直接的な恩を受けた者は少ない。

その分メイはゲーム内での貢献は大したことはないが、『食事処メイ』の存在によつて、荒んでいたプレイヤーを擬似的ではあるが日常に戻した。それによつて心を救われたというプレイヤーもいたのだ。

「ああそうだ。君にしか話せないことだからね」

互いにティーカップを手から離し、向き直る。普段は胡散臭さがある菊岡だが、仕事のこととなると真面目になるのたためこの時は信用できる。それに今回はメイにとつて深く関わりがあるようだ。皐月は手のひらを菊岡に向けて出し、話を促す。

「仮想課にとつてSAOはまだ解明されていないことが多いんだ。特に分かってないのは76層以降のこと。意図的にロックされてあるデータが大量に見つかった」

話の内容はキリトが終わらせたところより上がまだ解明されていないこと。だが1年も時間があつてそれが進まないのはロックがされていたからのようだ。だがこれを皐月だけに話す理由がわからない。

「見つかったデータの大半は2重や3重に鍵がかけられており、botなどで解除を試みたが、開けてみれば大したことはなかったんだ。mobモンスターの情報、街のマップなどが大半だった。今の新生アインクラッドの非公開データと一致する」

この解析は消されたSAOデータを無理矢理にバックアップし、破損箇所を修繕しながら新生アインクラッドと照合しながら行われている。利益がないという報告だけを、それもただの一般人に話すのはやはりおかしい。

(まさか、あれを開けられたんか…?)

皐月は、いやメイは一つの可能性に考えついた。今回の菊岡の話は自分にしか当てられていない。今聞いた情報からこれから推測するにメイが一番関係ある情報が出てきたということだ。

「ロックされたデータの中から明らかにおかしいものが出てきてね。そのデータは他と違って512のロックがかけられてたんだ」

512。その数字だけで皐月は察した。ヒースクリフとの交渉の

際、外からの解析を警戒して最大限に機密保護をしてくれると約束はしてくれた。それを時間をかけて破られたということを暗喩している。

「昨日、ついに512個目のロックが解除された。一つミスする度に1時間のインターバルを強要されたが、後半は茅場先生特有のパターン化が多かったから比較的楽だった」

皐月は歯齧みをする。予想するにSAOでとった行動でバレたくないことが多分バレた。候補は3つ。

ラフコフと店関係であれ会っていたこと

ヒースクリフとの会話

GM権限の使用の瞬間

ラフコフとの会話ならまだ言い訳はつく。脅された、自分の身を守るためだ。約束を破れば殺されるなど、嘘はない。

だが後者二つは絶対にダメだ。その間にも菊岡は大きめの鞆の中からパソコンを取り出し、ある音声データを流す準備をする。

準備が終わり、パソコンに繋がれたイヤホンを渡される。目の前の画面には再生マークがあり、クリックすればすぐに流れるだろう。

「これを聞いてほしいんだ」

覚悟を決めて皐月は音声データを聞くことにした。

『これは推測です、ヒースクリフさん。あなたの正体は『茅場晶彦』ではありませんか?』

やはり、バレたくないことがバレた。先ほど菊岡は大半が76層以降といったが、全てとは言っていない。やはり過去のデータにも目はつけるのだろう。

『いかにも、私が茅場晶彦だ』

ここまで来て皐月は心の中で舌打ちをする。これから先最悪皐月は事情聴取だろうか。この後もあの時の会話をほとんど聞き進められた

「これを聞いたのはまだ僕だけだ。君は茅場晶彦の正体を見抜いた。だが君はそれを周りに言うことなく、自分の中に押しとどめたようだね。その判断を責めるつもりは無いさ」

『君に何かする気は無い。今まで通りこのゲームを楽しんでくれたまえ。他のプレイヤーにバラされると困るがね』

多分この時のヒースクリフの台詞だろう。回りくどい言い回しであるが、これはバラせば命の保証はないという意味にも聞こえる。だがメイにとって問題なのはこれからだ

『私の正体を見抜いた褒美だ。何か希望はあるかね?』

この音声が聞こえた。多分この先の褒美のこともバレているだろう。ユイが目の前にいるレベルで冷や汗をかく。

『ザツ…ザザツ…』

だが予想を反し、次に聞こえたのはノイズの嵐だ。ヒースクリフとこの部分だけしっかりと聞こえない。

「解析できたのはここまでだ。この先の会話にもまたロックがあつてね。さて、ここからが本題だ」

菊岡はパソコンを片付け、臯月を見る。

「君もまたキリト君同様に茅場先生に認められたようだ。そこで我々の計画に協力する気はないかな?」

菊岡はヒースクリフとメイの約束のことは特に気にしていないようだ。それより彼が重要視してるのはメイが茅場の正体を見抜き、彼に認められたこと。他は些細なことらしい

「……どういった内容ですか…?」

臯月は警戒度を上げる。メイが持つてる秘密をギリギリのところまで暴かれたので仕方ない。

「そうだね。まずはその説明からしよう」

「というわけなんだ」

「これ今すぐ決めなきゃダメですか？」

聞いた内容は想像を絶するものだった。いくらなんでも機密性、重要性が高すぎる。一般人に話す内容ではない。

「今すぐとは言わないよ。3月末までには決めて欲しいかな」

今は年末であり、約3カ月の猶予はある。これは重要なので軽くは決められない。

「今日はありがとう。いい返事を待ってるよ」

2人は解散し、皐月は家に帰った。その道中皐月は生きた心地がしなかった。

—————

家に帰った皐月は気分転換にALOをしようとする。だがその前に部屋にあるパソコンにメールの通知が1件来ていた。差出人はALOからの自動メールだ。

『かねてより予定していたクエストが決まりました。1月5日限定の特殊クエストです。』

内容としては約一週間後に来る、限定クエストの内容だった。

「やっつですか……」

パソコンの前で皐月は呟く。その顔は笑っていた。

特殊クエスト&参加者達

年が明けて数日。今日は以前ALOから告知があった限定クエストの日だ。だがクエストの詳細は当日になってもまだ何一つ明かされることなく、その時になるまで分からないようだ。

今までのクエストは事前情報は大きなり小なりあったのだ。だがここに来て情報0。始まってから情報を集めるタイプかも知れないが、プレイヤー達は正月気分も抜けてないのでテンションは高い。

「明けておめでとう」

「「「おめでとう！」「」」」

全員が揃ったことを確認してからキリトが挨拶をする。それに応えるように他も挨拶を返す。

今日集まったメンバーはキリト、アスナ、メイ、リズベット、シリカ、エギル、クライン、シノン、リーファの9人だ。全員集まることは珍しい。

シノンはALOにコンバートをしており、メイと顔を合わせるのはいくらで何回目かである。

「正月は終わったんだけどアンタたち大丈夫なの？」

シノンが成人組に声をかける。学生は冬休みであるが三ヶ日が終わった大人はそれぞれがあるはずだ。

「今日はまだ休みだからな。それにこんなイベントは逃せないってもんよ！」

クラインの仕事先はホワイトのようなので、休みは適度に与えられる。長期休暇も普通より多いようだ。

「俺は普通に定休日だ」

エギルはこれ以上ない理由だ。

「ぼちぼち就職決まりそうや」

メイは調理師を目指している。それについて最近就職の誘いがあった。割もいいで嬉しい誘いではあるが、ただ上の人間が胡散臭い。

「それにしても情報が全く無いなんて初めてですね。このメンバーで私が一番長いことALOしてるのに経験ないですから」

「それに、クエスト参加者は開始前の13時までにはログインして下さいって表記も不思議でしたよね」

いつもは何かイベントがあるたび、リーファの感覚に助けられることもあったが、今回はあまり期待できない。それに公式すら情報を開示しないし、ユイの調べでも情報は入ってこなかった。更に加えてシリカの指摘した事前ログインをされていて欲しいとの注釈があるのも初めてだ。

「ということは全く新しいタイプか、厄介なボスがいるということだな」

キリトの言葉に全員が頷いた。少なくともアイテムを納品、または○○を○匹倒せのような、事前情報のいるクエストではないだろう。例えそれがあったとしても新しいフィールドでその時に知らされるはずだ。全員に情報なしというのは不公平になりにくい。

「あと2分で始まるわ。どんなクエストかな？」

アスナがとても楽しみな声で話す。迫りくる時間をまだかまだかと待ちわびる。

「前は参加できなかったからな。存分にやらしてもらおうぞ」

「私もここで盛大に暴れたいもんやわ」

キャリバー獲得クエストに行けなかったエギルとメイは鬱憤を晴らしに行くようなことを言い出した。話を聞いただけでもツールとの共闘は面白そうだったので行けなかった分は悔しい。

「3...2...1...」

時計を見ながらカウントダウンを始める。時刻はクエスト開始の13時になった。

パリン

遠くから何か割れるような音がした。その音がした方に振り返ってみると、新生アインクラッドの最上階付近から破片が落ちているのが光具合から分かる。

「えっ…」

全プレイヤーの目の前にウインドウが突然現れる。そこには限定クエストの説明があった。

- ・15分以内に参加するか決めてください
- ・クエストの制限時間は9時間です
- ・クエスト開催中は再ログインができません
- ・このクエスト開催中HPが0になりますと、自動的にログアウトします

・このクエスト開催中、情報閲覧に大きな制限がかかります。プレイヤー間でのメールは使用できません

・クエスト参加者は開始と共に特殊エリアにランダムに転送されます。

「なんだよこれ…」

届いた文面にクラインは声をもらす。ログアウトはできるようだが、いくらなんでもクエストを行う前提条件が厳しすぎる。

「ユイ、調べられるか?」

「任せてくださいパパ」

ユイは目を閉じ、情報を集めようとする。僅か10秒後、ユイの目は開き口を開ける。

「ダメです。外との情報が完全にシャットアウトされています。他のサイトにも繋がりません」

この言葉から察するに、このクエストは情報なしでやらなければならないということだ。何より厄介なルールは自動ログアウト。つまりは1発勝負だ。

「情報が漏れないように徹底してる印象があるわね」

リズベットは鍛冶妖精間での、独自の営業スタイルが漏れないようにしているところが少しあるので、守秘のやり方に思うところがある。だがクエストでこれをする理由がわからない。

「多分テストプレイみたいなものだろう。全員参加するよな?」

キリトの言葉に8人は頷いた。そして全員で参加ボタンを押し、クエストの概要を見る。

・旧SAO95層のボスが特殊ステージに脱走。これを直ちに倒せ。

報酬 黒鉄宮のEX枠に名前を刻印

これを見た途端、全員が驚いた。特にリーファとシノンを除いた7人は身震いをした。

「95層のボスかよ。これは負けられないな」

「ああ。たどり着けなかったから余計に楽しみだ」

エギルとキリトが笑う。それにつられるように他も笑う。そして9人を4人と5人のパーティに振り分けた。片方はキリト、アスナ、シリカ、リーファ、エギル。

もう片方はクライン、メイ、リズベット、シノンだ。

届いた特殊ステージのマップを見る。

「ランダムに転送されるようなので全員が集まってから入りましょう。強大であることは間違いないので他のパーティと組むことも視野に入れてください」

流石は攻略の鬼と呼ばれただけあって、アスナの指示の具体性、確実性はある。全員がそれに答えると時間がきた。青い光に覆われ、浮遊感に包まれる。そして転送された。

—————

クエストが発表された同時刻、ある小さなギルドも参加を決めた。そのギルドは6人で構成されている。

「名前が刻まれるんだって！これは予想外で嬉しいな」

「そうですね。本層でなくても記録がしっかりと残るならこれを逃す手はありませんね」

元気な声で参加することを決めたのは闇妖精の少女。歳の頃は15ほどだろうか。どうやら彼らはクエストの内容そのものより報酬の方に目がいつてるようだ。

「クエストの注釈からしてボクは大きな報酬があると思ってたんだけど、まさかここでこう来るとは思わなかったよ」

闇妖精の少女はギルドのメンバーの方へ向き直る。そして元気な

声でこう言った

「みんなーこの6人で頑張ろうね！」

こうして6人のメンバーは転送された。

—————

クエストが始まり、全プレイヤーがランダムに転送された。目標はボスの討伐。転送が終わり、メイは目を開けた。

「ははっ……」

目の前の状況に苦笑いしか出なかった。なにしろ5メートル先には明らかにボス部屋の雰囲気がある大きな扉があるのだ。

メイは扉の横に立て札があるのを見た。その立て札には3つの注意書きがあった。

・この部屋では翅の使用ができません

・この部屋では魔法の使用ができません

まず目に入ったのはこの2つ。相手がSAOボスであるならSAOのルールで行われることもゼロというわけではないし、何よりALOでは翅の使用禁止エリアもある。まだマシだ。

魔法の使用不可も別に不思議に思うことはない。SAOでは魔法は無いし、デュエルのルールで魔法禁止のルールを出す者もいるのだ。

1番問題なのは3文目だ。

・この部屋に挑めるのは1人だけである

パーティが組めないということだ。つまり早いもの勝ちということである。どこかでギミックを用意されている可能性もあるが、9時間でその情報を見つけ出し、解除できるかも怪しい。

メイは考えることをやめ、部屋の扉を開ける。

壁に備えられた松明に炎が灯る。そして入口の扉が勢いよく閉まり、ロックされる音が聞こえる。

全ての松明に明かりが灯り、ボスの姿が見える。人型ではあるが、全身に黒いノイズが走っていた。名前の表示は『■■■y』名前は文字化けを起こしていた。

「お、■■■■、だ■■■■？」

人型のボスはメイに話しかける。だがその言葉にもノイズがあり、到底まともに聞けるものではなかった。

「あー、まだそこそこ不完全みたいやなアンタ。悪かったな」

ボスはノイズの走った武器を抜く。メイも武器を構える。

「でもまあこれで終わりや。安心しいや」

2人は同時に駆け出した

僅か1分後、メイのHPバーは弾け飛んだ。

考察者&決意者

クエストが始まって20分。それぞれランダムに転送されたメンバーが集まりつつある。現在ボス部屋の前にいるのはキリト、シノン、リズベット、エギル、シリカの5人だ。

「あと4人だな。9人じゃ無理だと思うし他のパーティと組まないとな」

キリトはマップを開きながら言う。特殊ステージでもフレンドの位置はしっかり表示されるようなので、残りのメンバーの位置を確認する。

「あれ？メイがいないぞ？」

ここに来ていないクライン、アスナ、リーファの位置はすぐに確認できたが、メイだけ見つからない。そのことを把握したエギルはメイとパーティを組んでるシノンとリズベットに問いかける。

「お前たちは何か知らないか？」

言うタイミングを逃していたリズベットとシノンは、エギルが取り持ってくれたおかげで落ち着きを取り戻した。シノンがリズベットより前に出たので、シノンが説明するのだろう。

「メイはもう脱落したわ。開始3分で体力が消えた。減り方的には多分一撃死だと私は思ってる」

この事実を知らない3人は思考が止まった。ありえないことがいくつも重なっており、処理ができなくなったのだ。

「ちよ、ちよつと待て。それってつまりアイツは1人で挑んだってことだよな？」

まず我に返ったのはエギルだ。この中で1番歳上なだけあって、落ち着きや冷静さは高い。思うところはいくつかあるようだが1つずつ理解しようとする。

「これは候補の一つだけど、多分メイはボス部屋に飛ばされたんだと思う。いくらなんでも早すぎるし、誰かと違って1人で挑むほど馬鹿じゃないはずよ。」

リズベットは自分の予想を並べる。他にも候補は色々があるが、1

番可能性の高いものから提示し、現実味を持たせることにした。

しばらく話を進めることにしたが、やはり5人だけではまとまりにくい。残りの3人が到着するのを待ってから話すことにした。

クエスト開始から30分。まず1番近かったアスナが到着し、次にリーファとクラインが同時に到着した。リーファは初期転送位置が1番遠かったが、やはり風妖精だけあってそのスピードはピカイチだ。

全員が集まってからキリトはアスナ達に現在の状況を話す。やはりSAOでの攻略の指揮を執っていたアスナは状況の飲み込みが早い。

「メイさんが一撃死したということは、ボスはスカルリーパー並みの攻撃力か、大技を持っていると言うことです。前提としては前者を意識、後者は警戒レベルでいいと思われれます。」

メイは火妖精であり、SAOの引き継ぎに近いステータスだ。耐久の方にも並よりは振ってあるので、この情報だけでも大きなアドバンテージではある。

「でも何でメイさんは離脱しなかったんだ？あの人は無茶な戦いはしないはずだ」

クラインが素朴な疑問をぶつける。その疑問にSAO出身者全員はため息を吐いた。どうやら見当はついてはいるらしい。

「あのねクライン。さっきのアスナの言葉ちゃんと聞いてた？それにこのクエストの参加注意事項も読んでたら普通わかるはずよ」

リズベットが呆れる。相手はスカルリーパー並みの火力。そして明らかに制限された情報。この二つから攻略組であったクラインが気づかず、生産職のリズベットが気づくのがいかにクラインが鈍いことかを分からせる。

「つまりだなクライン。条件は75層の時と同じってことさ」

キリトがクラインに答えを教える。その答えにクラインは納得し、その時の戦いを思い出した。まず思い出したのはやはりあの火力。そして部屋のギミック。それは一度入ったら出られない部屋。

「出ようにも出られないってことか…」

「それにしても、他のプレイヤーも集まっているのに全然減らないですね。」

そう、こんなに話し込んでいればすでにレイドが組めるほどの人数は集まるはずだ。シリカが不意に出した言葉で全員がボス部屋の方を向く。50メートル先にボス部屋があり、その前にはすでにレイドが組めるほどの人数もいる。なのに数は減らないのだ。他にあるとすれば前から叫び声は聞こえるが、よく聞こえない。

「ちよつと見てくる」

シノンが立ち上がり、遠見のスキルを発動させる。弓兵には必須といてもいいスキルであり、遠くが見えるスキルだ。シノンが遠見で見たものは立て札だった。そこには例の3つの条件が書いてある。

「これはどうしようもないわね」

遠見を終えたシノンは振り返る。全員の方を向いてから看板に書いてあったことを要約して話し始める。

「あのボス部屋も制限が厳しいわよ。翅も魔法も使えないし、何より1人しか挑戦できない。だから進まないのよ。」

それを聞いた7人は呆然とする。全員が集まるのを待っていたので前の方では既に人は混雑している。

これと同時に疑問も解決した。メイがボス部屋の前に飛ばされていたと仮定すると、メイが1番初めに立て札を読んだことになる。彼女としては待つ理由がないのだ。

「でも連絡はできるのにしないっておかしいですよ？」

リーファの指摘は最もだ。単独で挑むにしてもそれくらいの報告はして欲しかった。いきなりのことで頭から抜けた可能性もあるが、独断専行はどうかと思う。

「1人ずつしか挑めない…ね。これはお兄ちゃん達に譲るよ。」

「私もその意見に賛成。因縁の深いアンタ達がどうにかするべきよ」

リーファの意見にシノンが乗る。2人は今回のボス戦を見送るようだ。旧SAOボスに挑みたい気持ちはあるが、目の前の6人は当事

者だ。横取りするのは気が引けたのだろう。

キリト達はリーファを引き止めはしたが、彼女たちの決意は固い。最後はキリトの方が根負けし、順番を決め始める。

「リーファ、やるわよ」

「任せるよシノンさん」

キリト達の後ろでリーファとシノンがよくわからない会話を始める。振り返ると矢を3本取り出し、弓にかけるシノンがいた。

1本目の矢を適当な方向にシノンは放つ。その矢は方角は適当だが、上に向かって打ち出され、そこで炸裂音を響かせる。

シノンの放った矢はただ音がするだけの矢だ。本来はモンスターからのヘイトを集めるためのものであり、ここで使うのは場違いである。だがその音は不意をつけば人の注目を集めれる。次にシノンは残りの2本の矢を同時に放つ。

放った方向は先ほど音の矢と同じ方向。だがその矢は先程と違い、音はせず、大量の光を放った。

「うわっ!?!」

「なんだ!?!」

全てのプレイヤーの視界が真っ白になり何も見えなくなる。だがリーファだけはこの作戦を知っていたので目の保護はしていた。全員が身動きが取れなくなるところでリーファは詠唱を始める。

「—————」

視界が覆われるのは30秒間であり、その間がリーファにとっての勝負だ。誰もリーファの妨害ができないのでリーファの詠唱は邪魔されない。だが途中でキリトが詠唱に反応する。

「—————」

リーファの詠唱には以前レコンが唱えていた魔法の単語が入っていたのが聞こえた。それは世界樹攻略の時に彼が使った闇魔法。だが時間目一杯使ったその詠唱はまだ止まらない。

詠唱はついに30単語を超えた。そのころに全プレイヤーの視界は取り戻され、詠唱中のリーファを見る。彼女の顔には誰もつけた記憶のない切り傷のようなものがいくつもあった。

「……！」

リーファの詠唱が終わった。並べた単語は37であり、最大規模の魔法だ。リーファの体からボス部屋の前にいるプレイヤー達に風の刃が大量に飛び出す。

「くそっ！」

「あっ!？」

刃は当たった者の体を泣き別れにし、また掠めたプレイヤーには掠めた部位から爆発が起こった。

だが詠唱に時間がかかったとはいえ、これだけ強力で広範囲の無差別攻撃にはそれ相応にデメリットがある。リーファの体には更に傷が増え、HPも削れていく。

「やあっ！」

誰かに止められる前にリーファは魔法の射出速度を上げる。爆発の音と煙で何も感じられなくなり、闇雲に打ち出す。

魔法発動から僅か12秒。ボス部屋の前は大量の煙に覆われ、何も見えなくなった。だがキリト達はリーファの後ろに立っていたのであることなく、少し煙が晴れたところでリーファのリメインライトが見えた。

「リーファー！」

キリトが叫ぶ。こんなことは望んでいなかったからだ。リーファもそれをわかっていたので誰にも言わなかったのだろう。アスナが蘇生を試みるが、魔法の代償の一つで蘇生は意味をなさない。

煙が少し晴れ、シノン煙の向こうをよく見始める。そこに一つだけだがプレイヤーの影が見えた。シノンは糸矢を取り出し、そのプレイヤーに向けて放つ。矢はそのプレイヤーに巻きつき、シノンはそれを引っ張りながら外に向かって全力疾走する。

「おい待てシノン！」

キリトが止めようとするが、シノンもリーファ同様止まらない。キリトは追いかけてようとするが、エギルに腕を引っ張られた。

「よく考えろ。アイツたちが何故こんなことをしたか分かってるのか？俺たちのためだぞ」

「このまま放つてとけるわけないだろ！」

キリトは叫ぶが、その横からクラインがキリトの肩を掴む。

「最初に納得した時点で俺たちの負けだったんだよ。」

これがSAOならそういうわけにもいかないが、ここはALOだ。彼女たちの気持ちが無下にはできない。

「分かったよ…。」

ここまで言われてキリトは納得するしかない。順番も決まったので挑むことを決めた。

—————

「いやー、オネーサンたちすごいね」

シノンは約500メートル走ったあたりで対象は拘束を解いた。闇妖精のプレイヤーはリーファの魔法を掠めただけですみ、左腕と右目を失ったが体力は残っている。

「ここでアンタを逃すわけにはいかないわよ」

「そうだねー。ボクもこの体じゃオネーサン倒さないとあっちに行けないし」

闇妖精の少女は剣を抜く。シノンと向き合い、勝負が始まった。

シリカ& ■■■

「誰も…いなくなつたな…」

リーファ、シノンの活躍によりボス部屋前のエリアにはキリト達6人以外誰もいなくなつた。まだここに来てないクエスト参加者はいるかも知れないが、今がボスに挑める最大のチャンスだ。

「それにしても、もう3人も脱落したんだね…」

アスナがポツリと呟く。最初は9人いたはずなのにクエスト開始僅か30分少しで3分の1が脱落した。シノンの体力はまだ残っているが、彼女は足止め役に徹しており、ここに戻ってくる気もない。

「順番も決めたんだ。ここで勝たなきゃアイツらに悪い」

エギルが全員を前に振り向かせる。ここでシノンを待つだけだと時間の無駄だ。彼女たちに体を張らせたのに成果なしでは格好がつかない。

「シリカ、いける?」

「行けます!」

リズベットがシリカに問いかける。シリカは気合を入れるように大声で返事をする。今回のトップバッターはシリカである。シリカは戦闘技術は他のメンバーよりは劣るが、一つだけ他のメンバーにはないアドバンテージがある。

「キューー!」

それはピナの存在である。ボス部屋には1人しか入らないが、ユイが可能な限り調べた結果、ピナは、タイムモンスターはその区分ではないようだ。

ピナがいることによりシリカは誰よりも動きやすい。焼け石に水程度ではあるが、回復はできるし、何より攻撃の手数が増える。SAO内では中層で活動していたシリカだが、ALOでの新インククラウドではキリト達と肩を並べて戦うこともできる実力はある。

「行つてきます!」

「頑張れよ!」

シリカが扉を開けて中に進む。彼女が部屋内に足を踏み入れるの

と同時に扉は勢いよく閉まる。やはりアスナの予想通りであり、75層の時と同じく一度入ると出られないようだ。

シリカの挑戦が始まった

—————

部屋の中は暗い。シリカが入ったことに部屋そのものが反応をすように壁に置かれていた松明が灯っていく。最初は真っ暗で何も見えなかったが、徐々に見え始める。

部屋の真ん中にいたのは人型のボスだ。ただその全身には黒いノイズが入っており、存在が不安定なように思える。

「■■、■■■は■■■な■■■」

口があるか分からなかったが、何やら言葉のようなものを話しているようだ。だがその声はノイズが大量に紛れており、意味を理解できない。だがシリカとしては以前挑んだスリュムのような口上のようなものだと思う、特に気には止めない。

「■■■か。■■■め■■■せ■■■う■■■」

ノイズが走ったボスはもう一度話す。やはり何を言おうとしているのか分からない。言語エンジンがあるというのは間違いない。ということはあのセリフは集中を削ぐために意識されたものだろう。気にはしていない。

相手の体力ゲージが出てくる。本数は3本であり、ボスを名乗る割には非常に少ない。1人で挑まされるのだからこれくらいの調整はやっともらわないと困るのだが、丁度いいだろう。

シリカは腰から短剣を抜く。それに合わせるように相手も武器を抜く。だが相手の武器にも黒いノイズがあり、形状、長さが定かではない。ところどころ形が変わってるようにも見えた。

ボスは構えたまま動こうとはしない。目がどこを向いているか分からないが、シリカより高い身長の手相手は顎を少し引いている。視線があるとすればシリカの顔だ。つまり出方を伺っている。

「行くよピナ！」

「キューー！」

シリカはボスを右側を回り込むように走り出す。ピナは反対に左

側に向かつて回り込み、簡易的な挟み撃ちの構図が出来上がる。相手にも翅は無さそうに見えるので、上に回避はできない。跳躍しても翼のあるピナの餌食だ。

駆け出すまで見届けたボスは、左方向のピナの方に動き出す。速さはシリカ以上だ。ピナとの距離は詰まっていき、シリカとの距離は開いていく。

ピナは相手の間合いに入る前に口から泡を飛ばす。耐久は低いが、ピナは中距離の攻撃が可能であり、それにより相手を牽制ができる。

ピナの泡攻撃は半分は避けられた。だが残りの泡は当たり、そこから破裂していく。泡にはデバフ効果も乗っており、対象のAGIを30秒の間15%下げるというものだ。

「■っ」

ダメージとしては大したことはない。削れた体力は約2%だ。だが足を奪えれば勝機はある。距離を詰められたピナは空中からシリカの肩に戻る。

「でやあああああー！」

両手で短剣を握りしめ、シリカは単発短剣スキル『アーマー・ピアス』を放つ。ボスはそれに合わせるように武器で受け流そうとするが、横からピナが体当たりをし、体制を崩す。

シリカの攻撃は当たり、後隙もないアーマー・ピアスを連続で放つ。2発は当たったが3発目は上に跳ねあげれる。シリカは後ろに退き、構えようとする。

「うそっ!?!」

だがボスは退いたシリカに構えられる前に走ってくる。下からの斬りあげを避け、そこから繋いで横に振る。対処しきれずダメージを受けてしまう。

ピナは上に飛び、シリカの援護を試みるが、ここで誤算が生じる。ボスは武器を噛み、一度飛びシリカの肩を踏む。そしてそこからシリカの肩を踏み台にして片足だけで飛んだ。高さはピナの元まで届き、ピナの体を掴む。そしてそのまま着地した。

着地したボスは腰からノイズのかかった細いものを取り出す。そ

してそれをピナに刺した。

「キョー！？」

「ピナー！」

ピナの体から力が抜けるのがみてわかる。あの細いものには何かしらの効力があるのだろう。ピナはその場で倒れ伏し、動かない。

「■■■■い■■■■は■■■■タ■■■■」

ピナの体力は削られ切ってはいないが、ピナがやられたことにシリカは怒る。シリカは4連撃『ファッド・エッジ』を放つ。一撃目から命中し、次々と突いていく。3発目までは当たったが、間を縫われて4発目は避けられた。

だが飛びのいて避けられたため、硬直時間を突かれることはない。相手が3歩目で硬直が終わり、振り下ろしを探検で受ける。

受けた瞬間に腹部に衝撃が走った。体は後ろに追いやられ、蹴られたことが後からわかった。おそらくはナイフで受けた瞬間に出る死角からやられたのだろう。

シリカはもう一度ファッド・エッジを放つ。シリカの最大火力はこれなのでまだ2割ほどしか削れてないライフをどうにか削ることを考えていた。

「■■た■■」

「でやあー！」

一撃目、スウエーバックで避けられる

二撃目、相手はしゃがんで避ける。体は前に傾いている。

三撃目のモーシヨンの途中で違和感に気づいた。

今度は肩を刺されていた。モーシヨンの途中なのにだ。途中で体制が大きく変わったので自動的なキャンセルが入る。硬直時間の間に相手の武器はエフエクトを纏う。

相手が行ったのは5連続スキルの攻撃だ。シリカはまだ見たことのない動であり、突き技だ。シリカは全て受けてしまい、体力が残り半分を切る。だがシリカは確信した。相手は一撃技を使ってこなかったのもまだ使われない。火力も低いのでまだ戦える。

一度落ち着いたシリカは1〜3連撃の技で攻めていくことを決め

る。連撃技はまた間を縫われる可能性があるので単発をメインにすることを決めた。再びアーマー・ピアスで攻め込む。

ピナが突然起き上がる。そして目標を決めず、ただ口から泡系の攻撃を撒き散らす。ピナが倒れてから狙われないように立ち回っている。シリカはその攻撃を受ける。そしてシリカは急激な眠気に襲われた。

「■つと■■た■」

何か言ってるようだがはつきり聞こえない。眠気に抗うが足に力は入らず、目のほうも定かではない。

相手が走ってくるが足が動かない。ボスは姿勢を急に低くし、シリカの脚の腱の部分を斬りつける。シリカの眠気状態はそれで解除さ

れた。だが臍を切られたのでうまく立てない。片膝を地面についたまま短剣を構える。

ボスはシリカの周りを走りながら荒ぶるピナに太めのノイズのかかった武器で動きを止める。ピナは避けることもせず壁に固定された。シリカはその様子を見るだけだ。立てないので庇えない。

思えばボスの狙いはピナがメインだった。シリカはピナとの連携によって強者足りうる。ピナを封じればただの中レベルのプレイヤード。

ボスはシリカの周りを走り続ける。シリカは目で追うが、後ろまでは見えない。そして地面を蹴る音が聞こえた。

「あ」

ボスの頭がシリカの目の前にあった。そして腕には武器。その武器を首の形に沿われ、喉をかき切られた。

着地の瞬間に腕を踏まれる。シリカは短剣を落とした。顔をもう一度あげればボスが見下ろす形でシリカを見ていた。

「おまこ」

最後だけはつきりと聞こえた。そう言われた時には自分の視界が回っていることに気づいた。

シリカは首を刎ね飛ばされて負けた。

中の様子を見ることのできないボス部屋の前でキリト達はシリカの勝利を願う。だが負ける可能性もあるので唯一の情報源であるシリカの体力の減り方を見るしか他にできることはない。

だが結果としてシリカは負けた。いきなり体力を半分ほど削られた時にはやはり高火力持ちということが確定的になり、次に3割以上のライフが全て消えたので2発で落ちることは間違いない。アスナとキリトは以前90層ボスクラスの死神を地下迷宮で見たことがあるので、そのくらいの強さだと予想した。

「シリカも負けたのか…」

だがいくら情報が入ったところでシリカが負けたことには変わりはない。結局相手の火力しか分からないが、メイの時より進歩したとは思えない。

「…ちよつと待って。」

「どうしたアスナ？」

唐突にアスナが呟く。先ほどのシリカの戦闘で思うところがあった。体力が半分以上減ったのにも関わらず、シリカの体力は回復することが一度もなかった。ピナがいたならば少しでも回復はするはずなのにだ。ここからアスナの中で仮説が立てられた。

「シリカちゃんの体力が一度も回復されなかったことはピナが回復ブレスをしなかったってことになる。そうなるとそのボスは真っ先にピナを倒したかピナを行動不能にした…?」

この仮説を聞いたメンバーは冷や汗をかいたような感覚になる。シリカではなくピナが先にやられたのが偶然だとすれば気に止める必要はない。

「もし、ピナが真っ先に狙われたとすれば…」

そうなるとボスには合理主義的なAIが備わっていることになる。モンスタータイマーは相棒との連携が命である。それを奪われたなら途端に厳しくなる。

「つまり、駆け引きが必要ってことね」

リズベットが片手棍の持ち手を地面に突く。次の挑戦者はリズベットであり、駆け引きや交渉といったスキルは武器屋を経営している彼女の得意分野だ。生産職の希少性、自分の鍛冶スキルの高さから値段を高め設定し、相手を強引に納得させることから彼女は仲間内からぼったくり扱いされている。

「それなら俺も得意なんだけどな…」

リアルでカフェの営業、そしてゲーム内では雑貨屋を経営しているエギルもその例外ではない。メイもその区分には含まれるのだが、シリカ以上に情報がないはずなので納得するしかない。

「何よ、多分私が一番弱いかも知れないけどもそれでもアンタ達とはそれなりに戦ってきたつもりよ。勝ってみせるわよ」

周りから少し不安の目を向けられたリズベットは不満を漏らす。リズは普段は鍛冶のことをメインにしており、戦闘はそれほど積極的ではない。それでも素材集めには行くことも多いので戦闘経験は十分だ。

「それじゃ、行ってくるわよ。」

「頑張ってるわリズ！」

リズは気合を入れる。一番付き合いの長いアスナが激励を送り、リズベットは嬉しくなった。私だってみんなと同じように戦える。それをはっきりと証明できそうな気がした。

—————

リズベットはボス部屋に入った。ドアが閉まり、ロックがされる。そして松明に明かりがついていき、部屋全体が見える。真ん中にはボスが立っていた。

「■は■か。■■って■■」

その言葉にリズベットは戸惑う。何か意味はあるのだろうか解析できなければ分からない。鍛冶師であり未知のものに惹かれはするがあれは倒すべき敵だ。片手棍を構えて出方を見る。

ボスは統計的に先制攻撃を仕掛けてくることが多い。リズベットもそれを理解しているためこの行動をとった。だが相手もリズベットの方を見ており、動く気配がない。やはり優れたAIがあるのだから

う。

先に痺れを切らしたのはボスだ。瞬時にノイズの走った武器を抜き、構えた足に力を入れて一気に駆け出す。リズベットはその速度を見て回避は間に合わないかと瞬時に判断し、片手棍で受ける。

リズベットは相手の武器を見る。ノイズが入っており、形状はおろか、間合いさえもはつきりとしれない。偶に形が変わっているように見えるのでやりづらい。今はクラインの武器と同じぐらいの長さだ。リズベットは相手の間合いを確かめることにした。

相手はリズベットとの距離を詰める。武器を突き出されたので同じようにリズベットは受け流す。その途中でボスは急に姿勢を低くする。

「んな!？」

リズベットの足に足払いをかけてきた。完全には決まらなかったがそれでも姿勢を崩してしまう。再び詰めてくる。まだ万全ではない体制で攻撃は避けられない。リズは突き出しと振り抜きを受けてしまう。

「■そ、■■ら■」

体制を戻して飛び退いたリズベットは構える。相手の間合いがつかめない。ならもう諦めるしかないかと判断し、リズベットは仕掛ける。

単調な棍を振り、わざと避けられるようにする。相手は想像通りに避けてくれたところで一步駆ける。そして片手棍単発スキル、パワー・ストライクを放つ。範囲技であるため当てやすい。

相手は受けたものの威力で後ろに飛ばされる。そして短くても硬直の間に全力で詰めてきた。リズベットは武器同士を打ち合わせ、結果として互いに弾かれる。リズベットはその体制から3連続スキル、トライス・ブロウを放つ。相手は受けようとするが、筋力値に補正の入った攻撃に受けきれなかった。攻撃は全て入った。

「■■、く■っ」

相手にスタンが入る。この好機は逃さず5連続スキルのダイアストロフィズムを放つ。また全ヒットし、ボスの体力は1本目の5割を

削る。

5 発目の打ち抜きで間合いが再び開く。今までのやり合いからリズベツトは相手の武器に予測がついた。

1つ、相手はスキルを使いたがらない。形状が変わると言っても武器の種類は変わらないようだ。スキルを使えばアドバンテージが失われる。

2つ、相手は距離を詰めたがる。刀ほどあればリズの間合い外から攻撃できるのにしない。それどころかリズの武器の方が長く感じれた。間合いは短いはず。

ここからリズベツトは相手の武器を2択に絞れた。曲刀か短剣のはずである。

ボスが詰めてくる。やはり距離は短くしてくる。刀の間合いなのに攻撃もしてこない。リズベツトは受け流そうとする。

だが今度は違った。相手は武器を上 to 投げる。自由になった手でリズベツトの手首を捻りこむ。体が回って地面に叩きつけられる。相手が上になり、武器が手元に戻っており、両手で握り込んだ武器で突き刺しにくる。リズベツトの胸に当たってダメージが入る。

もう一度相手は刺そうとする。リズベツトは右足を引っこ抜き蹴り上げる。武器の面に当たり、そのままの相手の握り込んだ手を相手の顎に当てる。

武器を蹴り上げた感覚として、短い。そして曲がってることはなく、直線的であった。短剣だと確信する。

相手は思わず飛び退いてしまい、リズベツトはそこから脱出する。そして再び相手に向き合う。

リズベツトは運が良かった。いつ、どこで条件を満たしたのかは彼女自身にも身に覚えがないが、ボスの武器にかかっていたノイズは完全に消えていた。

その武器を見てリズベツトの思考は止まった。意味が分からない。どうしてそれがある。

彼女がその武器を見間違えるはずがない。

どうしてその武器がそこにあるのか分からない

嫌だ、嘘だ、やめて。そう言った感情しか湧いてこない。

カラン

リズベツトは片手棍を落としてしまう。両手で口を抑える。絶望感に襲われ戦闘どころではなくなった。

「■■■■、バ■■て■■■た」

ボスが何か呟く。多分隠したい情報がバレたことを嫌がっているように見えるが、それどころではない。

「なんで…、それを持つてるのよ…。」

やっと声が出る。相手はそれを構えながら答えた

「ア■■■が■■■っ■■■くれ■■■ら」

やはり分からない。だが受け答えはしているようだ。リズベツトはつい怒鳴ってしまう

「はっきり答えなさいよ！なんでアンタが

ハー」

詰められていたことに気づかなかつた。リズベツトは口を切られ話すことが難しくなる。そして相手は姿勢を低くし、リズは目で追う。

「また■で■」

心臓の部分を深く刺され、挟られる。貫通した刃に体力を削られる。リズベツトは、何も分からないまま負けた

クエストが始まってからまだ1時間も経ってはいない。それなのに脱落者ばかりが増えていき、ついに部屋の前には4人しか残っていないのが今の状況だ。

よくよく考えてみると1人ずつしか挑めないというのはプレイヤー達にとっては辛いものがある。本来SAOは協力してクリアすることを前提にされているのでボスは当然ながら強い。なのでレイドを組むのは必然であり、それぞれの役割が渡される。完璧なステータスなど存在しないので当たり前だ。

「やつぱり鬼門じゃねえか…」

メンバーが残り半分を切り、クラインが現実を再確認する。仲間を待つ間にも精神面は削られていき、押しつぶされそうになる。SAOだと発狂していたかもしれない。

「やつぱり何も分からないな…」

リズベットが負けたとはいえ、何かないかとキリトは考える。体力の減り方で火力だけはわかるが、やはりそれ以上の情報はない。モンスター相手にこれほどやり辛いのは久しぶりだ。

「いや、分からないことなど無いわ」

アスナが何かに気づいたような発言をする。やはり攻略の指揮を取っていただけあり、微かな情報も見逃さない。

「メイさんに使われた一撃技が2人には多分使用されてないと思う。そんなのがあればリスクがあつてもボスは使うはずよ。」

2人も挑んでそのような攻撃を彷彿とさせるような事は一切ない。持ってたとしても技発動後のリスクはあるかもしれないが、あればそれでもうつだろう。だが未だメイにしか確認はされていない。そのことはシノンとクラインからは聞いている。

となると発動条件がある。それを満たしたのがメイということだ。だがクエスト開始から3分以内で脱落した上で条件を満たしたことになる、相手の体力関係ではないと思える。

「確定情報じゃないのに予測だけで突っ込むと足元をすくわれる

ぞ」

考え続けるアスナに対してエギルが止めにかかる。少ない情報から何とか予測するが、あくまで予測を超えないので先入観を持つのは危険だと判断した。実際1層ではβテストの情報を盲信してディアベルが死んでいるのだ。

「……めんなさい」

アスナが思いとどまる。常に誰も死なないように考えてきて彼女は無意識に責任感を抱いていた。それをいち早く止められたエギルには流石というしかない。

「俺が行く。キリト、アスナを任せるぞ」

「ああ、負けるなよエギル」

何かと付き合いが長いのでこれ以上の言葉はいらない。エギルは目の前の扉を開け、中に入った。

—————

エギルが部屋に入るとそれに反応するかのように壁に設置された松明に火が灯る。扉が閉まってロックされるような音もした。ここまではアスナが予測した通り。部屋のギミックは見てきた上、これまでの経験から焦ることはない。

部屋の真ん中にはボスがいる。人型であり、今までのバスのような迫力には欠ける。だが全身にはノイズが発生しており、不気味に思える。

「■■■■ギ■■■ん■■■」

ボスが何か言うようだがエギルにはわからない。意図的に隠してるとなると発言に何かボスに関するヒントがありそうな気がする。

「何か言ってるようだが分からんな。商談なら乗るぞ」

つい悪ノリで返してしまふ。ここには2人しかいないので話すことが重要だと自己判断を下した。何か反応があれば儲けものだろう。

「■■っ■■■変■■■せ■■■ね。そ■■■も、■■■はも■■■す■■■。」

試した結果エギルの予測は当たった。受け答えだけはしっかりとしており、言語エンジンどころかユイレベルのAIだと確信する。これならシリカが挑んだ時にピナが先に狙われた線は濃厚だ。

ボスが武器を抜く。それにはノイズが入っており、エギルには見たこともない種類だ。リズベットがギミック解除をしたが、その状態はプレイヤーが変わるたびにリセットされることを誰も知る由はない。引き継ぎではないということだ。

エギルも武器を構える。両手斧は攻撃力も高く、また面が広いので何かと便利だ。

ボスが距離を詰め突きにかかる。エギルは手首を捻り広い面で防御する。そのままもう一度捻り、相手を弾き飛ばす。

「ぬんっー」

軽い

一度受けただけでよく分かる。相手に筋力値はエギルより低い。そして武器の間合いも短いとも取れた。刀ぐらい見た目はあるが、先端がエギルに重なったのを彼は見逃さなかった。武器は見掛け倒しだ。

相手は詰めなければならぬことが判断し、またその距離内と筋力値ならエギルの方が圧倒的に有利だ。互いに詰めるしかないの考えるより先に動く。

先にモーションに入ったのはボスだ。下から斬り上げの動きをと、刃の付け根で受ける。当たった瞬間に飛び退かれた。

ボスが走ると同時にエギルも構えて走る。受けに回っては手数とヒットアンドアウェイでジリ貧になる。相手の間合いより先にエギルは斧を振る。相手は武器で受け、その瞬間にしゃがむ。そのまま振り抜こうとしている。

エギルは瞬間的に判断し、武器を振り上げて防ごうとする。だが間に合わず腰のあたりに喰らう。それでも何とか相手を上に持ち上げた。

落下位置に合わせて2連撃範囲技の『ワール・ウインド』を放つ。ボスもそれが当たるより先に2連撃範囲技で合わせる。

エギルはその動きで相手の武器を判断した。動きは短剣スキルのラウンド・アクセルだった。これで武器も分かった。

相手は武器がバレたことが分かったようだ。なので単発スキルの

アーマー・ピアスで攻める。エギルも単発のスマッシュを放つ。互いにダメージは喰らうがボスの方が不利だ。

ボスはやり方を変え始めた。エギルの首を狙い始めたのだ。唐突に喉に迫るノイズの短剣を避ける。首の薄皮が切られたような感覚が出る。斬り上げ振り抜けを防ぎボスは5連続スキルのインフィニットを放つ。エギルは面で3発受け、残りの2発を受ける。

「うおおおおー！」

「ん■っ!？」

だが受けながらモーションを取り7連撃重攻撃のクレセント・アバランシュを放つ。ボスがそれを全て受け、体力が一本目の9割減った。そして大きく弾き飛ばし、壁に叩きつける。

硬直が解けると互いに動く。受けあいをすれば有利なのはエギルであり、体力はボスの方が削られる。だから受けるつもりはないはずのボスはアーマー・ピアスで動き続ける。エギルもスマッシュで防ぎ続けた。だが2連撃のクロス・エッジを放たれた。全てくらったがエギルは斧を体に当てた。だがエギルの体力も消耗しており、残りは約4割程だ。

「り■■ね」

一本目の体力が全て失くなり、ボスは飛び退いた。そして体の周りのノイズが少し剥がれ、ノイズの体の上に灰色のローブが出てきた。

ボスは再び走り出し4連撃のファッド・エッジ繰り出す。4発全てをかする程度で済み、エギルはランパージャックを放つ。だがそれを武器の付け根のようなもので引っ掛けられた。

「捕■■」

そのまま罅迫り合いになり、パワー有利のエギルは速攻で弾き飛ばした。そして構えようとした。

急に目の前にノイズがかかった細いものが3本飛んできた。それらを全て斧の面で受け切って落とす。

「■■っ」

「危ねえ…」

何か覚えがある。だがそんなことも気にしてられない。ボスが走って3連撃のシャドウ・ステッチを放つ。受ければ麻痺状態になるスキルだ。動きを知っているので2発は面で受け3発目は避ける。そしてクレセント・アバランシユ。硬直してるので全て当たり、体力の6割を削り取る。

再び距離を取られたボスは足を踏みしめながら立つ。そして何も握ってないはずの左手を無造作に引いた。

ピウツ

エギルの後ろから首に違和感が走る。先程防いだはずの細いノイズが飛んでいた。エギルの首に当たったのだ。

それが当たると途端に視界が霞み、そして回り出す。位置が特定できない。ボスが走ってるように見えるが、右に左に動くので余計に分らない。そして3連撃の何かのスキルを喰らう。エギルの体は動かなくなった。

「お、前、……ま、か」

舌も回らない。麻痺状態幻惑状態という最悪の状態になり、今や何もできない。体力を半分削ったがここで負けるのが分かった。

「■■■■、■■■■■■■■」

多分耳にも状態変化があるのだろう。エギルの視界は更に回る。視界の周りが治ったのはログアウトしてからだ。攻略組のエギルの挑戦はここで終わった。

作戦続行者&傍観者

場面は変わってここはボス部屋の外。一面に広がる草原の中で二人のプレイヤーが未だに闘いを繰り広げていた。

片方は水色の毛並みの猫妖精であり、名前はシノン。弓を持つているが矢筒の中には残り2本しかなく心許ない。GGOからの自分の狙撃手のイメージをある程度払拭はでき、今や仲間の火妖精からの勧めで短剣を握っている。

「オネーサン強いね。こんなに苦戦するのはこのゲームでは初めてだよ」

もう片方は闇妖精の少女。だがリーファの魔法の影響により彼女のパーティは壊滅し、残りは左目と右腕を失った彼女のみ。爆煙が充満してる中シノンに連れられた。

少女にとっては最悪のコンディションでの戦いになる。片目が潰されたことにより距離感はなく、また利き腕ではない手で剣を握っているのだ。そんな中戦えるので実力はとてつもなく高い。

シノンもそれは分かっている。今までの撃ち合いから剣の振り方もおかししいし、視界も悪いのに少し押されている。相手が万全ならすぐに負けてここから逃げられただろう。

「そういやこんだけ打ち合ったのにまだ名前を聞いてなかったね」

闇妖精の少女がつぶやく。やはり剣士の矜持がある者は作法に拘るところがある。シノンが知ってる中ではクラインやアスナやキリトが特にそういった傾向があると思う。

「…私はシノン。ただの殿よ」

「ボクはユウキ。よろしく」

ユウキと名乗った少女は慣れない左腕で剣を構える。シノンも短剣をしまいメイン武器の弓を引く。

距離感の測りにくいユウキは弓で射られる訳にはいかないのだから手を自分の間合いに引き込むしか無い。翅を広げて弓の焦点が定めさせずに突撃していく。シノンは対応しきれず弓を構えたまま右往左往させられる。

ユウキの袈裟斬りをシノン は避ける。だが剣の先に防具をかすめてしまいダメージは防ぎきれなかった。そこからユウキは一步前に詰め片手剣4連撃バーチカル・スクエアを放つ。シノンは一撃目は避けたが体制を崩してしまい、残り3発は受けた。

だが相手にスキルを使わせ、それも受けるのもシノンは想定していた。シノンの勝利条件はユウキの足止め。ユウキの勝利条件はシノン を倒しボス部屋に向かう。目的が違うのだ。

(だったらー)

4連撃目を受けながら足に力を入れる。体力は既に3割を切った。先ほども弓の弦に当てていた程度の弓をユウキが硬直している間に一本しかない切り札を一気に引き絞る。

引き絞られた矢にスペルが浮かび上がる。既に魔法が編み込まれておりすぐに発動する仕掛けだ。シノンはゼロ距離で弓を放つ。

当たったそばから黒い大爆発が起こる。設定されていた魔法は闇魔法の爆発系の類いだ。その威力は絶大であり半径5メートルの爆発だ。その中心にいる二人は体力もろとも消し飛んだ。

先ほども述べたがシノンの勝利条件は足止めだ。自分の体力を残す必要もないと判断し自爆での道連れを選んだ。リーファに当てられたのは確かだが判断は間違っていない。

二人の勝負は相打ちではあるが、目的を果たしたのはシノンだ。なのでシノンの勝ちと言ってもいいだろう。

—————

A L O内とある場所。白い部屋のような場所で一人の男が座っている。ここは普通プレイヤーが立ち入りができないどころか存在すら知らないような場所であり邪魔されることはない。

「あー、またそんなもの食べてる。いくら栄養面に影響ないからつてどうかと思うよ」

いや、どこからかどうか分からないが少女の声の邪魔が入った。男は手に持っていたラーメンを置き、声の主に話す。

「これでも週に一度しか食べてないよ。彼女の料理から再現したデータだけあってその辺は合わせている」

「そんなに美味しいの?」

男は後ろから冷蔵庫のような箱を7つ出して指を指す。それぞれの箱には各曜日が書かれていた。

「君も食べるといい。そうすればわかる」

少女は言葉を飲み込みながらその箱に向かう。目視できる距離になれば服にはMHC P6というクソダサイTシャツを着ていた。ただ全身にはノイズが走っているが、声は聞こえる

「ラーメン狂いの茅場晶彦が他の料理を分かるとも思えないけどね」

暗闇の中座っていたのは茅場晶彦だ。ラーメンを食べながら目の前のモニターを見る。映っているのはボス部屋前であり、3人のプレイヤーが話しているだけだ。

「これ今どこまで進んだの?…うまい…」

少女は杏仁豆腐を食べ始める。その甘さは初めての体験であり、とても美味しい。それと同時に質問もしていた。

「全員が挑んで負けているよ。その中の一人は攻略組だ。」

「あの子ついに勝てたのか。どこまで行けるかわかったもんじやないね。…まあ相性も良さそうだし?」

茅場が状況を説明する中少女はまた冷蔵庫を漁る。次に取り出したのはプリンだった。

「そもそもなんで君は止めなかったんだ?一番最初に目をつけたのは君のはずだ。」

茅場が少女に問う。彼女はユイの姉妹のようなものであり役目は同じだ。またユイのような記憶消失もないので仕事はふつうにこなす。

「精神状態の検査した結果としてはガツタガタだったよ。でも私が行こうとした途端にしばらく安定するんだから行けないし、最後の方は維持を続けてるしね。ユイみたいな末路をたどるのはいやだね。」

勝気な言葉で返す。MHC P6は現実主義でありまた合理主義だ。自分の仕事を優先しているので姉と同じことはしたくなかった。

「君は姉に容赦がないな。それで、今現れたってことは私に報告が

あるのではないか？」

はあ、つと溜息をつく。やはり生みの親には全てが見透かされてお
り少女としては私が必要あるのかと感じる。そこまで把握して
る自分でやればいいじゃないかとも。

「今の精神面はガツタガタだね。私としてはストレアとかに行かれ
る前に行きたいんだけど行ったら申し訳ないでしょ。それで気分
でも損ねたら何されるか分かったもんじゃないよ。」

その答えに茅場のスープを飲む手が止まる。予想していた答えと
違っており、また彼女の報告には嘘や隠し事など今までなかったの
で信用している。だからこそ予想と反したことに驚いた。

「……やっぱり分からないな。何もかもを捨ててその道に進んだの
に満足してないとは……。」

「目的が変わったからでしょ。あの状態で平気を保てるのが一番お
かしいよ」

茅場の答えに食い気味で返す。少女も茅場の横に座り木曜日と書
かれた箱の中からマルガリータを取り出す。そして二人でモニター
を眺めながら無言で食べ勧めた。気まづくなり口を開いたのは少女
だ。

「あの3人の中で誰が勝てそう？ 私は2人は可能性あると思ってい
るけど」

「奇遇だな、私も2人だ。恐らく君と予想は同じだろう。」

「私としてはあの子の精神面が崩壊しない限りなんだっていいんだ
けどね」

「今、何を思ってあそこに立っているんだろうね？」

部屋の中央に立つ者の末路は二人にも分からない

虚しい

クエスト開始から1時間半。既にパーティは3分の1にまで減ってしまい、俗に言う壊滅状態にまで持ってかれた。

部屋の前に残されたのは僅か3人。最初は仲間が1人1人と減っていくにつれ辛い思いをしていたがここはALLO。相手は旧SAOボスだが死ぬことはなく、みんなの仇討ちを果たして朗報を持って帰ると決めてモチベーションを取り戻した。

「エギルも負けるのほどの強さか…。底が見えないな」

「でもボスの火力の上限も見えたはずよ。となると火力での撃ち合いが一番効率がいいのかも知れないわ」

「残ったの脳筋だけだもんな」

残ったメンバーはキリト、アスナ、クライン。挑んだ9人の中でもトップクラスの脳筋であり、また実力も上からの3人だ。エギルとクラインは同じぐらいだが最近のログイン率ではクラインの方が高く、今2人が戦えばクラインに軍配が上がるだろう。

「さて、次は順番通り俺でいいよな?」

次の順番はキリトだ。戦闘能力が一番高く本来なら最後に回ってきてもおかしくはない。だが順番を決めたのはくじ引きなので関係ないのだ。

「モンスター情報はどこにも出回ってません。私でも中には干渉できなくて本当に1発勝負ですよ。パパ」

キリトのポケットの中からユイが飛び出す。キリト達の前で挑んで負けた3人の間、ユイもどうにかしようとして頑張ってはみたが本当にどうしようもなかった。その上ユイも中に入れないようなので直接分析することも不可能だった。

「任せろ。倒してくるよ。」

そう言いながらキリトは扉に触れる。その瞬間にユイは消えてしまいキリトのアイテム欄に入る。

「頑張ってねキリト君」

「頼むぞキリト!」

同じ部屋に入ることにはできないが後ろから応援があるだけで勝てるような気がする。部屋に入ると勢いよく扉は閉まった。

キリトは部屋の中に入り、それに反応するかのように壁に設置された松明が次々と明かりを灯していく。中にはキリトにとつてみたこともないようなボスがいた。人型で全身にノイズが走っていた。

「■っ、も■ン■。そ■っ■ら」

ボスがキリトを目視すると話しかける。何を言ってるのかは理解できなかった。そしてボスはその場でいきなり手を叩き出した。

するとキリトは青白い光に包まれる。いきなりのことと目を瞑ってしまったが、まだボスの体力ゲージが出てなかったので襲われることはない判断した。

光が収まると目を開く。するとキリトの装備は変わっていた。黒のコートは種類が変わっており、懐かしさを感じる。ALO妖精特徴の尖った耳も普通になっている。武器もエクスカリバーは消えてエリシユデータとダークリパルサーになっていた。つまりSAO装備になっていた。

更に目の前にはウインドウが開いていた。そこに書かれていた内容はこの世界には普通なものだった。

「：限定： 二刀流スキル習得」

更に詳細を開くとキリトが習得していた全スキルがそこにはあった。相手が旧SAOボスであることもあり、サーバーがSAOからの改変であるため限定的に合わせられたのか。

それと同時にキリトはふと考えた。今SAOの時に合わせられたということはクエスト制作者は恐らくキリトのことを詳しく知っている。そしてこんな芸当ができるのは知ってる人で一人しかいない。

「茅場晶彦か…」

「■■え■か？」

ポツリと呟いたことに反応される。キリトが武器を構えようとボスにも体力ゲージが現れ、ボスはノイズの走った武器を逆手に持つ。

久しぶりに戻ってきた二刀流スキルを慣らしたい気持ちはキリト

にはあるが、ここはボス戦。実戦で使いながら感覚を取り戻すしかない。

そう決めたらキリトは早い。先手を取られるより先にボスに向かって走り出す。キリトが剣を突き出すために腕を引くとボスが一步詰める。それにより剣が前に向かって突き出される時にはすでに刃の中心より手前にいた。

キリトの攻撃を流されボスは武器を振り上げる。交差した剣で防いでバツクステップで距離を取る。そしてもう一度近づき右、左、左、右でスキルを使わず攻撃を繋げる。その手数多さにボスは責められない。

(まだまだ、まだ上がる！)

久しぶりの感覚である時のような速度はまだ出ない。今日の前の相手に勝つにはまだ速さが足りない判断した。その証拠に慣れられたので今降ってる剣は何回か避けられてる。その間にもボスは斬り払い斬り上げ振り下ろしで攻撃をしている。

「はあっー」

体のギアが入れ替わるような感覚がする。時間が経てばキリトも感覚を取り戻し更に速度が上がる。受けきれなくなってい突き出しが胴体に当たる。

その隙を流さないように二刀流15連撃スキル『シャイン・サーキュラー』を放つ。スキルの補正により更に速くなる。ボスは避けようと試みるが全てを避けきれない。最初の2発と8発目と11発目は避けられ、何回か流されたが半分は食らった。14発目で武器を上にかき払い15発目の斬りおろしは当たる。

15連撃目の終わりに更にキリトの剣は光る。終撃モーションからスキルを繋げ5連撃スキル『デプス・インパクト』を放つ。

「■■■や■■れ!」

今キリトが行ったのはシステム外スキルのスキルコネクタだ。スキルからスキルに繋げ攻撃を続けるという技だ。振り向き斬りからの5連撃を全て攻撃を与えゲージを削りきる。

一本目のゲージを全て削り、ボスのノイズの走った体からローブが

彼には分からなかった。なぜそこにいるのか

彼には分からなかった。なぜこんなことをしているのか

彼には理解できなかった。ただ意味がわからなかった。

ボスのノイズが全て剥がれ落ち、その顔が、その髪が、その装備が明らかになる。

銀色の長い髪をポニーテールにまとめ、その装備は黄色系の軽金属の鎧。そして水色の鉞包丁。何よりその顔には見覚えがある。

「何やってんだよ……メイ……」

そこにはボスとして立ってるSAOの時の姿のメイがいた。

「やっぱ強いなアンタ。もうボロボロやわ。まあもう気にすることもないし」

メイが軽い調子で返す。そして武器を構えキリトに斬りかかる。咄嗟にキリトは防ぐ。

「どういうことだよ！おい！」

「見たまんまのことやろ。そういうことや」

状況が理解できないキリトは今メイを倒すことができない。こうして確認することしかできないがメイには説明する気もない。

キリトは武器を持ち上げメイを上弾き、メイは飛ばされ空中に放り出される。その状態のままローブの中に手を入れた。

ドシュ

メイのローブを突き破りながらキリトの脇腹に衝撃が走る。そこにはクロスボウの矢が刺さっていた。

体が倦怠感に襲われる。足も震え立てなくなりその場に倒れ込む。

体力バーを見れば麻痺状態のアイコンが付与されていた。

「なんで…だよ…」

倒れているキリトの首をメイは持ち上げる。喉に鉋包丁を当ててキリトに話しかける。

「理由は説明できひん」

メイはそのままキリトの首を掻き切った

再戦&再現

「いや、まさかアンタに勝てるとはあんま思ってたんやけどな。まあ乱してくれたお陰で勝てたようなもんか」

部屋の中にある黒い命火に向けてメイは話しかける。先程そこにはキリトが体力を全損した場所であり、ALOではこれが残っている限り意識はそこにある。答える口はないが話は聞けるのだ。

ただ暗闇の中で何故とキリトは思う。誰も周りに人はいなかったとは言えメイの体力は全損したはずだ。なのにここにいる上ましてやボスときた。考えるたびに分からなくなる。目的も分からない。キリトの目の前が更に暗くなっていき、そのままログアウトされた。

「キリト」

メイはウィンドウを開き手慣れた手つきで操作する。目の前にモニターが現れ、それを見る。そこにはアスナとクラインがキリトが負けたという事実には戦慄していた。

キリトはメンバーの中で最高戦力だ。その彼が負けたとなれば残された者の士気は普通落ちる。

『私、行きます。キリト君の仇をとってきます』

モニターの中でアスナがクラインの説得をする。セリフからして次はクラインの番だったかもしれないが、居ても立っても居られなくなったのだろう。

メイは今回のクエストが始まって以来初めて順番のカンニングをしたが、本来なら次の相手は常に把握するはずだった。今更になって使うのも気が引けるが、折角なので使おうとしたのだ。

(次はアスナかあ…)

目の前に現れたスタートボタンを押す。するとメイはノイズに包まれていった。そして何事も無かったのように部屋の真ん中に進む。正体がバレれば不利な戦いだ。SAOで使った手も通じるかも分からないがベストは尽くそうと決めた。

—————

部屋の扉が開く。部屋の松明に灯りがついていきアスナがそこに

いることをメイは確認する。自分がノイズに包まれているのは知っているがメイは自分の言葉すらノイズが走ってるのは知らない。だからこそ彼女は問う。

「■気■■■■■の■久し■■■や■■」

これに対して目の前にいるアスナは何の反応も見せない。やはり何かしらの障害は入っていると見るべきなのかも知れない。そんなことを余所にアスナは細剣を構えていた。その眼はいつもより鋭く、キリトの敵討ちが目的だと見てとれる。

メイも武器を構え、体力ゲージを表示する。アスナはそれを確認した途端に走り出し細剣単発スキル《リニア》を放つ。メイはそれを鈍包丁の面で押し流した。

安全位置を確保し、アスナが流れる直前にメイは垂直に立てていた武器を水平にして振るう。アスナはそれを腰を曲げて避け、一回転しながら距離を取りもう一度構える。

「■■わあ、ヒツ■■■■■ン■■■■■エ■■か」

アスナの行動から作戦がわかった。だからといって対抗策はすぐに来上がるわけでもなく、それに可能な限り対応することを求められる。

突く、突く、避ける、突く

避ける、受ける、アーマー・ピアス、斬りあげる

やはりアスナの方が攻撃が速く、鈍包丁特有の面積の広さとアスナの癖を読んでどうにか防ぎきっているが、このままでは負けてしまう。

アスナの最大の強みは細剣の先端による突きだ。SAOの時より鋭くなっており、今や受けるので精一杯だ。バーサクヒーラーの二つ名に恥じないほどのその戦いぶりに普通なら諦めそうになる。

だからこそ負けていられない。ここでメイが負ければ95層は突破されるという事実は変わらないのだ。諦めることなんて許さず、ただ足掻くことを選んだ身としては譲れない。

「ふっ、はあっー」

だからといってメイの動きも上がるわけではない。徐々に追いつ

かなくなっていき少しずつアスナの突きを掠める。このままではま
ずいと判断し、メイは作戦を切り替える。アーマー・ピアスを放ち、ア
スナの体力を削った。だが急遽攻撃に切り替えたことによりアスナ
の突きもモロに食う。

アスナはその隙を逃さず、3連撃スキル《ペネトレイト》を放つ。メ
イは硬直に襲われており、全ての攻撃を受けてしまう。1本目の8割
まで削られてしまい、またアスナはまだ8割も残している。

メイは1本目のゲージを捨て身に使い4連撃スキル《ファット・
エッジ》を放つ。硬直が解ける直前のアスナは1発目は食らったが残
りは全て《アクセル・スタブ》で突いて流した。そしてメイの硬直の
間にリニアを叩き込む。

「■そっ」

1本目のゲージを全て削られメイのノイズの一部が剥がれてロー
プが現れる。そのロープを見ただけでアスナには何か思い当たるな
感じがしていた。

メイもそんなアスナの顔を見抜き、細剣の間合に入られるより先に
動き出す。突きと斬り払いを防がれたものなんとか距離は詰
まっている状態だ。だが両方の攻撃が届くだけでまだどちらの領域
でもない。

お互いに斬り結んでいく。メイの攻撃をアスナは細剣で逸らして
いき、またメイもアスナの攻撃を鈍包丁の腹で受けている。お互いに
絶対的な間合に入りたいため行動に出る。アスナは5連撃《スピカ・
キャリバー》をメイは5連撃の《インフィニット》を放つ。

互いの突き技が先端を捉え続ける。相打ちに終わったと思えるが
やはり戦闘面において優勢なのはアスナだ。メイは押し返されてし
まった。

動き続けるしかないメイはまた走る。アスナのリニアを読んで
いたためそれを飛びのいて躲し、2発目のリニアを姿勢を低くして
避ける。その状態から足を掛けアスナの体制を崩す。一瞬もたつい
た際にメイは体制を戻し、剣を振るう。ゼロ距離でも関わらずアスナ
はそれを受け切った。

(離れ…られない…！)

アスナからしてみれば中々に苦しい状態であった。今までのボスにはある程度距離を保ってきたが今の相手にはどうしても詰められる。まるで自分のことがわかられているようですつきりしない。

罅迫り合いの状態に持ち込まれ互いに膠着状態になる。だが不利なのは相手の視線が見えないアスナである。離そうとしても力技で離れてくれない。

(これは…！)

目の前にナイフが飛び出す。だがそのナイフは急遽体を逸らしたアスナの体を捉えることなく地面に落ちる。だがこれで確信した。

体制を戻される前に10連撃スキル《オーバーラジエーション》を放つ。全てボスに当たり、2本目を削りきった。そしてノイズが全て剥がれ落ちたためボスの顔を見る。

「やつぱり…メイさんじゃないですか…」

戦う内にアスナは気づいていた。その剣筋から、その特徴から。

「掠りもせんかったわ…。やつぱり通じへんか…」

メイは舌を口の中で回す。舌裏に隠していたナイフを外し、手段を一つ失いどんとん不利になる。だが詰められる訳にもいかない。メイは走りだす。武器の振り上げをアスナは細剣で受けまた罅迫り合いになる。だが今は口に仕込みもないので問題はないと判断した。

「答えて下さい！…どうしてここにいますか!？」

「んなもん言う訳ないやろ。私に勝って聞き出したらええんとちゃう?。」

「このっ…!。」

アスナは今までの類にならない速度で腕を引く。メイの体制を崩し大きい隙を作り細剣9連撃奥義スキル《フラッシング・ペネトレイター》を放つ。

1 撃目 2 撃目 3 撃目は綺麗に当たる。

4 撃目、突きでメイの体を浮かす。

5 撃目、メイの《ハーネット・メイデン》を飛ばす

6 撃目、メイの頭が下に来ていた。

7 撃目、メイの体力が1割を切る。

8 げk…「ばくか」

ザシユツ

メイが足を引いていたことにアスナは気づかなかった。メイの蹴り上げを頬に掠める。アスナの顔には切り傷がついていた。

メイの足装備のつま先からナイフが出ていた。それに気づいた途端アスナの体は動かなくなつた。

「また…嵌められ…」

メイはよろけながらも着地し、ハーネット・メイデンを拾い上げる。そしてアスナの元に近寄る。

「そゆこと。やっぱりキリトより私に慣れてるだけあつて一番キツかつたで。」

ローブの中からクロスボウを撃つ。足のナイフは比較的時間が短いため重ねがけをする必要があるのだ。

「ごめんな」

メイはそう言つて苦笑いを浮かべながらアスナの背中を刺した。

種明かし&目的

時間は少し前に戻り、ここはALO内のとある白い空間。ここで茅場晶彦とM H C P 6はアスナとメイの戦闘を見ながら食事を楽しんでいた。現在はメイのローブが現れたところであり、まだ中盤である。

「ここからだな。」

「ローブが出てから暗器解禁だからね」

茅場とM H C P 6は意見を交換しながら実況をしていく。なにせアスナは2人からは『可能性あり』と見られており、その分期待せずにはいられないのだ。

メイが強引にアスナとの距離を詰めようとしていく。スキル同士で撃ち合いながらも食らいについていくが、2人の目からすれば明らかにメイが不利だった。

「やはりアスナ君は強いな。彼女の剣筋を既に見抜いている上、元の実力が違う」

「だね。そういやあの子はなんで閃光の攻撃をギリギリとはいえ避けているのか教えてよ。私が目をつけた頃より段違いだ」

説明を求められ、茅場はM H C P 6にメイの実力はどこで身についたものかを教えていく。ヒースクリフでも受け切れる自信のない攻撃を対処する術を身につけたメイのことを。

「私もつい先日SAOの過去データを見てから知っただけで直接は知らないんだよ。ただ彼女の実力はあるギルドのトップから直接伝授されているらしい。そこから彼女なりの調整も入ってあそこまで昇華されたようだ。」

茅場が持っている情報はここまでであり、つい最近にはその相手のログが書き換えられていたため誰かは特定できなかつた。だがメイの戦い方から誰のものかは予想はつく。

「なるほど。それもあの子の正気を削る要因みたいだね。…やっばり行っておけば良かったかな…?」

M H C P 6はスフレチーズケーキを食べながら少し後悔する。

「なら今のを君が行けば良かったのではないか？」

茅場は入り口を指差しながらMHC P6を見る。そこには新たに1人の人物が立っていた。

その人物は火妖精の姿をしていた。赤い髪をポニーテールに纏め上げており、腰には短剣がある。その姿は明らかにAL Oのメイであった。

「やっと終わったぞ。くっそ…何をどうやってもこの姿から戻れやしねえ…。」

だがその口調は荒々しく、更に今の姿形に文句を言っていることからメイとは違うことは一目瞭然だ。頭を掻きむしりながら勢いよく座り込んだ。

「しかも姉貴達は高みの見物か。一時とは言え何もかも分からなくなることやこんな格好することを避けてお食事会か。」

「ごめんってナナ。ほら膝貸すから」

「うるせえ。その姿じゃ膝がどこか分かんねえよ。背中貸せ」

ナナと呼ばれたのはメイの姿をしたものはMHC P7であり、6からすれば妹のようなものだ。ナナは冷蔵庫からうなぎの肝吸いを取り出し啜り始めた。

ナナも元々MHC P6と同じく、最初はノイズだらけの体だった。しかし今回のクエストの都合によりMHC P6の代わりにノイズだらけとは言え一時的にSA Oのメイの体を手に入れたのだ。

最初はどんな体とはいえノイズだらけの体と別れを遂げたナナは喜んだ。だが一瞬でボス部屋に転送され、真っ先に入ってきたメイと茶番を演じることになった。その内容はアカウントの入れ替えと一撃死の見せかけ。ナナの体は火妖精のものに変わり、一瞬で待機部屋に送り返された。

ナナは姉妹の中でも頭がいいとは言えない。だが姉妹の中でも戦闘能力は高く、イレギュラーの掃除はしていたが、イレギュラーにやられるのは初めてだった。嵌められた体のまま動くのも嫌だったので、今の今までずっと戻せるか試していたが失敗に終わった。

「それで姉貴、今どこまでいった？」

ナナは体のことを受け入れ、その優先順位を落とし今の状況を確認する。

「この子入れてあと2人だよ」

「なるほど。私が色々やってる間にそこまで進んだのか。」

肝吸いを飲み終えたナナは次に寿司を取り出していく。M H C P 6も寿司を取り出し、画面の方を見る。今はメイとアスナが鏝迫り合いをしていたところだ。

「ここだな」

茅場とM H C P 6はタイミングを見た。するとメイが口からナイフを飛ばしたが、アスナに避けられた。

「ふむ。やはり我が血盟騎士団副団長。同じ手は喰わないな。」

「正体も割れたね」

メイのノイズが剥がれ落ち、僅かな言葉を交わしてからアスナが決めにかかる。だがアスナのモーションの途中でメイは足からナイフを出してアスナの頬に当てた。

「うわっ…えぐいな…」

メイのやり方を初めて見たナナは素直な感想をこぼす。更にそこからクロスボウを取り出し、アスナにとどめを刺したのを見て笑うしかなかった。

「対人戦の化け物かアイツ。暗器とは汚ねえな。」

「あの子まだ髪の中と籠手の中にも隠してるよ。後は口の中…歯に麻痺毒塗ってるね。」

「どこまで武器を隠すんだ彼女は…」

M H C P 6から明かされた事実には茅場は少し引いていた。流石に隠しすぎだろうと思ったところを話そうとしたが、視界の端に立ち上がるM H C P 6を捉え、口を閉じる。

「…またか…。あの子本当に大丈夫か？」

誰かとの戦闘が終わるたびに似たような反応を見せる。今回のアスナも前回のキリトも例外ではなく、M H C P 6の様子からメイのこどどと分かる。

「どれどれ…っ」と

もう分からない。当初の目的はここでは絶対に果たさない。本来なら果たされたと考えるべきだが実際には果たされてない。虚しい…。虚しい…。

しまう。

だがその僅かなスキル後の硬直を逃すわけにはいかない。メイは足を全力で動かしクラインの方に突き進む。クラインの硬直が解ける頃には既にメイの間合いであり、メイはそのまま斬りつける。クラインは先端を少し受けてしまったが、短剣の芯は逸らすことに成功した。

鏢迫り合いの体制になった瞬間にメイは不利になるのを理解していた。刀と鉞包丁での勝負ではまず話にならないためアスナのように相手を探ることなくまず押し負ける。

互いの武器が合わさった瞬間にメイは鉞包丁を軸にして体を持ち上げ、両足でクラインの腹を蹴る。

「ぐっ」

メイは着地と同時に全速力で走りアーマー・ピアスを発動させる。クラインは咄嗟とはいえ受けることには成功したが、流しきることはできずダメージを負う。

そこからもう一度アーマー・ピアスを放ち、クラインはそれを受けきる。硬直時間は短く、クラインはスキルを使わない袈裟斬りをメイに当てる。だがクラインが振り下ろし終えたと同時に硬直は解け、メイは2連続スキル『サイドバイト』を放つ。一撃目は当たり、2撃目からクラインも3連続スキル『緋扇』をメイの鉞包丁に合わせながら放つ。一撃目でメイは流され、2撃目から食らう。

「■■■■た■■■」

メイはクラインに突っ込む。間合いの外からクラインの刀をモロに浴びながら突きを連続で放つ。2発目でクラインは剣速はメイの方が速いことを理解し、メイの手元をよく見た。そしてメイの腕が伸び始めると同時に5連続スキルの『鷲羽』を放つ。特効状態だったメイは避ける手段もなく全て受けてしまい、1本目のライフを全て失う。

「よし、まだ大丈夫だな」

クラインの体力はまだ8割を少し切ったところだ。ボスがまだどのような変化をするか分からないが、このペースなら勝てると考えて

いた。

メイの体からローブが現れる。焦っていたメイはローブが現れるその時まで色々と考えた結果二つのことが導き出せた。

一つ。完全に焦っていた

二つ。コンビをある程度組んでいた相手なだけあつて短剣の動きを知っている。

ただしクライン本人は完全に無意識で対処をしているためそこに気づくことはないようだ。

頭を冷やしたメイはローブを触る。仕込んでいた武器の存在に安心感を覚え、ノイズで覆われた顔を上げた。

クラインは足をジリジリと動かしながらメイの様子を見ている。ゲージブレイクの直後でパターンの変化を見極めようとしているのだろう。

様子を見ている間になんとかダメージを与えようとメイは行動する。同じようにクラインに突っ込む。クラインはスキルを使わずに上から下に斬り下ろす。

「何っ!？」

だが刀が届くより先にメイは後ろに反る。フェイントが上手く決まり体制を崩したクラインの頸を狙う。クラインは短剣の先を頸に掠め薄皮一枚で何とか避けたが肝を冷やした。

頭を振って避けたためクラインの視線はメイを向いていない。

ローブで隠れた針を2本取り出し投擲スキルを発動させる。頭が振り戻った時に目の前に針があり驚いた顔をしていた。だがクラインは頭を止めることなくそのまま振り下ろし、針は後頭部を通り過ぎた

「■ッ！」

思っている以上に対策が的確で舌打ちをする。体制を戻したクラインはメイに向かい走り刀をメイの左肩に振るう。それを鉋包丁で受けて互いに後ろに一步下がる。

互いに一步詰めもう一度武器を合わせる。すり足で近寄りクラインがメイを押し返した。だがメイは右手を地面につき、手を滑らせて衝撃を抑える。クラインはメイのまともに使えない右腕を狙い片手

で刀を振る。だが左手の鉞包丁で受け、一瞬ですり抜ける。それを見たクラインは体を縦に捻り、遠心力を乗せながら頭に振り下ろす。それを同じように受け、右にすり抜ける。

その2度の衝撃で松明の火が消える。視界は暗くなり見えにくい。対応はできる。突きを防がれ、斬りあげを受ける。

突きのタイミングでアーマー・ピアスを発動させる。至近距離で、その上必中の距離だ。クラインは避けることをせず緋扇を放つ。硬直状態のメイに全てヒットし、距離を開かせる。

メイはナイフを吹きながら針を6本飛ばす。3撃目の途中で合わせて投げたため当たらずだ。

クラインの体が急に止まる。3撃目の途中で体を無理やり動かしてスキルキャンセルをしたのだ。2撃目で距離を取られたため硬直の間に攻撃も届かず、遠距離用の仕込みはもう無い。

「嘘……」

「……そういう……ことですか……」

クラインは奥義スキル散華を発動させる。集中していなかったメイに全てヒットし2本目を削り切った。

メイを覆うノイズが全て剥がれる。そしてクラインにとっては確信から絶対的な事象へと変化する。

「どういうことですか……メイさん……」

予想はできていたとはいえクラインは動揺を隠せなかった。メイがボスとしてそこに立っている。ローブの中からは見え見慣れた顔がそこにいた。

「どうも……もう……そういうことです」

たった一言だけ呟く。まだクラインの体力は7割以上残っているが、メイにしてみれば麻痺を当てれば相手の体力の量は基本的に関係ない。

メイは動揺しているクラインとの距離を詰める。鉈包丁を振りかぶってからクラインは意識を戻して刀で受ける。

「なんでメイさんがこんなことしてるんですか!?!」

メイの人柄的に答えられないと分かっているがどうしても聞いってしまう。だが、たった一言だけ、確かにメイの言葉が耳に聞こえた。

「私が……こうすることを望んだからです!」

メイは叫びながら鉈包丁をクラインの脇腹めがけて突き立てに行く。クラインはそれを真正面から刀で受け流し、鏢を当てがい鏢迫り合いにもう一度する。今度は蹴りにも注意していた。

ズブリ

膝に違和感が走る。メイの足からナイフが飛び出し、それがクラインに刺さっていた。クラインはそれに気づいた瞬間力を振り絞ってメイの鉋包丁を押し返し距離を取る。それが終わった瞬間に体から力が抜けその場に倒れる。

「やっぱり私のやり方知ってる人と戦うのは苦労しますね」

上手く毒が刺されればそれで勝ちだが手の内がバレていると中々決まらない。足のナイフはクラインすら初見であり対抗策は無かった。

「本当にすみません。でも仕方ないですよ」

メイは鉋包丁を握りながらクラインに近寄る。その顔を見ればどこかこの結果に満足しているようで、だが何か悲しそうな顔をしていたメイをクラインは見てしまった。

こんなやり方は間違ってるはずだ

舌が回らない口を動かす。クラインは知ってるはずだ。メイが無意味なことはしない主義だと。何か目的があって動いているはずだがやり方が間違ってるはずだ。

メイはクラインの元まで歩き、刀を投擲スキルで壁に向かって投げ
る

いつもそうだ

大事なことに最後まで気付かず、手遅れになっていることが多い。
クリスマスイベントも、コーバツツの時も、ヒースクリフのことも。
…後悔ばかりだ。

メイは鉈包丁をクラインの頸に当てる。

何も…話してくれない…

クラインは納得していない。今は麻痺で動かないがまだ間に合う
はずだ。それにメイを倒さないと話してくれないだろうとも分かっ
ている。

動け…

動いてくれよ体ア!

メイが腕に力を入れ、鉈包丁を引こうとする。

メイの手からハーネット・メイデンが離れる。鉈包丁を蹴られその衝撃で手放してしまった。メイは思わず飛び退きクラインの方を見た。そしてその驚くべき状態に目を疑った。

麻痺状態が解けていない

もはや意味不明だった。そんなメイの反応を知らず、また本人すら知り得ない状態でクラインはメイと向き合う。

「すいませんメイさん」

「歯ア喰いししばれ」

互いに素手。体力は同等。

2人の負けられない勝負が始まった

殴り合い&決着

クラインとメイにとってお互いに武器を取りに戻るといふ選択肢はなかった。クラインの刀は壁に刺さっており、またクライン自身が刀がどれほど深く壁に刺さっているかを把握していないからだ。中途半端に背を見せてしまえば何をされるか分かったものではない。

メイの鉈包丁は地面に転がってはいるが、HP以外の全体的なステータス面でクラインには劣る。また麻痺耐性のついていないクラインが麻痺状態のまま動いている現在、他のステータスが強化されていてもおかしくはないと思っているため、迂闊に武器を取りに行けばそこを狙われるはずだ。

だからこそお互いに素手で対応することを選んだ。メイはローブを投げ捨て、更に鎧と籠手に仕込んでいた針やナイフ、毒液の入った小瓶なども全て捨てた。毒が効かないならあっても邪魔なだけだ。

拳を構えながらお互いは睨み合う。少しずつ距離を詰めながら最初の一撃を入れるタイミングを探ることにした。

一步、二歩と近寄り、周りながら目を離さない。そして2人は同時に足を地面に深く踏み込んだ。

お互いの拳が腹に入る。やはり性別的な体格の関係上クラインの方が深く入っているが、メイの腕も伸びきるギリギリなのでダメージはある。

「ヴッ…」

「ツ…」

同タイミングとはいえ中々のクリティカルヒットに2人は飛び退いてしまう。それでも戦闘中には変わりなく、構えは崩してしまっただけは負けにつながってしまう。クラインは腕で口を拭い、メイは下がっていた頭を上げる。

1発目の撃ち合いからメイの心にさらに火がつく。腕と顎をさらに引き、クラインより先に動く。左の突きをクラインは右腕で躲し、残った右腕で殴りつけようとする。だがクラインは受けた右腕を伸ばし、メイの頬を狙う。だがメイも強引に腕を伸ばして起動を逸らし

た。

クラインは一時防御のため、メイは起動確保のために交差された腕を下ろす。だが腕の位置的に残ったのはメイであり、下から顎狙いで振り上げる。

だがクラインは上体を反らして避け、次に体を戻すと同時に、殴りかかる。一度でも体を止めてしまえば麻痺がまた襲うかも知れない。クラインは体を止めてはいけないと思っていた。

メイも拳を伸ばし、殴りつけようとする。お互いの拳が手首によって起動が僅かにずれる。

1 発

2 発

クラインは体を引き、メイは3発目の突きを繰り出す。クラインはその突きを両腕で受け、メイの腕が引くと同時にその場で膝を深く曲げた

クラインはその場で跳び上がる。元々筋力ステータスの高いクラインはその跳躍も高いところまでいき、メイの身長を超える高さまで飛んだ。

メイはそれを見上げ、即座に腕を交わす。クラインの蹴りが3発当たり、4発目は両脚による押し飛ばしで体を飛ばされた。

「チッ」

姿勢を低くして掌を地面につける。5メートルほど手を擦らされたがやっと体が止まる。すぐさまに顔を上げたがそこには驚くべき光景があった。

「んなっ!?!」

「ア、ア!」

クラインが全力で走っていた。そのスピードはメイが普段知るものよりも速かったのだ。やはり麻痺のことと言いステータスそのものが上がっているのかも知れない。

クラインはメイに飛びかかり、メイは緊急的な受けから2人は地面を転がる。回転が止まればクラインが上を取っており、腕を振り上げた。

クラインの腹部に衝撃が走る。メイに蹴られた体は飛び上がらされ、それをメイは追う。なんとか足から着地したクラインだが、腹部の衝撃は残り、顔を下げてしまう。一瞬で頭を戻したがメイの拳が迫っていた。その攻撃を後ろに下がりながらも避けるが、迫り来るメイの気迫には押されてしまう。

このまま下がりが続ければいずれ壁に当たるだろう。3度目の突きを避け、4発目の攻撃を体をひねって避ける。その時にクラインは体を回し、足を上げて回し蹴りを放つ。

「おっとおー！」

メイは首を振って避ける。クラインの足は髪と鼻先を掠め通りすぎたが、そのままの勢いで回る。もう一度蹴りが放たれ今度は腕で受け止める。

「がっ!?!」

クラインは止めた足を軸にして、メイの腕を滑らしながら飛ぶ。残った片足でメイの頭を蹴り抜く。

「いっっ!?!」

宙に浮いたクラインをメイは逃さない。浮いている体全体のうち、伸びている脚を掴んで壁にその脚を握りこむ。そして地面に叩きつけ、その場から飛びのく。

二人は互いに向き合い、もう一度構える。だが攻撃に転じる前にお互いは状況を確認めた。

(左眼…:まともに見えてへんな…:)

先程のクラインの蹴りで左眼を失ったようだ。距離感が薄くなり少々闘いにくい。

(右脚…:違和感が半端ないな…:)

メイに握り込まれ、叩きつけられた脚に違和感が襲う。少し動かしてみるが動きがかなり悪い。

だが修正を聞かせ、ふつうに動けることはできる。失ったわけでは

ないのでまだマシだと思うことにする。クラインは地面を踏みしめ、勢いをつけて走る。

クラインが突きを放つ。メイは一撃目を喰らい、2発目は後ろに飛んで避ける。クラインは再び体を捻り、回し蹴りを放つが、上体を反らされて避けられる。

(ならー！)

左肘を直角にし、メイに向かって落とす。

「あっ!?!」

メイはそれを読んだいたかのように掌を出して肘を止める。そして再び力任せに握り、クラインの動きを固定した。

「らあー！」

動きの止まったクラインに両足で飛び蹴りを放つ。吹き飛ばされるクラインを持ち前の速度で追いかけて、クラインの体制が整う直前に殴りかかる。

「つつ!?!」

腹に拳が入りクラインは更に追いやられる。クラインは体術スキルを瞬時に発動させ、動く前にキャンセルをする荒技を出し、硬直で体を留める。手は地面についていたので、逆立ちの姿勢で手で跳躍する。

「嘘やろ!?!」

無理な動きを成功させたクラインに驚かされる。そのまま右の回し蹴りに当たるまで気付かず、モロに喰らい体を飛ばされる。

やはりクラインはステータス、プレイヤースキルの何もかもが向上している。一撃の重さはキリト並みであり、一気に体力を削られる。

負けてやれるわけないやろ…

メイはよろけながら立ち上がり、見えにくい視界でクラインを捉える。するともう目先であり、拳を脇腹に食らってしまう。そのまま左の回し蹴りを側頭部に放つ。

「くっ…!」

「つつ…」

回し蹴りを喰らいながら、なんとかその場に踏みとどまる。そしてゼロ距離なのは理解しているのでクラインの頬にアッパーを入れる。

回し蹴りを放ったクラインは体は浮いている。その脚を掴み、遠心力を利用しながら投げつける。クラインは壁に打ち付けられ、ダメージを負う。

「フウー」

「ハアー」

激しい殴り合いの応酬で精神的に違いは疲れている。一度息を吐き、三度構える。

二人は同時に走り出し顔めがけて拳を振る。

メイの拳がクラインに当たり、クラインの拳はメイに当たることはなかった。これを機にメイは何度も殴りつける。クラインの視界は揺らされ拳を構えるどころではなかった。

何度も何度も殴られる。

クラインの体力は残り4%ほどになる。メイも残り1.8%でありここで止めれば負けるのを分かっていた。クラインは後ろに下がろうとした

ザクツ

クラインは足を刺されるような感覚に襲われる。メイが踵捨てずに仕込んだ最後のナイフでクラインを固定する。

前によるつかされ更に殴られる。避ける術も、躲す術もクラインにはなかった。

――――

メイは勝てると思っていて疑わない。ここで勝たないと目的を果たせなかったことになる。勝たなくては。倒さなくては。

麻痺を無効化された時は勝てないと思っただが、残した仕込みが効いてなんとかなっているのが現状だ。ここでクラインだけは絶対に倒さないとダメだ。

倒す。クラインも、キリトも、アスナも、エギルも、シリカもリズベットも ■■■ ために

――――

クラインの体から力が抜けていく。

(最後！)

メイは腕を振ってアッパーを放つ。

スウエアアーバツク
メイのアツパーはクラインを捉えることなくそのまま空振りをする。

「歯ア！」

クラインの拳がメイに迫る

「喰いしばれえええ！」

クラインの拳がメイを捉える。メイは体を飛ばされ地面に倒れこむ。そのままピクリとも動くことはなく、静かに倒れていた。

「……止まったかよ。メイさん」

負けてたまるか

負けてやれるわけないやろ

メイが急に起き上がり、その拳を振りかぶる。そしてそのままクラインに向かって伸び、

その拳はクラインをすり抜け、メイはポリゴン片になって消えた。
c o n g r a t u l a t i o n s の文字はクラインの目に入るこ
とはなかった。

目的&閉幕

クエストのリザルト画面を全て流し、クラインもとい壺井遼太郎はログアウトをする。頭に装着されているアミユスフィアをすぐに外し、直ぐ横に置いてある端末を確認する。

端末のロック画面を見ると、キリトやアスナ達からの通知が大量に来ており、またメイについての議論が展開されていた。その中にメイが発信したメッセージは何一つ無く、何かの間違いということもない。増してやあれ程戦った遼太郎としては確信すらある。

以前に一度飲み潰れた皐月を家に送ったこともあるので家の場所は知っている。あそこまで必死に喰らいつくメイを見たことなかったのも、これからどういった行動に出るかも予測はつかなかった。皐月と直接話す為に遼太郎は家を飛び出した。

時間は少しかかったものの遼太郎は皐月の家に辿り着く。家の呼び鈴を鳴らし、中からの対応を待つ。

『いや、今日は皐月は午前中から出かけてるよ』

中から聞こえた声は皐月の叔父のものだった。皐月を送った時に何回か話したことがあるので間違いない。となると皐月は今どこにいるのかも検討が付かなくなってしまった。あそこまで必死だった皐月がこれからどういった行動に出るかも分からない。遼太郎は挨拶をしてからその場を立ち去り、当ても無いまま一人で搜索を始めた。

—————

「クツツツツツツツツツソオオオオオオオオオオオ!!」

『起きたと同時に叫ばないでよ!ビックリしたじゃない!』

とあるホテル内でメイもとい篠原皐月はログアウトをしていた。HP0のログアウトはメイも例外ではなく、クエスト内で2度体力を失った彼女もログアウトをしていた。

皐月は頭を掻きながら体を起こす。そして身体にいくつつか付

いてある線を全て外しながら大きく溜息を吐いた。

「あ、すみません。完全に忘れてました。バイタルチェックありがとうございました。」

凜子さん」

皐月の横に立てかけられていた端末には通話中の文字が出ており、その相手の名前は『神代凜子』と表されていた。彼女は茅場の元恋人であり、ある交換条件のもと今回の皐月の企てに協力をしている。

『その調子だとダメだったみたいね』

「アカンかったんですよ。負けました。」

『それで？この後はどうするのよ。流石にアキみたいなことにはならないわよね？』

「死ぬつもりなんてないですよ。……そうですね…」

皐月はベッドから降り、着替え始める。その間に少し思考を巡らせた。

「このままこっそりと明日には帰りますか。合わせる顔もあらへん訳ですし」

クローゼットを閉めてから皐月は答えた。その答えに凜子は一瞬だけ考え、すぐその意味が分かった。

『そう、それなら問題無いわ。それと困ったことがあるならいつでも連絡を頂戴。私達の仲なんだから』

「あ、まだ他にも頼つてもいいんですか？」

皐月は意地の悪い顔を端末に向ける。その顔を見て凜子は安堵をしながら、それと同時に少し失敗したかなと苦笑いを浮かべる。まだ皐月と出会って数日しか経っていないが、彼女をどうしても茅場晶彦と重ねてしまい、大事に思っている。

「それじゃ、お世話になりました」

通話を終了し、皐月は部屋を出る。季節もあつて外はすっかり暗くなつてしまつたが、皐月は真つ直ぐ家に帰るつもりはなかつた。それにこれだけの騒動を起こした後に真つ直ぐ家に向かえばその途中で誰かと鉢合わせすると考えたのだ。

(基本的にいい人ばかりやからなあ…。)

薄暗い中目的もなくフラフラと歩く皐月を止める人はいない。

—————

走る。走る。走る。

とにかく走る。

午前中から家を留守にしているということは、後になつてこうなることを予測していたということだろう。それに皐月の足からして行動範囲はそう広くない。それに休みを挟むのが基本であることも知っているので休める場所を手当たり次第に探す。

たがどこを探しても遼太郎は皐月を見つけないことができなかった。時刻は夜8時。視界は真つ暗でよく見えにくい、ここで足を止めてしまえば駄目な気がした。

(どこにいるんですか…、メイさん…！)

どうしても聞きたい。何があつたのかを聞かなくてはならない。息を切らしながら、闇雲に走る。

ふと鼻が水の匂いを捉えた。下には河川敷があり、そこから匂いがしたのでらう。遼太郎は階段を降りた。

「……………こんばんは…」

間違えるはずがない。階段の下のベンチでバツの悪そうな顔でこちらを見上げるのは篠原皐月だ。

遼太郎は階段を下り、ベンチに座ってる皐月の前に立つ。

「…どういふことか教えてください」

その言葉に皐月は視線を逸らす。出会い頭にこれだけでは分かりにくい皐月には分かっていたからだ。そして何かを思い出したかのように目線を戻す。

「まあアスナには勝ったら教える言いましたしね。わかりましたよ。とりあえず座ってください」

遼太郎は皐月に促され隣に座る。そして皐月は杖を持ち上げ、地面を2度叩いた。

「SAOでキリトとヒースクリフが決闘した日の夜にですね、私はヒースクリフの正体を推測で当ててしまったんですよ」

懐かしむように皐月は言う。今思えばあれほど無謀なことをしたのは本人も反省はしていたが、それ以上の収穫があった。その事実には遼太郎は顔を少し変えたが、口を挟まない。

「そして正体の看破と口止め料として、何でも望むものを与えると言われたんですよ。その報酬として95層を明け渡してもらい、それに伴って一部のGM権限も貰いました。とは言っても誰か来たらそこを退くくらいの置物としてですけどね」

杖を持つ手に力を入れて立ち上がる。一步二歩と進み遼太郎に背を向けたまま皐月は口を止めようとしなかった。しかし湧き上がる疑問に遼太郎の口はいつのまにか動いていた。

「…なんでそのことを言ってくれなかったんですか…」

「言えなかつたんですよ。口止め料として頂きましたし、言ったら容赦しないとも示されましたし…」

皐月は石を拾いあげ河に投げる。ポチャンと音を立てて石が沈むのを見届けてから立ったまま遼太郎に向き直る。

「…それから、知り合いが死にました。GM権限持っても救えな

いのは救えないって：痛感させられました。もう何度目か忘れましたよ：。何人も何人も店に来ないのを悲しんだのは：」

当時の知り合いがふと蘇る。コーバツツ、クラデイル、ゴドフリーはもちろん。黄金林檎や月夜の黒猫団の面々も思い出し、ふと涙が流れた。

「私はもう嫌になりました。そして自分が持っている95層である結論に至りました。」

全員の体力を1にして幽閉すれば良いんだと」

この発言の時、虚しそうな顔で笑っている臯月を遼太郎は見逃さなかつた。そして遼太郎を考えに考え、この発言の意味するところに辿

り着いた。

「つまり、メイさんはSAOクリアを…」

「諦めました。全員で安全圏に行こうと決めました」

周りから見れば、無論遼太郎からしても明らかに間違っている。だが一部が望んだ『全員で脱出』というような夢物語も皐月は見ない。下層、中層、最前線全てを見てきた彼女はいつしかそんなことを諦めた。だが『生存』の夢は諦めきれなかったただけだ。

「そんなの…、おかしいじゃないですか！なんでもっと信じてくれないんですか！」

そして遼太郎は怒った。つまりメイはクリアを微塵も信じていなかった。茅場に一点張りをしたのだ。

「最前線にしろそうじゃないにしろ何にも変わらんやろ！毎日誰かが死んでいく！店で笑顔を見せてくれた人がもう来ない辛さを、名前に横線が入っていく怖さを、最前線とは桁違いなんやコッチは！」
泣きながら皐月は叫ぶ。やはりこのやり方はどう考えも納得はできなかつた。

「私一人が汚名を被るだけで良かったんですよ！95層が突破されるまで設定に生かされる私なら何とかできた！75層のクリアなんて誰も予想できひんやろ！」

実際はヒースクリフもメイも、その場にいた誰もが75層クリアを予測できなかつた。それによってメイの仕掛けは無駄になったが、その仕掛けは95層突破まで、メイにはノイズが走り、安全圏キル可能と、メイによつてキルされたプレイヤーは95層の出入り禁止のエリアに飛ばされることだ。

その仕掛けのことも遼太郎は皐月の口から話してもらった。

「…なんも間違つてへんやろ…」

遼太郎は自分の手に力が入るのを分かつた。そしてベンチから立ち上がり皐月の方へ向かう。

言わなきゃいけない。こんなのは間違っている。

「もう、やめてください。俺はこれ以上

好きな人が間違うのを見てられない」

真つ直ぐ目を見据えながら言う。ただ皐月はその言葉に口を開いた。

「もう遅いかもしれません。でも今からでも間に合うかもしれない。あなたが間違うなら引きずってでも連れ戻します。」

ただ涙の量が増える。それでも自分が間違っているとはどうしても思えない。

「私は…戻りませんよ…」

「なら俺が付いていきます。あなたは間違っているとしても、それを正解にしてみせます。あなたは一人で間違っているはいけないんです」

この言葉で分かった。私は一人で戦う必要などどこにもなかった。ただ目の前の、言っていることがメチャクチャの馬鹿な人がついている。

「…馬鹿じゃないですか。私もあなたも…」

「何があるうとついて行きますよ」

「…ぼくか」

いつのまにか皐月は遼太郎の胸に頭を預けていた。その胸はいつのまにか濡れていた。

しばらくしてから皐月は落ち着き、笑顔で向き直る。顔は泣いたことにより赤いが、その笑顔は純粹なものだった。

「帰りましょう」

「はいっー」

二人は河川敷を立ち去った。

ベンチの上に置かれた二つの缶コーヒーだけが、二人が手を繋いで
いるのを見た

神代凜子&邂逅

日本から遠く離れたとある異国。目の前にあるパソコンに映し出された文字を読む女性がいた。彼女の名前は神代凜子。SAO事件を起こした茅場の元恋人であり、今回は身内だけにしか露見しなかったが事件を起こした篠原皐月の協力者である。とは言っても皐月のバイタルチェックをしたただけであり直接的には関わっていない。

パソコンに表示されているのは皐月からのメールであり、今回の経緯について書かれていた。分の後になるにつれ反省文になっており、次第に惚気話になっているのには苦笑いをこぼした。

メール画面を閉じ、座っている椅子に深くもたれかかる。横に置いてあったマグカップの中を飲み干す。

「悪いことにならなくて良かった…」

凜子はたった一言呟く。凜子は皐月のことを無意識に気にかけていることを気づかされる。だがそれほどまでに彼女には思うところがあるのだ。

ふと目を閉じ、彼女との出会い、繋がりを思い出した。

—————

SAO事件が起こってから数ヶ月。凜子は長野県の山奥の小屋に茅場がいるということ突き止めた。

大学時代から茅場の夢は本人から聞いており、応援していたがまさか1万人を巻き込む形で叶えるなんて凜子は望んでいなかった。だからこそ彼を止めようと思った。——それが例え彼を殺すことになるろうとも。

だが凜子は茅場を殺すことができなかった。その時起きていた彼は凜子がナイフを持っていることを知っていながらたった一言だけ言ったのだ

「…困った人だなあ」

そう言っつて茅場はまたSAOに戻っていった。それだけで凜子の頭にはもう茅場を殺すという選択肢は無くなった。

それから凜子はSAOにログイン中の茅場の体の世話をすること

にした。度々ログアウトができるとは言っても、大学時代は自己管理ができなくもやしっ子だった茅場の体に問題が出ると思ったからだ。点滴台も用意されていたがやはり心許ない。

茅場は稀にログアウトをすることがあった。間隔はバラバラではあったがそのたびに凜子は安心した。そしてそのたびに中の話を少し聞くこともあった。

だがこの日だけは違った

「私の正体が看破された」

この発言だけで凜子は事の重大さが分かった。だが茅場が戻ってくるあたり、まだ数人にバレただけだと予想し、その対処法と一緒に考える事にした。まずは相手のことを知ることが大事だ。

「どんなプレイヤーなの？」

この時凜子の予想としては攻略組の中レベル、所謂聖龍連合や風林火山あたりだと予想した。トップの血盟騎士団は茅場が仕切っているし、ソロでトップレベルも引き込んだのでそこにはバレていないと思っていた。

「ただの料理人だよ。彼女はとんでもないことをしでかしてくれた」

そこから聞いたのはそのプレイヤーとの交渉のこと、口止めとして95層を明け渡したことを聞かされた。だがそのプレイヤーは本当の目的は話すことはなかったらしい。

茅場がキリト以外に個人の名前を出したのは初めてだ。よほど気に入ったのだろう。そのことを報告し、「彼女のやること分からない」とだけ残り茅場は再びS A Oに戻った。

そして彼はもう戻ってこなかった。

—————

そこから元同じ研究室の須郷がA L O事件を引き起こした。その事件は茅場が目掛けていたキリトが解決し、全てが片付いたと思っていた。

その矢先に彼女が現れた。

「神代凜子さんで間違いないでしょうか？」

長い髪をポニーテールにまとめ、笑顔が似合いそうな人だった。手には杖が握られているためおそらく足が悪いのだろう。だが顔の特徴、髪型などは茅場から聞いていた情報と一致する。間違いなく篠原皐月、メイだ。

だがどうしてここを知っているのかが分からなかった。凜子のことは茅場から聞いたのだろうか、現在地を知るに至るまでが不明だった。…だが敵意だけは無いとみて話をすることにした。

話の内容はお互いがどう茅場に関わったかと言うことだ。凜子は現実の茅場について、皐月はヒースクリフについて語った。そして話をするうちに打ち解けたが、茅場を助けていた自分に対して彼女はどう思っているのかを確かめたかった。

「怒ることなんて何もありませんよ。私だって、人のこと言えんことですし」

心が救われた。一人とはいえ理解はしてくれ、塞ぎ込むことはないのだと思った。そう考えているうちに皐月はいきなり立ち上がった。

「そうそう、凜子さんには来て欲しいところがあるんです」

そう言って皐月は凜子に一枚のメモ用紙を渡した。その内容はALOへの、プレイヤー〈シキ〉のログインIDであった。

そこから二人はログインをした。ログインした凜子の姿は風妖精であり、短髪だった。だがメイの目的はゲームプレイではなく、見せたい場所があるのだという。

「システムログイン」

メイがそう言うのと目の前に多数のウィンドウが現れた。そしてそのうちの一つを操作をする。その操作を進めていくと、最終的に残った内容は〈実行〉の文字だけだった。

「行きますよ。私に捕まってくください」

凜子はメイの肩に手を置き、メイはその瞬間に実行ボタンを押した。すると二人の目の前にはいきなり真っ暗になり、まるで瞬間移動をしたかのようなだった。

「…はっ?」

ただ目の前には人型のノイズがあった。だが体全体にはノイズが

走っているが、着ているダボダボのシャツには「7」と書かれているだけだ。

「おい姉貴！誰か！なんか変なのいる！」

声は高く少女のものだろう。そして奥から今度は6と書かれた服を着たノイズが現れた。

「ここにも来られるとか想定してないけど…」

声からして困っているのは明らかだ。だがこんなところに連れてきてメイがやりたいことだけが本当にわからない。彼女たち二人の様子を見るからにアポもないのだろう。

おそらくここにはメイしか知り得ない、またはメイが作った何かがあるのだろう。それがどんなものであるかと受け止めなければならぬと思っただ。

「お、悪いな二人とも。ちよつとここに用事ができてもてな」

そうやってメイは凜子の方を見る。目の位置がわからないが凜子は二人から見られてるのが分かった。

「…まあいい。だつたら構わんぞ」

「私も文句は無いね。あの人があんな反応するのも見ものかな？」

メイはその返事に無言で頷いた。だがその顔はまるでこれからイタズラをするような子供のような顔であった。

メイが手を鳴らすとそこに扉が現れた。

「えっ…!?ちよつと!?!」

そのまま凜子の手を引き、扉を勢いよく開ける。そして凜子はその中を見てしまった。

「本当に困った人たちだなあ…」

茅場晶彦がそこにいた。そこから凜子はただひたすらに泣いた。彼に合わせてくれたこと、彼と話す機会を作ってくれたこと、メイには感謝しかなかった。この恩は返さなければならぬ。彼女が例えどこへ向かおうとも、私が手伝えることならなんだってしようと思つた。

「と言ってもバイタルチェックだけなのよねえ…」

今回のALOでの事件で凜子が関わったのはそれだけだ。これだけでは恩を返しきれってないと感じてしまう。

「まあそう言っちゃったし、もう一回ぐらいならいいかな」

とは言ってもあそこまでスッキリしてる彼女のことだ。それほど無茶はしないだろう。

ピロン

パソコンに新たなメールが届く。差出人は菊岡であり、既に何度も断ってる計画への協力依頼だ。またかと思いつつ再び断るメールを打つ。

「あの子の頼みじゃないと行かないわよこんなの」
そう言って凛子はパソコンをシャットダウンした

マザーズ・ロザリオ 絶剣&料理人

「ねえメイ、クラインさん、〈絶剣〉って知ってる？」

ALO内にあるとあるホームの中、フカ次郎はメイ達に問う。

「いや、そんなん知らんな。最近はちよつとそれどころじゃなかったから」

「俺も知りませんね」

最近クラインとフカ次郎はメイを通してALO内でよく行動を共にすることも増えた。なのでお互いに緊張するようなこともない。

「まあ年末年始から出てきたプレイヤーだしね、あとメイは年始はやたらと気が張り詰めていたし、あんまりダイブもしてなかったし知らないか」

ちなみにフカ次郎はメイのクエストの詳細は知らない。言ってみれば知りたがりのフカから厄介な問い詰めになることをわかってるからだ。

「〈絶対無敵の剣士〉、だから絶剣。」

「そう呼び名があるってことは強いんですね？」

フカ次郎もALOでは強い部類だ。風妖精でも上であり、リーファといい勝負をしたりしなかったりと聞く。そんな彼女から他のプレイヤーのことが口に出るといふことはつまり…

「闘ったん？」

メイはフカに問う。実際ALOでの交流の始まりは戦闘が主であるため、そうじゃないと人の紹介しかない。フカは風妖精以外の繋がりは多い訳ではないので前者と予想した。

「そうだよ！どんだけ速いんだよ！何千時間プレイしてんだよ！時間詰め込みすぎだろ！つてくらい鬼強でさ〜」

「ほう？〜」

メイとクラインは互いに同じ反応をする。フカ次郎にここまで言わせるほどのプレイヤーだ。興味も湧く。

「そういうことで、対人戦が十八番のメイに敵討ちをお願いしたいわけ。この後まだ時間あったよね？」

メイはチラリと時計を見る。時間は午後2時過ぎであった。そしてクラインと顔を合わせて笑みを浮かべる。

「行きましょう」

「やな。面白そうやから行ってみよか」

「決まり！じゃあ行こう！」

—————

フカの話では絶剣は午後3時に24層の大きな木が生えている広場に現れるらしい。それまでに装備を整え、時間になるとその場所に向かった。

とは言っても飛行速度や元々のキャラのスピードは3人とも同じでは無い。そのため到着したのは3時5分だった。

キーンキーン

遠くから剣の打ち合う音が響く。目の前の島からでありもう始まつてるようだ。

「やってるみたいやな」

「ですねえ」

「ホントに強いよ」

とは言えまだ時間があるので呑気に向かう。島の真上に到着すると3人は急降下して降り立った。

「わああああああ！」

木の上から人が落ちてくる。ドスンと大きな音を立て背中から着陸し、大量の土煙を上げる。その煙が晴れる頃には既に立ち上がっており、大きな声で叫んだ

「参ったー！リザイン！」

リザインの文字が大きく浮かび、木の上からはwinnerの文字が大きく浮かんだ。そして木の葉を揺らしながらプレイヤーが降りてきた。

「イエー！」

手でVサインを出し、笑顔のプレイヤーだ。闇妖精であり紫色の髪

に巻かれた赤い鉢巻がよく似合う。そして初見なら強い、というより可愛らしいという印象を受ける。――女の子であった。メイは先入観により絶剣は男という印象を抱いていたので衝撃を受けていた。

「フカ次郎さん。あの子が絶剣ですか？」

先に我にかえったクライインが聞く。絶剣の情報を持っているのはフカだけである。

「そう。言っただけだったっけ？」

「…可愛い子だなあ」

メイは少し遠い目をしていた。何故なら先日のクエストが終わってから聞いたシノンが引きつけたプレイヤーと寸分狂わず特徴が一致する。利き手じゃない左手と片目を失った状態でシノンに勝つということは中々の化け物である。

「次の挑戦者はいますか？」

絶剣が大きな声で次の対戦相手を求める。だがメイは声を上げなかった

「あれ？メイ行かないの？」

「一回だけ見たい」

まずは情報収集からだ。シノンからの話だけではイメージはしにくいので一度見てみたいのだ。

すると一人のプレイヤーが声を上げ、絶剣と闘った。結果としてそのプレイヤーは絶剣のライフを2割も削れずに負けた。

「…速すぎるやろ、あれ」

とにかく絶剣は速かった。その速度はキリトより速いアスナといふ勝負をできるようなレベルである。フカ次郎が鬼速いと言っていたことがよくわかった。

だがメイも速いプレイヤーを多く見てきた。ここで下がれば元s a oプレイヤーの名が廃りそうな気がした。

「次の人――」

テンションが上がっている声で絶剣は呼びかける。一戦見てからと言ったからにはやらねばならないし、何より左右でフカ次郎とクライインが肘で突いてくる。

「お願いしまーす！」

メイは大きな声を上げる。絶剣はそれに反応し振り返る。

「オネーサンだね。オツケー」

絶剣は手を招く。メイは深く息を吸い込みながら前に出た。

「ルールはアリアリ？」

「もちろん。魔法もアイテムもバンバン使っていていいよ。」

アリアリとは魔法、アイテムありのデュエルルールだ。基本はこれに統率されており、これ以外で行う方が珍しい。

「ボクはこれだけ」

絶剣は腰の片手剣に触れた。つまり剣だけで戦うということだ。舐められているのか自信があるのかは分からないが、メイにとっては非常に都合が良かった。

「ああ、オネーサンは地上戦と空中戦のどっちが好き？」

「選ばせてくれんの？」

絶剣は笑顔で頷く。

「じゃあ地上戦で」

「オツケー。翅はなし、でもジャンプはありね」

そう言って絶剣はウインドウを弄る。その操作を終えるとメイの目の前に決闘申請のメニューが浮かんだ。

ユウキからデュエルを申し込まれました

相手の名前を確認し、ルールは〈完全決着モード〉を選ぶ。これはどちらかの体力が無くなるか、降参するまで続くルールだ。

カウントダウンが始まり二人は武器を抜く。そしてメイは胸に手を当て深く深呼吸をする。そしてカウントダウンは着々と数を減らす。

カウントがゼロになった瞬間メイは走る。鉈包丁での突きを3発放つが、1発目は避けられ、2発目は剣で合わせられた。だがメイは自分の戦闘能力が低いのは理解してる。3発目を避けられた瞬間に手首を翻して相手の首を狙う。超近距離からの攻撃なら合わせにくい。

だがユウキはそれすらも弾く。そこからメイは手を止めること

なく攻めたが、片手だけでいなされた。

(ならっ！)

思い切って深く潜り込んだ攻撃を出す。だがその読み合いに負け、ユウキにさらに詰められた。振り下ろしをよけきれずに受けてしまい、後ろに飛ばされる。

二人の距離が空き、再び構え直す。その時にユウキはニツと笑ったのでこちらも応える。

たった一度打ち合っただけでそこには絶対的な差があるのを理解してしまった。その上まだユウキには余力がある。キリトやアスナでも勝てないかと思うほどに速い。

鎧の中に手を入れ走る。コンマの時間でユウキも走り、メイはその瞬間に針を飛ばす。ユウキはそれらを弾き飛ばし、二人の距離は再び0になる。

ユウキが剣を振り上げた瞬間をメイは見逃さず、口の針を飛ばす。

ユウキは一瞬驚いたが、その針を叩き落とした。

(嘘やろ！初見やろ!?)

基本的に仕込み針を避けられたことはない。あれだけ話していて仕込んでいる様子を見せず、奇襲で仕掛けるからだ。

だが体制的にメイはしやがみ、ユウキが上段からの形だ。その形でユウキは片手剣単発へ「バーチカル」を放つ。

「らあー」

メイは低い姿勢から横に飛び避ける。そのまま地面を掴み、振り向きざまに土を投げる。目をやられたユウキは顔を払い、すぐに視界を取り戻す。

キユポン

ユウキが視界を取り戻すとメイが瓶の中身を一息で飲み干し終わった後だった。あの一瞬で恐らくバフ系のアイテムを使ったのだろう。

二人は同時に走り出す。武器を交え、金属のぶつかる音が高く響く。メイは武器の軽さでユウキに押しやられる。突きがかすめ、体力を削られる。メイは短剣単発へ「アーマー・ピース」を放つ。ユウキは

それを受け止め、片手剣単発へホリゾンタルを放つ。土煙が大きく上がり、メイが押し負けた。

だが足は止めない。止めていられない。ユウキから見ればものすごい勢いで迫ってくる。ソードスキルを発動させる動きを確認し、ユウキはそれに対応できるように構える。

メイの手からスルリと鈍包丁が抜け落ちる。

「へっ？」

相手がいきなり素手になったことにユウキは驚き、それにより対応

ができなかった。メイはユウキの左手首を右手で掴み、ユウキの腰とメイの左腕により、武器を握った腕を封じられた。

ユウキは抜け出そうとするが、メイのそこそこある筋力値により抜け出せない。そしてメイの頭が動いた。

「えっ!?!」

「はあ!?!」

「なっ!?!」

その行動にその場にいた全てのプレイヤーが驚いた。

何せ、メイがユウキとキスをしているのだから。

「えっ!?!えっ!?!」

「メイ…やりすぎだよ」

「やりすぎだろ…メイさん」

ユウキは理解できず、フカ次郎とクラインは呆れる。そしてその一

瞬後、ユウキは理解した。

何か流されてる

ユウキは飛び上がり、メイの腹に飛び蹴りを入れる。近距離には変わらないが、剥がすことはできた。

だがユウキはその場で崩れ落ちた。先程口移して流し込まれたのは麻痺毒だったからだ。

「ごめんな、何としてでも勝ちたいもんやから」

メイは鉋包丁を拾い上げ、刃を倒れているユウキに向ける。そして、その体制でソードスキルが発動した。それは先日実装されたオリジナルソードスキル。一定条件を満たせば自分でスキルを作れるものだ。(以降OSS)

メイのOSSは短剣専用単発、モーションは刃の突き立てだ。スキル名はへスパイダー・サイズ。対象が状態異常の時に110%の特攻を持つ。

狙いは脊髄。メイはユウキに刃を突き立てた。

だがユウキは麻痺状態にも関わらず、僅かに体を揺らし脊髄からそらした。だがそれでも特攻ダメージは痛く、残り3割まで削られた。そしてメイのOSSは成功後に対象の状態異常を取り除く。その瞬間を逃さずユウキは飛び退き、スキルを発動させる。

ユウキが発動させたのはOSSだ。片手剣汎用技11連撃のへマザース・ロザリオだ。メイの胸にX字を描き、最後の突きまで全てを当てた。

メイの体力は全て失われ、デュエルはユウキの勝ちで終わった。

「はい！今日はおしまい！」

デュエルの結果画面を見ずにユウキは叫ぶ。そして翅を広げてメイの方に向き直る。

「バーカー！」

それだけを言い残し、ユウキは飛び立った。

誰にも見つからなかったが、その顔は憤怒の色で真っ赤だった。

勉強会&ココア

メイがユウキと一戦交えてから数時間。メイは現在22層のログハウスにいる。このログハウスはキリトとアスナのホームであり、S A O時代からの思い入れのある場所だ。

「んでここが重複してて、二度手間の説明になるから要らんねん」
「うわっ、すっごい分かりやすい」

その部屋の中では勉強会が行われている。メイは講師代わりにされ、今はリズベットの英語を見ている。また前々から言語系の教科は得意だったので、数ヶ月後には必要でもあるため引き受けたのだ。

「あんた教師にでもなるの？前に決まりそうって言ってたし」
「もしかして皆のいる学校ですか？」

リズベットが呟いた言葉にリーファが反応する。リーファもすぐ横にいるため横からメイの英語がよく聞こえるのだ。

「まあそんなことは無いねんけどな。職場の環境的に必要になるかって。ほら、手え止まってんで」

メイが二人に課題を続けるように促す。静かな時間が続く中しばらくすると声が聞こえた。

「うーん…」
「ほーら、今寝るとまた夜に寝れなくなっちゃうよ？」
シリカが眠そうにしているのをアスナが起こそうとしている。2時間は詰め続けているので疲れたのだろう。

「シノノンには帰省前には全部終わらせたって言ってたよ」
大きな伸びをしながらシリカは起きる。そして他にも寝てない人がいないかと探してみれば、キリトが椅子にもたれながら、ユイがピナを枕にして寝ていた。

「GGOから戻ってきてずっと頑張ってるみたい」
「特に昨日はたいへんだったもんね」

そう言っつてリズとアスナはメイの方を見る。その視線に気づいたメイが顔を上げればそこそこ冷たい目だったのを見てしまった。

「その節は大変申し訳ございませんでした」

深々と謝罪するメイ。この下りだけでも今日で何度目かである。

「本当にビックリしたんですからね。朝にはもう解決したことなんだし終わりにしましょう」

「アタシはまだ頭抱えるほどなんだけど」

「でも私もメイさんと戦ってみたかったな」

朝にはみんなの前で大きく反省し、このことは大体解決している。だがまだ昨日の今日なので言われる分には仕方ないと思っていた。

だがリーファが戦いたいと言い出すとは思ってなかった。メンバーの中で唯一戦ったことが無いのでまあまあ驚いている。

そしてタイミングよくキリトが唸りながら体制を変える。その音に全員の注目が向いた。

「ホントに気持ちよさそうに寝てますね。こつちまで眠くなっちゃう」

「まあここがホームやから安心するんやろな」

メイの言葉にアスナはこのログハウスの入手時のことを思い出す。解放されたばかりの2層攻略では最前線を張ったのだ。ーアスナは目を閉じて鮮明に思い出そうとした。

そして寝た

「ちよつとアスナさん自分が寝てますよ！リズさんも！」

「起きーやリズ！まだ終わってへんぞ！」

「うにゆく…うーん…」

ユイを含め7人いる空間ではリーファとメイしか起きてなかった。それを見たメイはこれは勉強どころでは無いなど思っていた。

「なんか淹れるわ。何にする？」

「あ、じゃあ私ホットミルクをお願いします。それから」

そう言つてリーファは各それぞれの好きそうなものを頼んでいった。

リーファには、牛乳に砂糖を入れて温める

シリカ、リズにはココアを出そうと決めた。

ココアパウダーをヘラで煎り、水を入れながら混ぜる。

きび砂糖を入れて牛乳を少しずつ入れて混ぜる。

アスナと自分には適当に紅茶を入れ、キリトにはコーヒーブラックを淹れる。

全員がその匂いに釣られて起き上がり、休憩を挟むことにした。家の中では体感的に暖かく感じるの、外の風で目を覚まそうとする。実際メイも気を抜けば寝そうな勢いではあるため助かった。

「そーいや二人は知ってる？〈絶剣〉の話」

ココアを飲みながらリズはメイとアスナに話を振る。

「絶剣…？」

アスナはまるで初めて聞いたというような反応を見せる。恐らく本気で知らないのだろう。

「私は知ってるで。」

メイがそう返すと、リズは思い出すように話を続ける。

「聞くようになったのは年末年始だから…」

「アスナたしか帰省かなんかしてたはずやろ？」

「こつちにいる時にそんなこと思い出させないでください」

そこから3人はアスナの身の回りの話になる。京都の老家での話を軽く聞いていく。着物を着て挨拶ばかりで大変なこと。泊まっていた離れにはネット環境が無いことなど。そして極め付けは…

「お見合いでもさせられた？」

「無い無い。なんでも無いわよ」

この返答である。食い気味に答え、尚且つ普段はしない体を大きく使つての否定だ。リズはアスナの地雷を踏み抜いたのだろう。

「てかメイはどうしたのよ？」

「年末は北海道の親戚の家に行って、大晦日から三ヶ日は実家やな。そこでこつちでの仕事見つかつたって話したらOK貰えたから安心やわ」

「アンタ昨日は決まりそうって言ってなかつたっけ？」

そう。メイが、皐月が親に話したのは就職のことである。その内容を話すと意外とあっさりと飲み込んでくれたのだ。皐月本人があまり知らないだけで篠原家の人間は基本的に自由だ。本人の意思を尊重する。

そして昨日段階ではまだ決意を仕切つてなかつただけで、先方に連絡をした。向こうは数日待っていてくれたにも関わらず快諾してくれたため頭が上がらない。

「どこに決まっただんですか？」

そのアスナの質問にメイは少し唇を噛む。契約先には決まったことをあまり言うなと言われている。特にメイの場合はそれを広めてしまうとどこにどう広がるか分からないのだ。

「まあそれは4月になってからで。それで絶剣がどないしたん？」

そこから何も知らないアスナのためにリズは説明をした。24層での毎日の辻デュエルのこと。初日では誰も3割も削れなかったことを。

「それでもリーファさんとリズさんは一昨日立ち会ったんですけどね。本当チャレンジジャーですよね」

小さな雪だるまを抱えながらシリカが飛んでくる。明らかな差に分かっていながら絶剣に立ち向かった二人のことに対して感想を述べていた。

そうして雪が降り始め、体感的に寒くなってきたので部屋の中に入る。

「対戦相手いなくなりそうだけどね」

「賭けネタはすごいですよ。」

そこまで強いとなると誰も挑まなくなるとアスナは思っていた。シリカが先ほども言っていた通り、本当の意味でのチャレンジジャーしかいなくなる。ならばと夢を持たせたのだらう。それでも誰もそのOSSを使わせるまで追い詰めていない。

「ともかく速いんです。動きが目で追えないぐらいでした。」

種族の特性上のスピードがあり、尚且つリアルでの剣道経験のあるリーファが言うのだ。昼に立ち会ったメイも途中から簡易的にクセを見抜き、ギリギリ対応できるかできないかのレベルだった。

「動きのスピードと言えばそこで反則級の人が寝てるじゃない。あとそこでお代わりの飲み物を作ってる人も」

アスナが向ける二人はキリトとメイだ。とは言え速いのが方向性が

違うところはある。キリトは反応速度からなる基本的な速度。メイは確殺のためだけの単発の速度だ。

「戦ったんですよお兄ちゃんも。それはカッコよく負けました」

「私も負けてるで。あれやこれや使ってもアカンかったわ。」

そこからキリトが何かしら話していたことを聞き、アスナは俄然興味が湧いたらしい。そこからはリズと何か話しているようだが、メイはその場を離れてリーファとシリカとキリトを起こしに行く。

二人はキリトの顔に落書きをし、それを笑って見ていただけだ。

「じゃ、明日2時半ね。」

そう言つてアスナはログアウトをした。そうしてリーファが徐に口を開けた。

「メイさん昼間の決闘本当に何やってるんですか」

「ブフウ」

メイは盛大に吹き出した。リーファに見られてたのだろう。

「どうしたのよリーファ」

リズがリーファに説明を求める。リーファはメイにのみ話していたので周りからすれば不十分な会話なのだ。

「私は今日も絶剣の戦いが見たくてあのスポットに向かったんですよ。そしたらメイさんが戦っていたんです」

「へー、メイさんも戦ったんですね」

シリカが呑気に言う反面、メイの内心は穏やかではない。リーファが絶剣とメイの試合を見ていたということはあれも見られてるということだ。

そして全員がその決闘の内容を知ろうとリーファに聞く中、リーファは最大の問題を説明した。

「メイさん…それはちよつと…」

「中々に最悪でしょ？」

絶剣に行った毒キスが公にされる。それを聞いたシリカと話した張本人のリーファはドン引きをしている。だがその中で一人だけ違った反応を示すものがあった。

(…そっちの気もあるんだ…)

少し赤らめながらリズベットは俯く。その反応に何故か自分にも何かあるのではと思ってしまう、いてもたってもいられなくなる。

「そんなんじやメイさん彼氏できないですよ」

メツ、というような雰囲気でシリカが諭す。だがメイの反応は反省や恥ずかしいというものでなく、また別なものに感じた。

「でもメイさんクラインさんと帰り際に手繋いでませんでした？」

「ん？」

リーファのたった一言でシリカとリズがフリーズする。そして僅か数秒後にある可能性に、そしてほとんど確信に行き着いた。

「はあああああああ!?!」

「リ、リーファは…どう思う…?」

震え声で次はリーファに確認する。リズベツトは2人もいれば意見は割れたりするという希望にすがりついていた。

「あそこまでのいい笑顔でお互いくっついていましたんですよ?半年前と比べてお互いの接し方が大幅に変わっていましたし、何より手を繋いでいたんですよ。あの奥手極まりない2人が…」

「あゝあゝあゝあゝあゝ…」

またもや響き渡るリズベツトの声。頭を抱えながら机に突っ伏すのを2人は見守った。

「やっぱりそうよね…。本当リーファの言う通りよね…。あのクエストが終わってから急に距離感縮まっていたし…。」

そう言いながらリズベツトは机に用意された『0・96』と書かれた瓶を空ける。それに釣られてリーファは『0・1』と書かれた瓶を、シリカは『0』と書かれた瓶を開ける。グラスに注いで三人はそれを掲げる。

「それでは…メイのこれからを祝って…かんぱーい…」

「かんぱーい…」

リズベツトの悲しそうな声での音頭でグラスをぶつける。それにつられて二人の声も心なしか沈んでいた。

—————

「それにしてもメイさんとクラインさんかあ」

「メイさんって半分『風林火山』の構成員みたいなどころありましたし不思議ではないですよ。むしろしつくり来ます」

リーファとシリカが思い思いに感想を述べていく。リーファはそれほど付き合いが無いが、シリカはメイのことを知っている方なので話は弾む。

「あー、後はここにいるのとシノンぐらいかあ…」

リズベツトが不意にこぼす。その手には瓶がすっかり握られており、更に脇には2本空き瓶があった。そしてリズベツトの顔は何より真っ赤である。

「リズベツトさん…飲み過ぎですよ…」

ラベルに書かれた数字はアルコールの度数である。全てノンアルコールではあるが、メイ自作のものはノンアルコールのギリギリを責めるものもある。以前0.98でベロンベロンに出来上がったリスベットはあれ以降飲まないと決めていたが今日は別である。

「うるひゃいわね。飲まないとやってられないわよ」

失恋のショックで俗に言うヤケ酒をしているのだ。今のリスベットにはリミッターが無いため止められるのはメイがリスベット用に作った酔い覚ましのアイテムぐらいである。

「やっぱリメイってすごいわよね。リアルでも料理上手だし大人故の落ち着きはあるし明るくて一直線で笑顔とかも無邪気なときもあれば包容力もあるし」

酔っている割にはよく舌が回る。先程までの呂律の回らなさがまるで嘘のように話し倒す。

「私たちには何が足りないんでしょうかね？」

「でもあの人は先にクラインさんの胃袋掴んでますしね」

「あー！料理スキル極めていけば洞窟の時に掴めてたのに！メイと一晩過ごした時も掴めてたかも知れないのに！」

過去の選択を間違えたことを悔やみながら瓶の底を机に叩きつける。ドンツ！つと音が響き渡った。

リスベットの言う洞窟の時と言うのはキリトのことだ。今の酔った頭では料理スキルを持っていたアスナとメイだから先に交際ができていたと思っている。だが、それが一つの要因にはなったかも知れないが2人とも決め手にはなっていない。

「それでもあの2人には幸せにはなって欲しいですよ」

これ以上酔われると何をされるか分からないと踏みシリカが無理やりに話をまとめようとする。実際リスベットの手が何度かシリカの耳に伸びているのもある。

リスベットはリーファに薬を飲まされ酔いを覚ます。VR世界とは言え酔いが残り続けると現実世界でも多少なり影響が出るようであるため措置は取らねばならない。

後片付けを始め、時間を確認する。時刻は午後2時を示しており、

約束の時間まで残り30分となった。3人はスイルベーンを発ち、ログハウスに向かう。そして到着するとそこにはメイがいた。

「お、やっと3人とも来たやん」

そして屈託のない笑顔を向ける。ああ、やはりこの人は今充実しているんだと思いき知らされる。こんな思いをするのは2度目だがやはり慣れない。

「それでアスナは？」

喉にきた違う言葉を飲み込みメイに確認する。普通に居場所を覚えてもらい、以前と違い感情を隠すことには成功したのだ。

4人は池のほとりで話していた、もといイチャついていたバカツプルの前に立つ。

「悪いけどお時間でーす」

「でーす」

「あつはっはー!」

横から明るい笑い声が聞こえる。やはり心配されるより今のこのような瞬間の方が良く似合うと思う。だってメイには暗い声が似合わないから。

—————

24層の《絶剣》のデュエルスポットに到着する。前日同様にそこでは剣と剣がぶつかり合う音が響き渡り、観戦者達による熱気で包まれている。

「ほらー行つてきなさいよー!」

リズベットがアスナの背中を押し、絶剣の前にアスナを立たせる。その目立つ動作に絶剣が注目した。

「オネーサン、やる?」

「じゃあやろうかな」

アスナが更に絶剣に近づいていく。そうすればアスナによって見えなかったメイが絶剣の視界に入り込んだ。

「バアアアアアアカ!!」

この場にいる全員がメイと絶剣に注目する。アスナとキリトは事情ゆ知らないが、ここにいる殆どのプレイヤーは昨日のことを知って

いる野次馬なので絶剣の気持ちは分からなくはない。

「えっ？何？」

アスナが展開についていけなくて戸惑うが、絶剣が何でもないと伝える。何かしらただならぬ事情があるのだろうか、決闘のことに頭を切り替えた。

そこからアスナと絶剣の決闘が始まる。両者譲らない勝負を繰り広げたが、アスナはOSSの前に敗れた。

「オネーサンに決めた」

そう言つて少しのやりとりを交わしてから絶剣とアスナは飛び立った。とは言つてもアスナは無理矢理に手を引かれている。何やらここでは話せないような事情があるのだろう。

「ちよっ!?!アスナ連れてかれてるわよ!?!」

いち早く正気に戻つたリズベットが叫ぶ。だがその反応に比べて落ち着いてるプレイヤーもいた。

「あいつなら大丈夫だよ」

「絶剣さん多分悪い人じゃないですし」

「まあ気にする必要もあらへんやろ」

そう言いながらキリト、リーファ、メイは軽い調子で流す。リズベットには分からなかったが3人もこう言えば大丈夫な気もしなくはない。

そう言いながらリズベットはメイの方を見ると、いつの間にかコウモリと戯れていた。アスナが見えなくなると同時にその戯れも終了した。

報酬確認&屋台引き

アスナがユウキに連れ去られてからは、アスナからの連絡待ちとなりそれまで思い思いに過ごすこととなった。アスナの一番の相棒のキリトが大丈夫と言うのでそれを信じる方針となったのだ。

メイはみんなで共有している拠点に戻る。そこで先程アスナに取り付けたコウモリの位置を確認する。そこは以前に屋台で回ったことのある新アインクラッドであり、そのある一室であった。おそらくユウキのホームか、ユウキのギルド拠点かだ。

位置だけを確認してすぐにコウモリとのリンクを切る。リンクしている間はコウモリが相手にも見えるため、見つかるリスクもあるため、常には確認できないのだ。

「メイさーん。いますかー」

「いますよー」

ホームのドアが開きクラインが顔を出す。扉を閉めてどつかりと座る。

「それじゃ、確認するので詳細について教えてください」

クラインはウインドウを操作し、先日のクエストの報酬を確認しようとする。あれからまだ一度も確認していないため中身が何かを知らず、今日確認することになっていたのだ。

クラインの操作が終わると、目の前に巻物状のものがオブジェクト化される。それを手に取り紐を解いていくと文字列が大量に並んでいた。

「うへえ…」

隙間なくびっしり書かれている量に頭を抱える。小説や論文のような詰め込み方に読む気をなくしてしまいそうになる。

「これを要約してもらえませんか？」

クラインが巻物をメイに向けるが、このアイテムには所有者以外には視覚フィルターがかかるため今のメイが読むことはできない。ただ当事者であるメイは何が書いてあるかは知っているため説明だけならできる。

「えつとですね…」

メイがクラインに内容の解説をする。その中身としては16詠唱の限定的な魔法である。共有は一人まで可能であるためALO内では二人しか習得できないようになっていいる。

デメリットとしては16詠唱という重さ。あとはPKされてしまうと最優先でドロップしてしまい、所有権を失うため発動ができなくなるということだ。

「まあ…俺は魔法を使いたくないですよね…」

クラインはSAO出身として剣一本での戦いがプライドになっている。剣を使わない魔法はあまり使用したがないのだ。だがメイ本人としては折角獲得した限定物だから是非とも使用してもらいたいのだ。

「別にいいじゃないですか。これ視点を変えれば強化魔法みたいなもんですし。それにこれ自体に攻撃能力はありませんし」

とは言え一度みんなの前で宣言したことに背いてしまうことになつてしまう。しかしせっかく自分で設計した魔法がお蔵入りしてしまうのは可哀想だとも思ってしまう。

「…そこまで言うならちよつとだけ…」

そう言つてクラインは巻物をオブジェクト化して詠唱を始める。今回のこれは実戦ではなくお試し感覚で使用しているためクラインとしても気は楽だ。

とは言え普段ソードスキル以外での、詠唱のいる魔法を使わないクラインが詠唱をしている姿は新鮮だ。不慣れなことを行なっているため少し微笑ましく思ってしまう。

詠唱が終わるとクラインの目の前にウインドウが表示される。そこには魔法についての説明が示されていたが、メイの解説と同じことが書かれていた。

しかしメイの説明していた部分は途中までのものであり、さらに詳しい説明が表示された。

「…うそ…だろ…」

クラインがメイの方に視線をやると、いい笑顔をしている彼女がそ

ここにはいた。子供さながらイタズラに成功をしたような顔をしていた。

「んで？それ対象者どうします？」

メイの質問にクラインは再びウインドウに目を落とす。共有できる相手は一人だけだ。普通なら慎重になるがクラインは漠然と決めた。

「もちろんアナタですよ」

「ありがとうございます」

クラインがウインドウに触れるとメイの目の前にウインドウが現れる。クラインによって僅かに変更された魔法の内容を確認し終わると他のプレイヤー対策としてさっさと視覚フィルターを掛けてからウインドウを閉じた。

「さて！今日は屋台引きをやりますよ！」

「お、いいですね。俺も手伝いますよ」

「いいんですか!？」

唐突とは言えメイは偶に屋台引きをすることがある。SAO時代に染み付いた感覚が抜けきらず、またそれを行うことにより昔の思い出と対面することができる。しかしそれはいい思い出もある反面辛いものもある。

それでもメイは屋台引きをやめることはできなかった。あの思い出を忘れないために、天国にいるであろう彼等にもメイのことを思い出して欲しいように彼女は屋台を引き続けるのだ。

—————

「紹介するね！僕のギルドの仲間達！」

ユウキに連れ去られたアスナは新アインクラッドの最前線でギルド『スリーピング・ナイツ』と出会う。

「あのね…：お願いがあるんだ」

その内容とはスリーピング・ナイツとアスナだけの7人でこの層のボスを突破したいということだ。その理由としてはこの春にはギルドは解散状態となってしまう、全員で思い出を作りたいというものだ。

その方法としてボス攻略だ。先日と同様にボス討伐は基本的には黒鉄宮に名前が残る。だがそこには7パーティーのリーダーまでしか名前が残らないため、スリーピング・ナイツ全員の名前が載るようになるにはこの方法しかない。

アスナはこの依頼を引き受けた。SAOの頃は安全第一であったが、今ではあのような危険なことは一切ないため、また彼女達の想いに応えたかったのだ。

「ユウキは強い人を探してたんだよね？それなら私以外にも他にいたと思うんだけどな。」

特に片手剣使いの黒ずくめの影妖精のこととか覚えてない？」

「あー確かにあの人も強かった」

だが選ばれたのはアスナである。その理由がよくわからないため今一度ユウキに聞いた。

「僕の秘密に気づいちゃったから」

それでもまだもう一人自分より強いと思う人物がいる。その人についても聞くことにした。

「それじゃ短剣使いの女性火妖精とかいなかった？」

「ゲフツッ」

その言葉にユウキは吹き出した。アスナには訳がわからず、ただギルドメンバーのシウネーに背中を撫でられているユウキを見ることしかできなかった。

「えっ…どうしたのユウキ…」

ゲホゲホと咳をしてユウキは顔を起こす。そうして脳裏に映し出されたあの時の記憶が蘇る。

「あんな人はこっちからゴメンだよっ！」

ユウキはアスナに詳しいことは教えては貰えなかった。シウネーから聞こうとしてみたが、引きつった彼女の顔を見て何かとんでもないことがあったことだけは確信をした。

「それじゃ…また明日。」

次第に時間が来てアスナはスリーピング・ナイツと解散する。アスナを見送ったメンバー達は顔を見合わせてこれからについて話す。

「ちよつと口直しがしたいかな」

言い出したのはユウキだ。唐突に思い出した嫌な記憶を忘れたいのだろう。そうしてメンバーで手頃に食事をできる場所を探す。

『グラタンだよー。グラタンですよー』

ガラガラゴロゴロと木製のタイヤの音が聞こえ、それと同じ場所からスピーカーの音がする。彼らは興味を持ちそこに行くことに決めた。

到着するとそこにあるのは屋台だった。簡素な作りになっていて無駄がないように思えた。

「いらつしやーい。」

中にいたのは熊の面を付けた女性の声のプレイヤーだ。もう一人は野武士面の男であり、二人が店主だと伺える。

「オネーサン。グラタンくださーい。」

「はーい」

店主はそう言ってメンバーの前で調理を始める。

玉ねぎと鳥もも肉を切り、マカロニとブロッコリーを茹でる。

フライパンに塩を含んだバターを入れ材料を入れて薄力粉を振る。

その後牛乳とコンソメを入れ、塩胡椒で味をつける。

その後チーズを入れ、オーブンで焼く。

そしてその調理中にシウネーは店主に声をかける。

「お面、邪魔じゃないんですか？」

「いや、いいんです。別に邪魔じゃないです」

籠もった声で返される。声も少々聞き取り辛くお面に異常な執着があるのだろうか。本人も気にはしていないようだった。

「いやー、悪いなお客さん。この人どうしても面を取りたがらないもんで」

野武士面の男がお面のプレイヤーの肩を叩く。そのことに対して彼女はお面越しでもわかるほど照れながら男を引き剥がした。とても仲が良いように見えて微笑ましくなる。

「はい、できあがりですよ」

メンバーの前にグラタンが置かれる。全員が手を合わせて食べ始

めた。

「美味しいね！」

「そうですね」

「何これ食べたことないくらい美味しい！向こうでもこんなのがあったよ！」

その様子に店主の顔の見える方の男は笑っていた。お面の方はやはり顔が見えないためその表情は窺えないが、二人とも楽しそうにしてるのを見てシウネーはうれしくなった。

私たちも、『スリーピング・ナイツ』もこの二人のようにいつまでも幸せに過ごしていたかった。

—————

「お疲れ様でした」

店を片付け、それと一緒に熊のお面をメイは片付ける。まさかやってきた客が先ほどまで盗聴していた相手とは思っていなかったのだ。

「まあそりや確かにそんなこともしたくなりますけど……」

「まあこれで色々と分かりました。後はキリトに任せるとしましよ
うか」

彼等と接触し、大体の目的もわかった。恐らくキリトが『気付いてしまった』ことに予測はついた。

「それとして、早く試したいなあ」

クラインとメイの声が被る。

特別魔法&通行止め

「お、みんな動きましたよ」

目を黄緑色に光らせたメイはキリトとクラインに報告する。現在メイの視覚はアスナに付けたコウモリとリンクしており、その視界を共有することによって情報を仕入れている。

その視界に映っているのは27層の迷宮区。そこでアスナ達は道中でエンカウントしたりザードマンと戦っているところだ。それを難なくと倒し、ボス部屋の前に到着する。

大きな扉を目の前にしてアスナが他ギルドの存在に気付いた。双方に戦闘の意思はなかったため無駄な消費は抑えられた。

「アスナ達がボスに挑みますよ。これで勝てば良えんですけどね
：つて！ちよつ！あつ！」

「いきなり叫んでどうしたんだよメイ」

「そうですね。聞いているこつちが心臓に悪いです」

アスナ達がボスと戦う中突然メイの視界がブラックアウトする。アスナに付けたコウモリがアスナによって潰されたのだ。

「……アスナにコウモリ潰されました…」

だがそれでも分かったことはある。アスナがコウモリに気づいた時には他の闇魔法によるピーピングのトカゲがついていた。つまりメイと同様に盗み見をしている輩が他にもいるのだ。小規模ギルドを囓ませ犬役として利用し、少ない被害で利益を得るのは汚い手だが効率的である。

「これ…不味いんじゃないか？」

実況をしていたメイの情報からキリトが割り込む。ユウキ達スリーピング・ナイツは小規模ギルドだ。アイテムや装備を整える時間は短く済むため再挑戦までの時間はそう掛からない。だが大規模ギルドはその準備には時間がかかる。ユウキ達の挑戦後すぐに行かなければ彼等から見てみれば挑戦する機会を失うのだ。

「つまり…今すぐ行かないと横取りされるってことか!？」

クラインが声を荒げて立ち上がる。

「座ってください。それでも時間は2時半です。平日に49の数も集まるには相当時間がかかりますよ。」

「おう…じゃあ問題は無いってことですか？」

メイは首を振る。それを見たクラインは驚いた顔になり、そしてキリトは納得した顔をしていた。

「あのギルドマーク、やり口が最悪時期の聖龍連合のそれとほぼ一緒です。抗争になりますよ」

その言葉だけでクラインは再び立ち上がる。その後、メイとキリトも立ち上がり武装をして部屋を出た。

27層の迷宮区に向かう途中、メイが徐に口を開く。

「クラインさん。あれ試します？」

その言葉にクラインは一瞬呆け、その後、口角が上がる。

「ええ！やりましたよ！」

「という訳やキリト、前から頼むで。後はカモフラの為に何回か敵対してや。」

—————

「じゃあ戦おつか！」

27層の迷宮区にユウキの声が響く。今ここで起こっていることは順番の取り合いだ。準備の済んだユウキたちをまだ整っていない大規模ギルドが待てと要求する。だがアスナ達はすぐに挑めるのにそれを譲らない状態だ。

「ぶつからなきゃ伝わらないこともあるよ。例えばどれほど真剣なのか、とかね」

この状況下だからだろうか。ユウキは自分の肩が軽いと感じた。ここでぶつからないといつまで経っても自分達は噛ませ役をやらされ続ける。

「さあ、剣を取って」

剣に手をかけたプレイヤーがユウキの気迫に押される。だがその気迫に抗い剣を抜くと同時に斬りかかる。ユウキはそれを防ぎ袈裟斬りを入れる。

「うおおおお！」

横からの叩き込み。それを刃で受け切ったユウキは相手を弾き飛ばし4連撃のスキルを叩き込む。

「汚ねえ…不意打ちしやがって」

言い訳である。ユウキは相手が剣を抜いてから動いたのであり、決して臨戦体制が整う前に手を出したのではない。

それに彼女は知っている。この世には正面から堂々とし、悪びれない不意打ちを使うものだっている。彼らの言うところの不意打ちよりもっと汚いのと比べると呆れそうになる。

そのユウキの姿を見てアスナはハツとする。自分は逃げていた。目の前の問題から目を逸らしてはいけない。覚悟を決めよう

アスナは杖をしまい愛剣を取り出す。ここでユウキと共に戦う覚悟を決めた。

だが現実には甘くない。後ろから大規模ギルドの残りのメンバーが集まりきり、人数差が圧倒的になっていく。

「ごめんねアスナ。僕の短気に巻き込んで」

「こつちこそごめん！」

アスナとユウキは互いに謝る。だが今の気持ちに何一つ後悔はなかった。アスナは前のプレイヤーに向け体制を整える。

「悪いな。」

アスナの後ろから声が響く。振り返ればそこには黒い背中。頼れる相棒。あのゲームの英雄

「通行止めだ。」

〈黒の剣士〉キリトが立っていた。

そこからのキリトの行動は速かった。ぱつと見4パーティ程の人数を一人で制した。魔法攻撃は全て剣で斬り伏せるといふ神業をサラリと披露したのだ。

「相手はたった1人だ！怯むんじゃねえ！」

ビーーーーー！ビーーーーー！ビーーーーー

迷宮区に不似合いなサイレンが鳴り響く

ーーーーー

誰もが目を丸くする。こんな事例は今までにはなかった。そう、そ

れは迷宮区にいる彼らだけでなく全てのプレイヤーに知らされたのである。

アスナの、ユウキの、キリトの、大規模ギルド全てのプレイヤーの、果てには全ALOプレイヤーの目の前にウインドウが現れた。

〈ゲリラクエスト〉

95の討伐

たった、たったそれだけの文章である。それを確認した瞬間後方から悲鳴が聞こえた

「ギャッ！」

「グワッ！」

そちらを向くと見慣れない2つの姿があった。

1つは赤の鎧を着込み頭はフルフェイス式の兜を被っておりその顔は見えない。そして手には真っ赤な刀。

もう1つは頭部から大きな角を生やし、手には鉞をもっていた。体格からして女性ということだけは分かるが顔は真っ黒に塗りつぶされていた

そんな異質な見た目なぞ連中にとってはどうでもいい。一番問題なのはその体力ゲージだ。その数は3本でありボスとしては少ない。だがその上に記された表記に目を疑う。

紅兜&獄卒

体力ゲージを2人で共有していることがわかる。そしてそのことに気を取られていると後ろから斬撃を喰らう。

「30分稼ぐ！その間に速く！」

黒の剣士が後方部隊に襲い掛かる。その間にアスナ達は扉へ走り出す。

「行かせるかよー！」

前衛部隊がアスナ達の行方を阻む。抜刀に合わせてユウキが受け流そうとしたところで

剣を振りかぶった者の頸が落ち命火となった。そこには鉞を振り抜いた後の「獄卒」が存在していた。そして彼女は針を乱射し、刺さったものが次々と倒れていく。

「ま…さか…」

ユウキの直感が語りかける。間違いない。

「恩なんか着ないからね」

「ま■■■■よ」

獄卒の声は入り乱れている。そして瞬きと共に目の前には「紅兜」が現れ、獄卒の姿は消えていた。

紅兜が刀スキル「旋車」を発動する。その威力は絶大であり前衛部隊は致命的なダメージを負う。

「行っ■■■■だ■■■■い。■■■■さ■■■■」

その言葉にスリーピング・ナイツはハツとなる。目の前の障害物は全て無くなり扉の中にはすんなり入れた。

残された後衛部隊達にはもう戦意はなかった。

—————

結果から言うとアスナたちは勝利した。スリーピング・ナイツのメンバー全てを黒鉄宮に記すことができ結果に満足だ。

入った扉から様子を見に戻る。そこにはダメージを負ったキリトが仰向けで転んでおり、いつの間にかそこにいたクラインと熊の面をつけたメイが木の枝でキリトを突いていた。

「お疲れさん」

「おめでとうございます」

「お疲れさん。やるやんアスナ」

3人から労いの声をかけられたアスナは嬉しくなる。全ての努力が報われた気がしてならない。キリトの側に駆け寄りいつものようにバカツプルぶりを匂わせていく。

「ねっ！ユウキ。この後…」

そのキリトの感謝を済ませユウキの方へ振り返る。

「はい。誠に申し訳ございませんでした」

ユウキとシウネーに対して綺麗な土下座をしているメイがいた。何かしらの確執があるとは思ってはいたがこんな姿はあんまり見たくなかった。

アスナはメイの土下座姿を記憶から消した

不治&不治

痛い

昨日まで続いていたことが明日には変わるかも知れない。

いつまでも変わらずこの状況が続くと思っていた。

痛い痛い痛い

そんなことは夢だ。続くわけがないとあの世^S界^Aで嫌^Oというほど味

わったのに

自分の身にその『いつか』が来ることを忘れていた。

「つつつつつつつ!!!」

声にならない絶叫と共に落ちる感覚を覚える。その僅か数秒後には衝撃が走る。だが本来起きるはずの体には痛みが全くなく、痛みは全て脚に集中している。

「■■い臯■■!大■■夫■■■月!」

聞き覚えのある声が聞こえる。叔父の声ということはずぐに分かった。ぼやける視界の中でもすぐ近くにいただけは何とか分かった。だが声が異常に遠い。

いずれ徐々にその声は聞こえなくなる。視界もドンドン暗転していった。だがその痛みに抗うように臯月は動く上半身を動かし続け――体には重みが加わった。

それでも抗いに抗い続け

臯月は意識を失った。

――

ふと目を覚ます。朧げな意識がはつきりしていくことが自覚できた。

視界に飛び込んできたのは見知らぬ天井。

だが、そのシンプルな天井は過去に似たようなものを見たことがある。一年と少し前に鮮明に焼き付いたものと同じ「病院の天井」だった。

「またかいな...。」

そう呟き臯月は仰向けになっている身体を翻す。SAO事件終了

時に入院していた病院ならば頭上にコールボタンがあるのは既に知っているのだ。何も困ることはない。

「…嘘やろ…。嘘やんな…？」

体の上下を入れ換えようとしたがそうはいかなかった。上半身はしっかりと捻えることはできたが、足が絡まることを避けるために動かした右足が左足を跨ぐことはなかった。それどころか右足のふくらはぎには未だに布団の感触が残っている。つまり下半身そのものが動いていないのだ。

頭の中が真っ白になる。受け止めきれない現実には吐き気を催すが何とか堪えることができた。だが上半身や腕、頭は動くことは理解でき、過去の体験で得た法則的により、コールボタンは見つかった。すぐ押せる位置にあつたため、ボタンを押してから皐月は絶望感に襲われたまま処置を待った。

—————

皐月が倒れてから丸2日。全ての検査や現状確認が終わり整理はつかないが理解することには成功した。

まず皐月が最初に意識を失っていた時間は16時間。この時間の間に応急処置や最低限の治療は終えた。峠を越え安定した状態になつて彼女は目覚めた。

そしてそこから精密検査などの名目で彼女は麻酔により再度眠つた。次に目覚めた時には天井が変わっていたのだ。

皐月は現在叔父と一緒にいる。その目の前には2人の医者が出た。「まず最初の病院と違う理由ですが、あちらの設備では不可能な治療があつたためこちらに頂いてもらいました。」

病院はどこも同じ施設が揃っているわけではないのは皐月も聞いたことがある。相手のネームプレートを見れば、ここが横浜ということが分かった。

「覚悟して聞いてください。」

その言葉に息を呑む。皐月は顔を張り意識を固めた。何となくは予想がつく。顔を上げ医師をまっすぐ見た。

「あなたは…このままだと持って2年です…」

その言葉に時間が止まったような感覚がする。だがその感覚を振り払い皐月は尋ねた。

「理由を…聞かせてもらえませんか…？」

医師の説明を要約すると、皐月の脳には多大な負荷がかかった痕があるとのことだ。それは時期的にはSAO帰還時にできたものらしく、そこから壊死が発生し今の状態に至る。今までの足が弱っていたのはまだ初期症状であつたらしく、今立てなくなったのでもまだマシらしい。

「治り…ますか…？」

淡い希望を求めて皐月は問う。

「ここからは私がお話します」

もう一人の医師が前に出る。ネームプレートには「倉橋」と記されていた。

「篠原さん。少し彼女をお借りしてよろしいでしょうか？」

叔父ともう一人の医者はその意思を汲み取り、部屋を後にする。

「あなたは、VRゲームのプレイヤーとお聞きしました。」

「はい」

「アミユスファイアの仕組みについてはご存知ですか」

「あまり…詳しくは…」

皐月はそこからアミユスファイアの大まかな説明を受けた。普段使っているものに全身麻酔に近い効果があるとは思わなかった。

「…さて貴方には見て欲しいものがあります」

皐月はベッドから車椅子に移り、浅倉がそれを押す。

「見て欲しいもの、があると云いましたがそれと同時にあつて欲しい人もいます。彼女からも許可は得ています」

車椅子が押された先には「第一特殊計測機器室」の部屋である。その中に入ると少女が機械に繋がれていた。

「彼女は紺野木綿季」

そこから皐月は木綿季についての説明を軽く受けた。そしてメデュキュボイドがどのようなものかも理解した。

なぜ医師がこのようなことを説明するのかは皐月には理解できた。先程の余命宣告で予測するに「そういうこと」なのだ。

「紺野さん…私とお話してくれませんか…？」

皐月のこの質問の細かな内容は紺野木綿季に向けられたというよりメデュキュボイドの詳細と言った方が正しい。もちろん紺野木綿季に全く興味がないというわけでもなかった。

『あなたは…一体…』

スピーカー越しから少女の声が聞こえる。声色は沈んでいるがそれでも今は自分に向き合ってくれていることがわかる。一瞬の沈黙はあつたものの、どうやら彼女も皐月の予想するところまで行きついた。

『…あーそういう…。わかったよ』

倉橋から面談用のアミユスファイアの使用許可をもらう。互いに運よくALOプレイヤーであったため、場所を決めてからログインし

た。

そして二人は顔を引き攣った。まさかメイとユウキがこんな形で再開するとは思ってもみなかった。

互いに現実世界での深刻な事情を知ったからこそ話せることもあるというものだろう。ユウキとメイは背中を合わせながら上も下も前も後ろもわからなくなるような空間で話していた。

「なるほど。メイはSAO生還者だったんだね。通りで大体の人たちよりいい動きしてたんだね」

「つて言っても2年やからなあ。1年も先輩に言われても素直に受け取れへんな」

「もうすぐメイもこうなるよ。言ってたでしょ？終末期だつて」
基本ゲームの中では現実の中では御法度であるが、互いの了承やこの特殊な空間のお陰で話が進む。

現在使用している空間はメイが用意したものだ。神代を招いたものと同じであり、誰からも居場所を探られることはない。それに名目的には「ユウキ」と「メイ」ではなく紺野木綿季と篠原臯月として会っている。

「てかユウキもヤバかったんやなあ…。思ってたのとちやうかつたけどそれでもなあ…。」

色々と勝手に予想していたメイではあったがその予想は違っていた。ユウキもその口ぶりに気付いて問いかける。

「メイは僕をどう思っていたの？」

「白血病か過度のアレルギー体質やと思つてん。屋台の時の反応が大きかったからな」

薄暗い会話が続く。お互いに気を使っている分少し気まずい雰囲気はあるが、会話は進む。

2人は現在ALO及び現実から離れている身だ。さまざま辛いさからは逃がっている。気が滅入るのも仕方ない。

「…そっういやユウキも最近ログインしてなかったんやろ？」

ユウキはアスナに会わないためにALOから逃がっていた。お互い

に、特にアスナに辛い思いをさせないためにだ。

「うん。でもアスナが来てくれたら全部打ち明けるつもりなんだ」
背中であぐらまの姿勢から聞こえる声がある。その様子に振り絞った勇気で行動する彼女にメイには思うところがあった。

シヨックで特に今取り乱しているのはメイだ。自分とユウキを比べて今の自分がどれほど情けないことか痛感した。

だからこそ彼女は立った。

「ユウキ、一戦頼まれてくれへん？」

メイの知り合いは悩むなら体を動かせという主義がいる。その結果彼は英雄となり多くを救った。ならばその受け売りを使わせてもらおうではないか。

「いきなりどうしたの？おかしくなった？いや元からか」

その言葉にカチンとくる。確かに出会い頭に決闘の最中に毒キスをしたメイが10割悪いがいつまでも根に持ちすぎではないだろうか。腹が立ったので後ろ蹴りを軽く入れてユウキの腰を上げる。

ユウキはそれで飛び上がりメイの正面に立つ。お互いの顔を本日まともに見た気がした。その顔はお互いに睨んでいる。

「いいね。この方がボクたちらしいや」

「よーしなら本気でやるか」

メイが指を鳴らすと辺りの景色が書き変わる。その中身はボス部屋のような作りになり、戦闘をするためだけの場所といった感じだ。

「絶対勝つ」

片手剣と短剣が再び交わった。

—————

部屋の中はまるで焦土と化していた。床は剥がれ、壁はいくつも凹んでいる。ボロボロの部屋の中心には倒れる影が二つだけあった。

一つはユウキ。防具は所々割れてしまい、額の赤い鉢巻はスツパリ切れている。泥だらけになり腹には深々と鉋が刺さっていた。

もう一つはメイ。その姿は火妖精メイではなく、以前見たボス「獄卒」の姿。またこちらにも状態はユウキとほぼ同じであり、その体を片手剣が貫いていた。

「あースッキリした」

「あー獄卒でも相討ちかー」

戦いの感想を述べる2人の感想は対照的であった。ユウキは喜びメイが落ち込む。

「でもメイもスッキリしたでしょ?」

勢いよく起き上がるユウキは手を差し出す。メイはその手を掴み取りユウキに引っ張られながら起き上がった。

「まあそうやな」

メイの「獄卒」化が解け元に戻る。それでもどこか気分は軽くなっていた。

「どうするか、決まったよね?」

その問いに対して今見つける言葉は一つしかなかった。メイはユウキの顔を真っ直ぐと見つめ最大の笑顔で答えた

「残りの人生、楽しむで!」

お互いの意思を確認しあい、2人はログアウトをした。

数ヶ月後、メデユキュボイドというバトンを篠原臯月は受け取った

見舞い&経験

皐月が入院してから容態が安定し、見舞いに来てくれる人も増えた。叔父はもちろんのこと、ゲームで深いつながりがある仲間たちもそうである。だが場所が場所でもあり、来てくれる頻度は少ないがそれでも文明が進んだ現代では話す機会を設けることは難しくない。ビデオ通話を使えばいつでも顔を見て会話をを行うことはできるのだ。

まず一番最初にお見舞いに来てくれたのは意外にも篠崎里香と綾野珪子だった。更に里香の提案により通話などではなく病室にまで来てくれた。やはり皐月としては人と面と向き合って話をできるのは楽しいし、何よりそれを分かってくれて気遣ってくれたのが嬉しいのである。

「お体の方は大丈夫ですか？」

「無茶するんじゃないわよ。これ以上悪化したら皆も悲しくなるんだから。治る見込みもあるんでしょ？」

「ありがとな。まあ体の方は今は大丈夫やで。治る見込みつか取れる手段はないわけじゃないって私も聞いているから多分大丈夫やろ」だがそれでも言いにくいことというのはある。余命宣告を受けたことなど言えるわけもなく、またメデュキュボイドのことも公にはできない。

それに「取れる手段」はもつと言いにくいものであり、皐月ですらその概要は把握しきれていない。先日聞いた説明だけでは要点を抑えることができても詳細までは知り得ないのだ。

だからこそ皐月は二人にその希望を持たせることを選択した。この方が心配もされないし、連絡が途絶えてもこの身体の問題で言い訳は成り立つ。

「メイさんってこれからもALLOできるんです？できない病院もあるって聞いたこともありますし…」

「だーいじょうぶよシリカ。メイがそんな環境選ぶと思う？んなもん無理よ無理！」

「アツハツハ！よう分かってるやん！安心しシリカ。ログインもで

きるで！」

取り繕った笑顔で返す。確かに今はログインなどは問題なくできるがいずれは音声不信になった後の謝罪を考えると苦しくもなる。だがSAOやALOの感情システムを押し返せるか押し返さないかギリギリにいる皐月には2人にはバレないようにはできる。

しばらく話していて時間が来る。時計を見た二人は帰ることとなった。

「それじゃメイさん、お大事に」

「無茶しないでよねー」

手を振る二人を見送れば部屋の扉が閉まった。その後に残されたのは皐月だけであり寂しさがやってくる。

だが僅か15秒後に再び扉が開く。開けた先には里香が居た。

「なんや、忘れ物か？」

「そ。アンタには言わないといけないこともあるしね」

里香は皐月のすぐ隣に立つ。そして腰を屈めて周りに注意を払うように耳打ちをした。

「なんか隠してるのかも知れないけど、私は信じてるからね」

そう言つて里香は部屋を後にする。ただ部屋には取り繕っていたことがバレたという事実が残された。

「やつぱ…敵わんな…」

—————

リズムとシリカの見舞いから数日後、またもや部屋の扉がノックされる。「どうぞ」と言い中へ促すと、入ってきたのは和人と明日奈だ。

「おー、いらっしやい」

「どうも」

「お邪魔します」

皐月は椅子の位置を教えて二人に座ってもらう。この二人の顔を見るとついゲームの中だと勘違いしてしまい、足に力を入れようとはしたがもちろん立てない。とはいえピクリとも動かない上、布団の中

での動作なので気づかれることはなかった。

「別に無理して来んでもいいのに。遠いやろ？ここ」

この病院の場所は和人や明日奈の家からは本当に遠い。軽々しく枯れる様な場所ではないはずだ。

「アスナが行こうって言ったからな。俺に反対意見はないよ」

「お見舞いはキチンとした方がいいと思うからね。それにメイさんもこっちの方が好みでしょ？」

やはりSAO生還者には特に性格の方は割れているようで特に言い返せることはない。

「んで？ここまで来てでも話したいことが何かあるんちゃうん？」

だが性格が割れているのは皐月だけでもない。キリトやアスナを通し皐月は二人の性格もわかっているのだ。この二人、特にアスナは大事な話をするときは最初から顔を合わせようとする傾向が強い。BOBイベントの後の話し合いや、kobへの勧誘などがそうだったようにだ。

「やっぱりお前は分かるんだな。流石は全プレイヤーに分け隔てなく料理を作っただけはある。」

「隠す前に指摘されるのはもう慣れてますから」

2人は息を吐いてから顔を上げる。皐月から見れば真面目な顔をしているのが分かる。

「先日、私はユウキに会いました。」

「知ってる。ちよつと前にここでそのことについても話し合った」

皐月は木綿季とこの病院で偶には言え話す仲である。アスナと話をしたという報告も先日日本人から受け、また彼女はその時のことを嬉々として語っていた。

「俺もその時のことをアスナに教えてもらったよ。今では小型の機械をなんとか調整してて大忙しだ」

意外にも和人が口を挟む。ユイの為にと身につけた技術が役立つている今は充実してそうだ。

「お前…なんでユウキに会えた…？」

「えっ…？」

和人の唐突な発言。明日奈はそれに困惑し、皐月は顔色を変えない。

アスナは気付くことはなかったが和人は気づいた。ユウキの現在状況は意図的に秘匿されたものである。無関係なものが接触するのは無理なのだ。だがその環境を知り、その上本人の口から「ユウキと関わりがある」と聞かされ和人は気づいた。明日奈の反応的にも今初めて和人の考察を聞くのだろう。

「あー2人ともちよつとベッドの方に寄ってくれん…?」

ちよいちよいと手を招くと2人は椅子を引いて近寄る。その瞬間に皐月は上半身を前に傾け、手を2人の首に回してベッドに沈み込ませた。

「よ～～～気づいたなお前!すつごいわ!」

「ン～～!」

「ム～～!」

顔をシーツに押し付けられ2人はくぐもった声を出す。3秒ほどで皐月は2人を解放し、明日奈と和人は顔を上げる。

「一体何を!?」

「いや～反応が面白くて。悪かったな?」

だが2人は皐月の顔を見てその表情が普段とは違っていた。本当に反省をしているような、申し訳なさそうな顔をしていた。

だが和人は察した。察せられてしまった。

これ以上アスナに感潜らせるなど

「ま、前々から2人とも下の兄弟のような可愛さもあつたし?病人のヤンチャにぐらい付き合っても堪忍してや。大丈夫、死なへん死なへん」

な?つというように明るい笑顔を浮かべる。会話を握りつぶす行動に出るメイは厄介だと分かっている2人は諦めた。

「ああ。分かったよ。お前は商人氣質だから嘘は吐かないと信じているぞ」

「…絶対ですよメイさん」

「任せえ任せえ」

そうして2人は病室を後にした。

――

後日、メイは病室の中に誰も入れることはなかった。外出許可での買い物やALOでは普段通りであるが、今回の4人の来訪で人前では精神的に弱っているのを人に見せたくなかった。

クラインもその例外には含まれなかった。それ自身彼も説明された時に理解してくれたのでメイとしてはありがたい。

だが身内の叔父や医師、看護師は別である。VR絡みのことを深く知らない彼らにはリアル関係のこともあり入室は拒めない。

「おい臯月。これ家のポストに入っていたぞ」

部屋に入ったのは叔父である。封筒を渡され、荷物の交換をしてから部屋を後にした。

臯月は受け取った封筒を切る。中には完全に意識の外に追いやっていたものだった。

それは親戚のゲーム仲間に水増しのために頼まれた

神崎エルザのライブチケット2枚だった。

招集&テスト

『エルザのライブチケットが当たったあ!?!』

皐月の電話から驚いたような声が鳴り響く。その画面には《通話中》と表示されており、相手は篠原美優である。

「せやで。良えやろ〜」

前々から美優がエルザのライブチケットを欲しがっているのは知っていた。当選確率を上げるために水増し要因として皐月は使われてはいたのだ。その結果として皐月だけ当選し、美優は落選してしまったのだ。

『それ頂戴！言い値で買うから！』

美優はエルザの大ファンである。北海道から東京に出た友達と一緒にライブに行きたいとの願いは皐月も重々承知である。

「あげへんよ〜。私が使うんです〜」

『ぐわああああああ！鬼！悪魔！毒女！』

「中々の性悪女みたいに聞こえるなあ？」

とは言え皐月だつて行きたいものは行きたい。応募した時期では当たつたら譲るつもりではあったが一緒に行く相手と理由ができてしまった。

単純に時間がないのだ。思い出作りと洒落込みみただけである。

「まあ諦めてな。彼氏と行くから譲られへんよ」

『うつわあ〜。チケットに彼氏持ちの余裕発言。嫌味にしか聞こえない』

それからはエルザについて美優から色々教えてもらった。事前情報とは大体同じであり、それ以上にどれだけ彼女が好きという美優自身の話にも転がった。

電話を切ると久々にメールを確認する。パソコンを病室に持ち込む気にはなれなかつたので端末でも確認できるように設定したのだ。

メールは前々から通知の設定もしていたが開いた瞬間に新たな通

知が一見届いた。

〈集合。話があるから来て ←←← 〉

差出人はピトフイーである。「メイ」の名義でなく「シキ」に宛てられたメールである。つまり集合先は一つしかあり得ない。GGOにあるシキのバーである。

しかしメールは不自然な改行が山ほどある。まだ続いているのだ。

〈来ないとうなってもお姉さん知らないぞ♡〉

脅しである。しかしGGO内の街中にある店にしろ何にしろ破壊などできるわけもない。だがその文の破壊力は底知れなかった。拒否権はないのである。

—————

年末以来にログインをしたが特にGGOに変わりはなかった。風景や雰囲気も覚えている通りのものである。

慣れた足取りで路地へと「シキ」は入っていく。「メイ」ではなくこちらのアカウントは久しぶりであったが思っているほど違和感などは無かった。

バーの前に辿り着くと店先で樽に腰をかけている女性プレイヤーがそこにはいた。

「はーい♡シキちゃん！お久しぶりい」

「脅迫紛いのメールしてきてそれはないやろ…」

「来なかったらここら一带罨&樽まみれにしてたわよ」

「うっわ…」

そんな会話を広げ、シキはバーの鍵を開ける。中にピトを招き入れ適当に近い席に向き合って座る。

「んで？話は？」

蓋をされた小樽をオブジェクト化しピトに投げ渡す。ピトはそれを難なくキャッチし中のモノを飲んだ。

「大会出ない？squad JAM」

「何それ？」

聞き慣れない、見た覚えのない単語に興味が移る。だが名称以前につけられた大会という単語に特に惹かれるものがあつた。

「B o Bの団体戦って認識でいいわよ。ある日本人がB o Bの3回大会でのタッグ組んで闘ってた2人を見て興奮して運営に熱い要望を出したの。」

その大会でタッグを組んだのは間違いなくキリトとシノンのことであろう。見方によってはシキとザザの挟撃、その後の不干渉も「組んだ」認識になるかもしれないが、利害の一致と協力は別と思いたい。

「まさか個人の意見が通ったん…?」

「その通り！日本サーバーだけでミニ大会として開催が決まったのが略称S J!」

熱い口調でピトフーイは語るのを止めない。今の彼女を止められる人間など存在しないのではないかと思うほどである。

「それ持ちかけるって事はピトと私が組むってこと?」

最大6人までのチームが組めるとの詳細も聞き、素朴な疑問が浮かんだ。2人でも出れる事は出れるようだが人数の不利は覆すのは難しい。その証拠としてシキはキリトとシノンに負けている。

「残念ながら私は出られないんだ。その日は親友の結婚式でね。大会で死なずに優勝できたとしても?」

「首繋がってたらええね。そういや大会の日程っていつ?」

最大重要事項を確認し忘れていたことを思い出す。ピトに何かしらの用事があるように自分にも何かあるかも知れない。

「2月1日」

クラインとライブデートを取り付けた日であった。それこそ放り出してピトフーイの親友問題のようになってしまいかもしれない。

ともあれ余命が短い。ユウキのように記録として名前を残すのもいいかも知れないが現実を優先することにした。

「あー、ごめん。その日は私も命に関わる用事があってな。出られへんわ」

「えーどんな用事よ?」

口を尖らせて不満気にピトフーイは尋ねるだがそれも気にすることとはなく一言で済ませられる。

何度も言うがG G Oに限らずリアルの詮索は御法度だ。ピトフー

イの結婚式の用事はシキが聞き出したのではなく本人が勝手に言っただけであり、シキが漏らさない限りはマナー違反にならないはずだ。もちろんシキ本人も言いふらすつもりもなく、すぐ忘れるだろう。

「間が悪いと思うて諦めてな？私も本当に外されへんし」

「…わかった。じゃあ今から砂漠行こう！シキちゃんの実力落ちてないか私も見たいし！」

「まあ大会参加断ったから代替え案としてなら…良いかな…」

「よし！行こうか！」

ピトフーイは早速といわんばかりにウインドウを広げる。装備が次々と出てきてすぐに支度を終えた。そこから何か用事もあるのだろうか？ウインドウを広げている時間は長かった。

「……」

『実力テストだから一人でいけ』

ピトフーイと砂漠エリアに来たはいいものの名目上はシキの現能力の確認である。そのためインカムを装着して別行動を取っている。

「いや、それは良いけど相性ドギツイステージはやめてや。建築物樹木岩山何一つ無いぞ」

そう砂漠である。砂一面で立体物はなく、隆起が少々ある程度。B○Bでシキが敗北要因となったステージでありシキの装備とも相性が悪い。

シキはいつもと変わらずGAU-22である。腰には噴射装置もあるがここでは使い勝手が悪すぎる。その上GGO内の時間は夕方であり太陽と砂の色が合わさり辺りはピンク色である。

『その相性を克服できているかのチェックよ。私ここから口出さないからね』

ブツリと通信が切れる。ピンクに覆われた視界はとにかく悪かった。

「マジで見えへん…」

プロテクターや重量ヘルメットの防具で更に狭まる。

だからこそ40メートルに張られたワイヤーの存在に気づかなかった。

「はっ?」

轟音

手榴弾の爆発がシキを襲う。重装備のお陰でダメージは少なかったが、爆風と衝撃で後ろに仰け反る。一瞬で待ち直せるといっても突発の戦闘の中では致命的になることもある。

顔を起こしたがピンクの砂煙で視界はほとんどゼロになる。だがその中でも砂を高速で蹴りながら走る音だけは聞き落とさなかった。

(何かいるー!)

この戦略性、やり口は明らかにプレイヤー。それもこの砂漠をホームにしている人だろう。音はまばらに散っていきながらも確実に近づいてくる。

1秒後、P系の連射音が響き渡る。そして体に大量の衝撃が襲う。1発1発は大した威力ではないが、撃たれた弾の8割や9割も当たればダメージもバカにはならない。

「おっつ、らあああ!」

GAU-22を引き抜き目的もなく乱射する。ピトファイからはバレットラインも見られるから悪手だと聞いてはいるが、ただこのまま謎の存在に罅られ続けられる理由だって待ち合わせていない。

再び近く音が聞こえる。砂煙は時間と互いの銃の圧で少しは晴れてはいる。

「マ、ジ、か」

2メートルの距離でようやく視認できた。それはデザートピンクの可愛い装備に身を包みP90を握りしめる背がとてつもなく低いプレイヤー。互いのアバターの身長差は恐らく25cm。ピンクのプレイヤーが低姿勢で走ればガトリングの弾なんて当たらない。

チビプレイヤーはP90をシキの膝を狙う。しかも狙われたのは装備の関節部分の小さな隙間。ここまでの至近距離ならサークルだのラインだの存在しないも同じようなもの。

「はあっー!」

気合を乗せ突発的に膝を突き出す。顔面に入りのけぞったが不敵な顔をしながらチビプレイヤーは引き金を引いた。数発は隙間から入り込み直接的なダメージが通ってしまう。

だがそんなものはシキだっただけだ。ここからGAUを捨てようが拳に変えようが火力差で負ける。弾は当たらない速度も劣る。ならば

ザクリ

チビプレイヤーの首が宙に舞う。その顔は啞然としていて何が起こったかわかっていない顔だった。

しかしシキの判断が遅かったのか、乱射性能で負けたのかはわからなかったが

シキの体は膝から崩れ落ちた。

—————

「シキちゃんとレンちゃん戦わせてみたけど最高だったわ〜」

高台の上からピトフーイが戦闘を見終える。互いの弱点をつける2人が戦えば、また知り合い1と知り合い2の勝負が見たいだけに行われた。

「これなら楽しくなりそう……」

ピトフーイは高台から飛び降り姿をくらます。その顔はただ笑っていた。

記念日特別

I F 疑念&躊躇

何人死んだかはもう数え忘れた。そのぐらいの死者を出しキリト達は75層ボスである「スカルリーパー」を何とか倒した。

死者の中には今まで何度も自分たちと戦ってきたものもいる。何ならそのうち数名は自分達の目の前で死んだ者すらいる。そのようなこともありクリアしたとは思えないほど盛り上がりや達成感はなく、この場に漂う雰囲気はほとんど沈黙、重苦しい空気でありまるでお通夜だった。

疲労の色が全員に見える中、唯一堂々と佇むのはギルド【血盟騎士団】の団長、ヒースクリフ。彼はスカルリーパーが倒されたことにより開かれた扉の先を見据えていた。死んだ仲間や部下のことを気にかけているような様子は——無い

そんな彼を見るものが見れば冷徹、無慈悲と思う者もいるかも知れない。だがキリトは違ふところに目をかけた。

それはプレイヤーの命を表す体力バー。ライフが0になれば現実でもナーヴギアが直接プレイヤーの脳を焼き切るSAOの仕様上、それは命に直結している。

キリトはヒースクリフの体力が50.1%以上あることを確認し、そこからアスナ、クライン、エギルといった特に交流の深い者たちの体力を見る。それらを確認するとぐるっと周りに項垂れている者たちも見る。

全員50%未満。色は危険域を表す黄色、または赤である。

ヒースクリフだけが50%以上を示す緑色のバーを保っていた。

スカルリーパーとの死闘が終わってから間もなく、誰もポーシヨンの類は使っておらず、この場所では回復結晶すらも使えない。

いくら【神聖剣】とは言えあの猛攻を防げるのか？いや、恐らくは有り得ない。他のタンク系のプレイヤーがそのスキルを持っていた

としても恐らくは有り得ないだろう。

なぜならヒースクリフはそれができた？その疑問が収まることはなく、キリトの中で1つの可能性が浮かぶ。

ヒースクリフの体力はあのラインで止まるようになってい
るので
は？

その疑問が出た時に彼は自分の愛剣を握りしめ

そして

「ボス攻略お疲れ様でした……。クリアに貢献し、亡き人たちに献杯」

「「「献杯」」」

食事処メイにて今回行われたボス攻略メンバーが全員集まり――
名前に横文字が引かれた者は当然いない――食事会が行われる。

店主、メイは死者が出ることを信じたくはなかったが出ない可能性

が0ではないことなど重々承知していた。なんなら一度は死にかけた身である上、他人事ではない。

メンバーたちは好きな料理、飲み物に思い思いに舌鼓を打つ。

そんな中、店の隅のカウンター席でキリトはアスナと並んで料理を食べていた。

「キリト君…今までだってそうだったはずよ…今回だけじゃないし、KOB副団長である私にだって死者を出した責任はあるわ…」

「……………」

25層、50層、75層はクォーターポイントと呼ばれ、その階層を守るボスは特に強く設定されている。その上なにかしらの初見殺しもある。今回もその例外ではなく、予測はできなくても想定はできていたかも知れない。

だがキリトの思考は死者を出したショックや後悔よりも、未だに頭に残り続ける疑念で埋まっている。

（なぜ…動けなかったんだろう…）

キリトはなぜあの時ヒースクリフに対してなんらかのアクションを起こせなかった事を考え続けていた。だが今となってはもう手遅れなのだ。ヒースクリフは前線に出る時も、グランザムにいるときも基本的には周囲に護衛などをつけている。

100層を除き全てのクォーターポイントが終わった以上、これから残る強いとわかっているボスは10層刻みで存在するタイプの他より強いボスだ。とはいえ今までの経験則上、クォーターより苦しむポイントではない。死者も出さずにクリアできた層もある。つまり【護衛が機能しないヒースクリフが立っている】場面が訪れる可能性は限りなく0に近いと言ってもいい。

なぜ動けなかったのか。その理由として後付けかもしれないがキリト本人に思い当たる節は無いわけではなかった。

間違えていた場合の後の事を頭をよぎった

あの時取れる行動はヒースクリフに攻撃を加えることしかキリトには思いつかなかった。だがもしその先にある結果がキリトと同じ

くユニークスキルを持つだけのプレイヤーならキリトは間違いなく袋叩きにあう。

何しろボス直後に最前線のトップに立つプレイヤーに襲いかかった犯罪者プレイヤーという事実が未来永劫語り継がれることになる。そうなればキリトは良くて肩身が狭く、最悪は自分が殺されていた可能性すらある。いくら二刀流とはいえ20人以上に勝てるわけもない。

そして殺された後、アスナの扱ひも酷いものになるかもしれない。なにしろその犯罪者プレイヤーとシステム上とはいえ結婚しているプレイヤーだ。その影響を受けているかも知れないという理由だけで充分になるだろう。

横から聞こえるアスナの声が入ってこないまま、75層を超えた夜は終わりを告げた。

80層を突破した。今回は死者はゼロだった。その間にヒースクリフに仕掛ける、または問答をするような機会はなかった。

85層を突破した。今回もいまままでと同じでヒースクリフに仕掛ける隙はなかった。

最前線が90層になった。死者があれから出なかったわけではなかったが着実と前線は上がっていき、目的である100層突破までは手が届くような階層まで登ってきた。

今日は90層のボスの挑戦日である。

攻略組は50層の食事処メイに集まっていた。

「今回のボス部屋も今までの例に漏れず結晶使用不可の部屋となっています」

アスナは透き通るような声を貼り、その情報と声の凛々しさの二つを合わせ場を引き締め上げる。飲み物が喉を通るすら騒音に思えると思えるような中、次々と会議は進んでいく。

「以上で今回の作戦会議は終了とします」

アスナの声の後に厨房からメイが現れる。そして割烹着姿のまま、お玉を掲げて恒例となつてしまったことを叫ぶ。

「みなさん！今回も階層突破疑念に気合いの入れた料理を作つて待つてんで!!!」

メイの口の利き方は最早営業向きではないプライベート的なものになつていた。3年に及ぶSAO生活の中で最早丁寧に接する必要のないくらいには打ち解けていたのだ。

そして攻略組はこの祝い料理を楽しみにしているものもある。プレイヤーの食生活の大半はメイが握っているため、特に豪華な料理が楽しみなのだ。

こうして攻略組は90層のボスに挑んだ。

結果死者を出すことはなく——
メイが行方不明になった。